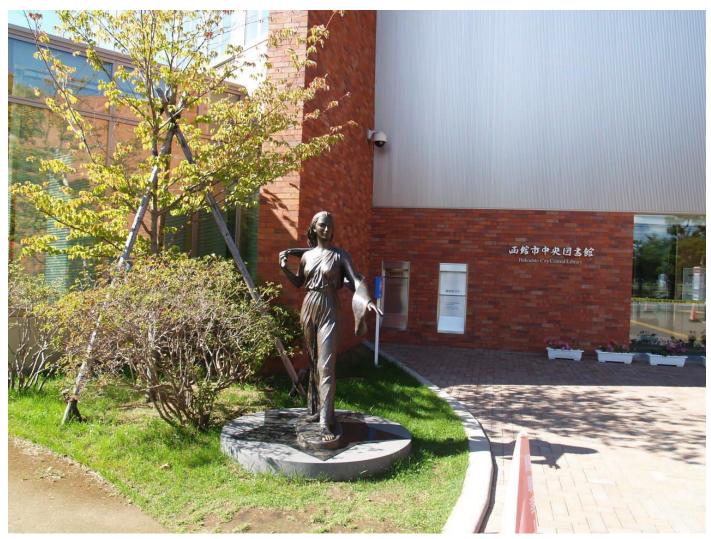


平成 28 年度 函館市民文芸 第 5 6 集



函館市中央図書館 指定管理者 TRC 函館グループ

【選評】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23	高校野球と武士道・・・・・三 輪 貞 治 21	姉妹・・・・・・・・三 橋 暁 子 19	階段国道と白いかたつむり・・水 関 清 17	ギュッと・・・・・・・野 口 裕 子 15	クルーズの旅・・・・・・片 岡 美智子 12	【佳作】	姉様人形・・・・・・・元 木 いづみ 10	「目話」「東京音頭」・・・縁 莚 勇 二 8	閑話二題	私の叶わぬ夢・・・・・・・ 菊地 政義 6	パン所感・・・・・・・大 滝 洋 子 4	りゅつこ・・・・・・・伊藤 曉 1	【入選】	◇随筆(対馬 俊明 選)		目 次	函館市民文芸 第56集
啄木の精神分析・・・・・水 関 清	::広瀬龍太	-   一宮本百合子と林芙美子―	伝聞 異なる場所(トポス)	:-菱 井 亜 紀	一在日作家の作品を読む―	「アリョン打令」と「ジニのパズル」	【入選】	○ ◇文芸評論(安東 璋二 選)			スイッチ・・・・・・・稲 本 昭 治	[佳作]	鳩の血・・・・・・・・山野 みちこ		スイレンの葉と水の中の地球	潮風のブルース・・・・・・佐々木 淳	【入選】

115 98

85

57 40

27

70

【佳作】 そっと光へ・・・・・・・ 欠 端 一 機 175	【入選】	◇詩(鷲谷 峰雄 選)			【選評】・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 174	(振り返れば青春)・・欠端 一機 170	はじまりは十五、遅咲き桜	函館ハーフマラソン・・・・・今 田 優 二 156	【佳作】	::大 滝 洋 子 153	夏目漱石の「こころ」に心酔	ジュリエットに会った夏・・・佐藤健145	::水 関 清 136	総合医を志したふるさとの町で	【入選】	◇ノンフィクション (竹中 征機 選)	【選評】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
【選評】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	由利宏子・・・・・・・・・・・・・・	【佳作】菊地政義・石岡繁雄・欠端一機・澤田寛之・	【入選】清水法雄・竹田光彦・佐々木克子・・・・・	◇俳句(熊澤 三太郎 選)			【選者詠】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	【選評】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	竹田光彦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	【佳作】石嵜章枝・水関清・柳本優子・清水法雄・	【入選】杉澤椛流・清水牧子・濱谷昭剛・・・・・・	◇短歌(山県 庸美 選)			【選評】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	コ・コ・ロ (心) よ・・・・玉 掛 公 恵	$\equiv$

◇審査員紹介・あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	【選者吟】・・・・・・・・・・・・・・・・・	【選評】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	関口孝二・・・・・・・・・・・・・	【佳作】野﨑麗舟・水島悦子・辰宮清春・水関清・	【入選】白井靖孝・本間総子・岩本真穂・・・・・・	◇川柳 (池 さとし 選)
199	198	196	195		195	

#### 筆 入

選

随

## りゆつこ

名前は

私

が

は

終戦直後、

藤

んという子どもの居ないご夫婦と二 は役所が用意してくれた家に石井さ に職を得たため一家は函館に住むこ く帰ってきた父は、函館の引揚援護局 正確に言うと私の家の犬ではない。 「りゅっこ」と呼んでいた。 子どもの 「りゅう」と言ったが、 折からの住宅難、 シベリア抑留からようや 頃私の家に犬がいた。 しかし 我が家 みんな る。 さんに飼われることになったのであ こ」が似合っていた。 たから「りゅう」というより「りゅっ 白に大きな黒斑の雑種犬で小柄だっ その子犬がやさしい石井さんの た。どういう経過だったかは忘れたが だけで起きあがれないし歩け いう名前をつけたかも覚えていない。 まった。子犬は腰を打ったら おばさんがどうして「りゅう」と な おば か くらい 世帯の 0 た。 いたような気がする。

とになった。

た子犬をかわいがっていたのかい んな事情からつい私の家の犬と言っ んのおばさんが飼っていた犬だが、そ 世帯で住んだ。りゅっこはその石井さ ゅっこは捨て犬だった。拾い上げ : 近所  $\mathcal{O}$ ľ 二世帯で使う暮らしでは、りゅっこも おばさんと私たちにはりゅ 助けてくれ、毎日食事を与えてくれる 両家のペットと言えたがやは のおばさんだった。一番つらいときに っこにしてみればご主人は 玄関 も便所も台所も一つの っこの接 石井さん ものを りり ф

まうのである。

学校

たの

か子どもたちが

の非常階段の上から落としてし

し方にはっきり差があった。石井さん

おじさんでさえも差をつけら 中で最年少の私には私が呼び 伊 まし てやその二 曉 れ

7

けだが、 りゅっこを友だちとは言えなかった。 とその手に噛みつく。もちろん威嚇だ でも向かうものなら「ウッウッガウ~」 なりだし、 ているが、 でているときは気持ちよさそうにし 落とされた後遺症である。下あごを撫 左足を使えずに走った。非常階段 ったが、歩くとき、走るときは後ろの た。立つときは四本足で立つこともあ かけても「しかたない遊んでやるか」 りゅっこは左の後足が不自由 の対応しか見せてくれなかっ 四年生だった私はそれ つい手が背中から腰の 頭を撫でると「ウ~」とう から だ 0

の裏手に引っ越した。石井さんは千代 が家を建て、我が家は今の なった。 さんは、農林 転勤をしない 援 省 護 の出 高 が 先機 縮 と決め 小 され 関 函館 0 たの 公務 父と 図 多員と 書館 カン 石 父 井

った。 田小学校の辺りに家を借りた。 ŋ ĺф っこは 石井さんだけの犬にな

感じた。 れて行こうとするおばさんの愛情を 交通事情では仕方がない。それでも連 れることになったようだ。そのころの 木の檻に入れられて貨物列車で送ら なった。りゅっこもおじさんが 石井さんが帯広に転 勤することに 作 った

りゅっこが玄関先に現れた。帯広に行 いていたら突然痩 であった玄関の掃除をし、 ころだったと思う。 っこ」と呼ぶと私の足の間に飛び ったはずなのにびっくりした。 勤 の時 母もとんできた。 季だから春 せてみすぼ 小学生の 休 母の手をな 父の 4 Ó 私 靴を磨 仏の仕事 5 終 込ん りゆ しい わ ŋ

無く、 口なら何も食べられなかったよ、きっ めようとするりゅっこの舌は 歯はぼろぼろになっていた。「この 唇はただれたようになっていた 血. 色が

ら千代田小学校付近の家まで、

通

0

は戸棚に急ぐと、貴重品だったバター と」と母は泣かんばかりに言った。私 はそれだけでかわいそうになった。母

た。 のおばさんは国鉄から報告を受けて わかってまたびっくりした。石井さん の手紙のやりとりがあり、いきさつが まま持ってきてりゅっこの前に の包み紙にバターをたっぷり残した その後母と石井さんのおばさんと りゅっこは夢中でそれを舐めた。 置 V

び出し がただれ、歯がぼろぼろになっていた た木は血だらけだったそうである。 子は噛み破られており、食いちぎられ 貨車の戸を開けた瞬間りゅつこが飛 石井さん 発車前 て逃げてしまったそうである。 (T) の点検 おじさん手作りの のため国鉄 の職員 檻 の格 が

あきらめようとしていたそうだ。

わけである。五稜郭駅の貨車操車場

カン

し誇れる犬だった。

うちにおばさんと母が頻繁に行 えらい」と褒めた。 たことが嬉しかったし、 私たちの存在を思い出して来てくれ ことらしい。私たち一家は ぎ取って我が家に辿り着いたとい していたその道筋に何かの痕跡 待って何日かそこにいたようだ。その いない空き家だった。おばさんの やさしい石井さんのおばさんが やっとたどり着いた家は、いるはずの ない口で何を食べていたのか。 良暮らしをしたことも こともない道をどう見つけたの 母は「えらい、 りゅっこが 食べられ カン を嗅 !き来 姿を もう かも j

の位置が変わることはなかったけ が家の犬だった。 て帯広に送られるまで うことで、もっと頑丈な檻に入れ に来たとき、それしか方法 石井さんのおじさんが 友だちにはこの りゅっこの中での エピソー りゆ がなな つこは我 -で自慢 られ · と言 私

出

張

で

函

今少し悔いている。った犬を飼ってやれなかったことを共働きを理由に二人の娘が飼いたが私には「りゅっこ」がいた。だから

### 筆

入

選

随

パン所感

レーズンパ

ンの

けであ なった今も勿論変らない。考えると私 好きで抵抗なくパンに。一人暮らしに た頃はご もう四十年以上も続いている。結婚し 聞 かれ ったか記憶にないが、 たら迷わ はご飯とパンどちらですか、と 飯であったのに、 ず "パン"と答える。 何がきっか 主人も大 \ <u>`</u> チや豆パン、

は朝のパンが楽しみで起き出

こう

ある。

特別

ン好きなんだろうと思う。食べ終ると 長い間続いているのは根っからのパ り食べる。最後の締に、果物も忘れな 熱いコーヒーか紅茶を入れてゆっく 「あゝ美味しかった」一と声出るので 唯、この繰り返しなのに飽きずに

味が高い 近パンを焼いて楽しんでいる人が、 り感が絶妙、とても美味しかった。最 戦して焼き上ったパン一斤を、 ってくれた。 ある時期、二女がパンを焼く事に挑 じて小さい店を出したとよく これが又私好みでふんわ 時 々送 趣

ず 一

切れ食べる。これ

も常時

冷蔵

庫に

貼り紙を目にすると、

すぐ入って

して美味しさは倍になった。主人も私

も旅

行が好きでツアーに参加し

よく

たようである。

時に"数量限定"

と店

\* をつける事もある。チーズも欠かさ

へっている。時には市販のサンドイッ

みようかなと心が騒ぐ。

の気分で一つ選ぶ。時には

"はちみつ

聞くけれど娘はここまで行かなかっ

は色

いろ用意してある中からその

日

の上にジャムをのせて食べる。ジャム を程良く焼いてマーガリンを塗りそ な事はしていない。市販の角パン一枚 うなのである。だからと言って、 言ったら大袈裟なようだが本当にそ

> 目もあ る 大 淪 洋 子

花を咲 い良く延びて来る 雪が か 溶 せ け る頃よ 道端  $\mathcal{O}$ タンポ もぎの葉 ポ が 0 ぱ 黄 が 色 勢 11

道すがら目にする度、 母手作りの っすめ 周 りをぐ Ĺ

ボールいっぱいにして帰ると早 らかいところを摘んで来て、と頼んだ。 運ぶと蓬や黒砂糖の香りがぷーんと でいう黒糖パンも作ってくれた。 である。又これと別に黒砂糖を入 つに食べた。子供の握り拳程の大きさ でてすりつぶし蒸しパンにしておや はよく二つ上の姉と私に先の方の柔 るりと囲むように蓬が茂ってい の遊び場になっていた。その 供の頃、家の近くに原っぱがあって皆 もぎの蒸しパンが脳裏をか -速茹

らでは 私に 私も 海外 ようがない。滞在中、 に満杯。パンだけでお腹 フランスである。柔らか食感が いけないと慌てる事しばしばであっ は へも出掛 一ヶ国悲愴な思い 硬いフランスパンは手の のパンがずらりと並 々として手を伸 けた。朝食には をした。 ばし を満た び、 Ш. そ それは が好きな じ は Ď 主 つけ ては す 人 玉 Ś な

が、

かりが灯され作業が

た。

それ 、と明

)印刷工!

場

が

あ

ŋ,

夜昼 続 ĺ١ てい なく煌々

つ

私の乗降する電停近くに新

聞

進

駐

軍とのトラブルが

V

ろい

ろ

を取

果物で通したのである。 とうとうお菜と 機がパ は食糧 当もお米少々にサイコロのように小 で見通す事が出来た。その時 れが表通りからガラス戸越しに奥ま 工場に変り、ずらりと並んでいた印刷 あっと言う間にアメリカ兵のパン |難の真っ只中、 持って行くお弁 ンを焼く窯に取り替えられ、 代

日本

ツアーの人はそれを知って手

0

0

さく切った芋が

コロコロ混じったも

決まって職場まで電車通勤となった。 て三月私は女学校を卒業した。 れだなあとつくづく思ったものであ わって食べてくれた。好みは人それぞ 食べないなんて……、と言って私 けないパンをこんな美味しいパンを い記憶が蘇る。それ ンと言えば、 て来 日本の主要都市にアメリカ兵 て、 ここ函 遠い昔の忘れ は 戦争も終り 館 も駐 就 5 屯兵 職も 明け れな に 代 二・三米先からパンのいい香りがして け リカの兵隊さんと目を合わせ を噛みながら立っている。母には 間らしく、いつも戸外で三・ うのないものであった。作業 来る。焼き上ったパンを次 勤めが終 に見ながら前を横切る辛さは ているのだ。 ので夕方にはお腹がすいてペコペコ、 ない よ、ときつく言われ り帰 その作業をガラス戸 りの 電車を降

兀

人

ては

ア ガ

X A の交代時 言いよ 人々取

り出

越

りた途端

る。

その頃、

が

進

あちこちで見かけるようにな

通り抜けるのに必死であった。

その頃 た

> 袋を満 ふん 思いが私を苦しめた。 忘れないものである。 のである。 沙汰され、住人は神経を尖らせてい あの わり鼻に蘇る。何十年経っても胃 にす事 焼き上ったパンの 戦争に負けたと言う惨め , の 畄 来 な カュ 香りが った時 今も 代は な た

ンが好きなのである。 こんな思いとは 何とも切ない思い出 関係 なく、 であ 唯 Z 私

は

## 筆

随

入

選

# 私の叶わぬ夢

術館で、

私

の手作り美術館

る。

時代 天外 任がない、 乙姫様や楊貴妃、  $\dot{\phi}$ . の 憧 幻想であっても、 れの女学生に抱きつかれる おまけに無料であ ものだ。 はたまたニキビ 荒唐無稽、 夢には第 奇想 面 責

な夢であっても、 霊に祟られ、 夢は勿論 ってみると結構楽し 妖怪変化に追い捲られ 思わず奇声を発するよう それはそれで後にな 怨

憤怒で顔を引き攣らせたりして、居合 た儘見ている事もある。 人知れずニタリと薄笑いしたり、落胆、 近、 私はよく夢を見る、 だから時々、 目を開 1

は薄氣味悪く思っているだろ

館 小さい可愛いオモチャ箱の様な美 の館長になる夢である。 私が見ている夢とは、 この それ 私が美術 たも世界

> 私独り、 私。そうだなあ 小さい空き地が良い のお堀端 ところで、美術館は箱よりも中身が 受付係も小使も学芸員 東側 の一番奥あ 場所は五稜郭 . W だだが たり、 なあ ŧ 公園 あの みな

大切、 ならいざ知らず、一介のもと小税理士 郎氏や大原惣一郎氏のような大富豪 さて如何するか、私が松方幸次

限界と云うものが り無い。しかし人にはそれぞれ可能 側に置きたいと思った絵画は数かぎ に何が出来よう。 今までに素晴らしい、 7ある。 ぜひ欲 しい、  $\mathcal{O}$ 

なの と言う事は、 やはり、絵を始め美術品 か。 確かに絵を見ていて空腹が 金持ちの道楽者がする事 を収集する 満

腹になる事は無い、

寒い部屋が暖か

館 員 ĺΙ なる事もない。 菊 それでも欲しい 地 政 義 0 であ

私は三十代から絵を収集しだした。 の冗費一切を避け、 なアトリエを構え、 重厚、 飯町 郊

私生活 画きになる木村捷司 ッチ、的確な存在感、 外に閑静 華麗だが押さえた色彩、 一面伯を知ってか 素晴しい絵をお 奔放 がなタ

天 作中の傑作、 十一点、色紙四点、これまた先生の らの事である。およそ三十余年間 つこつと先生の作品を求め のデッサン等である。 コンテによる仏像 た。 油絵二 (広目 傑

と称 恩師 十枚はあろうかと思う。 であるがその他にも、 私 3 0 金子幸正先生を始め、 れ 収集は木村先生の 7 V る諸先生方の 私の中学高校 作 作品 品 応画家 が 中心 0

業としていない方、 れ から、 、これ らが わゆるアマ 面 白 絵 ・チュ を職 うし だ。 でもない 喧嘩をし · で何時 間 ŧ か ۷ る。 絵

る。 偶然傑作を生む  $\mathcal{O}$ その 描かない 幻の傑作を探し出しお譲り であ だけだ。素人でもい る。 、これが私の持論であ 絵は 誰でも描 け つか る

御返

V

入してい

る時なの

いたも 1 よいよ種が尽きたら、ここ六十有 のだ、約二十枚は 下るま 頂

余年

不肖私が描き上げた自称傑作、

演歌、

民謡

なんでもござれ

だ。画集も

ような レー ル・デッサン約二百点が緊急出動。 他称駄作の油彩 の農夫の絵や、ゴッホの 目玉 工作品が、 ない 水彩・色紙 のは 寂 向日葵の ・ パ しいが、 ステ 3

そこは 沢は が夢で最も楽しい処、 さて建物 言えな 地方 の外観 都市 のミニギャラリー は どうする 夢 の度に図 面 此れ 贅 は

裏町 える たくない。建坪二十五坪、 変更し、いまだ未定、只、パチン の大きさにもよるが、下に十五枚、 ヤバレー あゝでもない 様 架ける順 な建物 総二階 には コ 序を考 屋、 こう

L

たり握手したりするの ŧ 隣ど

を 事がな つか 私 に話 V ・時は、 しか がけ、 きっとこの事に ボ サ ĺ とし 没 7

客の好みに合わせクラシック、 生装置も健在、 私はレコードを沢山 館内に音楽を流す。 持 って V ジャズ、 る。 観 再

でも良い 沢山揃えている。 も良いのだ。人氣の無い所でじっく客は誰も来ないかも知れない。それ

えー

を

頼む

り音楽を聴きながら絵を鑑賞する、こ れは最高の贅沢だ。

しかし、いつかは

客が来る。

宮沢

賢

山頭火のような客が襤褸袈裟掛けて、治のような客がチェロを担いで、種田 ふらりと扉を開けて入って来る。

けたい。 ることは 館 内 の — 美術館だからと云って肩肘 無 角に慰安のコーナーを設 い、とり澄ますことも 張

私

が八十五才の超高齢者だから、

けば つと御 、に口説、 良 年 配 の客 け ば良 が多い 怒ればな はずだ。 良い、 此 処で

そんなこと言って経営 んと夢の が 成 無い り 立 0

だなあ、甘そうだなあ、刺り「館長、正面の烏賊の絵、」朝張切って館を開ける。 な言葉。私はこんな言葉を のかだって?経営、なん 身に 期待 上う 手非 して此 1 もん つて毎 嫌

なあ!今度は 処で一杯如何か 「大将!この間 虎造 ね の江差追分、 . つ \_ の石松、 良がった 鮨食 込いね

ツ!嘘 「館長さん、 今日漸く名刺が出来て来た。 ばっかりー 御年 お幾 つ?…… これ アラ は

現だ。使う当もない上質の名 刺を縁に、今後も私 枚、表は漢字、裏は しく見続けたい ローマ字。 叶 め この 加が 名 百

IJ 菊 ij

#### 随 筀

入

# 選

## 閑話 題 目話」「東京音頭」

目話

くのが楽しみになっていた。 の老人センターにへぼ碁を打ちに行 古希を過ぎてから昼ころから近く

をしてくる事がある。 碁に行ったついでに電気マッサージ ときは毎日、良くなると週一回くらい くの整形外科に通うことがある。 年が年だから偶にギックリ腰で近 痛い

れるのが嬉しい。 型で、目が合うとニッコリ微笑んでく を後ろで縛ったポニーテール風 る。若い娘はパーマもかけず、長い髪 その病院の受付に女の子が二人い の髪

までの髪で、目が大きく背の高い娘で もう一人はウェ ] ブ 0 掛 カコ 0 た肩

の記憶能力の凄さや、

記憶装置の

一体人間の脳の働きってどうな

ある。 っていたが、補聴器を使ってはいなか 私は年のせいで少し耳が遠くな

ことがあるので、受付嬢をみている。 彼女が私を呼ぶときは呼びながら(と いるときは、私を呼ぶ声がきこえない った。治療が終わって待合室で待って

思うが)私を睨むように見る。私は気

れを地で行っている。 の窓口等々言われているが、 いう。彼女はそうだと目で答える。 が付くと「私を呼んでるの?」と目で 目は口ほどにものを言い。目は感情 まさにそ

ど表現力が無い。 ではないだろうか。 ればこれは「目話」と言っても良いの 巷間「手話」って言葉がある。とす しかし「手話」ほ

東京音頭

縁

莚

勇

踊り踊るならチョイと東京音頭ヨイ 先日、何の気なしに心の中で「はー

とである。昭和八年と言うと私は八歳 それがスラスラと出てきたこと… いたと言う状況であったと思われる。 である。遊びながら何となく聞こえて 八四、五年前のことで、蓄音機の時代 小学校の二年生くらいである。今から 年ころ大流行したものであるとのこ で歌えた。 ら、ちゃんと続くではないか。最後ま こまで歌えるだろうと続きを歌った ョイ…」と詞と節が歌われていた。ど この歌は昭和七年に作られ、昭和八

てくる。っているのだろうと畏怖の念がおき

である限り矢張り人間が上と言う事 装置と言う容量の制限の中での勝負 れだとて人間が作り出したもの、 しく将棋や囲碁の世界では人間が太 められているのか謎としか言えない。 の大きさの中にどのような機能が秘 か、素人の私にはわからない。あの頭 ことの記憶があやふやな時がある場 になるのではないだろうか。 刀打ちできないと騒がれているがそ 合がある。記憶の場所が違うのだろう くり残っているものと、 このように何十年前の記憶が、 近代のコンピュータの進化は目覚 四、五年前の そっ 記憶

### 随筆

#### 入

#### 選

## 姉様人形

「おばばが作ったの……。」

少し間をおき

母は、

静かに微笑み言った。

女、こ。と、柔らかく空気をかき分けるようにと、柔らかく空気をかき分けるように

れの私の祖母である。
「おばば」とは、明治二十五年生ま

和紙縮織で日本髪を結っている。桃和紙の人形である。母が、私にくれたのは、姉様人形。

黄緑色と白の矢羽根模様の着物を櫛も、あしらわれている。割れだろうか、丸髷だろうか。桃色の

り、花や景色が描かれている。帯は、濃紺。そこに白枠が幾つかあ

てはいない。

着ていて粋である。

ている。 帯締めは、赤できりりと引き締められ 明るい赤と白の格子に花柄の半衿。

ねじりされていて、結び目を表していントラストが効いている。中心がひと

水色に除虫菊の花柄の帯揚げは、コ

二十センチ余りの丈なのに、すっくと後ろ姿は、裾すぼみになっており、る。

した趣きが漂う。

前のこと。 手にした姉様人形。それは、六年ほど実家の母の部屋で、ふと目に留まり

ふっくらして見える。目鼻は、描かれれた顔は、中に綿が入っているので、細面ながら、手漉和紙の薄紙に包ま

元

木

いづみ

そんな也愛もないことを考える。母は、何故、私にくれたのだろうか。今や、少し煤けてしまった顔。

「ないで、またられない自った。小さい頃から、何かしら母に遠母と私は、姉や妹よりも距離感があるとなる他愛もないことを考える。

いう思いも、よぎる。 咄嗟に、姉や妹をさしおいて……と分を認識していた。

る。い入るように見ていたような気がすい入るように見ていたような気がすと手の込み具合に感心して、確かに食だなあ、どうやって作ったのだろう、ただ、その時は、すごいなあ、上手

うゆとりも生まれた時期だった。いていた職を離れ、念願の着物をまと時を同じくして、その頃は、長年就

母が、嫁入り支度として用意してく

れた着物の中から、 若過ぎない色柄を

選び着ていた。

った。 締められるようになり、 何とか、ひとりで着付けをして帯も 楽しい時期だ

塩瀬 い付ける作業も快かった。 の半衿の質感も気に入り、 長襦

着付けの仕方を真剣に見ていたのだ だから、和紙人形と言えども、その

和の物は大好きだから。

その後、姉と妹に、祖母の手作りの

とも知らなかった。 姉様人形のことを尋ねてみたが、二人

母 の十歳年下の妹の叔母にも話し その存在に驚いていた。

おばばから、母に手 あなたが生まれたのは、いつですか。 渡されたのは、

つなのでしょうか。

あなたは、おばばと母の会話を聞

ていたのですね。おばばが、どんな思 いを込めて作ったのかも知っている V に、 今年の桃の節句 その母も、もう、この世にはいない。

のですね。 そして、あの時の母と私のやりとり

ŧ.....°

こにこしていた祖母は、昭和五十六年 着物地の前垂れをして、いつも、に

の三月に他界している。 三十年ほど、母の手許に大切にされ

かけている、その顔。 ていた姉様人形。 長い月日を経て、うす茶色に変色し 目も口さえも描

ではあるが、精一杯、 かれていない。 それぞれの住む世界を隔て、 温もりを伝えて 寂

「それ、・ あなたにあげるよ。」

その声が、 おばばが作ったの……。」 耳元に遊びに来る。

> スの蕾が花開いた ひとりで旅立った。 たのは、 その後だった。 庭のクロッカ

の後、

静かに、静か

人形が佇 優しかった母 んでいる。 の写真のそばに、

母の手で 祖母の手すさび 温められて 我が 姉様 胸に

になってしまった私の頬を秋風が通 「そうだよね、 母さん。」が、 人形 口癖

り過ぎてゆく。

#### 筆 佳 作

随

# ルーズの旅

出 美

智

子

高価 それなのに今年は二回もクルーズに ズ」みたいな船旅には無関心だった。 のイメージのせいかもしれない。 が大好きな私だが「カリブ海クル 外国船は心配。 キャンセル。

った。一人旅は慣れていたが、 仕方なく一人で参加することにな 全額返金なし。 船旅 で

・プリンセス」と言う 日間のは、 神戸から ッグを持っていた。「あの 0 人が「ダイアモンド」のブランドバ 函館 から乗った飛行機で近 クル Ì くの

申し込んだ方ですか?そのバッグは

カン

が何度もあった。

韓国 館神戸間は飛行機で、瀬戸内海、 九州一周だった。前から昼の瀬 前以って買えたんですか」など話し 名の

イギリス船

イアモンド 月上旬 行った。

五.

Ō

Ń

うで、 素敵な 機から見た島々の間の漁船がすごく 戸内海を船で通って見たかった(飛行 ので)。 今回のクルーズを教えられた。 フェリーは夜だけだそ け、 目と言う。バッグは前回買ったそう。 同じクルーズに参加する方で二回

も助かった。 てください」オーケイを貰って、とて 「一人で参加するので、連れて行っ

聞いたろうか、本当に有難うござい した」神戸埠頭からは、船室が違うの 「私一人なら此処まで着くのに何 ま 度

うで、

室は二人一室に決まっているそ

お一人さま料金がない。旅友を

か誘

ってみたが、中々いない。や

と見つかった人が、間近に重病にな

で一人。

らと分かった。 いると思っていたが、 韓国 釜 山に行くからパ 外国船に ス ポ 乗るか 1 1 が

が、 に行ったが、 に曲げる。六階に行き、指を曲げた方 に向け、「六(ロック)」その指を直 の顔の乗組員は、日本語 ければ分からない。主に 十四階 案内図を見せ場所を聞 の船室、 行き止まり。 何をする が少し 東南 こんなこと けば Ď ŧ 指 話 崩 記せる ア風 カコ 角 な

ズに

席

は、 無地一つ紋との指示だったが、本当に はイブニングドレ 二日目のディナーは 正装のことで男性はスーツ、 ス、 「ドレスコード 和装なら留袖、

豪華に着飾 ご夫婦が手を添えて、写真撮影。私 って氷の塔に注ぐ時は、大抵 っている。 シャンパンシャ

疲れ も晴れ着だが 田舎くさい。 煌びや か で

見えた。 前に並んでいた男性のパスポ 思いつつ、パスポートを出した。直ぐ りだから、上陸は無理かもしれないと きたかったが、世界遺 長崎で下船したら、「軍艦 産 になったば 島」に行 ートが

夫婦。 るのですね。私もです。一人なので付 いていってもいいですか?」岡山のご 「アラッ!貴方も片岡さんと言われ 四度目と言う。

軍艦島なら自分たちも行こうかとな どこを見るか決めていないそうで、 今度は私がリード。観光案内所で

からだそうで、石炭が豊富に採れた頃 聞 端島が正式名。軍艦の形に似ているいて手配する。

は五千人も住んでいたと言う。 「思いがけず来れて良かったよ」と 全行程波も穏やかで神戸で別れる ったと言ったら案内してくれ 船の中に詳しく、 私が何 片 岡氏

1

イレに

用意された袋を持ち歩いて 飲んだとたん「ゲボッ」。

いて良かった。

もやっと。

「今度は日 本船に乗ってみたら良い

ょ。

月初 「飛鳥Ⅱ」、 この一言が二回目につながった。 8 函 [館発のクルーズは、 日本郵船 仙台と横浜で寄航 又は 九 下

う。 る。一人の積もりが友も行きたいと言 に行った。お一人用が少し割高だがあ 日。これも初めて。嬉しくなって聞き 新幹線で新函館北斗に戻る一 泊二

か? 日本船だからか、 短い 期間 0 せ い

間くらいは大揺れ。薬を貰いに歩くの 頭を午前十一 も絶対に心配はございません」有川埠 ください。酔い止め薬もあります。で 抜けましたが、揺れることを覚 乗船直ぐに「台風十二号は日本海 時出航後。 深夜から二時 悟 ľ

> かもしれない。相棒は我慢できたそう た。酔い止めでなく、吐かせる薬なの たからと、又半錠飲んだら、 っかく飲んだのに直 ぐ出ち グッとき

Þ

0

だが、三回出した私の方が回復は早か

予約 泊中は自由。私達は松島海岸に行き仙 った。 台から帰函の予定。下船した仲間 台風一過の仙台港は晴天。 してあったようでそれぞれ 顔色の違う船員も親切だった。 約半日停 タク

が随分変わったと、聞いていたの 東日本大震災で、松島湾の島 々の で是 形

非見たかった。

シーで行ってしまった。

なの ぼやく。 分からなかった。二人とも年寄り難聴 まり昔に来ているので忘れ 「今説明し でも遊覧船のコースが違うの で、説明が聞きとれないせ たのはどの島のこと?」と たか、よく カン

を少しだけ買う。 量 名物土産 「笹かまぼこ」を自分用の 友は大荷物なくらい

変ね。
「よく頂くからお返しにするの」大

やっぱり、日本人は日本の船旅が良まだ乗った事は無い。新函館北斗で降りたのは、初めて。

いね。

#### 筆 佳 作

随

# ギュッと

と決 化し、 許されていた。感染症が 内だけ。 てしまう。 思いだったろうか。今、 ック状態になり。どれだけ辛く悲しい 覚めた主人はまるで拷問 聞けず、 身体中管を通され、 その時は一命をとりとめた。 をつけることとなった。緊急手術をし 選択で、 口から管を入れての呼吸なので、口も 酸素マスクも全く効かず、苦渋の 病院に着く寸前で激しく苦しみ出 年 自宅かり 七月、 られ すだけでも胸 それも入る時間 身動きも取れず、 口から管を通す、 ICUの中に入れるのは身 ている。一日数回 ら救急車で病院 主人は持病 両手も拘束され、 が 締め付けられ その時の は 0 一番怖く 状態で、 人工呼吸器 心 麻酔から目 回に五分 臓 0 しかし、 運 病が 面 事を パニ ば ħ ろう。 訴え、 どん薬は強くなっていくのだが…。手 困惑するくらいだった。なので、どん らしかった。先生も、何故寝ない なり強い 眠ったら負けると思っていたのか、か を向いてしまったりもした。 主人は、フン!と鼻に縦筋を立てて横 すると、私に言っても無理だと思った してね」と、何度も主人にお願 ういう状態になっているの 毒しマスクをして面会をする。 原菌を移してはい い。この状況なら誰だってそうなるだ も「生きるためだから、 してくれと、すがるような目で必死 いに行った時、 あの強い主人が涙を流した。 主人は物凄く精神力が強くて、 眠 り薬を打っても眠らない 主人は、 けな V お願い、 何故自分がこ ので、 か、 無理もな Vi 早く外 最 手 のか した。 我慢 初会 を消 私 ても、 術は 温 とても強い生命力を感じる力で握り つと私の 何かを伝えようと、五分間、 のぬくもりだけ。そんな中で、 手首の下にある、 唯一繋がれるのが、ベルトで縛られた しない。管が入り、口がきけない主人。 返してくれたのだ。私が離れようとし 人の手を握った時に、「ギュッ」と、 はっきりしていた時があった。私 はつぶっていたけれど、とても意識が ICUの部屋に入った時に、 くのだった。 まだ予断を許さない危険な状態 かく、 そんな中で、 一応成功したというもの 首を振って決して手を離そうと とても強い力だった。私はそ 手を握りしめ 入院して二日目 主人の手と、 てくれたの 主人 Ó, 私の手 私に、 八は目 が 私が が まだ 主

裕 子

野

П

主人の手を放した。 からね。」後ろ髪を引かれる思い 無情にも ーもう、 面会の時 時間だからね。 間は 経ってしまっ また来る

のままず

っと側に居たか

った。

でも、

しないだろう。「一人にしちゃうけど、

れた。 して、 もう、 Uに入って十三 日目に主治 医に呼ば 握り返してくれる事はなかった。 返してくれても、 主人は眠っているか、ちょっと反応は 亡くなった。 その後は、どんどん薬が強くなり その日 手立てがないと聞かされた。 感染症が進み、状況が悪化 「の夜、 その時のような力で 眠るように主人は I C Ļ そ

を抜いてくれ。」という事だったの るようになった。「助けてくれ。」「管 を私に伝えたかったのだろうと、 それからしばらくして、私は、主人が 本当に慌ただしく過ぎ去 「ギュッ」と手を握ってくれた時、 その後は、 話 や、それだったら、あんな風に しかけるように温 葬儀関係やら何やらで、 っていった。 かく握 考え うは か 何

> Ŕ 頑張れ 0) 感触は、今でも忘れてはいない。で 主人と最期に言葉が交わしたか よ。」だったのかな。温かい手 0

た。 それが、 一番の心残りであった。

一周忌を迎えた。主人は再婚で、 早いもので、 今年の七月に、主人の 主人

四十九日の時は、一歳になる孫を、東 になってもらった。そして、葬儀後の になっており、 には優しい息子がいる。 葬儀でも、 何かとお世話 息子には力

くて愛おしくて、涙が流れそうになる

なって寝てくれたっけ。そして、一周 初めて会う孫。仏壇 京から連れてきてくれた。主人も私も の前で、大の字に のをじっと我慢して笑顔で遊んだ。

小さな小さな手が キャッキャ言いながら歩きはじ た彼女は、私の手を引いて、家の中を た。そして、やっと歩けるようになっ 忌の時も大きくなった孫を再び連れ 可愛らしく手を合わせて拝んでくれ く天使だった。我が家の仏壇 てきてくれた。 屈託 私 ない笑顔。 の手をギュッと 一の前 まさし でも

握りしめて歩く。どうしたわけ

は、 た。 かなか のだ!!そう感じたら、もう、愛お の感触と強さとまさしく一緒だった 人が私の手をギュッと握りしめた時 かさ。どこかで感じた事が。 の強い事ったら…。その時である。 歩く。本当に嬉しそうだった。その ずっと私の手を握り、 ハッと思った。この力の強さ、 私 の手を離そうとはしな 引っ張って そう、 か 主 温 私 力 0

笑顔 1 H うだったのか!この天使の、光り輝く に語りかけてくれている気がした。 いる。彼女の笑顔を通して、 女と主人は間違いなく血が繋がっ 色 の空は主人の大好きなスカイブル の快晴の日だった。 、これが全て。 あり がとう。 主人が その 私 7

#### 随 筀

### 佳

作

# 階段国道と白いかたつむり

は道づれ、

世は情け」、

とい

Š

海底トンネルの世界を、

人気漫画キ さらに、

t

竜

言葉が 業時の観光ブームはすでに去り、 貝 間が青函トンネルで結ばれて一一年 い体験をしたのは、 げなく差しのべていただいた、得がた 旅先でそうした好意の手をさり 九九八年夏のことであった。 ある。 当時 四歳だった三男とと 本州と北海道との 利用 開 ラクターとともに楽しむ。

した観光資源を開発しようという機 そのものにも目を向け、 することだけではなく、 れからはトンネルをただ列車で通過 者の漸減傾向が明らかになる中で、こ そこを舞台に 海底トンネル

呼ば 岡と竜飛のふたつの海底駅を拠点に、 全長にちなんで、 運が高まっていた。 五三 れ る トンネル 八五㎞という青函トンネル 「ゾーン五三九」と 内に設け 6 れ た吉 (D)

> 達でき、 飛海底駅と地上との間を結ぶケー な企画であった。 たわる北海道との 峡を眼下に見下ろしながら、対岸に横 いう立体的な楽し ルカーに乗れば、竜飛岬まで徒歩で到 トンネルが海底を貫く津軽 み方が出来る、 距離を実感する、 稀有 لح 海 ブ

峡」四号に乗りこんだ。 の窓からは、牛が寝そべった形をした 朝、三男とともに、 一九九八年八月はじめの日曜 函館駅から快速 進行方向左手 日 海  $\mathcal{O}$ 

で下 飛海底駅」にこの列車で向 ら、青函トンネル内に設けられた 函館山がよく見える。 車し て、 海 底と地上とを結ぶ この日はこ カ そこ れか

飛斜坑線」のケーブルカー

に乗り継ぐ

きなり、

風車が見え、

灯台が見え、そ

水 関 清

の最短 約二時間 験坑道訪問と、 いう、目下のところ函館 函トンネル記念館駅」に到着出来ると 予定だ。 コースだ。 このルー で竜飛岬 お隣の 「竜飛海 ŀ のたもとにあ は、 「吉岡海底駅 から竜飛 総乗車 底駅 る 時 0 間 体

っぷり歩き回ってみるつもりだ。 問に回して、今日は竜飛岬周辺を マにしたさまざまな催 で催されている、 海底トンネルをテ しは、 次回 た 訪

たケー 短い と上って リの急勾配を、 い鉄道として知られ、 ち海面下一四〇)メートルの日本 竜飛斜坑線」は、 通路 ブル V) を渡って駅の カー . <\_ 七分もかけてゆっくり は、 記念館駅に到着し 度二五〇パ 外に出ると、 海底駅を発車し 全長七七八 13 . 短 う う

して青空が見え、 海底か 6 の脱 出 を瞬

時に実感できる 竜飛岬には、途中の車

両が通行

がある。 る国道三三九号線 な X 間を階段で結ぶことで知 つづら折りの階段を、 別名「階段国道」 弾むよ られ

して、「さん・さん・きゅう」と嬉し いついた私に、路肩の道路標識を指さ 番下まで下りると私の名を呼んだ。追 うな足どりで降りて行った三男は、一

遊歩道の端にしゃがみこんだ。

そうな声で読みあげた。下りてきた階

という三つの数字を読み上げたのだ。 板の、青地に白く染め抜かれた三三九 段が国道であることを示す三角表示 もと来た道をとって返す上りでは、

「さん」と言っては一段上がり、

\_

葉の上から滑り落ちてしまった。 と言って手を伸ばした瞬間、丸まって

段の階段を、歌うようにして登ってい ながら、標高差七十メートル・三六二 う」と言って上がった三段目の階段で ん」と言ってはもう一段登り、「きゅ 両足をそろえた。 これを繰り返し

った。 三男は、 階段を登りきった疲れも見

瞥しただけで見物をすませてしまい、 せずに竜飛岬灯台へと向かう。 十選にも選ばれた白亜の灯台だが 灯台五

後、この海底トンネルのことを聞

女の子。

東京から観光で函館に

入った

出来 敷地 こうに横たわる、故郷北海道の姿を望 んでひとしきりはしゃいだ後、 の周囲を歩き回る。 津軽海峡の向 突然、

では、 りしている。函館まで連れて帰るのだ の帯が一本、白い殻をぐるりとひと回 れば、殻が確かに白く、高い。赤褐色 を這う蝸牛。興奮して父に語るところ 見つめていたのは紫陽花の葉の上 白い蝸牛だという。言われてみ

が、あの白い蝸牛はどうしても見つか らない。 であれこれと一生懸命に探 り、下草の中を探り、 「あ!?」 すぐに紫陽花の葉を一枚ずつめく 地面の 上を親子 回った

> を聞いた三男は、みるみる笑顔になっ 子が、自信たっぷりに語ったこの言葉 しれない。」と、話してくれた。 るよ。白い蝸牛も戻って来ているかも ば、芽が出て木になって、すぐにわか しながら、「これを目印に埋めておけ をポケットから取り出して三男に示 いう。函館山で拾ったというドングリ け、私たちと同じ列車でここに来たと 自分よりちょっぴりお姉ちゃ W 0

に植えていった。 ふたりで、ドングリをひとつずつ丁寧 木切れで懸命に地面を掘り、女の子と ていった。小さな手で、近くにあった

んな木に成長しているだろうか。 あれから一八年。ドングリは今、 سلح

のは、その一部始終を見ていた六歳 大泣きする三男をなだめ てくれ た

## 筆

佳

作

随

橋

暁

子

囲ま 私 れた穏やかな田園風景の昔 の生 れ育つ たの は、 緑 0 Ш 0) 赤 に

川であ

る。

んと一 く弱かったので、 と働きづめで、 度と家事、 くなり、 私 が 緒に出かけた。 小学一年、 姉は学校 休日は 末っ子の私 姉 父に手伝 から帰ると食事 何処に行くにも姉さ は 14 才 は . つ Ò て畑 体 時 Ë 母 仕事 ずの支 小さ は 亡

様に優 笑顔 族 に就くこともあった。 すゝり泣く私と抱き合って、深い みに両肩に下げ、 姉 で話す時は物静かで私 (サダ子) は、長い黒髪 L かった。 ター、 偶には亡き母を想 面長でふっくら 靴下を編み 冬になると、 にには を三つ ・眠り 母 した V 0 編

が小学三年の

時、

初めて靴下を編

に支えられながら、

と苦労も

ありま

したが、

の子供も授かりました。

'n 編物、 む 昭 事を教わり完成 亀田村にも農協組合 和 20 手芸を楽しむ原点とな 年終戦、 教育も生活 た喜 のお び は、 米貯蔵 も改正さ てい 今で、 ŧ る 庫 父母 族は まし

姉

の長 た。

女が

野

群馬県前

橋市 長

に移住 対県に嫁

し 1

た。

家

 $\mathcal{O}$ 

いない私

の2人の子

供に まし だ後、

暖

生活は寂しかった。ある時姉に 黒松内に嫁ぎました。 移り住んだ。 が建築され、 として、五稜郭駅の近くに大きな倉庫 姉 ちゃんは早くお嫁に行ってしま その後、 父は倉庫番とし 父と私 姉は 19 才の の 二 て私達は 何で 人の 春に 0

はに ることが、 たの」と聞くと「お父さんを安心させ 才の三月、 姉 には かむ様に微笑んだ。そして私が 5人の子供、私も結婚し2人 父は **7**0 親孝行だと思ってね。」と 才で逝って了った。

20 帰れ が認 会し、 家族 と知らされまし た。 (老人ホー 平成 いでの 知症 なくなり、 50年以上の長い年月は過ぎ去 22 一になっ 温 年、 Ė 泉旅行を楽しみながら 姪 転倒 た。 た事、散歩に出 お (恵子) 世話 し車椅子の生活で さん になってい カン て家に 5 る 姉 再 0

前向きに生きて来 亡き夫と家族 人生には何か ら車 菜の花畑の中に、 青葉 その年4月、 木立 で 30 の林を通り、 分程走ると、 恵子の案内 大きな近代的な 広々とした畠と 美 で前橋駅か ツ **´ツジと** 

- 19 -

仕立て送ってくれました。 リスマスプレゼントや、

その後も、 かい丹前を

が 別社会福 建っていました。 祉 法人、サ シル ] ムふじみ)

亡くなった事さえも忘れている」と、 恵子の話では「母さんは、 子供も何人居るの か、自分の 自分の娘 夫の

ゆきます。

いよいよ別れの時、私が手作りのチ

ね、 がら涙ぐんだ。 私と姉は手を固く握り肩を摩すりな 見つめ、 声をかけると、顔を上げ、じっと私を 3年の月日は長過ぎたのだろうか、 な老婆が俯伏している。会えなかった れた大広間のテーブルに、白髪で小さ ろうか?微かな期待と不安を祈る思 妹である私を思い出す事ができるだ いで、受付から広い長い廊下を案内さ 「姉さん、暁子だよ久し振りだねえ」 私の妹あっ子」と、笑顔で頷き、 暫くすると「あゝ、あっ子だ

すると「うん、うん」と頷づき涙ぐむ。 とを語 は函館市となり、 その後、 関前に、家族が並 った。私が持参した昔の赤川 人一人を指差 赤川のことを聞く姉 近代的 しながら説明 一んでいる古い なったこ

> ながらも、温かく深い想いは拡がって 面会時間 私は (時間よ、止まって) と念じ はあっと云う間に過 ぎて行

人参を持っているうさぎの人形を、姉 リメンの赤いチャンチャンコを着た、 人参だねえ」と優しく微笑む。 の手の平に乗せて上げると、「大きな

姉さん) 熱くこみ上げる涙に声を押え めてくれた、お母さんの様に大切なお きな両手で柔かく私の小さな手を暖 すり、手を振りながら部屋を後にする。 ね、」細く小さくなった両手と肩を摩 「姉さん、又来年必ず会いに来るか (ふっくらと優しい笑顔は小さく、大 5

我 術をしましたので、ひらがなの大きな 私からお願いがあります、白内障の手 さんとそっくりになって来ましたね、 恵子は「叔母さん、仕草がだん―― えますので、お手紙出してくれません 読め ます、 係の方にも読 でもら 白

ながら嗚咽していました。暫くして、

函して一カ月後、 りし頃の姉さんを見る思いでした。 五稜郭公園 の桜が美しく咲き散った 大きなひらがなで、

か。」と話す恵子の笑顔に私は、

お礼の言葉であった。日毎に老い ね。」と、2日後、 0 は心からの感謝と、 郷愁の想 古里は昔のまゝに甦えるのでしょう。 れ行く記憶の中で、自分の生れ した。本当にありがとうございました。 子さんの誕生日で、大変喜んでお 入り、手紙が着いたのは5月28日サダ 会いに行きます、元気で待ってい 始め、赤川の近況と、「又、来年必ず こと、我家の庭のボタンが美しく咲き 再会を想い祈る日々である。 いで待っている姉さんに、 ホームから電話が 明るく生きる希望 りま 7

#### 筆 佳 作

随

高校野球と武士道

よいよ夏の甲子園

[の熱戦

つ

行進曲 まに で、今も多くの人々に愛され、私もた 曲 中村八大作曲、そして坂本九が歌った 奏された。この名曲は、永六輔作詞、 昭和三十七年の入場行進曲として演 思い出す。この曲は私が生まれる前年、 氏が作詞した『上を向いて歩こう』を ズンになると、 前 が始まった。 年 (いわゆる「六・八・九トリオ」) 'n モノマネしながらカラオケで歌 流行 が選ばれる。 歌の中から開会式の ちなみに春 、先般亡くなった永六輔 私は高校野球シー Ō 甲子園 入場 では、

感じがする。 典

となる週間 おいて、 は破られていない。洋楽が好きだ この曲は、米国 アジア圏の歌手では唯一 位を獲得 [のビルボード 未だにこの

> これは、発売元のレコード会社の社長 我々日本人にとっては何とも奇妙な そうで、曲の内容とは全く関連がなく が気に入ったことから名付けられた が、契約の際の会食で食べたすき焼き KIYAKI』(スキヤキ) であった。 れる際に付けられたタイトル 驚くと共に、 く感じたことを今でも覚えてい そして、この曲がイギリスで発売さ 日本人としてとても嬉 は SU

その ないように上を向いて歩く、 つくられたという。失意の涙がこぼれ ともあれ、そんな歴史に残るこの 悲し 実は永六輔氏の失恋経 みに耐えながら上を向いて 一験をもとに つまり、 名 勝負 逆転劇が繰り広げられるなど、日 駆使され、

歩いて行こう、その先にはきっと幸せ

が好む要素が多く含まれている。

時として予期せぬドラマや

た私は、若い頃にそれを知って大変 が待ってい るに違いないと聴く 輪 貞 治

励ますメッセージソングなのである。 話を高校野球に戻そう。日本人には 知力、 体力共に大 彼らは本 私 內 包

Ŕ に野球はチームスポーツであること んそれは他のスポーツも同様だが、 く。いわゆる文武両道である。 練習を重ね、技術と精神力を磨い 分である学業と並行して日々厳し きく成長を遂げる高校時代、 あると思っている。 している日本独特の「道」の精神性が の理由の一つとして、高校野球が 高校野球ファンがとても多い。 囲碁、将棋のように常に先を読み、 の中で様々な戦術や駆け引きが てい V

な武 道 (創 正 Þ 堂 々と全力 を尽くして戦うこと

ゆる「道」の実践を通じて自らの生き 構築してきた。そして、それらの 道や柔道等) を両輪とし かり、 日本人は様 や文化(書道や茶道 て独自の Þ 神 いわ 性 な まり礼に終わる」、「勝って驕らず負け より高 1 価 値を見出す。

実践

ょ

武装集団である武士階級においては、 特に、 己自身と向き合い打ち克つ= を体現したものであろう。そこには 定己の

方を模索し、人生の糧とした。

の倫 あることから、神道、仏 人命や社会秩序に直接関わる立場に 観が ?長い 時 間 をかけて醸 -教、儒教など 成さ 頃の練習や試合を通じ、仲間や相

を創出した。 浸透し、武士道という独自の思想 それは他の民族にはない

思う。 大変高 尚 ですばらし いものであ ると

ば、 武 ○自分の事よりも社会全体 士 道 のエッセンスを平た く言え

為人の為)のことを優先する、

しての ○辛いこと、悲し 分別や深い思慮を持って行動 いこと、 恥ず 思う。

する、 する、 かしいことにも耐えながら、常に 道 に といったことであろう。 お · て 試 合に 勝つこと は 前 進

ちろ

つん大切

な目標だが

それ以上に

高校

野

球とはやは

り似て非なるも

敗に重点

置

かか

れる職業野

球

で

精神は存在すると思うが

こちらは

もちろんプロ野球にも

|球道

 $\mathcal{O}$ 

て腐らず」といった作法や姿勢はそれ

精神や、 根幹にある。高校野 いやる=惻隠の情というものがその 相手の心情を深く理解して思 対球にお いても、  $\exists$ 

交わりながら己を磨く。そしてお互い に敬意を払い、礼儀を重んじながら全

手と

力を尽くして戦うのである。 それゆえに、勝って喜ぶ選手も負け

〇人と (世の まさに 身の生き方を身に付けていく。それは 彼らはそれ ている者にも感動を与える。 て涙する選手もその姿は清々しく、 「野球道」の実践そのも らの 経験を通じて自分自 そして、 のだと 見

礼 に始 であ 幕末、 る 主君

0)

忠

0

蝦夷地 また、 館 やがて社会に出て活躍していくこと なって私には見えてくる。 汗を流す姿が、高校球児たちの 龍馬といった志士たちが で散 様々な経験を積み重ねながら、 いった新聞 開 拓 元を目指 選 組 副 長 て奔走 ・土方歳三や、 剣術修 球児たちも でした坂・ 姿と重 行 本 で

向い たちが 流す涙は美しく、それはい だろう。 辛い時、 .て歩く強さも大切だが、 : 甲子園の土を掻き集め 涙がこぼれないように上 つも私の心 高校 な 球児 が . 6 を

送を楽しむことにしよう。 もつつきながら高校野球 今度の休みは、 Ĺ のテレ ス の洗 7 ヤキ ビ放

の垢を洗い流してくれ

る。

#### 選 評

馬 俊

対 明

あらためて作家宇江佐真理の地 的な数字になったということである。 とで反響を呼び、貸し出し冊数が記録 同 特集に宇江佐真理追悼として、 紙 昨 に 年 Ó 第 載された作品を再掲 55 集 函 館 市 民 文芸 かつて したこ は 元で 巻頭

11

期連載されたエッセイ、 乗するわけではないが、宇江佐真理は エッセイストでもあった。 両 他誌掲載の作品も含めて 見上げた空の色」として出 ウエザ・ 道新に不定 リポ

顔千 ートは、 載された

だろう」とある。はて、さてこの公式 っているからである」対して「男の作 は 評論「反面文学としての林真理子」に 版されている。昨年本誌に転 0 「林真理子のエッセイはおもしろい。 エッセイは彼女ほど笑わせてく おもしろいかと言えば 感心することが多い 本音 なぜ [を語

活動

予内容

の

説明に終始しておもしろ

が当ては 点を置いたつもりだがいかが 「おもしろさ」と「感心」度に重 まるのかどうか。 今年の選 だろう 考

# っこ

曉

りゆ

か?

ある。 でいた「私」の家にたどり着いた話 になりながら飼い主と二世帯で住ん てけなげなりゅ つ越しする家族の様子などと合わせ 主から引き離された犬が、 終戦後の食糧難、 当時の住宅事情や職 っこの姿を感動的に 住宅難 を求めて引  $\mathcal{O}$ ボロ ) 時代、 ボ 餇 口

の人気と関心の高さに驚く。それ

に便

# 描き出している。 「初めての絵本の読み聞かせボラン

グループの紹介である。 なったつもりで演じています」とあ るように書かれている。 足の経緯 ティア」 てなるほどである。 かせ「劇場」では「自分が女優さんに 新しく始まった絵本 から活動内容までよくわ エッセ 毎月 グル · の 読 イとしては み聞 Ì 0 読 プ Ó カン み聞 発 廿

さに 欠けてい る

題 名 形見の品思い出の品を市へ の通り父母が残した形見の品 寄贈

夫が れてしまっていることにものたりな ュースのような題名ですべてが うな品々だろうと思われるが、 のだから時代の貴重な資料となるよ 寄贈した話である。 ルガン・スキー・ 服や千人針の腹帯。 収 集し た カメラや軍 スケー 博物 娘たちが使ったオ 館 ŀ -等々 隊 で引き取る 時 、を市に 報道 :語ら

## 大滝 洋子

さを感じた。

「パン所感

る。 始 糧 場に変わ パンマン」は、そのころを舞台に から学校給食などでパンの味を覚え る時のつらい思い出を書い 軍兵士の前を空腹を抱えて通り抜 進駐してきて、印刷所が 難時 8 パン好きの話である。 そういえばやなせたか た時代を思い出させる文章であ 代 【そして日本人が米食 り、作業を終え たらし パンを焼 函 |館に てい L  $\mathcal{O}$ 光軍が る。 辺 進 く エ 倒 け

始 まったのだ たったか な

## テレビは誰の物なの か

以上の意見は差し控える。 た作品を紹介、選評する場なの が、当欄はあくまで市民から寄せられ ている放送法というのがあるはずだ に公共の福祉に適するように規 ろう。表現の自由を保障するの してもらう」というのが ゲットにしているから、男性に クイズ番組などであれば、筆者が書い が夕食の準 れが男性差別だと訴えている。 の出場資格が女性に限られてい ついての注文である。ゲー いる通り「女性視聴者をメインター 夕方 つのテ ・備で家庭にいる時間 ・ビの 視聴者参加 7局側 ムコ 0 いでこれ と同 意図だ 番 は 主婦層 ] て、 制 遠慮 帯 ナー 組 時 i  $\mathcal{O}$ そ

とあ 参加 るなど相変わらずの旅上手である。国 ってブランドバッグを持ってい ポートである。慣れない一人旅 は 海 か と国内 け 強引に のクルーズの旅 ば連れ を うく

> 取 遊 内 れないとか、本音がずばずば 覧 0 船 方 は での説明が年寄り難聴 船 酔いで吐いてしまったり、 書か で聞 るが 'n き

になっていることに感心した。 年寄りにはもってこいの旅行 ているので、 少々急ぎ足ではあ 2ガイド

世界一小さい美術: 「私の叶わぬ夢」 館の館長になる 政義

作と信じて収集した作品二十枚。そし アマチュアの作品であるが筆者が傑 幸正先生など、 村捷司画 め書き出してみると、七飯に住んだ木 夢を描いている。展示を夢見ている絵 画 のコレクションがすごい。確認 .伯の油絵二十一点。 恩師金子 諸先生の作品六十枚。 のた

て自身の油彩、水彩、色紙、パステル、

デッサン約二百点。

クルーズの旅 片岡 美智子

か。 5 流すなど、この の絵画が アマチ ここに その他収集したレコードを館内に ·勢揃 ュ は アまでの一 函館を中心としたプロ 夢の世 しているのではな 界は、 群の 美術、 画 『家たち カン い

文学等趣味人の域を超えて芸術に

親し 11 と言うべきか。館長以外に立ち入れな のが残念であ んできた筆者ならでは  $\mathcal{O}$ 幽 仙

# 「やつがれな小学生」

交換 らず、読書感想文や学級日誌、作文、 なったのではないか。終わりが物足り 成長過程がうかがえて締めくくりに 化にもう少し がれ」を使わなくなったという心の ったに違いない。いつの 盛なちょっとおしゃべりな女の子だ ったのだろう。言葉に敏感で好奇心 れて新しく知った言葉をやたら 爆笑された話。 それが書生言葉=男性 で「やつがれ」という言葉を知って、 小学生の頃遠藤周作 ノートに書き散らして先生方に 触れてくれると少 女性の身で語 .. の 作 の間にか の自称とは知 :品を読ん 感 「やつ に 惹か に の 使 旺

# 「キッチンの窓から」

な

して見 風の白壁の家の奥さんが亡くなり、 二十年も前からキッチン つめ続けてきた近所の の窓を 様 洋 通

作品、 年経 枚を超えて400字=原稿用紙10枚分あ ような作品である。惜しむらくはこの 化を定点カメラで捉えた掌編小説の の町」という言葉がむなしい。町 える大きな立て看板に書かれた「安心 なった家に泥棒が出没する。窓から見 なったことを聞く。一人暮らしが多く 畑 の手前 って主人の訃報が伝えら 随筆部門の制限字数原稿用  $\mathcal{O}$ Kさん宅の奥さんが亡く っれる。 。 紙 5 の変 花

# |期限付き』で、ヨロシク」

った。書き直しを考えてほしい

0

なにか事情がありそうだが、その ろや「期限付きで」と断るところなど 性に「これから一人」と念を押すとこ うに歌っている。壁に掛けた油絵の女 む心を短いフレー 新しい部屋に、新しい調理器具。弾 のがない のが残念。 ズを重ねて、詩のよ 辺の

## ギュっと」 野口 裕子

私」の手を握り返してくれた時の感 ギュっ」というのは心臓病が悪化 CUに入った 主人」 が付 添う

> 触の表現である。一周忌にやってきた 血脈を描いた感動的な作品である。 いう擬態語で、夫と妻、孫との確か 人」との確かな繋がり。「ギュつ」と ュっと」握りしめる。その時感じた「主 「孫」が「私」の手を離そうとせず「ギ な

### 閑話二題 「目話」「東京音頭」 縁莚 勇二

との「目話」の話 私と整形外科の受付にいる若い 古希をすぎて少し耳が 遠くなった 、彼女

る。二話とも老いの自覚の上に居すわ 人間の記憶力の不思議について考え 音頭」を最後まで歌っていたことから、 った人間賛歌と読んだ。楽しくて感動 先日、何の気なしに心の中で「東京

# 「階段国道と白いかたつむり」

的

別名 それを取り落として泣きじゃくる息 が見つけたものが 詩的な題名の作品。 階段国道」を登って四歳の息子 白 国道三三九号線 1 かたつむり」 水関 清

> 在、 は十八年前のこととあるが、 が成長した後の姿を語る場 拾ったドングリを差し出して、その実 かについてぜひ触れてもらいたかっ 通によって海底駅が廃止になった現 的である。 子に、観光で東京から来ていた少 竜飛岬に至る経路はどうなったの この海底駅を巡る旅の 面 新幹線開 体験 女が 感

た。

る。 く記憶の中で、生まれ育った古里が くなった夫のことも忘れている姉 ムに入った姉を訪ねる。 姉のその五十数年後。群馬の老人ホー 「私の妹あっ子」と笑顔で迎えてくれ 赤川の田園 姉 前後の説明が冗長だが、失わ 妹 [風景の中で育った私と 認知症 で、 れ行 暁子 甦 が

## 「高校野球と武士道」 三輪 貞治

えるという最後の文章が心に響く。

が、その魅力の一つとして武士道精神 するところが多いが、高校野球の との共通点を挙げ 校野 球球 のファンを自認する作者 て論じている。 共感

ながら高校野球を楽しむ」作者のそのながら高校野球を楽しむ」作者のそのは、共感。それに "郷土愛" なども挙が、共感。それに "郷土愛" なども挙がられるだろう。武士道の解説に力ががられるだろう。武士道の解説に力ががられるだろう。武士道の解説に力ががあた。「すき焼きでもつの郷土をがあるだろう。武士道の解説に力があいて歩こう」など、若い頃のヒットがあいるだろう。武士道の解説にないたが、者がしたが、大きでいるがあいた。「するという」があるだった。「するというない。」には、本いではないの思い入れで応がある。

がある作品である。

係はわずかに触れているだけ。その母をさしおいて私にくれた。母と私の関たという姉様人形。母がそれを姉、妹明治二十五年生まれの祖母が作っ

姿勢には賛成である。

やかに

過ぎていったかつての女性

ようだ。

しみじみと伝わってくるもの

姉

様

形を通じ

て描

て

あって親子姉妹と親しみながらひそ

も今年の三月亡くなった。人形の着物

姿だけは詳細に描かれてい

る。

家庭に

- 26 -

## 説

選

小

# 潮風のブルース

佐々木 淳

た観光 せてい ると、 リー 人々で溢れるのだろう。 ナ る。 客 L が が は は 陽が 伏 0 涼 したような形の んびりと歩いていた。 を求めそぞろ歩く人達や、 沈 が む 頃に カラリとした日だっ は 山が鮮やかな緑を浮き立 あ  $\mathcal{O}$ Щ の上 海に背を向 た。 は カメ 夜 く景を眺 クラを手 埋 立 け 地 振 ŋ 8  $\mathcal{O}$ る た 返

見上 が、 は同 に翳 天を突くようなマストを見上げ げ 自 .じようにマストを見上げる少年の姿に気付 るも 転車で通り た右手を腰に戻 0 掛 0 まり った少年は ĺ てヨ 彼にとって ット 様に 0 7 は、 後 V) 、た男  $\exists$ 方 それは ットのマ 向 は、 カン V 0 庇 つの 、スト 7 た。 0 よう V 景 を た

色に過じ 皮を剥 後は足 男は 0 ぎなか ような を掴んで引くと、 船 仲 て身を細切にすると、 間 った。 胴 から早朝に貰った烏賊を捌き始め 体 にナ イフを入れ、 面白いように内臓が抜けて来る。 すでに熱い飯の上に乗せ そこを切 ŋ た。 せ ば、 スカ

は

+

チ

エい

ア の |

E

に寝そべ

胃

 $\mathcal{O}$ 

活

動

デ 小 ッ 丼

V

っぱ

飯を十分も掛からずに平らげると、

0

をデ

切

排

L

た横

臥に入る。

これもって、

も六十六年

の智慧だっ

油

を回して、

男は飯をかき込んだ。大根卸と生姜を乗せ、

ムシャムシ

な

る。

辛

Ď

0

少し

多い

<

か 男 に 5 欲 が う t 11 11  $\mathcal{O}$ t な智 美味 もの は そこには無 通り が、 と続 た 0 お 知 茶 V かと思うのだが 1慧だっ. 時に いだとの つてい 過ぎ、 美味 けて で流 1 のだと、 · 手 1 か ものは )習慣が. た。 た入 · き込 再び 込 む。 れ 彼は思 み、 大概 恋 それは六十六年の人生から知り得た確 我なが ī . る。 付 一気に味わ くな て男は 若い いてしま 少 の物事がそういうものであると、 つってい K いちど躊 頃 5 咽 って戻ってみても、 何 か が いってい る。 らの 度 もっとゆっ 詰まると、 ŧ 躇 癖 重要な 手に入れたい 飯が逃げるわ . る。 て、 くり t 横 飯 V のを失って 目で見 は ツ 喰え もうす  $\vdash$ ŧ け 気に そ ボ なが は 0 1 Ć は 喰 な 方

た。 目を 閉じ 吹きに似 7 潮 ってい 風  $\mathcal{O}$ 音を る。 時 聴 折強 < 鴎 吹  $\mathcal{O}$ く人風 鳴 き声 は 激し は ア ル F 1 ラム ホ

口 ルル のようだ。 男は もう三年の 間、 この音楽を聴 い 7

の財産 下出血 合は 届 0 に病院経営を任せ、 でも行けるが 、端に郵便受けを置いたら、 けてくれるようになった。 友 である「ラミー号」に住むようになった。 で 人の家といったところ  $\exists$ ット 死んだ妻の遺影を持って家を出て、 . О 上が 最早その気にはならなかった。 引退したのが六十三 彼 の世界だった。 が。 気の効いた郵便配達員が、 その気に 時 たま出 一歳の な 時。 残った唯 ħ ば何 息子夫婦 掛 船着場 くも膜 け る沖

の時 う呟いた。「もっとも免許証は息子の家の住所だが……」 9 「何でも試してみるものだ」男は目を閉じたまま、 間 月の強い陽差しが傾き、港が夕日を帯び始めた。 が一番好きかも知れない」男はそう思った。 9月 そ

5

0 はまた来年の夏も、 だった花 若者にとっての重要な夏も、終わりかけている。人々 もう末になり、 灭 踊り ŧ 花火に歓声を上げ、 ほとんどの祭りも終わった。 過去に消えた偉人達の仮装 夜を踊り続 賑や け 行 Ź 列 カ

まどろみに入った。

辺 声 ŋ で 彼 はすっか は 目覚めた。 り暗くなっていたので、 ほ W の三十分ほどの彷徨 数時間が過 0

> ぎたような錯覚に陥 り、 意味も無く周 りを見渡してみた。

日 が短くなったな……」

ような、 うに瓶に り出した。 音量を上げて油の跳ねる音に負けないようにすると、 焦げ茶色のマホ い良く開ける。 れていた黄金色の液体が目覚める。 残りである烏賊の に盛り付けると、クーラー・ボックスからビールを取 を混ぜて塩を入れた。オリーブ・オイルでそれ 頭を掻きながらキャビンに入り、 歓喜 口を付け、 栓抜きで王冠を二度ほど軽く叩いてから、 のような音が 小気味良い音と共に小さな瓶 ガニーテーブルに着くとテレビを点けた。 足に粉を塗し、そこにカレーパウダ ライト・ビールを流し込む。 ビー ルの流れた方向とは 漂う冷気を吸うよ 発電機を回した。 に閉じ を焼き、 唸り 込め 逆の

Ш.

0

考えてない」男はそう呟いて苦笑いを浮かべた。 にそれをビールで流し込む。 揚げたてのゲソをムシャムシャと頬張る。 「我ながら身体 のことは 良く 、噛まず 何も

方向に発せられた。

リー ゆっくりと燻らす。 サックスがキャビンの中を踊りまわる。 0 至福 やがて、 を載せる。 の時がゆったりと流れ ダンサー いつもの儀式が始まる。 チャ 0 ように空中 j アラビア文字のような形の煙が、ベ ij : パ | . る を淫靡に漂う。 力 アナログの î 0 煙草に火を点け、 軽快 彼にとって なアル

やがてハン 枚 0 Ŧ コ ] ックに転 -ドを聴 がり込んだ。 いて三本のミラー 明朝 -を 飲 は 沖 に W だ彼 出 「る積 は É

レ

れる。 ホンキー 気に入りのキャプテン帽の庇を下げる。 朝 ラミー まだ薄 本人にしか解らないその曲は調子の微妙 は 鏡 トンク・ピアノのように、 のような水面 暗 はゆっくりと離 \ \ \ 底 0 だった。水晶 発動 れた。 を 。舵を片手で持ち 流れ続けた。 回 Ļ に閉じ込めたよう 口から歌がこぼ 棒で埠頭 元に外 れた を押

S の 微風 を釣ろうと思った。 を進 水銀の上を進んでいるような錯覚を覚える海だっ の海 マーキング地点に着いた。男は昨日のお返し めてくれた。 は **穏やかで帆は小さく膨らみ、ゆっくりとラミ** それほど沖に進まないうちに、GP に烏賊 た。

伝わる。 面 がら海底 て行く。 に浮上して来た。 帆を降ろして、 、それ でのたうつ烏賊が「キュー」と鳴き声を上げた。 烏賊を寄せるために付けられたL を繰り返 糸を引き上げてゆくと、 に消えて行く。 く。一匹、二匹、 す。 沢 空中に上げられた鳥 Щ やが . の 針 糸を引い てずっ を付けた糸 三匹と連続し 烏賊 しりとし ては沈め、 を の茶色い 錘に て上 賊は水鉄 た Е 重 引 任 D が 胴 4 1 せ /煌 ては 砲 が n 体 て が 手 きな のよ 沈 る に 沈  $\Diamond$ 海

> が、 にギラギラとし そこで釣 回っている。 三回 男は 彼は自分が飽きずに喰い切れる分だけで良かった。 ほ 再 ど仕掛 が帆 りを止 を けを沈っ 張 め 始めた。 り、 た。人によっては何十匹も釣るものだ はめ、七匹の烏賊を吊り上げた男は、 マリーナに 鴎がラミーを追って上空を飛び 戻って行く。陽は はすで

うに ŧ, 内 ようにそれをかき込むと、 びを摩り下ろし、 Щ 臓 わさびの強烈な辛味 昨 . 飛 再び烏賊と飯をかき込む。 を空に放 日と同じように手馴れた捌きで烏賊の刺身を造った。 が乱れ る。 り投げると、 男は烏賊 丼の中央に乗せ醤油を回す。 が鼻に 満足気な微笑みを浮かべた。 数 羽 の身を熱い 抜 ける。  $\mathcal{O}$ 鴎がそれ 涙目 飯 に になり を取 乗 せ いつも り合うよ Ш わ ż  $\mathcal{O}$ 

友達の 終 が < 11 ヤ わ 居ない。 ビンに向 重たくなった腹を持ち上げるように立ち上 ったのだ。し はず その少年は ズボン。 海を観てい かって歩き出した。 りになることはないし、 今日は月曜日だし、学生の な ここは学校では か 昨日もそこに でも 少年 男の目に は自 なく、 いた。 マリー には一人 転 潮風 車 白い ナには 夏休みは マリー  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ が授業を教えて 少年 で地面 長 ・ナだ。 袖 ほ が が とん とっくに ると、 0 映 座 ヤ つて 鴎 が

ヤビンに入った。 水だけだ。男はすっかり白くなった髭を摩りながら、 平線とそれを創り出している気の遠くなるような量の海 方を見詰 男は キャプテン帽 めてみた。そこには珍しいものは何もな の庇 を上げて少年の視 線 が 向 かう彼 水

そう呟いて剃刀を顎に当て、白い髭を剃り落とした。 退した頭髪と、 数ページ捲ったところで案の定睡魔がやって来た。 湯を沸かして髭を剃ることにした。鏡を覗き込み、 ハンモックに転がり、先週買った船の雑誌を捲った。 悪魔の訪れ……。 額の皴を見詰める。「歳をとったもんだ」 心地 後

が誰 「岡さん・ かの名前を呼んでい

西岡さん!入るよ!

かが何処かに入ると宣言してい

「お昼寝してたか、邪魔しちゃったね」

もった重そうなケースには瓶のビールがずらりと並 ボンでハーフカウル 目を覚ました。 のヘルメットを被っている。 目の前の侵入者はTシャツに半ズ 両手で ん で

く咳きが治まった彼は涙目で男を見上げた。 は 急 咳き込み、 激しく肩を揺さぶった。 ようや いた。

カラなビールを注文してくれるのは西岡さんくらいのも だ」男はビールのケースを床に置き、 西岡さん、愛飲のビールを持って来たよ。こんなハイ 「また煙草を吸い過ぎたね」そう言って彼は笑った。 クーラー・ ボ ツ

クスを開けて瓶を並べ始めた。 ああ、 ありがとう。すっかり眠っちまったよ。 いう

W

ちに沖へ出たもんだから……」西岡はハンモックから降

持って行ってくれ」 りた。「ビニール袋に入っているのが今朝獲った烏賊だよ

「悪いねえ」男はビニール袋を摘み上げた。

入ビールを取っていた。 西岡は古くからある近所の酒屋から、毎月のように輸 毎月ビールを運んで来るの には酒

らない状態だった。 にするか、まったく別の商売をするのか決めなけれ では、すでに三代目が活躍してい 屋の二代目で西岡よりも二歳若 い柏村だった。 たが、 いずれコンビニ 柏村商 ばなな

ない。 儀なくされそうな男の、 になることもある。 柏村は西岡とは釣り仲間で、柏村が時折ラミーの すでに一線を退いた男と、それを余 相憐れむ友情だったのかも知れ 船員

から、失礼するよ」

そのうちまた、

釣りに行こう」

「それじゃあ、

この 後、

息子と店番を代わらなきや

ない

- 30 -

送った。 柏 村 0 背を追うように 西 岡 は デ ッ ¥ に 出 友人を見

型バイクの マリー 柏村は ナから去って行った。 ス 1 可愛いと言えるエンジ ] カブのス ターター ンの音が を踏み込んだ。 始 まり、 彼は 小

ふ 気が付くと、少年がそこに居た。

立ち始めていた。少年は黙って、その 西岡 少年は、まだ海を見ていた。 は少年のことが気になった。 静かだった海 何かが 波を見詰めて 咽元辺りで蠢 は、 白波が 1 た。

いているのを感じた。 やがて振り向いた少年と彼の 視線

じら にすると、無意味にそこらを歩き回った。やがてポ が合うことになった。一秒に満たない交流 が逸らし逃した。 彼はキャビンに戻り、 は、 雑誌 初老 ロシ を手 の恥 こんなことを考えていた。

かな空間に載っていた眼鏡を手にすると、 手を入れ ヤツの胸ポケットを弄ったり、 たりし てから、 丸い 覗き窓を嵌め 半ズボンの尻ポケットに 込んでい 再びデッキに · る 僅

上がり、 は はまだ、 雑誌を眺め始めた。確か同じページを五回 デッキ・チェアーに横たわった。 そこに居た。

は

眺

に目を めた事を自分に言 キャビンに降りて脱ぎ捨てていた洗濯物を麻 やった。 もう直ぐ正午になる。 い聞 かせた頃 彼 は 雑 誌を置い て時 の布 計

> た。 りで蠢いていたものが、 横で漫画本を見てい  $\mathcal{O}$ 袋に入れると、 間に渡した歩み デッキに出 小物 て大きく息を吸い 板 入れ る少年の横に を渡った。 勝手に飛び出して来た。 の抽 斗 カ 埠頭に上がり、 、込むと、 差し掛かると、 でら小 銭入れ ラミー を取 自 -と浮 転 ŋ 車 出 辺  $\mathcal{O}$ 橋

「君、学校には行かないのかい?」

お節介といえば、

お節介に違い

な

い。

だが、

西

岡

は

完

全な無関心では居られなかった。 まま俯

「もう直ぐ昼だ。 少年は一 瞬瞳を上げたが、 何か喰った方が 再び無言の 良

いた。 そう言って西岡はその場を離れた。 彼はいつも行くコイン・ランドリー マリーナを出て通りを渡る。 その道すが に向 かって歩 5 彼は V

たものか……。 何 か喰った方が良い 別に、 あの少年の栄養状況が心配だったわけではない。 なんて、 もう少し他の台詞

だった。 に 1 る定食屋に飯を喰いに行く。週に二回はこの はラー スを行う。 コ イン・ランド メンを注文するが 注文は野菜炒め定食か生姜焼き定食。 ij - に洗濯: 物を詰 ほとんどはどちらか 8 込み、 お決 軒 まりコ 隣 定食

7

に手を入れる 置いてポロ 新聞を取ってカウンター席に座る。 らっしゃい」と言葉を掛ける。 「巴軒」と書かれた古い暖簾を潜ると、高齢 シャツの胸 を弄り、 西岡は微笑みを見せると、 次は半ズボンのポケット 新聞をカウンターに 0 女性が

そう言って笑った。 首を傾げる西 「何にしますか?先生」手に幾つものシミができた女は 岡 を見ている。 「眼鏡、 忘れたんでしょう」

テレビを眺め始めた。 「ご推察通り……。 野菜炒め定食」 西岡は苦笑しなが 6

がフライパンを煽りながら、チラリと目を向けた。 「眼鏡チェーンを付けて首から提げていれば忘れないよ 「まったく、 「俺の眼鏡、 色んな物を忘れるようになっちまったよ 貸そうか、先生」カウンターの中の老主人

ね。 合わせる。 料理用の大きなお玉がそれを掻き消すように食材を混 も無理だけどね」一瞬フライパンから火が立った。 先生なら似合うんじゃねえかい?俺なんかはとって 中 ぜ 菙

だな」西岡は再び苦笑した。 「そうやったところで、 ブラ提げていることを忘れそう

昼の時間 すべて埋まることなどなかった。つい五、 は満員だった。更に時間を遡れば、 三人と、客が入って来た。それでも店 六年前, 町全体に活 の席 ま で は は

> シミに彩られるように、乾枯は地方都市に浮き出し と忍び寄る。 気があった。 心に鬱が忍び寄るように、 女の肉付きの良い白い手が 閑散 1 つの は ľ 間 ゎ てい カ

日も雨は降っていない。 空は灰色に変わり、 食事を終え、マリーナに戻ると、少年の姿は無か 涙を零しそうな雲が見える。 つた。

「今夜は空が、大地を潤してくれるかも知れない はそう想った。

西岡

焼く油の音が聴こえないくらいだった。 く音が聴こえ始めていた。 城を決め込ん 雨が激しくデッキを叩く。 陽が 沈 んだ頃、 でい た西 雨が降り始めた。すでにキャビンに篭 岡 の耳 アフリカ大陸の太鼓のように、 その音のせいで、烏賊の足を に、 大粒 0 雨が デッキ を叩

める。 料 こにアンチョビを溶かした。 .理店で出しても良いくらいだと想い、微笑んだ。 ミラー オリーブ・オイルにニンニクのみじん切りを入れ、 乾燥バジルを振掛 ・ライトの王冠を栓抜きで二度叩く。 付て白 烏賊の足を入れて素早く炒 皿に盛ると、イ 咽に タリヤ 流

込んだビールは格別 「パセリを盛れば、 だった。

もっと良いな」西岡は一人呟いた。

気が荒れると息子や嫁から電話が入ったものだった。 雨は激しくなっていった。ラミーに棲み始めた頃は

天

「父さん大丈夫かい?」

「お父様、家に来て下さい」

やら催眠にかけられているような気分になってきた。西ビールを呑みながら、激しい雨音を聴いていると、何つまでも心配しているほど、若い夫婦は暇ではない。 最近は最早、心配電話もなくなった。無理もない。い

遠い昔のように想えたが、実はそんなに昔じゃあない。岡の頭の中では、過去の想いが巡り始めていた。それは

て来た。 ぺを行っていた。救急医療にも携わり、多くの生死を観べを行っていた。救急医療にも携わり、多くの生死を観ー自らがメスを握っていた頃……。若い頃から多くのオ

た。 西岡の頭には、無影灯の残像がぼんやりと浮かんでい

態で再び戻って来た。 ようやく救った命が、六十日後には、救えぬほどの状た応急の止血を外し、切り裂かれた血管を縫い合わせる。 ストレッチャーで運ばれて来る若い女。手首に施され

> 治まった。 ように咳が出た。 陋習は捨 彼 は煙草に手を伸ば て去るべきか……」 それは急に激しくなり、 した。 まるでそれに合わせるか 彼は煙草 0 箱 そして徐々に カ 5 手 を 離 (T)

か眠りに落ちて行った。
西岡はビールを煽り、目を閉じた。そしていつの間に

し、代わりのものを掴んだ。

ている。西岡はデッキで大きく身体を伸ばし、深く息を早朝に目覚めた。雨は止み、朝焼けが鮮やかに広がっ

やら弄り始めた。 年は自転車から降りて携帯電話を取り出すと、それを何 らデッキに出すと、 やすいように縛ろうと思った。 く。男は紐を手にしてデッキに広げた雑誌 見ているのか、あの鋭い目で沖を見詰めている。 吐いた。鴎がマストの上に止まっている。そこから何 風が変わ i) 雲が流れた。 彼は再び、 落ち着いた時間 雑誌の あの少年の姿を見た。 塊をキャビンか の山 が過ぎてゆ 「を、 深く息を 持ち

向 なかった。 だけで良いんだ。頼めないかな?」 西 岡 た少年に、雑誌 は声 ちょっとだけ手を貸してくれないか?」 厂を掛 けた。 の山を指で示した。 この 朝、 そうすることに躊躇 「押さえてくれる 彼 は 振 は

視線を戻した。 年は 彼は 電話をバッグに入れると、 暫く西岡 恰も無視してしまったかのように思えた のことを見ていたが、 ヨットに向かって歩 再び携帯電 話 に

み寄って来た。 「足元に気を付けてね」西岡 ]は満足気に微笑んでい

るかな 迎え入れ、 「そのままデッキに上がって構わないから」彼は少年を 雑誌 の山を指差した。「ここを押さえてもらえ

は、 西 岡 少年は の心に染み入った。

か細い声でそう答えた。まだ幼いその声

「はい」

「そこを、 西岡は紐を手にして両膝をデッキに着けた。 もっと押すようにしてもらえるかな

らかな手と交差する。 んだように深い皺が 持った西岡の手は、陽に焼けて荒々しく、潮風が染み込 小 年の 細 手が、雑誌の山を押さえ付けていた。 あった。 その逞しい手が、少年の柔 紐を

縛ってみるか 「セイラーは色々な縛り方ができるんだ」西岡は縛 の塊を後にやると、次の山を整えた。 「次は君が り上

西岡 と同じようにして、紐を巻き付 け

ーそうだ。 そこの 下 ・を通し 西岡 は少年の細 1 指

が案外器用に動くのを見守った。

「そこで、もう一度、グルリと巻くん 年は雑誌 の 山を縛り終えた。 些細な事だが、少年の

顔には、 で空の器に、 僅かに満たされた微笑が浮かんで見えた。 ようやく水が注がれたように……。

両手を腰に

当てて、華奢な少年を見詰めた。 「巧いもんだ」西岡は雑誌の山を重ねると、

「ちょっとここで待っててくれ

の缶を取り出すと、デッキに戻り、一つを少年に手渡し 彼はキャビンに降りた。クーラー・ボックスから二つ

た。 「アルバイト代だよ」そう言って微笑むと、リングプル

だ。「色んなジュースがあるけど、やっぱりコーラが を開けた。炭酸が抜け出す音がして、 い大気に溶けていった。西岡 は 黒い液体を咽 冷気が未だ蒸し暑 に流流 込ん

- 34 -

「ありがとう御座います」少年はそう言って、 口飲んだ。 ラを

好きなんだよ」そう言って少年の横顔を見詰めた。

欲求を感じていたわけでもなかった。 頭なかったし  $\mathcal{O}$ その言葉を口にしてしまった。 |本当なら学校にいる時間なんだろう……たぶ 飛び出 してしまった。 行かない理由を突き止めたいという強 説教する積もりなど毛 カ <u>گ</u> 何 故かそ 西 岡

だよ。 れば一々考えることなく、 プを手に取った。 てね」西岡 のように此処へ来るのなら、 その目的に合った結び方を選んで使う。 は微笑みを造り上げ、 しく聞こうなんて思っては 「セーラーは色々な結び方を知ってるん 自然に手が動く。勝手にね 君と友達に 傍らにあった細い 1 ない なりたいと思 ・んだ。 慣れてく 口

を交差させた。同じように青を赤に巻き付けると、 彼は青いロープと赤いロープの端を交差させて青に赤を 度巻き付けると、今度は輪を描くようにして再び二本 両端

を引いて輪を狭めた。 少年は西岡の手捌きをじっと目で追っていた。

とロ ープを少年の細い手に渡した。 「これでこの二本は離れない。どうだい?まるでロー プが握手しているみたいだろう」西岡は結んだロ プ

かりと手を握り合った。 を狭めてみた。 少年は物珍しそうに眺めた後、 輪がきっ ちりと締まり、 ロープの端を引いて輪 二本は更にし 0

ンドリーに向かった。

結び終えると、二本のロープを引いて輪を縮めた。「これ 交差させた。「さっきより一回多く巻き付けるんだ」 したようなものだな 西岡は もっと強力に結び付くんだよ。肩を組んで、握手を 別のロープを二本手に取ると、再び同じように 彼は

少年はその結び目を受け取ると、強さを確かめるよう

に、 二本のロープを引いてみた。

日

ニコニコとしながら見ていた。「君、名前は何て言うの?」 西 一岡は少年の、あどけない、 とも言える仕草や表情を

彼は自然にそう言っていた。

白い歯を覗かせた。 「おじさんは西岡だ。よろしく」彼は浅黒い顔を崩して 松原です」少年は小さな声で、 そう答えた。

行った。 少年は目を合わせることもなく、西岡の砦から降りて

西岡 もまた、 無言のまま少年の細い背中を見送った。

はい 間が過ぎ、 その日も色々な物を片付け始めたら、 を手伝い、 何 つものように洗濯物を袋に詰めて近くのコイン・ラ 日か掛けてお城の中を整理した。 時計を見ると午後の一時を過ぎていた。 微笑みを見せながら 昼頃には去 少年は、 あっと言う間 って行っ 毎 目 に時 西岡 た

棚 り上げた。 と視線を移すと、 映っている。店の老夫婦はテレビから西岡に、ゆっくり の上に置かれたテレビでは、 巴軒の引き戸を滑らせると、 「いらっしゃい」と枯れた声を精 客は一人しか居なかった。 見慣れない昼 のドラマが 杯張

野菜炒め定食」西岡が注文するのを待っていたか 0 ょ

うに、客が立ち上がってレジに向かった

を上げ 新聞 を読 た ケットに入れたはずの が み始めた。 目 Iの 前 に差し出された。 一通り読み終える間 老眼鏡を確 麻 カン 油 8 もなく、 ると、 .の香り 湯気 が 西岡 す

え?」
え?」
を対していけど、警察もどうにか出来ないのかねか何だか知らないけど、警察もどうにか出来ないのかねる新聞を覗き込んだ店主が、そう呟いた。「ストーカーだる新聞を覗き込んだ店主が、そうないた。

顔を見詰めた。「マストが折れ 音を立てて沢庵を噛んだ。「自殺も三万人だ」彼は店主 毎 店主は黙って年老いた妻の背中を見詰めた。 潮の力に流されて、何処へ 日 のように誰か が殺されてるね」 向かってい て漂流しているようなもん 西 るの 岡 は かね 小気味 彼女は : 良 テ 0 い

激しい咳を始めた。うように飲み込んだが、突然水を吐き出すような勢いでうように飲み込んだが、突然水を吐き出すような勢いで小さなガラス・コップを口に付け、冷たい水で口中を洗」定食を平らげた西岡は、ビール会社のロゴが描かれた

レビを見上げて、

じっと画面に見入っていた。

よ」頭を掻きながら彼は新聞を広げた。「中学生位の子が、「水が気管に入っただけさ。煙草は大分減らしてるんだブルを拭いていた老婆は笑いながらそう言った。「おや、先生。煙草の吸い過ぎなんじゃないの?」テー

出した。 毎日のようにマリーナに来るんだが」西岡は唐突に言:

「授業に出ないで海を見に来ている」

ってのは、陰湿らしいからね」に行かないなんて言い出したことがあったよ。今の虐め視線を上げないまま会話した。「家の孫だって一時は学校「虐められてるんじゃないの?」店主は鍋を洗いながら

いたら……」彼はカウンターに小銭を並べると、静かに造り上げた虚構を崇拝している。そんな大人を見続けてや権力そのものに敬意をはらう。決して人格ではなく、が人に敬意をはらわなくなった時代だ。その代わり、金「ああ……」西岡は立ち上がって小銭入れを弄った。「人

拭きながら、共にお礼の言葉を囁いた。店主は鍋を洗い続けながら、妻はテーブルをフキンで

店を去った。

は黄色とオレンジ色に彩られている。高い空に鱗雲。遠くに見える学校を取り巻く銀杏の葉違う何かに包まれていることを感じた。それは秋だった。ヨットに戻った西岡は、マリーナがすでに、昨日とは

「秋なんだな……」

早く捕まえると、包み込んだその掌をゆっくりと聞いた。のが空を舞う。彼は目の前を飛んでいた一匹の雪虫を素秋はいつも泡沫のように消える。そしてすぐに白いも

雪虫 って行 は 0 ほ W の 一 瞬 動 か がずにい たが 再び 何 処 カン ^ 飛 び去

う計画だった。明日、少年を誘って、ほんの少しばかり港を廻ろうとい明日、少年を誘って、ほんの少しばかり港を廻ろうとい高い空を見上げた彼は、ある決心をしていた。それは

ほんの少し港を散歩しないか?」「やあ松原くん。天気が良いから、エンジンを使って、予想も当たり、少年は今日もラミー号の前にやってきた。彼の予想通り、次の日は晴れた凪だった。もう一つの

「引はる)などは、「Nino)」。 少年は少し微笑むと、自らデッキに上がって来た。

西岡は彼の微笑みを見詰めた。

は午後2時を指していた。るだけだからね」そう言って西岡は腕時計を見た。時計い。でもまあ、硬いことは抜きだ。ちょっと港を一周すい。でもまあ、硬いことは抜きだ。ちょっと港を一周す「本当は勝手に君を連れ出すのは良くないのかも知れな

波が後ろに広がって行く。に、掻き分けられた、重い海水が押し退けられ、V字のに、掻き分けられた、重い海水が押し退けられ、V字のりとラミー号を進めた。舳先が重厚な扉を押し開くよう(彼は小馬力のエンジンを掛けると舵輪を操り、ゆっく

頭を水中に突っ込んでいる。少年はその光景から瞳を上付けた。小魚の群れを捉えたのか、沢山の鴎が海に降り、少年は防波堤の向こうに、ざわめき群れる鴎の姿を見

げ、徐々に水平線に近づく太陽を見た。

ラミー号はゆっくりと進み続

がけた。

西岡

は思

出

二人は何も喋らなかった。会話はあまり必要ではなかを眺め、朽ちかけた埠頭のコンクリを見詰めた。ればならない。眠りに就く前の儀式のように、彼は岸壁るように、港を廻った。冬が来ればヨットから降りなけ

やがて夕暮れが訪れると、風が出て来た。ったのだろう。

「ブルースだ……」

うに夕焼けの空に流れていた。ブルースのようであり、鴎の声はブルース・ハープのよ風は西岡の耳を鳴らした。それはシャッフルの効いた

犬を連れた中年紳士は何かに興味を示して動かなくなしたお腹を、もう片方の手で押さえている。したお腹を、もう片方の手で押さえている。すっかり雪の消えた春の景色を楽しんでいた。恋人同士する日曜日の午後だった。マリーナを散歩する人達は

ったその場所で、黒く澱んだ海水を見詰めていた。男がいた。二十代前半らしい風貌のその男は、空席となかつてラミー号が停泊していたその場所に佇んでいる

った愛犬をじっと見下ろしていた。

ですか?」いつの間にか男に近づいていた人物は、白髪「あのう、そこにあったヨットのことを、知っている方

混じり

0

頭

髪と口髭を蓄えてい

方に良くしてもらったものですから……」 の持ち主 「ええ」 男は ……名前は 頷 いた。 確 6 か西岡さんと仰ってました。 7年前 にここに あ つ た Ξ その ット

私の父ですよ。死んで6年以上経ちます」「ああ」口髭の男は溜息のような声を漏らした。「それ

は

「亡くなられたんですか……」 まの父ですよ 死んて6年以上経ちば

く医者の不養生というやつでしたね」「ええ。肺癌でね。気付いた時には末期でした。まった

に行きたくないばかりに、此処へ来て……西岡 ットに乗 んですか。 西 男は少々驚いたような顔を見せた。 出 0 せてもらい、この港を廻ったこともありました」 息子は微笑みながら、 そんなことも一切知らず、 大きな綱止めに腰を降ろ 「お医者さんだ ただあの 含ん 頃は学 こった 0  $\exists$ 校

した。

防波堤 なんて、 死 「病床で ぬ 7 の下手な 先端に見える小さな灯台を見詰め その 信じられませんでしたが 私や私の妻とも距 前 話を 父が に亡くなっ してい 見ず たも 知 ま 6 したよ。 一離を置いていた。  $\bar{O}$ ずの少年を乗 で、晩年 ね」彼は 愛想が  $\dot{o}$ た。 腕 せ 父はずっ 悪くて人付 を組 て海 病院を私 母 は む に 父が کر 出 る き

分と同

じ

理

山

なのだと感じてい

た

た。 し始 L 経 大好きな場所で気ままに暮らせたのだから、 姿を描くように、じっと海を見詰めた。「最後の何年かは、 るかと思えば、 者を救ってきた人だった。 ことは出来なか 彼は視線を落とし、自分の爪先を見詰めた。「父が何故 んでも、 久しぶり、と、  $\exists$ が好きだった。 の電話が ットでの生活を選んだのか、 営する民宿に転 任 め 音楽とヨットと海を愛していた。 せると、一人でヨットに る。 涙が出ないと想っていたが……号泣しましたよ」 そん 入る」彼は最早そこに存在 いや、 さようなら、だけだった。そんな父が 必ずといっていいほど、 ったけど……外科医として休 な生活を続 がり込ん 気ままで自由な生活を信 休日を珍しく家で過ごして がけてい で、 住 春 最後までその真意を聞 4 たん 始 にはまた め た。 私と父の会話 ですよ。 L ない 病院 ヨッ 冬に 父は自 船と父親 から呼び みもなく患 奉し } 父は は で暮ら 友 分の 7 孤 人の 死 Ś  $\mathcal{O}$ 独

運 ベ なが 一命を 松原 方は、 ~ 5 , 悟 っていたのかも知れ 目 最早遠い思い出となった西岡 0 前  $\mathcal{O}$ 男が此処を訪 ない」 れ たの は の顔を思い どうやら自 浮か

たん 自 「言葉には たと 母は突然台所で倒れたきり、 想います。 しな  $\mathcal{O}$ 状 かったが、 に は 外科医として多くの 何一つ たぶん 気付 父は自分が許 もう目覚めることはな てあ 命を救 げ 5 れ 0 せ て来た な な カン 0 0

私も、 とは 上げた。 はずっとそう思っていましたよ」 る人で、 は家族よりも仕事が大切で、自分の妻より患者を気に たんですよ。 カ った。 なかった。それどころか、母は親父を崇拝してい 父のことは、今こそ尊敬しています。 愛しているのは自分自身なのだと……子供 その時も父は、 母は親父のことを一度だって悪く言っ 患者のために病院 男は潮風に向けて顔 でも、 向 カ 0 親父 たこ 0 た。 7 を 頃 す

に一艘 り過ぎた船が防波堤 二人の耳にエンジンの音が聴こえてい の船が港に入って来た。 を廻 つり沖 向 かって行く。 た。 目 の前 ほぼ を通 同 時

松原は、 独 り言のように呟い

に逃げたんです。 と言ってました。 ていた瞳を上げた。「西岡さんと最後に港を廻った帰り、 てくれて、共に過ごしてくれたのですから」松原は伏 西岡さんのおかげだと想っています。 んです。 「虐めを受け 夕日 僕は孤独を愛したのではなく、孤独という場所 が 輝 ていた僕は、此処で過ごすことが多か い 僕にはただの潮風だったけど……」 それでも、一応、大学に入りました。 ていて、 あの人はブ ノルース あの頃 が聴こえる 声を掛 った せ け

> くて ŧ, 時 が 流 れ、 潮 0 流 れ が 変わ れ ば、 新 V 所

向 かって行くはずだと……」 西岡 の息子に微笑みを向けた。

松原

は

戻り、 まらないのだと知りましたから……だから此処でやり したいんです。失ったものを取り戻したいんです。  $\mathcal{O}$ 「今は東京 時があるけど、 働きたいと想っているんです。どんな人にも の大学に通 それを乗り越えて行かなければ っています。卒業したらこの 何 不遇 誇 も始 街 直

松原 愛情や、大切な人との時間を……」 は力強い瞳を見せた。 それを見た西 岡 は 大 頷

た 逞しい青年に成った

11

す。 <u>寸</u> て微笑みを見せた。 が始まっているような気がします」松原は この ち止 僕が西岡さんの所へ来ていた時 まり振り向いた。 街にも新幹線が そして背を向けて二、三歩進 · 来て、 観光客も増えてきたそうで よりも、 西 新しい 岡 に だが、 向 何 か か 0

事を忘れない たぶん、きっとまた、 ために」 此処に来ると想 1 ます。 大切な

去 気流を捉えると、 一つた。 鴎が 羽、 沖に向かって飛 空高く舞 VI 上が 'n で行った。その鳥は ŋ 太陽 0 彼方に 了 . 飛び 上 昇

彼は遠く、

水平線の彼方を見詰めた。

さん

決

L

て言葉に

しなかったけ

ど、

せる

な

僕に言ってくれたのだと想います。

今がどんなに苦

## 説 入

選

小

## スイレンの葉と水の中の地球

浜

凪

くの家の近所には沼がある。 沼と呼ばれ てい て、 名前の由来はよく知らない。

なだらかな丘と林に囲まれ、 東屋があって、 スイレンの葉が浮かぶ水には赤い橋 沼の外周にはところどこ

がかかっていて、 生まれた時からずっとそこにあったから特別何も思わ いつもカモが遊んでいる。

ないけど、見ようによっては結構いい場所かもしれない。 だって、前に京都に遊びに行った時に見たガイドブッ

る。

高尚で、 クに似たような沼が載っていて、その沼は扱 なんだかすごくもてはやされていた。 い がえらく

になったりしない。 しない。 かったのか。惜しいな。でも、それでも有名になる気が の地味な場所 そうか。この沼に由緒ある寺や神社があったらよ キャッチーな話題に乗る何かがないと、 は全国に名をとどろかす有名スポット こんな

くにとって大切な場所だから。 人がうじゃうじゃ押しかけてきたらイヤだもの。 いんだ。この沼 は有名にならなくてい ここはぼ

> 頃からぼくは、そこには何か得体の知れない大きくてナ 大きな輪が浮かび上がって水面 沼には、 カエルも、 フナも、 エビも を揺らすから、 いて、 マ水底 子どもの から

ゾ そんなゾクゾクがいつも背中の辺りにさわさわと忍びよ 怖いけれども見てみたい、 の生き物がいるような気がしていた。 淀んで底まで見えない水の暗さが余計に想像を煽 知りたくないけど知りたい、 って、

ったけど、何もなくてもぼくの足は引き寄せられるよう 友だちと連れ立ってフナ釣りや虫捕りに来ることもあ

ンの葉の上にいた今まで見たこともない大きな牛ガエ にここに向かった。 そして、小学二年の空がやけに明るい春の日、スイレ しょっちゅう来ていた。

ル

覚えている。 を捕ろうと手を伸ばして、 たかが、七、 八歳の時の出来事なのに、今でも鮮明に ぼくはあっさり沼に落ちた。

ない色を持つスイレンの花の、 い桃色と薄 桃色と白という、 妙にピンとした完璧なフ まろや かさこの

オ ル ムのこと。

まさに今、手に入ろうとしている、 モーモーと哭く土

色の巨大な牛ガエル。

手を伸ばした瞬間に聴こえた、 いきなり激変した世界。 トポンという小さな音。

たさ。しまったという思い。 恐怖。耳がキーンとす

る。

青の地球が見えた。 前の水の中にとっぷりと浸かりながら回っている、暗い 中に落ちて行こうとした刹那、 だんだんなんだかあきらめて、 そこは闇で、何も見えなくて、最初はもがいて、でも、 静かで真っ暗なその闇 急に視界が開けて、 目の 0

のような音を出してゆっくりと回っていた。 それは沼と同 ]じくらいの大きさで、ゴゴゴゴと地響き

いない生命力とパワーで圧倒するように回っていた。 あって、 があって、色があって、光があって、緑があって、 なぜだかわからないけれど、少し悲しそうに。 形は確かに地球儀のようだったけれど、リアルな凹凸 何より、混沌とした闇の水の中で少しも捨てて 地が

こるもんじゃない。

手を当てたくなったけど、 えて、まるで回るために血を流しているような気がして ったより距離があって。 ゴゴゴゴという音が、どうしてかぼくには悲鳴に聴こ 目の前にあるのに遠くて。

> 飛行士のようにポワンと浮きながら見ていた。 よりあまりに大きいその物体を、

くの体

ぼくは

宇宙

強さと寂しさが一緒にいる。

そう感じているのに、ぼくの目の前で繰り広げられて きっと、回るのはたいへんなことなんだ。

V る光景は、とても美しかった。

体は軽くて、息もできて、不思議とそんなに苦し

なかった。 そこから急に意識は薄れて、あとの記憶はない。

れのせいだったんだという思いだけ。 ぼくの中に残ったのはただ、ああ、 あの水底の はこ

した。正直に話 も、水の中で見たことを話しまくったこと。一生懸命話 ものすごく怒られて泣いたらしい。でも、 ていない。覚えているのは、家に帰ってからも、学校で ぼくはその後、近くにいた大人に引き上げられ、 した。だってこんなスクープ、滅多に起 あ んまり覚え

るというお決まりのセオリーを歩んだ。 案の定、ぼくの話は夢だと笑われ、 嘘だとののしられ

は水の中の地球 て来る輪を指さして、となりにいる友だちや親に 凝りもせずまた沼に行っては、水底から浮 その時の相手の目や表情を感じる度に、ぼくは怖く 0 せいなんだぜ」と何回か言ってみ かび上 「あれ たけ が 0

なり、 ってい 悲しくなり、だん るような気になって、 だん自分がまちがったことを言 次第に口をつぐむようにな

ょっと笑える。「この胸のトキメキをみんなにシェアー くなっちゃったん い話だ。 人になっても延々家族や親せきの間 今思え ひとりの共感者もいないまま、 の話 説得力ゼロ。信憑性ひとつもない。 ば なんて、 カをやって沼に落ちたというネタだけ むりもない。 んだな、 沼に落ちたショックでちょっとお 夢でも見たんじゃない そんな荒唐無稽な した恥ずかし ぼくの話は で語り継 話 葬られる 自分でもち が · の的 しかも子 れている。 が、 な笑 か i L 大

人になったかというと、この体験をまったく意に介さな 幼い頃 ぼくの体験が 中途半端でだらだらとした大人になった。 の、この特異な臨死体験を経てぼくがどん いつのまにか 「昔から周りに 迷惑を かか な大 け

葉を、

誰も受け入れなかった。

っちまったな。

あの時の

ぼくの真剣な思いを、

真剣

な言

い思い出。

P

まーす!」と意気込んで撃沈

面 かけての説得力の方はすごくあるからだと思う。 目 て授業を聞 と事もなげに身内で な 高校は普通に行って、 Eいているわけでもなく、 時 々学校は 休むけど残りは 語り 継 すごく真面目でも が れ るの かといって部活 行って、身を t それに 不 真

> に カン け 12 ら下の 進路は決まって行って。 多くてそれ 熱中するでもなく、 中あ なりにつきあって、 たりをウロウロ 友だちは結構 してて、 成績 V て、 その成績で自動 は V つでも中の 浅く広く数だ

普通なのに不憫というか、つまらないことでひとりだけ ら光でも出てんじゃねぇのか?と思うことはあった。 くあって、 やっているのに、 間が ただ、 悪いというか、タイミングが良すぎるという 昔から、 目立. つ何ものもないのになんでだ?何か みんなと一緒に ぼくだけ見 つかって怒られ いるのに、 ることがよ 同 じ ように 体 カン

だ ぼ 5 け から受け入れる気の くも真実を必 1 を持ってきて食べていたらぼくだけ見 怒られて、親が学校に呼ばれたりした。 の時間にだるくてロパクで合唱曲を歌っていたらぼ から、 くはもう面 りで怒られることもあって、さすがにそういう 見 中には本当に ルを買って飲んだらぼくだけ見つかったり。 男子六人で三時のおやつに給食室から余 融通 つかったり、 の利 なんでか知らないけど、 かない 倒 くさくなって色々なことを で述べたけれども、 ぼくは何もしていないのに誤解やとば 祭りの日に縁日でどさくさに な 頑固者だったり、 い冷たそうな輩だったりすると、 そんな悪い子じゃない 相手が どんな言葉も つかっ あ 高 つて きら た 圧 b, 紛れ 的 るパン 8 だ らくだ つた てビ た。 最初 音楽 0

判はかなり浸透した。人、親戚連中にぶちまけたから、ぼくのしょうもない評大、親戚連中にぶちまけたから、ぼくのしょうもない評苦労ばっかりよ!キーッ!」と怒りにまかせて知人、友のに、親は小、中、高と学校に呼ばれて、母親は「もうのに、親は小、中、高と学校に呼ばれて、母親は「もう

け

るかと思ったら、

親が

:「いい加減フリーター

は

止

高校を卒業して社会人になっていた。がら、はっきりした目標や目的などないまま、気づけばきな子ができて振られたり、たまにうまくいったりしななんとなく学校に行き日々を過ごして、その時々に好

社会人世界は厳しかった。

そりゃあもう、驚くほどに。

った。容敂なハ世界。 にうるさかった。シビアだった。冷淡だった。利己的だ それまでの学校生活のゆるさが嘘みたいに、ガチガチ

ダメ出しばかりの日々に疲れてなんだかいつもブーたれけは続いていて、中途半端でふらふらしているぼくは、そんな中でも相変わらず何かにつけて見つかる特技だった。容赦ない世界。

ごい顔で、ぼくを大嫌いな目で、声で言う。

ていた。

辞めて、 なバイトを転々としてなんとか日銭を稼ぎ、 いていけずに一年で辞めて、次に就職した配管工事の会 最初に 就職 未 長 く続いていたんだけど、三年目に入ったとこ 就職 した食品会社の営業は上司が横暴で二年 のまま会社が倒産 した運送会社は して、 オヤジたち その 後は これでも行 0 荒 いろん さに 0 で

これまで運悪く見つかった色々は、「やる気を見せろ」しかたなく職安に行って探した設備会社に今はいる。がすごくて、母さん怖くて顔が鬼みたいで面倒くさいし、いい歳なんだから」とうるさくて、日々のプレッシャー社会保険とか年金とかついている定職につきなさいよ、

「引くことも覚えろ」「アクティブに動け」「デンと構え

え」「走れ」…ええと、あと何だったけな。それを人はすえ」「見て覚えろ」「ずるくなれ」「サクサク進めろ」「笑でうする」「相手のこと考えろ」「段取りしてからやれ」「人を手なずけろ」「同じこと繰り返すな」「もっと飯食いだがにぶい」「明るい顔しろ」「発想を変えろ」「返事は大転がにぶい」「明るい顔しろ」「発想を変えろ」「返事は大転がにぶい」「明るい顔しろ」「無駄なことやるな」「回ろ」「走れ」…えたといる。「気が利かない」「無駄なことやるな」「回

やんと聞く方なのに。
をぶつけたりケンカ売ったりしないし、人の話だってち当たりいい方で、争いを好まないし、むやみに人に思い当たりいい方で、争いを好まないし、むやみに人に思いどもがグレて家庭が荒れてるとかじゃないの?なんかイねぇ、家で奥さんとケンカでもしたんじゃないの?子

どんな人間なんだよって悩む。「笑え」「走れ」と来たら、だいたいさ、全部聞いてると、ぼく、どんだけだよ、

ちゃうんじゃないかと。しまいには腹かかえて笑うぞ。今度は「飛べ」とか「光れ」とか「消えろ」とか言われ

もしかしたら泣くぞ。

てそれだけの話。も暮らせるけど、社会人は厳しいっも暮らせるってこと。暮らせるけど、社会人は厳しいってもいない。自分を認めて欲しいなんて子どもみたいなこと思っか。社会に物申すなんてそんな大それたこと考えてな

も流れだけで生きて来られた。 り、ジム行って気分だけやってる感醸し出して、それで うせぼくはずっと昔から中途半端ですから」って開き直 イプでもないし、 わけでもないし、 ー!」って奮起して人生変えようとするほど意志が強 て、そこでもかなり病んではいるんだけど、「よっし 仕事が長続きしない負い目はちゃんと自分で感じて いつも三十パーセントくらいの目覚め方で、深く ストレス溜まったら酒飲んだり、 挙句の果てに「ああ、そうですよ、 言われたことを反省して次に生かすタ . マンガ読 んだ V Þ V

> يخ °

た。 気づけば、三十五歳だ。いいおっさんになってしまっい水の中で、何も考えずにダルマ浮きしたくなる。 時々

的にかなりがんばっているわけだ。それは今までで一番長く勤めているということで、ぼく

ッキーと言えるかもしれない。たっての厳しい社会人生活の中で、唯一ぼくに訪れたラから、ぼくにまで被害が及んでいない。それが長きにわ長がこれまでとちがったタイプのそう、少しヘンな人だいや、正確にはぼくががんばっているというより、社

社員と言っても、ぼくを入れて五人しかいない会社だけを寄せては断わられ、それを包み隠さず社員に報告する。どうみてもうまく行くはずがない女にいつも真剣に思いいまだに独身で、常に女の尻を追っかけている。それも、のオヤジだが、なんというか・・・・精力が半端ない。のすりだが、なんというか・・・・精力が半端ない。うちの会社の社長はもうすぐ六十歳で、今もおそらく

れる。 説 0 れる。そしてワクワクを隠し切れないしあ けでうまく行っていることになり、 「あれ 顔で相手の女がいかにきれいでいい 明しまくり、 最後まで行 ' なぜいつも団子なのか知らないけど、とにか 社長、ダメだったんスか?」 かなくてもとりあえず飯を一緒 ふられるとどうしようもなく落ち込む。 社員全員に団子をく 女かをひとしきり わせその に行っ

「・・・・うん」

今の設備会社に五年いるということで、

りがたい。 にはきびしいが、人に言う分、社長は自分でも一生懸命 るから、どうも人の細かいことは気にならないみたいだ。 トが いから会社の利益は大事」という素っ頓狂な理 「女を誘うためにそれなりの金を持っていないといけな いているし、 カン 充実しているということで、それに血眼になって なくても自分の思う通りに過ごして結局プライベ 長 0 場合、 何よりぼくをロックオンしないことが それはすなわち、うまく行 生由で仕 って あ 事

る。 今日もぼくは色あせた薄緑の作業着を着て、 仕事をす

の要請が 噴射 出るしくみになっていて、そのパイプが老朽化して水の 沼 そして今、ひょんなことから、またこの では昔から、何の趣向か時間ごとにショボ がきた。 弱 まっているからと、 役所からうちの会社に修 八郎 沼 イ噴水 にい る。 玾 が

そのせいで割りのい 気になるんだな。 ちゃんと放射され こんなの誰も見ていない 見ると、噴水の 放っておくわけにもいかない てい 水 役所には い仕事が来て、うちの社長はホクホ はなるほど少し弱まってはいたが、 た 6年日数 気がするけど、気になる人は 々のクレ ームの電 のだろう。 が

幼

じた。大人が見るただの風景になっていた。どんよりと 倒な仕事かもなと、 五歳上の七十歳のじいさんと話しながら、 行くんだよ、と、 う七月になるというのに、夏どころか寒い気さえする。 した曇りの日で、緑がひどく暗くて色を失っていた。 久しぶりに来てみたら意外に狭いなこの沼は、なんて感 奇心やナゾへの V それよりも、 何 頃にときめ 十年ぶりか 沼の真ん中の噴水の蛇口までどうやって ワクワクは いた、そこにうごめ で来た沼は全然変わ 勤続年数は同じだが歳はぼくより三十 現実感でいっぱいだった。 もうすっかりなくなっていて、 く生き物 つ ていなか 思ったより面 たちへ 0 た 0

そうだ。 うのに遊んでる場合じゃないだろ!」と怒ったから、 生活かと思いきや、奥さんが ょうがなく色々探して、ようやくこの会社に再就職した 工をやっていた。六十歳まで働いたら定年、 七十歳のじいさんは勢さんといって、六十歳までは 大工だから自分で自分の家を建てるんじゃない 「三十年の家のロー 悠々自適な -ンを払 大

ア て飯をごちそうになったりする。 フロヘアで、見かけも中身も雷さまみたいだ。 こう見えて、ぼくと勢さんは仲が カーの家を信じ、そこで家を建 てち 夫の ľ١ やう奥さん 腕より大手住宅メ たまに は 呼 ば れ

い意味で。ぼくは奥さんが紫のアフロでも、肝っ玉

役時代、 たらしいが、奥さんがその勢さんよりずっと強いところ デカい人情あふれる人なことを知っている。勢さんは 仕事に厳しい鬼と呼ばれた職人気質で通ってい 現

を払ったようにニコニコしたゆるーいじい そんな勢さんも、うちの会社に来てからは厳しさの さんになって 枷

がウケる。雷さまと鬼。どういう夫婦だ。

いる。ぼくはその勢さんしか知らない。

を片手に沼に入ってみる。 とりあえず、用意してきたウェーダーを身に着けて竿

ておきながら、勢さんはそれを穿かずに沼の縁にいて、 さんはそれを胸長と言う。そして胸長と通の呼び方をし 長靴なんだけど、ウェーダーと呼ぶのはぼくだけで、勢 ウェーダーっていうのはサケ釣りとかに使う胸までの

ぼくだけが沼に入っている。

というのに、こういう時だけ、勢さんはよぼよぼと必要 てみるが、途中でもう全然深い。 以上に老人の雰囲気を醸し出す。やるな、じじい。 竿で深さを確かめながら少しずつ噴水に向かって歩い 勢さんの腕や首にはまだ現役時代の筋肉がついている

うけど、あそこに行くまでにぼくたち沈んじゃうね 「勢さん、どうする?管は交換しちゃった方が早いと思 「んだ。この沼は深いんだから。昔から底なし沼って噂

> があって、足を引っ張る河童が だったら最初から教えてよ」 Ž) . るんだと」

 $\mathcal{O}$ 

「ふふん。何でも経験だ」

「あ、でも、底はあったよ。河童はいなかった。 ぼく昔、

落ちたもん」 昔からパサラだったんだ

な 「落ちた?バカだな、おめえ。

「全然ダメってことだ」 「パサラって何ですか」

な地域年齢限定方言つかわなくても」 「じゃあ、全然ダメだな、でいいじゃないですか。そん

作業できないよ」

「ふふん」

「社長に言って、ゴムボートでも用意してもらわない

からな。手漕ぎの船の操縦は慣れてんだ」 えわけねえもの。 「どっかから借りてくるだろ。社長がこの仕事、やらね 漕ぐのは任せとけ。わし は夜釣りすっ

るんなら」 ないですか。 ですか。じゃあ今も一緒にウェーダーで沼に入れたじゃ 「へー。勢さんやるじゃないですか。元気満々じゃな むしろ着慣れてるじゃないですか、釣りす

「そうだよ

لح

「二人で行ってどうすんだよ。河童に捕まるのはひとり

· · · · ·

でいいから」

「おめぇ、役所で管のサイズ調べといてもらえな。

つい

でに発注もかけとけよ」

「勢さんは何やるんスか」

「だから、わしは船を漕ぐ」

茶を飲みに行くべ」

「さあて、今日の仕事は終わったな。早く終わったから

「茶?どこに」

「近くにいい店があるから、連れてってやる」

ったかな」

まっすぐ会社に帰る気がまるでない勢さんのナビで、「いいから。行くべ、行くべ」

車を走らせた。

ビンボー臭さが漂っている。あまりに朽ちているから外りのプレハブ。なんだよ、ここ。喫茶店どころではないうっそうと茂る林の中に忽然とある、さびが浮きまく目的の場所は、意外にも車で走って二分で着いた。

林に溶け込んでいるとも言える。でもその林があんまり

板さえ鉄板

には見えず、

ある意味、景観を損ねず

それに、神社でもないのに入口の横にお稲荷さん的なねなくても、誰の迷惑にもならなさそうとも言える。人の来なさそうなただの林なので、景観を損ねても、損

薄汚れた石の狐がいたり、すぐ隣の大きな木にものすご

なとこ。ており、妖しいことこの上ない。うわーヤダなぁ、こんており、妖しいことこの上ない。うわーヤダなぁ、こんい数のカラスがいて黒々しくガーガーギョーギョー鳴い

に入る。 そんなぼくの動揺を事もなげに無視して、勢さんは中

そんなぼくの動揺を事もなげに無視して、勢さんはシいなり寿司・まんじゅう販売所じゃねぇか!ケースがあって、行く手を阻まれた。喫茶店じゃなくて、ごはんとかまんじゅうとか団子が並べられているショーけど、中に入るとすぐに、いなり寿司とか赤飯とか五目けど、中に入るとすぐに、いなり寿司とか赤飯とか五目けど、中に入るとすぐに、いなり寿司とか赤飯とか五目

開け、中に入っていく。ョーケースの横にある隠し扉のようなベニヤ板のドアを

「ユリちゃん、茶、飲みに来たど」
客は誰もいない。
ペース。カウンターと、三つのテーブル席があった。目の前に開けた、いきなり明るいウッディなカフェ

ス

「あら、勢さん、お久しぶりです。お仕事帰り?」

「事帰りじゃねぇだろ。サボリだ、サボリ。

三角巾をかぶり、 カウンターから出てきた「ユリちゃん」は、 紺の割烹着を着た、たぶんぼくと同じ 頭に白 11

歳くらいの、それは、それはきれいな人だった。 いや、きれいっていうか、歳相応にシワもシミもあ

囲気のある人だった。 ラスもいいってことになるような、なんともいえない雰 がいるせいで汚ねぇプレハブも狐のオブジェも大量のカ て、芸能人みたいなきれいさじゃないんだけど、この人

無視して、勢さんが大声でしゃべる。 そのことに少なからず動揺しているぼくを事もなげに

「ぼーっと立ってないで座れ。おめー何にする?」

「何にするって、 メニューは?」

選んで食うんだよ」 「入口にあったべや、いなりとか。あそこから好きなの

ヒーは?」

ユリちゃんが番茶持ってきてくれっから」 「そんなのねぇよ。食堂なんだから。食うもん選んだら、

が叫ぶ。 カウンターから「お煎茶もありますよー」とユリさん

ぼくは番茶で」

「なんだおめー、番茶でいいんじゃねぇか。ユリちゃん、

わし、 なりと赤飯ね

おめーは?」

「はーい

「ええ?じゃあ、五目おにぎり」

「はーい」

0

「ユリちゃん、

五目ひとつ」

漬物と、淹れたての番茶が運ばれてきた。 すぐに、いなりや赤飯や五目おにぎりが 介った皿

「どうぞ、ごゆっくり」 それだけ言って、ユリさんはカウンターに戻る。

「いい店だべ?ユリちゃんはいい女だし、いなりは五十

円で安いし、漬物サービスだし」 「こんな店、あったんですね

ら、今はユリちゃんがやってんの。三人の中でユリちゃ が死んでから母さんがやって、母さんが歳取ってきたか ねぇか?ユリちゃんのばあちゃんが始めて、ばあちゃん 「ずっと昔からあった。もう三十年くらいになるんじゃ

全然覚えないなぁ」 「三十年前から?この辺、今まで何回も来ているけど、

んが一番やさしくてめんこいなぁ」

時々消えつから」 「見える人と見えねぇ人がいるんじゃねぇの?この店、

は ?

何 か が がおか しい。 この店はとても怪しい。 佇

が尋常じやね

を騙して迎え入れ夜な夜な包丁を研ぐ老婆のいる古び は っ・・・・ここはもしかして、昔話に出てくる旅 た 人

た感じがする。まるで幻のような。そこにいるけど、本 家・・・・どうりでこのユリさん、なんだか浮世離れし

勢さんが茶を飲みにぼくを誘う時点で怪しい。このじじ が恩返しに木の実を持ってくるという・・・・だいたい 当は実体のないような。じゃあこのいなり寿司は馬の糞 お茶は馬のしょんべんで、お金は葉っぱで、キツネ

い、河童を信じてるんだから。

えかよ。中はともかく、外装はちょっとまちがえればお 「冗談に決まってるべ。やっぱりパサラだな、おめー」 だってこの店のロケーション、洒落になんねえじやね

「ユリちゃーん。 番茶おかわり」 化け屋敷だぜ。

「はーい」

のが好きだよな めるぜ。じじいってほんと、茶とか風呂とか何でも熱い 茶を飲むスピードが速いぜ。激熱の番茶なのによく飲

お淹れしまーす。あの、 「はい。好きなだけ飲んでいってください。心をこめて 「ここは何杯でも茶が飲めんだ。な、ユリちゃん」 お茶のおかわりはよろしいです

ぼくはまだいいです」

か ?

の初めてだっつーから、連れて来てやった」 「ユリちゃん、こいつ、同じ会社のタロウ。ここに来る

あら。初めまして、タロウさん。ようこそいらっし

Þ

いました」

「あ、どうも」

るぞ。 がって。目がデレデレしてるぞ。アフロの雷さまにチク じじい、必要以上にユリちゃん、ユリちゃん連発しや

「うちの社長が時々、団子持ってくんだろ?あれ、ここ それから勢さんは、ちょっと声を潜めてぼくに言う。

の団子」

まーたいへんだったんだから」 「んだよ。ユリちゃん、社長に惚れられて、惚れられて、 ああ、あれ!」

 $\lceil \, {\stackrel{\wedge}{\sim}} \, \rceil$ 

んないスよ。社長はうまく行ったんスか?」 「はぁ、どうなんス 「わかるだろ?社長がぞっこんになるのも。 かね。来たばっかりだからよくわか

「そんなに強く断言しなくても。あ、 「うまく行くわけねぇべ!」

でも、

いまだに団

子持ってくるじゃないですか、社長

「それはな、振られても断ち切れない思いっつーのが、

ふん」 あるんだよなぁ。だって、ユリちゃんだもの。ふ

「ふふんの意味が全然わからねぇ」 ・いんだよ。色々あるんだよ。若造にはわかるめぇ。

おめーはあと二十五年くらいかかるべな」

「何スか、その遥か遠い年月」

「リアクション、 ねえのかよ!」

「ここは和むなぁ」

「え?まぁ、そうッスね」

「番茶がうめぇなぁ」

**「うまいッスね」** 

「落ち着くだろ?」

落ち着きますね」

あってな、子どもにねだられてよく買いにきたもんよ。 「昔、ばあちゃんがやってた頃は、夏になるとかき氷が

おめ一はそん時、生まれてたか?」 「三十年前でしょ。生まれてましたよ。

この辺にもよく

だで、楽で居やすかった。

来てましたよ。家、近いから」 「かき氷、食ったか?」

> ない」 「いや~どうだろう。 食ったか もしれないけど、 記憶に

だったんじゃねぇか?この店は心のきれいな人間じゃね 「その時は消えてたかな、 この店。おめー 邪な子ども

えと見えないんだから」 「は?邪じゃないし。百パーセントピュアな子どもだっ

「ピュア?なんだそりや。 外国の言葉使うんじゃねぇ!」

「純粋って意味ッスよ」

たし」

かたくさん買って、母ちゃんに土産を持って行ってやれ」 「いいから食えよ、五目を。それでな、 帰りにいなりと

何でだよ!」

ちゃんに」 切り盛りしてんだから、さりげなく応援してやるのが男 作って、まんじゅうや団子作って、ひとりで細々と店を の甲斐性ってやつよな。 「ユリちゃんはな、こんなところでいなり作って、 わしはいつも買って帰るな、 赤

それでは、なんだか安すぎて不憫な気がした。そう、な るく言われた時、茶を飲んでいいだけくつろいでおいて んかくつろいだんだ、よくわからないけど。なんだかん でも確かに。レジで「五目おにぎり六十円です」と明 それは雷さまが怖いからじゃねぇのか。

ぼ くは、いなり寿司と五目おにぎりと赤飯とま 0 W

から、 じゅうと団子を二個ずつ、母さんの土産に買ってしま きっと母さんは父さんに分けずに全部食ってしまう また太ると思う。

7

った。ぼくだけにしかわからない、ある衝撃的なもの そして、レジで金を払おうという時、 五目おにぎりを食っていたテーブルからは死 ぼ くは見てしま 元角にな を 0

魚鉢ギリギリくらいに大きい、 体。それは、水の入った透明な金魚鉢に入れられた、 ていて見えなかった、カウンターの後ろにあったその物 ガラスの地球だった。

考えるより先に言葉が出た。

あの・・・・・」

はい?」

「これ、何ですか?」

「これ?金魚鉢に入った地球です」

「そうだけど。なんで」

「タロウさん、八郎沼に行ったことありますか?」

「そりゃあ、 地元ですから。ていうか、今もその八郎沼

の帰りなんスけど」

球が沈んでいるんですよ、ふふ」 「そうなんだ。あのね、八郎沼のスイレンの下には、 地

店を出るとき、勢さんが何かしゃべっていたけど、 内

容を覚えてい

品か微笑 ない。

んでそれを言ったは

ずの、

あの人の顔

覚え

が 鳴って、 その時、 ただ心がざわざわして、それがずっと消えな ぼくの中にはパ ーンッという空雷みたい なの

V

カコ っった。

たけれど、やっぱり、そんな店は知らないという。 家に帰って母さんにいなり寿司を渡しながら聞 てみ

普段なら浮か それからのぼくは、結構たいへんだった。 んだ思いは出来事に紛れて簡単に

流

n 7

時、 の人が知っている。そんなシンクロってあるのか。 いくのに、 訊けばよかったんだ。でも、 消えない。水の中の地球。それをどうしてあ 訊けなかった。もう一 あ

を食い、 のためにあの店に行くのか。ひとりで?ひとりでい 度あの店に行って、あの人と話したい。でも、ぼくはそ 番茶を飲むのか。 勢さんや社長のように、 、ユリ

も社長が目を付けている女に会いに行っていいのか。そ さん目当てで来たと勘違いされるんじゃないか。 そもそ

はもしかしてあの人に惹かれているのか。 な気なんてない いに駆られるのか。 のに。 だとしたらヤバくねぇ いや、 ほんとにない だからこんな のか。 面倒な ぼく

W

ない。しかもぼくはイケメンじゃないし。 ことになったら 困 る。 い ならねえだろ。下心なんて あれ

えすぎだって。なんでこんなに考える。じじいだって気言っちゃってんの。そんなこと考える必要ねぇだろ。考

すぜ。やんなるぜ。ああ、疲れる。い。会って話したい。なんだこの衝動的なもの。持て余んなにはっきりと甦る。消えてなかったのかよ。知りたがう。水の中の地球だ。ガキの頃のことが今、なんでこ軽に行ける店なんだ。行ったって問題ねぇだろ。いやちえすぎだって。なんでこんなに考える。じじいだって気えすぎだって。なんでこんなに考える。じじいだって気

くは降参した。
バカみたいな思いの堂々巡りを繰り返して、ついにぼ

い夕焼けの日だった。
い夕焼けの日だった。ようやくきた夏の、異常なくらい赤が耳で聴こえるくらいバクバクして、ガキみたいに情けだと何度も自分に言い聞かせて。そのわりには心臓の音ところで、どうせ望む答えなんて人からはもらえないんたまたま近くに来たから立ち寄った体を装って。行っただうしようもなくなって、仕事帰りに店に向かった。

定をすべてひっくり返して、自然にぼくを受け入れた。他女はぼくの名前を憶えていた。予め用意していた想いて。話し相手がほしかったところなんですよー」どうぞこちらのカウンターに。ヒマすぎてぼーっとして「あら、タロウさん。おひとりですか?いやでなければ、「あら、タロウさん。おひとりですか?いやでなければ、

ってしまい、

くは、それだけで子どものようにうれ

しくな

自分の中からあふれてくる言葉をそのまま

にしゃべってしまった。

に沈んでいて、すごいパワフルなんだけど血を流しながて、それと同じものを見たんです。沼の大きさいっぱい「それ。水の中の地球。ぼくは五歳の時、八郎沼に落ち

ら回っている地球を」

「そうね。私も見た」

「 え ?」

人に言っても、わかってはもらえないけれどね」で何度も見たし、自分の奥深くでもそれを知っている。らずっと知っている。あの沼には地球が回っている。夢「私は沼の中に入ったわけじゃないけれど、小さい頃か

楽になった気がして、ぼくは泣きそうになった。だけで、長い間知らずにずっと抱えていたものがふっとながったひとつのものを見ていることがわかった。それその瞬間、言葉なんかなくても、説明しなくても、つ

目で見たものしか信じないもの」「そりゃあ、そうですよ。人は手に取れるものと自公笑われたし、バカにされて受け入れられなかった」「色んな人に話したけど、誰もわかってくれなかった

いじゃないですか、ふふ」んとだもの。それは、自分の中に大切に置いておけばに「でも、あるんだからしかたがないの。感じたことはほ

「わかってもらいたかった」

-え?

「あの時、ガキの時、一人でいいから」

これで二人になった。もうさびしくないでしょう?」「あれを見る人は、きっと限られているんですよ。でも

んだろう、あれは」
「あ、ああ。なんであんなもの見たんだろう。何だった。

「ぼくらはみんな生きているってことですよ」

「は ?」

るってこと。あなたは、今までたくさん血を流した?そ「人も地球も、血を流しながら一生懸命回って生きてい

れとも、たくさん迂回した?」

「迂回?」

「血を流さずにすむように、交わしたり、霞ませたり、

見ないようにしてきた?」

「じゃあ、きっとこれからね」「え、血は・・・・流したような、流さなかったような。」

?

誰にもわかってもらえないのは悲しいことだもの」「かわいそうに。あなたはきっと、ずっと寂しかった。

しない」「・・子どもの頃の話だよ。今はそんなこと、考えも

「それでも、心の深い部分はちゃんとそれを覚えている。

あって、だからあなたは、人と気持ちを分かち合うこととそのまま残っている。その時の衝撃が消えずにずっと消えないの。人に対するショックや落胆は、今でもきっ

をあきらめた」

た。準備ができました。これからはいっぱい血を流してうひとりじゃないもの。だから開く。さあ、時が来まし「でも、あなたの悲しみはもう解放される。だって、も

回って。ふふふ」

「心を込めて、おいしいお番茶を淹れます。時々、ここ

に話をしにきてください」

「そんなに心配なら触って。私はちゃんとここにいます。体ある?」「君・・・何者?人間だよね?妖怪じゃないよね?実

握手」

んと人間です。妖怪でも、宇宙人でもありません。はい、みんなにちょっと変わってるって言われるけれど、ちゃ

したいと思った。つながったものを絶ちたくないと思っ自分で自分をちょろいと思う。でも、この人ともっと話もらえることが、こんなにうれしいなんて知らなかった。たくなって困った。わかってもらえることが、共感してその手を握った。そしたらぼくは、自分の全部を注ぎ

た。たぶん、すごい好きだ。

「ぼくとつきあってください

無理

「えー!」

ス。一歩ずつ踏んで、血を流してください。ふふ。また相手を知って、仲良くならないと。それが人間のプロセあってはないです。まずはお茶を飲みがてらお話をして、二回目ですよ。互いのことを何もわからないのに、つき「えー!って、あなた。私とタロウさんは、まだ会って

のお越しをお待ちしています」

これだ。たぶんこれに社長も勢さんもはまったんだ。

ポン。音が聴こえる。ぼくはあの時と同じように、また を笑えなくなった。勢さんをバカにできなくなった。 くはきっと、これからそれに振り回される。 かくてやさしい。それでぼくは驚くほど元気になる。 を受け 彼女は人の何かがはっきりと見えていて、本能的に全部 もう血 の前にいる。 入れる。 ああ、 一は流 醸し出すものは魔性なのに、なぜだか温 れ始めている。 地球が回り始める。 それにウキウキとする 思考と感情は苦 社長のこと F ぼ

んだよ。それなりに一生懸命やってきたぞ。いや、そうんどいことをやるのかよ。三十五年間の空白は何だった血を流すって、今からかよ。三十五歳から、こんなし

でもないか。

回っていたんだ、ヤツは。とした闇の中で、少しも捨てていない生命力とパワーで、ために血を流す。強さと寂しさが一緒にいる。その混沌、時間が逆行する。記憶が覚醒する。地球の悲鳴。回る

わした?霞ませた?迂回した?あの人の言葉が甦る。血を流さなくてすむように、交

をう、ぼくは自分が痛んで血を流すなんてこと、怖く としないが、傷つかない生き方。共鳴をあきらめる生 としないが、傷つかない生き方。共鳴をあきらめる生 とてもできなかった。見なければそれでも進めた。向 たんだ。文句あるか。

揺れながら、それでもギリギリバランスを取っていたりできない。抱えきれない。我慢できない。起らないふ走って、無くそうと思っても勝手に走って。知らないふやねえか。格好悪いじゃねぇか。そんな自分のこと、飲率ねぇか。格好悪いじゃねぇか。そんな自分のこと、飲認めたくない。自分が弱くて臆病だってバレちゃうじ

欲しいものに手を伸ばそうとして初めて、流れ出る自天秤。今、それが傾く。

分の血を見た。痛くて、

ドクドクと波打っていて、苦し

られられ。酎っらやっこよう。だから、三十五歳にもなって、今からそれをやる。い。それでも欲しい。それでも、そこにつながりたい。

やれやれ。困っちゃったなぁ。

にやりと笑った気がした。なぜだか遠い昔に見た沼の中のでかい地球が、一瞬、

にもわからないすごい勇気をひねり出して。ユリさんに会いに行っている。話をしに行っている。誰をれから。ぼくはあの店に行くようになってしまった。

考える。行くなんて、いい歳の大人がそれをやっていいのかとか、行くなんて、いい歳の大人がそれをやっていいのかとか、りや番茶は口実で、どうしても会って話したくなるから色々考える。たくさん考える。会いに行くまで。いな

回も振り返る。 とか言われてんだぜとか、何だいたい、一回「無理」とか言われてんだぜとか、何とうしいんじゃないかとか、考える。 きっとその時ぼくの顔はうれしそうだろうから、うっ

しているこうなほこなないだ。『コントはほごごトごといもともとぼくの好みは、ちょっと茶髪で化粧をしっかとかも、くよくよ考える。でもぼくは客だから、金のためには笑顔も作るよな、

ユリさんは地味だ。すべてにおいてぼくの好みと真逆主導権を握るのはこっちで、思い通りになる女。りしているような派手な女なんだ。見かけは派手だけどもともくの好みに、ちょくと落奏で仕来をしてか

んだり、悩んだりする。い。自信を失って、揺らいで、ぐだぐだ考えて、落ち込ってしまうし、形勢的にやられる一方で優越感に浸れなだ。そして美しく毅然としている。ぼくは自分を振り返

全部吹き飛んでしまう。 それでも顔を見て、話をすれば、毎回それらの思いは

がそう思っている。だけで、ぼくたちはつながっている。いや、勝手にぼくだけで、ぼくたちはつながっている。いや、勝手にぼくたった一つ。幼い頃に見た水の中の地球という共通項

て今日まで来ている。てもどうしても断ち切れない何かが、ぼくを奮い立たせてもどうしても断ち切れない何かが、ぼくを奮い立たせると、消そうとし

けど一生懸命向かい、伝えることをやっている。今までの人生で決してやらなかった、無様かもしれないさんの存在感はぼくの中でものすごくて、だからぼくは、もしかしたら、恋愛ともちがうのかもしれない。ユリ

そして、それに手を伸ばす度にぼくは血を流れ

れる。 流れる血は赤くて痛い。それをまざまざと見せつけら こんなにもろくて、こんなに弱くて、こんなに容 血は流れる。

たり、 を一生懸命生きるんだぜ。 今じゃ平然とあいさつし、悠々と番茶を飲めるようにな 満たされる。何もなかった頃よりも、たぶんずっとい て感じがする。痛いけど、元気になれる。苦しいけれど、 それなのにどうしてかパワーが湧いてくる。 焼け空に泣きたくなる。感情が溢れてくる。 八郎沼が愛しく思えた。空気と色が変わって見えた。 くが、人にやさしくなれたりする。ゴムボートから見た すぎだとポジティブに光に向かう。なぜだか、仕事をが ない自分に落ち込んでドツボにはまり、 腹が減ったりする。思いがぐるぐる巡って眠れなくなっ った。成長しているぜ。先のことなんか考えないぜ。 プダウン。刺激で、摩擦で、抵抗で、負荷で血は流れ、 んばろうという気になる。笑うことが多くなる。 考えすぎて食欲がなくなったり、話 たまに、店で勢さんや社長と鉢合わせしたりするけど、 あまりに疲れてぐっすり眠れたりする。 構 どうしても会いたくなった時に行 ユリさんは笑っているぜ。 がはずんで猛烈 別の日には考え 生きてるっ 激しいアッ しょうも このぼ に

っているんだぜ。

なあ。 小 せえなあ。 何者にもなれてねえな どうしようもね え なあ。 何 もできてねえ

でも今は、そんな自分も嫌いじゃな

と、たぶん、これが・・・・しあわせってことなんだ。 ああ、言いたくない。言いたくないけど、 でも、

## 説 入

選

小

## 鳩の血

のまち

0

まれてい 象徴だ。

るこの じっさい

Ш

が、 0

ŧ

し無か

つ たら、

まち

懐に

to

か

失

わ 0 0) 軽 Ш

海 が

峡

を背景 たっぷ

Щ

という象形文字その

まま

姿

りと青い

夏空を力強くもち上

ć

の行く手に座している海抜335メートル

高さ以上に市民

から

仰

ぎ見

ジ

で浮かび上がったのだろう。

は  $\mathcal{O}$ 

て車 佇ま られ親

を走らせる。

近づくにしたがい視界から稜線は

いはどんなだったろうと思いながらその

うになる。

わたしは山裾にある市民墓地に向

代

わ

りに葉が茂る木々の一

本一本まで判別できるよ

にかうべ

く右

ハンドルを切った。

た  $\mathcal{O}$ 1 た。 脳裏に、 のとき滝 なじ講 K" の墓前祭』とい 沢さんや西岡 Ш 間 0 西岡 野 さん さん うのはどのようなイ 、やわ も間をお 4 た か それ ず 頷 だれ 7

なの 積 関 1 存在という宿  $\mathcal{O}$ らみあ 心 だろうが憶えていない。 歳のとき、 くつかが、 11 ち のつよい かわからない不ぞろいな欠片で象られてい げられ ばん年嵩 っていた 磁力だったかもしれない)。事 時系列はバラバラのままだがわた 全学連委員長とし 命を背負 のわ たしだが、 (函館で生まれ いながら生きた彼の だが 後年、 てのKは報道 V わ ;育ったということが ゆ 安保闘 る六 実な + エ 占。 争の でみ 年 る K シー 安保 L 0 か Ō 中に V F 的

知 たことが しより四、 つ つ 墓前 てい 11 祭という行事の たとは思えな あっただろうか は 五歳 どこか 年下なので、 ら生じ 情報をもたらした滝 たの それなのに、 やはりリアルタ さらに幾つか若 その あ 墓参りをしよう 沢さん ŋ 1 0 話 ム で K は を 尚 聞 わ を た

それだからこそどこか気になるひとだった。

た彼 報 が 、わらか 言動は 女は を滝 行わ 年のことだ。 孫 ħ 沢さんがもってきた。 な声で独り言みたいな滝沢さんの誘いに、 つねに沈着冷静で頼りになるひとだ。 ていて、 がいるとは思えない 行ってみない 毎年七月の第 だれ でも自由に参列できる ? 若 一土曜 公民館の講座でし 々しく弾んだ外貌な H K" 0 ŋ 墓 との あ 前 わ 0 祭 0

 $\mathcal{O}$ 

あるテ りあ 講座終 から 首をかしげながら、一昨日のことなのだけど東京の知 を食べていたの 頼まれてKの墓参りをしてきた……と話しだしたの ったあとだった つだった 了 0 ブルをかこみひとしきり講座の内容や感想を 後にたち寄った喫茶店で、いつものように隅 かがその日のテーマだった)。 あって発端 わたしたち三人の間でKのことが話 (函館のひとは明治時代どんな料 は西岡さんだった。 西岡 さん Ħ 人 が 理

亡き縁者 「思いが 依頼し け てきたひとの縁者が若いころKと交流があった。 に代わって函 ないことを頼まれてびっくりしたわ。ずっと 館のあなたに墓参りをお願いした

えてあ 気にかけ い思いもあるのだと引き受けたのよ」 げ たいから是非 ていながら、とうとう果たせなかった願いを叶 あなたに……と 聞 そん な強

カラスたちも戻りはじめ、 手向け か。 る花を抱えて西岡さんは、まずK そのうちに日は傾きだした。 枡目をひとつひとつ塗りつぶすみた  $\mathcal{O}$ 教えら は 思ったより早 れた墓地に 仲間と呼び交わ V 0 たち並ぶ だ。 囪 رىرى 館 しているのだ Ш 墓 の墓を捜 を 0 石 塒 のどれ 影 とする E 11 入る 見 が

> 今日 ろう鳴き声が濃 は あきらめ ようかと思 くなりつつあ 1 ながら試みに急斜 る夕焼け空に ひび きわ 面 をつ たる。

当たりまでのぼってみた。

題

に

な草書体で "K" の名前が彫られていた。 な背の低い……」 長のかたちではなくて、そういうお墓にかく 変わ 近づいて、 つた作 刻まれ ij  $\hat{O}$ 石があ ている文字を読 0 たの。 ふつうの、 W でみた。 れるみたい 昔 たお か 5 やか 0

それ

ŧ

0

さんとわたしを見た。 たたかい、 中央にではなく、 しめるように、いつもよりふかぶかとした眼差し 「指さきで文字をなぞってみたら、なんとも言え 西岡さんは、ようやく発見したときの歓びを再度かみ 息遣いみたいなものがつたわってきて……」 右上に、 小さく。 で滝 な V 沢 あ

にいくという何よ うつさないまま時が過ぎ、ようやく去年の七月、 わった。わたしも墓を見てみた  $\mathcal{O}$ だった。 あのとき、ずしりと重い りの機会を滝沢さんが K K V 関する断 · と 思 0 片が つくってくれ た。 だが また 墓前 動 加 祭

木陰に横たわってい Kの墓は 品なすが、 目 の当た 山すその たが、 りにしてみる い た。 斜面 波乱にみちてい 。 の
、 西岡 ほそい さ んか 7ら聞 黒御 たであろう彼の 砂 利 影 1 道を登りきった 石 てい たとは お ごそか

な え

求めてはげしく咆哮する海の《動》を抱えている墓……。 とのない波だ。一見《静》のたたずまいだが、行き場を られていた。冬の津軽海峡 ばに寄ってみると、鋭く尖った波頭が墓石 あ と対照的 深く安らかに休息しているようだった。 に思わ れ た。直方体を横に の荒れ狂う、 ね カン 決して鎮まるこ せているせ の上一面 だが に彫

そ ŧ

人々のいちばん外がわに滝沢さんと西岡さんもいた。 のあき地や駐車場に数名ずつかたまり談笑してい しを浴び、青くかがやく海峡を眼下におさめながら周辺 風貌や雰囲気も異なる二十人をこえる男女が午後の日差 殆どだろうと漠然と思っていたのだが、はば広い年齢 きていれば七十代。かつて仲間だった同じ年頃のひとが まっていた人びとの年代はさまざまだった。 K が生 の

りにこぼした。 「ここへの上り口、通り過ぎてしまって……」 教えられていた目印をみのがしてしまったことをふた

後だそうよ」 「Kの奥さん、 いま空港に着いたので始まるのは三十分

があ 如といえばそれまでだが、依頼され墓をさがしたと西岡 と思いながら 本酒 に供えようと用意してきたのだろう。さすが気が の瓶らしきも いだとわり たしは初めて思い "奥さん"という言葉に、 のを抱えてい 、る滝 至った。 尾沢さん 想像力 K に が にも家族 言 こった。 0 欠 付

> 方が、 さん わたしよりずっと誠実だとおもった。 たりまえな だから墓があ るということへの単 カン 7ら聞 相手のぜんたいを把握し理解しているという点で のだが。 1 ることは不思議 たときも最初に感じたことは、K アイドルをおいかける若いファンの 純な驚きだった。亡くなっているの であるはずはなくむしろ当 0 墓 一があ

わ と差し出した。 やかに言った。Kとどういう繋がりのひとなのだろう、 しながら、 をのせた折りたたみテーブルのかたわらに野球帽をかぶ った男のひとが立っていた。近づくと紙コップ 「ご挨拶しましょうか、この集まりの世話 たしの目には滝沢さんや西岡さんより若くみえる。 滝沢さんが日本酒の瓶を、 滝沢さんが顔をむけた方を見ると、ペットボトルなど 何のみますか、ビールもありますよ、とにこ お墓にお供えしてください を差し

おすごしください」 「新しいひとが 来られると嬉し V です。 気楽 に、 適当に

だ 厳 こともしない。開始の時刻を問い合わせたとき、「およそ 三時ごろから始まります」と滝沢さんに告げたそうで、 ことを誰 からなのか、墓地でなかったらどこか 密 適当に、といっただけあって、 な決まりごとは 何することもなく周 ない緩やか りに紹介するというような な 世話 *"*墓前 人はわた の会社が野外リ 祭# なの した だった。

クレーションを愉しんでいるように見える。

でし とが彼女 的に違うもの……それは何だろう。散らばっていた人 ノトー る空気をまとっているように感じられ 妻?ほっそりしたからだに白いブラウスとグレイの たせして申し訳ありませんでした、と頭をさげた。 つしょの トが は頭をひねった。 がとまり数 り吹きわ た コ -ンの装 か、と挨拶が 似合う女子大生のような雰囲気のひとだった。 ツ 0 飛行機で来たのだろう横にいる女性たちと異 プにそそ 周りに集 た ルる ・ V 人 だからというだけでは の女性が降 風 いでもらった冷  $\mathcal{O}$ (まり、 交わされている光景をみながら 心地よさを味 りたった。 今年も会えましたね、 わ たいお茶を手に、 っていると、 なく、 る。 中の一人 ひとりだけ なにか決 お元気 Κ お とき ス た U 定 モ な 11 力 待  $\mathcal{O}$ 

感謝

いたします……。

と、みんなは墓の前に集まった。が、そろそろ始めてよろしいでしょうか?と声をあげるひとしきり再会をよろこぶ様子を見守っていた世話人

でうけ 11 まさら いという素振りで中央にたった。 始まりのことばを……。 たが、 けな 野 る は 無し 開始 が そうだよ、 でい の合図ですからと世話人 いちこち į١ 世話人がKの妻にうながした。 んじゃない?彼女 から 早く、やった、 挙 が り、 彼女は仕方が やった。 は澄まし は 木 0 たよ 顔 笑

> L 訴 ださってありがとうござい 11 函 所が欲しい、そのための墓をつくってくれ、とい 言っていたのですが 九 た。 たともいえますし、 !館に行ってみなさんと会うというミッションをい されまして、 州 か , b それから、 東京 こうし から、 みなさんの協力もえてここに もう二十年たちました。 てみ わたしの励みにもなっています。 釧路 お友達が、 ・ます。 か なさん 6 おれ とお Kは墓などい K  $\mathcal{O}$ れたちが ために 会 1 毎 建てた 集まれ . Б 6 七月は わ ĭ L , る場 0 ば てく で 直

そん は決 ながら垂直に切りたった断崖にたち続けるようなも ごしてきた。 彼を看取り、その 観 とか Kのパートナーとして、 飾らない気負いがない な時間をとおり過ぎたから身にまとえた清冽さなの て経 // 諦 観// 験することの 責任 あと今日までひとり短くない時間 ということばが浮かびあがった。 感とか自負心をもちながら、 語り口だった。 ないそん 変化の激しい な日々は 暮らしをかさね 聞きながら 強風 他 の をうけ をす  $O_{\circ}$ ひと //達

地 元 K  $\mathcal{O}$ 0 スピ 友達 妻 室 0 は あ  $\mathcal{O}$ チした。 K 思  $\mathcal{O}$ 出 様子などを、 友人の何人かが 話 かを、 最 期をみとったという医師も それぞれKに語 ごじぶ N の近 況 りか 報告を、 ける

日々 とわ っぱいだったろう。祖父は町工場の経営と、 人の子どもを育てなければならない当面 ことを話 解できなかった。 叫び声が とするひ 五. だった。 、るうね たしたち孫の行く末にも頭を悩ます心休まらな 母は、 何を意味しているものか、十二歳の 題にしたことはなかった。 りを知ら アンポ Ō 祖父母 父 母 家では、 と暮ら な ユ プレ のうしろだてがあるとは V ・ハンタイ…… わけ す 祖父母や母も、 ヒコール 住ま ではないのだろうが、 V にも が届 父と別れて日 V ・つま 遠くからデモ のことで頭 世 てきた。 の中に わた いでも 娘である母 いえ、 が経 つづく そ 起 は が V  $\bar{\mathcal{O}}$ 玾 V 0 0

L

た

介人のやや誇 が出来上らないときは深夜まで、 しているなか、祖父は一 大きく変化しそうな兆 んど家族だけで営まれ 戦後、ほとんどの の下 -請け 張 婚 え受け した話 7 12 の 下 際 ないことに気づ がい てお 詩け しだが、 継ぐ財産などなにも無く、 て、 人が生活の基盤をうしなって 人むすめ ったのかもしれない 家族を失くし り、早朝か 仕事をやっている工場は 創造性のない の母に婿養子をとっ 休むことなく働 たと思う。 5 てい 頼まれた仕 た父に、 ・仕事ばか が、じき 世 仕事  $\mathcal{O}$ 1 中 ほと 混 は 7 は to 仲い 事 乱 n

> り合 祖 な 軟 0 た。 母 時 弱な怠けものにしか見えなかったから衝突が絶えなか 0 間 7 二人のあいだで悩んだ母は、 が は 悪くなってい 7 画家を夢みたことも い の 反対 だろうか。 < に義 ばかりだった。 母 焦燥 ある父の資質が理 であるわたし 感 が 父に家を出るよう促 0 0 男まさりに  $\mathcal{O}$ る 父に 袓 母 解できず、 غ は  $\bar{\mathcal{O}}$ 自 折

は、 5 とをやってください」と言った。子どものわたしとし 返された。 ほ 1) 命をなくし マラリアに罹 うを歓迎 のことは ていた母は、父の人生を縛りたくなかった。「わたした 父がフィリピンから戦死することなく帰国 おとなたちの 心 奇跡的に生還できた父の話を結婚 ていく過酷 配 患 しない ī 諍 たからだそうだ。ほとんどの V が充満する息苦しい家でなくなる で、これからは自 な戦場か ?ら病 人ということで 由 にやりた してか できた 日 本 5 兵 0 ŋ は が

やはりさ 5 あ 館 わせることがなかった)。連絡 0 今年、二〇一〇年も 講 墓前 座は L 滝沢さん たあ でスピー このところ開かれていなかったので暫く顔を  $\mathcal{O}$ 時 が メー 間 と光景 チした人でさえ、 // 墓前 ルで知ら がなつかしくよ せてくれたからだ(公民 をうけて、 に行くことにしたのは、 K の妻以外、 日常の 4 が え っ 喧 た。 騒 か

なく、 だけでもいい、行ってみよう、と決め、 なくても、 距離をとるようになっていた。 らずのうち、気まずい思いをしないよう、なるべ あるのかもしれないとかんがえたこともある。 すべり落ちてしまう。 いてみたり、何かと関連づけたり努力するのだが脳 った人を忘れることが はきっと覚えられなかっただろう。若いときから、 人と言葉も交わさな 名 前も . もしかして無意識に拒否してしまう病 わ たし あの場所に立って、あの人たちを眺めている は 記 憶 か つた。 記憶にきざむことが苦手なだけ ないよう何遍も繰りかえし ていない。 交わしたとしても、 でも……ことばを交わ 滝沢さん 滝沢さんに 0 的 ように 知らず知的な原因が く人と つぶ から 出 ō 他 3 で B あ

ふって がら滝 加者は思 ぶしく踊っている。望むいじょうの晴天にめぐまれ ろのツツジが天蓋 る。 妻たち一行もまだ着い 沢 度しか来たことがない V たのに さんと西岡さんを探したが姿が見えな 年と変わ 、思い に朝には、 の位置 5 のように枝を伸ばしている。 な でゆったりとおしゃべりに興 あ てない  ${\not\vdash}^\circ$ がった。 クニックのようなの のに懐か ようだ。 眼下 · の 函 しさにさらわ 館 湾 どかな光 は 夜中 光 れな ï が 雨 K 7 参 ま が

1

Kです、

今年も行きます」と返信した。

到着すると、周囲

の雑草が刈られ、磨か

れた墓石

 $\mathcal{O}$ 後

キュアが塗られていた。

 $\mathcal{O}$ 

わ

め

墓に、

また来てしまいましたと手を合わせ

隣 去らず一 0 7 た。 に本のような 1 . ると、 青い表紙 歩退いただけで、そのひとが 女性が の本が気になったのだ。 ものをささげた。 ひとり近づいてきて わたし がり 1 しは墓前 くつか お わ るの から 0 花 立 束 ち

L  $\mathcal{O}$ 

何ですか?そ れ

た。 んは 目を開けたとき、 人と話すのは 避けてい わたしはすかさず声をかけた。 るのに なぜか 制 御 できなか

紙 持ってきたの いう写真展を東 「これ?これ の冊子をもつ手の、 甘くやわらかな声のひとだった。 ょ ね、 京 でやったの。 この あ 形 のい いだ、 1 爪 それ 六十年安保 にワイン 手作りら · を K に レ 報告し から五十 ツ Ĺ K V 青 た 年と マ 11 表

ぎわ 写真 気が手書きの説明文もあってつぶさに伝わってくる。 が手渡された。 どうぞ見てください、とひときわやわらかな声で冊 またもやわたしは衝動にさらわ 拝見してもよろしいでしょうか が並ん ぶり、仲間 でいる。 表紙をめくるとカラーコピーした大 0 人たちらしい顔 最初の打ち合わ れながら申し など、写真展の せ 0 様 子、 出 雰囲 尔 0 に 学  $\mathcal{O}$ 

「そうです カ こんな写真展をされたのですか五十

周

年

時の報道をしらべて集めたり、著作権の問題をクリアし「展示するパネルをつくるため、国立図書館に通って当

よくやったって誉めてくれるかしら、Kは……」たり、予想していたより時間がかかり労力もいったの。時の報道をしらべて集めたり、著作権の問題をクリアー

「あの……お仲間だったのですか」

感じのそのひとに、しぜんとことばが出てくる。いウェーブがかかっているいかにも都会の女性といったンツスーツに長身をつつみ、肩まで伸ばした髪にはゆる安保闘争の?ということばが言えなかったが、黒いパ

ないけれど」にいるのがわたしなの。といっても本人にしか判別できにいるのがわたしなの。といっても本人にしか判別でき「ほら、学生をまえにKが演説しているこの写真、ここ

を見つめていると、ような接し方に吸いこまれながら冊子の指さされた写真隙のない外見なのに、人懐っこい、昔からの知己である秘密をうちあけるみたいに声をひそめ、にっこりする。

いうものです、どうぞよろしく」 「そうそう名刺をさし上げなくては……わたくし、こう

じ力強い字体で書かれていた。
りなのだろう、『和泉やすこ』と、冊子の説明文とおなにふっくらと軽い和紙の名刺をさし出した。これも手作スーツのポケットから名刺入れを取りだし、羽のよう

「スミマセン名刺もってないのです……山野みちこ、と

申します。函館山の山に、野原の野……」

慣れない展開にしどろもどろしながら説明していると

すとふたりも名乗った。 たしのやりとりをみて、滝沢まゆみです、西岡れいこでころへ滝沢さんと西岡さんがやってきた。和泉さんとわ

ているの?」 「みなさん、函館の方ですか。いつもこの墓参に来られ

「函館はKのふるさとでしょう?だからここでも節目のわたしたちの声は三重奏のようにかさなった。「去年からお参りさせてもらって、今年二度目です」

…どこか、会場つかえるところ知りません?」 今年、このようなことしてみたいと思ってるのだけど…

答えながら、意外な方向にころがっていることにわた「心当たり、ないことはないのですが適当かどうか……」直球がとんできた。

しは戸惑っていた。

きる場として改装したスペースを借り、年譜や関連の写ようにした。会場はデパートだった建物を市民が交流でだけでなくKの生涯をたどろうと決め、タイトルもそのふるさとである函館でやるのだから、テーマは安保闘争下旬、一週間開催して盛況のうちに終えることができた。そんな経緯があって実現した《K・帰郷展》は、十月

真をパネ いたひとたちなのだ!)。 · る期 高校 ったので、 間 か j ル らの **!を借りられた。中学時代** にして展示 親友が副委員長となってくれ 早すぎず遅すぎな した。 墓参りのあとす V. の級友が実行 ちょうどい ぐ申 た (墓 |委員| い L 空 込 前 長 4

に

思い 立つような、 たび揺さぶられるも 心 度おこなわれている墓前祭に参加するようになったの 内役に、 った感情を整 したことはない つまびらかなことは知らないし、 の奥底でずっと気になっていた人の実像に近づきたい が引きよせた、 日ほどの準 Kを探求 理してみたかった。 胸騒ぎのような、もろもろがないまぜにな 人だったが、 する旅をしたといえる。 などという運命論者的な感慨もわく。 Ō 備期間 が あ ŋ, を振り返 たまさかKの挿話に出あう 機会があ わたしの日常とは交差 心れば、 いったら、 和泉さん 偶 於、 その泡 年に を案 ŧ,

1

ル

半端 K な のことだけでなく、ふりかえってみれば他に 解 決できないままのことが 1 くつも横たわ って ŧ 中途 V

コ ウキのことはその一つだ。

0 ウキ ワンルームでいつも絵を描いていた。 面 は、 倒 を みていた若者だった。 若いときアルバイトをしたところの女性 彼 は あ てがわ わたしはタマ ħ た十 経

> 外 ŋ 社 丰 だった。 さん 畄 食材や日用品をその 長では、 しな に な か 命 心られ った。 Ś タ マキさん 閉じこもっているとい (女性経 部屋に届 営者 と呼ぶようい けた。 は わ た したち コウキ っても っていた) は 従 ほとんい 業員 ほ 時お

れな か 死 、ん 5 見たことありますか」と尋ねた。 跡はなかった。目をそむけ凝視したわけではない 痛 かべていたら目が冴えて眠れなく 一々し れているのか。 ビーは鳩の血 その んでいる鳩をおもい チゴとか薔 V) ねじれた胴体から羽が垂直に立ち上がった亡骸 V けれど気高さがあった。だが舗装道路に血 それが生きも もっていった紙袋を渡しながら、「鳩の 薇 0 と呼ばれていると聞いたのだ。 赤 ふかい艶々とした温かい赤をおも がではル 出し の、 ビーの貴さや美しさが てしまった。 鳩の体を流れている血 、なり、 前夜ラジオで、 車に轢 しま いに路 たし カン 血 れ 表 極 かに 喩え た Ë いう 0 痕 は き  $\mathcal{O}$ 

鳩の血?見たことないなあ

ね ね。だけど、 え 平 コウキは素っ気なくつぶやいたが一呼吸お 0 1 ヌー ながれ出した瞬間 ジの鳩が血をながすの の血 はきれいなんだろう は 悲劇 のときだよ

ンバスは、 絵筆を左右 に振 訪 ñ ぬりなが るたび違う色が塗り重ね 5 天 を あ お られ 脚 てい 0 0

t

群像だ は風景 枚 に変わっている。 つ 丰 ヤンバ たの 何 が、 も描 スにつぎつぎ異なる絵を描い 抽象画になったり、つぎに訪れたとき 11 ているのだと最 色調もだから一定ではな 初 お もつ たが、 ているのだ。 ただ

我慢できず、とうとう聞いてしまった。

「どんな絵にするのですか」

こうして一枚のキャンバスに絵の具を重ねつづけていく いほうがいい んだよ。 「完成することはないんだ、 何枚も描いたら始末にこまる。 絵が描けるあ 余計なものは無 11 ずっと

のまえ描いていたの好きでした」 「欲しいひとに上げれば喜ばれるのではないですか。こ ぎまさ

れるような色彩だった。 屋にかざるには少し大きいが、 寂 ĺ V) ときに励

そのまま死んでしまっても、 か路上で暮らすかもしれない、それならそれでいいんだ。 いる、偶然ひろわれてね。 知ってるだろうけど、 欲 ぼくは今タマキさんに養われ っさい望まないでいようと決め そのうち追い ぼくはじぶんが何をしたい . 出され、又どこ Ė

のことなど聞かなければよかった。 るの んおかしな話をして、 か楽 しん でいるの コウキはわたしがどん なん わたしは油絵の て人だ。 鳩 具の の血 な

画を記事に

してくれた地

元紙があったのでカンパが

に ったの 0 たからだ。タマキさんは、わたしに お ふたたびあ いがただよう部屋を無言でとびだ よ、と泣いた。 の部屋に行かなかった。 日本のGNPが世界第二位に .黙って消えてしま コウキ が V

な

らくな

たと大々的にニュースが流れたときだった。

 $\mathcal{O}$ 鞄を開いてみたが中には何も入ってなかった。 を紹介した。父がどのように生きていたのか、 でも、まったく分からないままでは悲しすぎる 家族だって、わたしは丸ごと理解してはいない。 の入院先から母に手紙をよこした。母は函 人間をすべて理解はできないと端からあきらめてい 人の 母は父に良かれと思って自由になる扉を開けた。 父の気持はどうだったのだろう。父は最 心を見極 めることは むず カン L い。 V ちば 館 晩年、 のホスピス W りまが ひとり

り、 するといった。 の協力もあお 開 催 会場に貼りだすパネルの下準備をしていることにし ポスターを作ったり、チラシの文面をか 日程を決めて和泉さんが東京にもどるとき、 いで、 わたしと滝 展示するため 沢さんや西  $\hat{O}$ 新しい資料集め 畄 にさん 函 が ええた K 夫

写真も ビュー 感じる)、 いうお母さんの毅然とした表情は、Kの妻にどことなく ていた。 のほ つけられている。「息子の行動を信じています」と した記 か だったひとか 事のコピー せ  $\overline{\mathcal{O}}$ 5 心 配もなくなった。さらに大きな収穫 Œ 5 が提供された。 とん Kの逮捕直後、 どKの信奉者か かなりの字数に、 母親にインタ らのように は

以後は とが れを開 まで定めなく渡り歩いていた不安定な時 笑い声も聞こえてきそうだ。仕事を変えながら南から北 生時代の繊細ななかに意志の強そうな風貌のKに見いる。 いたのだから、どんな風貌だったのだろうかと想ったこ とに気づいた。 てくれた。 ひととしか思えない 写真といえば、 がふえる。 () L いてわたしはこれまでK 因 託 だいに別人のようにふくよかに のない ずいぶん間 入 院 墓のあったことや妻がい 大きな挫折を味わ 表情 関係 和泉さんが参考にとKの追想集を送っ 気難し した病室でさえ笑っ ・目の前 をしていたなん が抜けてい 者 が 思い いKを勝手にイ の写真に の容貌を 出 ったのい をつづったものだ。 ると自 にかすか て ..... ∘ |朝し てお になり、 知ら だから影があ 期のはずな たことにさえ驚 · メー な違 b, ながら、 なかったこ 元 はじけ 豪快 和 来 のに、 7 感 陽 学 性 な Ź そ 0 が

> 後、 機動 よろこびが滲む和泉さんの声だった。 局に行って、ようやく四十年前の記録映像を探し当てた。 仕 ることができたと和泉さん 事だった。 職を転々とした。その一つが、 隊ともみ合 備 も後半に ドキュメント番組 \ \ な ふってか 逮捕され、 5 カン 実刑 さが 連 をつくり放送したテレ 判決をうけ L てい 北の海で漁船に あ った。 た K た 0) 映 K 国会前 は 像 ·-出 ビ る 所 で

4 た L に 7 11 直  $\mathcal{O}$ 手数料を払って写真にすることはできるから、 「でも見せてもらうだけ。貸し出しはしてくれ んなで検討しなければならなかったし、 いたが会場におくリーフレットには何を盛 る。 ポスターはすでに各所に貼らせてもらって好評をえて 一前 て会場に掲げましょう」 甲板で作業しているカットを三枚頼んだわ。パネルに かかげるメ その数日後、開催の十日前、和泉さん の仕上げ作業をするためだ。 宣伝 のチラシはポスター イン , の大: 小パ ネルを作成 -を縮小 滝沢さんがデザインし して配 心しなけ は 圂 なによ 館 動りこむ れ 布 に入った。 をは K が ない ば ならな り会場 漁船 ľ  $\mathcal{O}_{\circ}$ め

とわたしたちは昔からの友人のようになった。作業をしていくうち、七月に出あったばかりの和泉さ

てくれた部屋に準備のため連日あつまった。

帰郷展》

開催

 $\mathcal{O}$ 

仲間

に入ってくれた人が

提供,

たの、 いる方だと思っていたというと、六十五歳まで働い 数年だと知ったのもそのときだった。最初から参加し 結婚もしないで……と笑った。 なさん が Κ の墓参に訪 れるようになった (T) んは、 てい まだ

和泉さんは」 れて、今年で七年目かな?と指をおった。 とちがうところ。だから定年になってからようやく来ら ブラックリストに載せられたから、 「でも、 ずっと全学連のデモに参加していた和泉さんも警察 恋はたくさんあったでしょう、魅力的ですもの 就職できたのは希望  $\mathcal{O}$ 

わたしは親戚のおねえさんに尋ねるようにいった。

さんK に紹介されるときのK、長靴をはいて壇上にあがったの。 はっきり覚えているのは、全学連の委員長に決まって皆 残念でした、わたしは目の前のひとには関心がない って応えた……ほんとの話、Kは全体のリーダーですも 「このあいだ仲間 挨拶したことはあるけど話したこともなかったのよ。 に惚れていたんじゃないのかって言われたから、 に、もちろん冗談なんだけど、おまえ のよ

それま

での

たとうれしかったわ

いころ、

1

・まより

t

つと棟

方 志

功  $\mathcal{O}$ 描

 $\overline{\langle}$ 

がみなぎっていた。新しい時代をつくるリーダーが現れ

インテリ然とした委員長とまるで違って活力

يح |

肉

な女人像に似ていたのではないだろうか。ふっく

は 寸. きとする。 らした頬と好奇心やどる瞳が話 ち向かってきた和泉さんの話は、わたしたちの作業を かどらせた。 しなやかな迫力で、なにごとにも怯まないで しているうち一層

7

ない。 同 険というのはわたしにとって言葉のみがするものだった。 な時間とお金を費やして……と疑問だった。挑戦とか冒 なぜ、苦行でしかないことを進んでするのだろう、 咄嗟にわたしは聞いていた。日頃から登山する人を見て、 独りで登ったこともあるそうだ。怖くなかったですか? つまらない生き方をしていると分かっているが変えられ 好会にも所属し本格的な山登りをしていたともいった。 会社員だった時代は、市民運動に参加しながら、山

わたしは一 大自然のなかを黙々と高みを目指している和泉さん あったのよ」 「ただ歩きたかったの、そうせずにはいられないときも 暗闇もつめこん 段と頼もしく好きになった。だまってい だ重 1 . リ ュ ツ ク を背負 って、 圧 倒

K ル論」を書いていた。一世代あとのわたしの時代でも、 が高校時 会場に展示するものの中に、 代 · 所属 た文芸部誌も 同期生が寄贈してくれた 加 わつ た。 K は

ル  $\vdash$ なレベ とボ ていて憧れながら読 Ì ルでなく、真っ向 ボ ワー ル 0 理 想的 んだも 関係 からサル という記 のだ。  $\vdash$ ル もち の実 事が 存 女

のに

.外ならない』とサルトルを引用している。

取

り組

h

でいた。

『人間とは彼が彼自ら造

り出

た

話題に ない会話をし、最後はカラオケで演歌をうたいあげたと 彼に電話 大学の後輩だったひとのエッセーだ。札 だことがあったので探したのだった。 た文章を和 ていた。どちらも『かつてのこと』には触れない、 ほ ない。 をしてくる。 かに図書館でコピーしてきたKについて書 泉さんに見せた。 そう書かれていることが読者のこちらに、 二人は は居酒屋 郷土史誌やタウン誌で読 で飲み、とりとめ ひとつは、 幌に来るとK 高校 か  $\mathcal{O}$ は れ • W

で育 た二人が じように 館出身の しずかな緊張をあたえる。もうひとつは小論で、 + に見 権力の ダル クロ てはならない、 大物右翼とKを論じていた。どちらも母子家庭 時代は違うが ないだろうかと考察してい スする日がきて、 前 て世 に挫 間 折する。 同じような思想から出 二人の親和 に流れる。 やがて親子ほど年の離れ それはあ 性 論者  $\mathcal{O}$ 根 は ってはならな 幹 それ 12 発して、 .目を向 同じ け V 函 同

0

しね、 Kのことをしっかり書きのこしておきたく

血

な 0

った。 をかけて取り組むつもり。 書きのこしたい。 けっこう世間的に成功者になっている仲間が多い ちんとまとめ まざまに言われ とき、 んを奮い立たせて生きてきた。 っと道標としてい ってきたわ。それで確信したの。 準備 をもらったんですも は の は 《 K ・ 帰郷 和 泉さんが、 あの時代 早逝 Kもどこかで頑張っているにち をはじめ ĩ 【を背負 た K ておかなければ無責任 ているけれど、 てから、 展》 の思 完成まで時間がかかるだろうけど晩 たのだなあ…って。 つものやわら つたまま生きて四十七歳 の 1 あなたがたと今日まで夢中 を、 今回こんなに貴重なたか 行 け 当事者 六十年安保闘争、 かい 動 をしているときだっ を、 Kのこと、 な 声できっ わた がいない 困難にぶ 0  $\mathcal{O}$ Ĵ ひとりとし L ね。 で死 わたし ぱ 0) そし 視点から ってじぶ りと言 なか W カン しはず でい った てき 年

て てくれた てくれたひとたちが に出会ったことが いるものに気がつきながら……。 和泉さんは会場においたノートを抱き寄せた。 ートだ。 分か 多く <sup>≈</sup>K る。 Ò • ひとが 帰郷 その 展》 目 五. をみて感想をつづっ にあって今日、 ○年まえ 0 K いやじぶ 来場 失っ

和 美しさを、  $\mathcal{O}$ ぜひ和泉さんに書い ル である鳩が流 さな てほ げ ń しい。 ば ならなか わた つた K

#### 小 説

#### 佳 作

稲

本

昭

治

スイッチ

雨が降っては、止みを繰り返した。 すように寒い。暗くなって雷が鳴り出すと風も出てきて、 リューム検査の朝、まだ冬には早かったが、肌を刺

ことだし、今日を外すと、いつになるか予定も立たない しをしようかと思った。でも、一年に一回と決めていた 山室信也は、予約していたバリューム検査を、先のば 気合い入れて重い腰を上げた。

その日の夕暮れ時、電話が鳴った。

びっくりするようなことは、いつも急だ。 病院からだ

「胃カメラによる検査を、早急に受けたほうがいいです

受話器を耳に当てたまま、一瞬身が固まる。

「なにか、見つかりましたか」

おそるおそる、 訊いた。

「それは、胃カメラの検査の後で……。急ですが、でき

ください。朝は食事を取らないできてください」 たら八日の九時十五分までに、レントゲンの受付にきて もっと訊きたかったが、あまりに事務的で、質問に応

えてくれそうもない。

受話器を置いた。

早急にといい、食事をとらないでといい、異変が見つ

よほど病状が悪化していて、急を要するのだろう。 かったらしい。それに、日時まで決めているというのは、 壁のカレンダーに目をやる。途中に祭日や土日を挟ん

くれればいいのに。 でいて、まだ一週間ある。急ぐのなら、もっと早くして

のだろう。これが、ぎりぎりの日程なのだ。 きっと、予約でいっぱいの中に、割り込ませてくれた

下剤を手渡しながら言った。

検査後の、医師と交わした短い対話が、

気になった。

「去年も、バリューム検査しましたか」

「はい、同じ時期に。ここで受けました」

「そうですか……。そのとき、なにか言われませんでし

たかし

たったこれだけ。

さりげない言い方だった。

もしかしたら、出が けの天気は、こうなることを暗示

していたのだろうか。

覚えがある。かかった時間も、 り替えさせられ、右も左もわからなくなって、苦笑した 細かく指示されたような気がする。また、同じことを繰 検査中に感じたことと言えば、例年と比べて、体位を いつもより長かったよう

分になっていた。 終わったときは、 船酔いでもしたようで、吐きたい気

る時間になる。 胃カメラまでの日数は、 そのまま悩むには、 十分すぎ

でも、まだ死にたくない。 どもも成人していて、一応人生の区切りはついている。 は学校勤めを、五年前に停年している。二人の子

た月ほど前に、子供向けの本を出版したばかりだ。次作 それに、勤務中に書きためていた原稿を整理して、ふ

もゲラ刷りがあがってきている。

るだろう。ゲラを完成させるには、あまり余裕はない。 胃カメラの結果によっては、今度の本は 、遺作という

電話の様子なら、検査の後、すぐ入院ということにな

ことになるかもしれないと思うと、入院前に仕上げなけ

ればと、ゲラ刷りの手直しにとりかかった。 ところが、電話のことばかり気になって、集中できな

けられなかった。 い。わずか、百ページあまりなのに、その半分も手をつ

定の時刻より一時間以上早い。 る。妻の陽子もいっしょだった。病院に着いたのは、予 病院の駐車場は、いつも混んで、遠くの駐車場に回され 当日、八時の開門に間に合わせるよう、早く家を出た。

字面を追っただけだった。 書棚にある、古い本をとって開いた。気が散って、目で けなのに、いつものように会話も弾まない。備え付けの レントゲンの受付には、まだ、だれもいない。二人だ

八時半を過ぎると、一人ふたりと廊下の椅子が

ていく。 受け付けのカーテンが開いた。

人もなく、不安そうな顔をしている。陽子が、ときどき 胃カメラの検査を受ける人だろうか。 だれも談笑する

声をかけてきたが、 上の空であった。

着かなかった。 いよいよ検査で、 重大な宣告をされると思うと、 落ち

名前を呼ばれて、待合室に入った。

先に呼ばれた人が、椅子に座ってあんぐりと口を開け、

看護師がスプーンで透明な液体を入れるところだった。

「飲み込まないで、数分、 こんなことを言われていた。喉に麻酔をかけるのだそ 喉の奥で止めておいて」

うだ。 信也も同じように、 液体を口に入れられ、 数分たって

から吐き出した。 喉の感覚がなくなったころ、検査室に入った。

細長いベッドに横になる。

れられた。のどを通るとき吐きそうになった。 黒い小指ほどの太さの、ホースのようなものが口に入

検査は十分もかかっただろうか。

終わって、丸椅子に腰をかけた。

しい。

のようなものが見える。 ってきた。よく見ると、真円の中に、 医師は机の上に写真を置いた。 真っ赤なものが目に入 熟れたザクロの実

「だいぶ進行しているようです。胃ガンです」 医師は、そこをペンの先でさしながら

はっきりと言った。やっぱり。

とわかります。すぐ入院の手続きをしてください」 意外だった。ガンのときは直接本人には告げず、 **三織検査をしなくても、経験上、見ただけで、ガンだ** 

していて、拍子抜けしてしまった。 を呼んで言うと思っていただけに、 あまりにもあっさり

「胃ガンだって。すぐ入院の手続きをしなさいって」 廊下に出ると、陽子が立ち上がるのが、目に入った。

廊下を歩きながら、見せてもらった写真のことを話し

「去年も、バリューム検査したのにねえ」

こう言ったきり、陽子のことばが途切れた。

た。

ないのだろう。それは、信也も同じだった。

「一年で、そんなに大きくなるものかなあ

「ガンなのに、わたし、呼ばれなかったわね また言った。信じられないようだ。

検査と呼ばれなかったことで、不満が増幅してい

「胃ガン検診だからじゃない。悪か ったら胃ガンてこと

だろ」

ぶっきらぼうな言い方になった。

なんにも自覚症状がなかったのに。 「わたしも、説明して欲しかったわ。吐くとか痛むとか、 とても信じられない……」 突然ガンだと言われ

まだ、言っている。

あってもいいのに」
「そうだよな。そんなに進行してるんだったら、なにか

を思い出していた。信也は、またバリューム検査が終った後の、短い対話

あった。それを、見逃したとしか思えない。
もしかしたら、一年前の検査のときも、ガンの兆候が

病院では、去年の写真を確かめて、慌てて電話を、よ

いる。

こしたのではないだろうか。

えてもみなかった。のギャップは大きすぎる。こんなに、身近なものと、考は、一瞬なんだ。ふだんは思ってもみなかったのに。こ死について考えなくてはならなくなった。生と死の転換突然、死が身近になってしまった。いま死ななくても、

だら、「きれい」とか「美しい」とか、言ってしまいそうなものだった。植物とか人工物で、自分のガンでなかっ真円の中に、熟しきって口を開けた、ザクロの実のようていた。信也のガンは、まるでコンパスで描いたようなーガンは、もっとどろどろしていて、汚いものだと思っ

かった。異変にも気づけないほど、鈍感だというのか。だいぶ進行しているというのに、自覚症状はまるでな

ったものではなく、薬局で買ったものだ。薬を飲んでいた。それも、病院にかかって調剤してもらでも、口の中が苦くなることがあるので、一日一回は胃の中が苦くなっていて、不快だったことだ。それが日中

ちょっとでも、あったとすれば、朝起きるといつ

たのだろうか。病院で診てもらうべきだったと後悔して買う薬も、その時々で違っていた。それがよくなかっ

胃ガンは、本で調べたり、インターネットで調べたり

した。

医療保険による補償にまで、心配は及んでいった。そのうちに、死んだときの保険金や、入院したときの

ば、二十五年ほど前にも似たようなことがあった。陽子は、呑気なことを言っている。強いな。そう言えしていて、なかなか死ねないんだから」「そんなに悩まないでよ。ガンでも、いまは医学が進歩

てさ」「タバコを吸わなくても、肺ガンになる人がいるんだ

いたことは、間違いないな。覚悟してたらいいんじゃな「痰は自分の体から出たものだし、なんか怪しいものが

「受動喫煙てこともあるしな。その方がひどいらしいぞ」

ん言われた。初めは笑って聞き流していたものの、心配怖がりそうなことを、からかい半分で、職場でさんざ

うだった。 タバコを吸わない信也が、喀痰検査を受けた経緯はこ

は次第に心の中で膨らんだ。

ての人数より少なかった。

それで担当者が嘆いていた。

「このままなら、次年度は割り当てが減らされる。

それなら協力してやろうと、受けたのだ。かいないかな」

だけが「再検査」なのだ。ところが、喫煙者が全員、異常なしだったのに、

信也

で、血を吐いて死ぬのだそうだ。る本を、片っ端から開いてみた。肺ガンの末期は苦しんる本を、片っ端から開いてみた。肺ガンについて書いてあ気になって、書店を回って、肺ガンについて書いてあ

二人の子供がまだ、小学生だったこともあって、死んまっているような、そんな気持になってしまっていた。調べていくうちに、なんだか肺ガンになることが、決

そのときも陽子はだときの保険金まで調べたりした。

「まだ肺ガンと、決まってもいないのに悩んでも、どう

にもならない

ちや、母の顔を見るのもつらかった。仕事もないのに、ことばの数も、だんだん少なくなっていった。子供たと、気の強いところを見せた。

しぜんと帰りが遅くなった。

「代われるものなら、代わってやりたい」母はため息交じりで、

肺ガンと決まったわけでもないのに、先取りして家族みこう言われては、返すことばも見つからない。まだ、

んなに、心配をかけてしまっている。

だれ

どもの時からの信也の悪い癖だ。 小さいことでも、くよくよ考え悩んでしまうのが、子

もあったが、生活保護を受けたらどうか、という話生委員に頼んで、生活保護を受けたらどうか、という話信也は中学二年生で、妹、その下に二人の弟がいた。民漁師だった父が亡くなった時、母は四十五歳だった。

「子供たちに、肩身の狭い思いをさせたくないから」

母は頑なに断った。

保険金と、母の内職が頼りだった。 モや、大根のとれる小さな畑があったし、わずかな父のこれと言った現金収入もなかったが、山にはジャガイ

時化になると、浜に流れ寄る海草を拾い、食いつない隧分と「長の卢耶カ東りだった

た

- 〔デゥズゥゥ ニウジュ・ロダゥ。 母は同じ苦労を、陽子や孫たちにさせたくない、とい

よく腹痛を起こす母だったが、父が死んでからは、そう気持ちがあったのだと思う。

寝ているのかと思うほどだった。れもなく気丈に働いた。夜は頼まれた和服を縫い、いつ

の心を刺した。
そんな苦労を見て育っただけに、母のことばは、信也

も悩んだので、喜びはひとしおだった。 結果は「異状なし」だった。わかるまで、ひと月近く繰り返されるようで、生きることの非情さが身にしみた。 父と同じように若くして死んだら、父母と同じことが

き回った。 忘れているわけではない。それなのに、いつもより、動忘れているわけではない。それなのに、いつもより、動言にはまだ早かった。外は寒い。胃ガンであることを

それが終わっても、家のことで、やり残していることした。
家の周りの片づけ。信也の車と娘の車のタイヤを交換

「病人なんだから、少し大人しくしていたら」

があるような気がした。

陽子は、あきれて言う。

一段落して、ゲラ刷りの修正にかかった。しかし気に

も治らない。これも、あの世に持っていくことになるのなることがあると、集中できない質は、この期に及んで

かと、笑ってしまう。

となる。ちょっぴり、勇気がわいてくる。版されれば、手術が思わしくなくても、死後に生きた証なんとしてもゲラを発送してから入院したい。本が出

入院する朝、ようやく完成した。

車で病院に向かった。

と言ったとか。そんな心境だなと思って、フフッと笑っだれのことばか忘れたが、死ぬ間際に「これでよい」病院の近くの郵便局に寄って、「速達書留便」で出した。

ことにした。わなくてよいということだった。空きができたら、移るかなくてよいということだった。空きができたら、移る金が取られると思ったら、病院の都合なので、それは払相部屋に空きがなかったので、個室に入った。特別料

検査が待っていた。

採血、採尿に始まって、

腹部

レントゲン、心電図、

腹

腸検査など、なん日も続いた。部エコー、心臓のエコー、肺機能、肺活量測定採尿、大

るのだったら、一刻も早くガンを切り取ってもらいたい。なにをぐずぐずしているんだ。ガンが相当進行してい

考えてみる。終いに、おかしくて苦笑してしまう。のか。眠れないから考えるのか。どっちなんだろうと、あれこれと考えると、眠れない。考えるから眠れない

検温に来た看護師に訊いた。

「そうね、検査は普通、二週間くらいかかっていますかいかと心配してます」「毎日毎日、検査ばかりだけど、病気が進んでしまわな

文句を言いたい気持ちが、しぼんでしまった。ら……。山室さんは、だいぶ急いでいるようですよ」

る。

入院して十日目、昼近くなって婦長が来た。

生です」
「手術は二十五日に決まりました。執刀の先生は黒田先

手術なら、一日でも早いのは大歓迎だ。

ろうと思ってると、るときは、なにか大事なことがあるときだ。内心なんだるときは、なにか大事なことがあるときだ。内心なんだところが、午後になると、また婦長がきた。婦長の来

こした。と言った。後ろに延びないで、前に来たのだからほっ「すみません、手術は二十二日に、変更になりました」

ど早まったので、イラついていた気持ちがおさまった。検査も急いでやってくれてるようだし、手術も三日ほ

陽子は、毎日のように昼食前に来て、昼食後に帰って

なんども、言った。 行った。

「まだ手術もしてないのだから、毎日来なくてもいいか

「ついつここそのたびに、

「わかった」

来なくていいと言いながら、時刻になると、待っていと言ったが、それでも毎日やって来た。

は車ばかりで、バスに乗ることがなかったから、きっと家は街の中心から、ずっと外れにあった。出歩くとき

ときどき看護師がきて、検温や入院時の心得のような陽子は不便を感じているだろう。

ことを説明した。

どんな健康な体でも人は、いつかは死ぬ。この世に生をとは、出来ないのが死だ。生きているものは必ず死ぬ。さていられる、そんな気がして過ごしていたのだ。おンを宣告され、手術を目前にしてみると、いやおうさいとして、考えることはなかった。漠然と明日も生たこととして、考えることはなかった。漠然と明日も生たこととして、考えることはなかった。漠然と明日も生たこととして、考えることはなかった。

とを、深く考えることもなく、生きてきた。 受けたときに、死は決まっていた。いままで、生きるこ ま死んでいくとしたら、充実感などないだろう。

病院からのたった一本の電話。しかも事務的な電話で、

ることはできない。どんな努力をしてもだ。 死について考えなくてはならなくなった。死をくい止め

> ことばも聞こえる。 足音がせわしくなった。声を殺して、早口で言い交わす こんなことを考えていた時、突然、廊下を行き来する

また、だれかの生が、終えようとしているのだろうか。

死を前にしてうろたえるだけでは、安らかな死などな 医から手術の説明を受けた。 四時 過ぎ、 部屋に呼ばれた。 陽子と娘の三人で、

胃の下部を三分の二切除します」 図を書いて、説明してくれた。

んな死なのだろうか。

信也は考える。

いのではないかと。それにしても、安らかな死とは、ど

信也は、仕事を停年になった後、趣味として始めたも それは、精一杯人生を生きた果てに、自ら悟るものか 進行しており、手術しても完治の見込みはうすいので、 手術後も抗がん剤やエックス線による治療を、 手術には、五時間ぐらいかかるという。ガンはだいぶ 覚悟して

学んだような気がする。頂上という目標にたどり着くた のに「山登り」がある。これで、精一杯努力することを、 いて欲しいというのだった。 説明が終わると言った。

めの努力は、これまで生きてきたのとは、ちょっと違っ 歩の連続だった。歩みを止めたら、目標の達成はない。 登りの数時間は、まさしく目標を持った、苦しい一歩 頂上に立って見る絶景、そして充実感は今まで体験し るのに、なぜか言えなかった。医師の答えが恐ろしかっ 「なにか、訊きたいことはありませんか」 最大の関心ごとだ。ことばがのど元まで出 (あと、どれくらい生きていられますか) 信也は、訊きたいことがあった。

ているような気がした。

果たして、仕事をしていた時の信也には、恥ずかしな そのような体験はなかったと言っていい。このま 「麻酔するときになって、暴れたりということないでし 医師は、なにか思いついたように言った。

た。最後通告をされたらと、内心うろたえていたのだ。

かか

つてい

がら、

たことのない、素晴らしいものだった。

ようね」

了をい、そのこだ。 「それはないと思います」

即座に、笑って答えた。

「皆さん、そういいますけど……」

いにくそうだ。 気になることがあるようだ。ちょっと間があって、言

「たしか、お仕事は教員でしたね」

はい

「失礼ですが、教員には割といるんですよね」

こういって、顔を見た。

「ないと思いますよ……」

ここまで言って、はっとした。

めていた。

「それでは……」

医師は部屋を出ていった。気になることがあった。

も、部屋は電灯をつけたままだった。 信也は子どもの時、暗いところでは眠れなかった。夜

うに思う。

泣いたのだ。それが、小学校が終わる頃まで、続いたよまして、暗いと、よく泣いた。ありったけの声を出して、戦後間もないころで、停電が多かった。夜中に目を覚

母はよく言っていた。

「夜中に、火のついたように泣かれると、なにごと起っ

なってきて、いまにも死にそうになってしまうのだ。だ 真っ暗だと、方角が全く分からなくなると、息苦しくたのかと、母さんまで怖くなってしまうんだよね」

停電は雨風が強くなった時に、よく起こった。天候がから、泣き方も尋常じゃなかったようだ。

一層深いものとなる。 荒れるようなときは、前もって雨戸を閉めるので、

闇は

にりすると、それだけで安心だった。 雨戸にちょっとすき間があったり、節穴や釘穴があっ

で、方角がわかる。それを頼りに一晩中眠らずに、夜中に目を覚ましても、そこから漏れる小さな明たりすると、それだけで安心だった。

かり

ら、側にいて手をじっと握っていてくれ」「おれが死にそうになったら、暴れ出すかもしれないか入院してから、陽子に言ったことがある。

から」
麻酔をかけたら、眠ってしまうんだから。心配性なんだ麻酔をかけたら、眠ってしまうんだから。心配性なんだ「心配ないって。死ぬときは意識がなくなってしまうし、

「一度死んだことがあるような言い方だな」

ろうから、覚えてて」ったことを医者に話したら、適切な処置をしてくれるだったことを医者に話したら、適切な処置をしてくれるだ「突然暴れたら、迷惑かけるだろ。そのときは、いま言

「こんな時に、思い出して。気になるんだよな」 まは、暗いところで寝てるんだから、大丈夫でしょ」

「そうなったらのことでしょ。覚えておく」

いまでも心の隅に残っていて、こんな時に思い出すの

のだろう。 まだ、手術まで数日の間があった。眠れない夜が続く

見れなくなるかもしれない。 こに向かって生きられるものを。いまはその小さな光も、 らいの「光・未来・」が見えてたら、そこを見つめ、そ 子どもの時に、大泣きした暗闇であっても、針の穴く

もみなかった。それを気にしたり、考えたりして来なか 死というものが、こんなにも身近なものだとは思って

らな」

分の中でうやむやにしてきただけのことではないか。 いことがいくらでもあるのに、漠然とした期待感で、 発など、一瞬のうちに命を失ってしまうような、恐ろし 交通事故だって、自然災害だって、原子力発電所の爆

とやってくる。生命の誕生と死は、こんなにも近い存在 生命保険のセールスマンが、「かわいいお子さんのために」 子どもが生まれると、どこでかぎつけるのか、数日で

であることを、忘れていた。

険にさらされているというのに、差し迫った自分のこと 病気でなくても、 事故は突然に起きる。常に、命の危

として考えたことがなかった。

かな色が、また信也の頭に浮かんだ。 胃カメラで見た、熟しきったザクロの実のような鮮や

だ、六十五歳になったばかりだというのに。 ついて思うことは、無意味になってしまったようだ。 生存率まで気になりだしたいま、自分の人生の未来に

陽子の口癖は、

「平均寿命までは、生きないとね」 「そうだよな。おふくろだって八十歳まで生きたんだか これが信也の願いでもあった。

くて二、三ヶ月くらいのものかも知れない。 この短い間に、なにをしたらいいのだろう。 いま、未来について考えるとしたら、一ヶ月、いや長 肉体的な

ことはダメだとしたら、やはり考えることしかない。

生を長続きさせると思いたい。ようやくという感じ よいよ明日は待っていた手術だ。少しでも早い手術

昼頃、看護師が来て毛ぞりをした。胸から下、股まで

たものだった。 だった。電気カミソリだった。 中年の看護師で、 手慣れ

なった局所を見て、思いは遡った。 すっかりきれいになった鼠径部。 とりわけ、毛のなく

ツは、人絹という布で、作ってもらったものだ。 ンツをはいて泳いでる。 母から強く言われていた。 あれは、小学校四年生の夏の盛りだった。みんなは もののない時代で、信也のパン

「どうして」 「パンツをはいて泳いだらダメ」

「人絹は、海水でぬれると、弱ってすぐ破れる」

これが理由であった。 パンツを脱ごうとしたら、健治が笑った。すっぽんぽ

んが、おかしかったのだろう。 「シン、パンツはいて泳いだって、なんともないって。

海から上がったら、たき火でかわかせばいいべや」

|そうか……|

と言ったきり、ことばが続かない。 そばにいた、

光男

「みんなやってっから、心配ねって」

言ってい

る。

母の怒る顔が、頭に浮かんだ。たき火で乾かしても、

ょっと悩んで、エイッとばかりパンツをはいたまま、 嘘をつくことに違いない。なんだかすっきりしない。 4

んなと渚に走った。 夕方になって、 海から上がった。川で体を洗い、たき

た。 火をみんなで囲んだ。一日の終わりは、 ものだ。残っている焚き木を、ぜんぶ火の上に積み上げ 拾ってきた古いイカ籠も積み上げた。 お祭りみたいな

パンツはゴムのところを伸ばして、棒を挟んで広げ、

そこを長い棒に引っかけて、たき火にかざした。 しばらくして、油のしみたイカ籠が音をたててはじけ、

勢いよく炎を上げる。

風下になって、煙くなる。 たき火の勢いで、かぜが回る。 たまたま信也の方が、

いっとき、顔を背けて目をこすっていたとき、

「パンツ、燃えてるぞ、シン!」 だれかの声がした。煙いまなこで見ると、ほ

んとに燃

えよ。さっぱりするぞ」 えていた。慌てて、砂の上で踏みつけたけど、見事に燃 えて、湿ったゴムのところだけが、残っただけだった。 「それじゃ、どうにもならねーだろ。火の中に投げちゃ あきらめきれずに、燃えカスを両手で広げて見ていた。 みんなは大笑いした。信也もおかしいのに笑えない。

年先輩の弥一が言って、またみんなが笑った。

どうにもならない燃えカスのパンツだけど、信也は持

ち帰って、軒下に積んである、焚き木の間に隠した。 知られたくないことは、すぐ見つかってしまうものだ。

夕飯どき、姉が言い出した。

「パンツ燃やしたって、ホントなの」

ドキッとした。こんなに早く知られると思っていなか

「えっ、あれだけはいて泳いだらダメって、言ってたの

母は目を丸くして怒ったけど、姉ちゃんが笑い出し、

ている。少しだけ、ほっとした時、 父さんも笑った。つられて母さんも仕方なさそうに笑っ

赤いマンマ炊いて祝ってやらないとな、母さん」 「シンにも、隠したいことができて、うれしいこっちゃ。

みんな大笑いしてるのに、信也だけ湿った笑いになっ

まは亡い父母をいっしょに思い出せて、うれしかっ

胃ガンが見つかってからは、笑うことがなくなってい ちょっとだけ、この笑いで明るい気分になれた。

手術室に入って麻酔をされた。

不安だったが、すぐに眠ってしまったらしい。

気がついたときは、 集中治療室だった。

まだ、生きている。

の自由が奪われているような、息苦しさがあった。 やけに喉の渇きを覚えた。ひとりだけ看護師がい 鼻から口まで酸素マスクで覆われていた。意外と呼吸

ない。 水が飲みたかった。舌が下あごにくっついて、声になら

死ぬことはないだろう。

手術の後は水が禁物なことを思い出した。

飲まなくて

病室にもどると、陽子が

「なんのこと」 「おれに、なにか変わったことなかったか」

「暴れたりしなかったか」

陽子は、不思議そうに聞

まだ言ってる。手術中、 五時間を超える手術だったという。 なにもなかったようで、 ほっとした。 眠ってたでしょ」

医 師 が来た。

ガンは胃の壁を突き通していなかった。悪いところは、

全部採りましたから」

このことばで、目の前が明るくなった。

りだ。

「は、「抗ガン剤やエックス線治療を覚悟して」と手術後は、「抗ガン剤やエックス線治療を覚悟して」と手術後は、「抗ガン剤やエックス線治療を覚悟して」と手術後は、「抗ガン剤やエックス線治療を覚悟して」と

実感として大きく膨らみつつある。く膨らんだり、しぼんだりする。いま、信也のこころは、思うことがある。それが時によって、風船のように大きのか、定かでないのに、あたかも個物としてあるようにった、定かでないのは、不思議なもので、体のどこにあるこころというのは、不思議なもので、体のどこにある

この医師の一言は、信也には「死から生への切り替え「ガンは胃の壁をつき通していなかった」というんだ」。こんなことを聞いたことがある。「こころ」というのは「ころころ転がるから、『こころ』

「おまえが生まれたときは、コンブ取りの真っ最中で、のことを、話してくれたことを思い出した。そうだ、小学校高学年の頃、母が信也の生まれたとき

スイッチ」となった。

母さんは大きな腹をして、舟からコンブを下していた。

ところが、急に腹が痛くなって、動けなくなった。

ふた月も早く生まれてしまったんだ。 気がついたときは、おまえが生まれてた。予定より、それからのことは、気を失っていて覚えてない。

ハまなら、呆育器こ入れられるナど、当時は、そんなった。体に力がないから、泣くこともできなかった。 それは小さくて、手のひらに乗っかるくらいよりなか

育たないと思った。近所の人たちも、だれもがそう思っいい道具もなかったから、かわいそうだけど、この子はいまなら、保育器に入れられるけど、当時は、そんな

たらしい。

ろんなものを、すりつぶして飲ませたんだ。も十分に出ない。おかゆをすりつぶして飲ませたり、いそれに、食べ物もろくにない頃だったから、おっぱい

おかげで、丈夫に育った。おまえには、よっぽど生きた。近所の人たちも、入れ替わりで、手伝ってくれた。体を温めるといいと言われて、朝晩お湯に入れてやっ

る力というか、生命力があったんだ」

からだろう。不治の病という思い込みがあって、心に余裕がなかった不治の病という思い込みがあって、心に余裕がなかった。忘れていた。思い出せなかったのは、ガンは恐ろしい

母は、そう言っているような気がする。「おまえは、ちょっとやそっとで、死んだりはしない」

けど、いまは、この「あやふや」さが、ありがたかった。こころというものは、あやふやで定まりのないものだ

そう言えば、こんなこともあった。

れて、肺炎にかかってしまった。高い熱がな は、確か小学校一年生のときだった。風邪がこじ ん日も続い

そうだった。 て、喉の周りにも白いものがついて、息をするのも苦し いまのように自動車もないし、病院も遠い。できるの

でも、熱が下がらない。なん日も眠ったままだった。 は冷やすことだけ。頭、わきの下、股を冷やした。それ この時も、死ぬのではないかと心配したんだよ」

不思議, 長 い眠りから覚めたとき、 な夢の話をした。 信也は眠っていた時に見た

ンドコドンドコという、音に合わせて、降っていた。 「真っ暗闇の中、きらきらと輝く星のようなものが、 やがて、ドアが現れ、音に合わせてドアが回りだした。

F

いられる。

た女の人が現れた。顔も手も白いのだ。 そのうちに、真っ暗い闇の中から、まっ白い着物を着

い手で、おいでおいでをしている。 そして、回転する扉の間 から、 ゆっくりと指の長 い白

かない。 その人のそばに行こうと、必死にもがいても、 しばらくして、女の人が消えた。その後も、白い手だ 体が 動

> け 白い手も消えていった」 が真っ暗闇から、おいでおいでをしていた。 やがてドンドコドンドコという音が小さくなって止み、

信也の話が終わると、母が言った。

は、いなかったかもしれない。 「その白い女の人のところに行ってたら、 いまのおまえ

その時は気をつけなくてはな」 またその『白い女の人』が、出てくるかもしれないよ。 よく助かったもんだ。おまえが死にそうになった

る力が備わっているとしか思えない。まだまだ、 と言え、この二つのことからも、 生まれたときのことと言え、肺炎にかかった時のこと 信也には並外れた生き

11 のだから。 それに、まだ夢の中に 「白い女の人」も出てきていな

人で聞いた。 手術して十日後、 医師の説明があった。 陽子と娘の三

ーセント。検査の結果、リンパなどに転移していなかっ 「進行ガンであるが、『ステージII』で、生存率八十六パ

ガンは切り取ったので、抗がん剤やエックス線による

ということに」 治療は必要ありません。五年以内に再発しなければ完治

白くなった街並みも、入院前と違って見える。 しばらくぶりの外は、眩しかった。 空気も、

うれしかった。

生きて家に帰れる。

はなっただろう。 ガンが、胃の壁を突き通していたら、「ステージIII」に

陽子はこの時とばかり、ことばを強めた。

じゃない』と言っても、言うことをきかないんだから」 「『だから、言ったでしょう。はっきりしないのに悩むん 言った顔は笑っていた。

でも、信也は、考え、悩んだことを、無駄だったとは思 っていない。その分だけ、生や死について考えることが 悩んだことで、自分から追い込んでいたことはわかる。

できたのだから。 ガンの再発がなくても、老衰もあることだから、たと

え生命力が強かったとしても、死は訪れるだろう。 やがて、来る日のためにも、一日一日を、大事に、充

実したものにしなくては。

婦長が来た。

「いつ退院してもいいですよ」 許しが出ると、一日も早く家に帰りたかった。

それから、二日して退院した。

#### 文 芸 評 論

#### 入 選

# アリョン打令」と「ジニのパズル」 在日作家の作品を読む―

菱 井 亜 紀

は じ

しか 社会の実相に肉薄しうることもある。 向き合うもの、 え関心がないまでも)おぼろげにもしれる周知の事実だ。 チにさらされるなど酷い扱いをされていることは 時に陰に ず選挙権がない、 権利を持てず(たとえば税金を払っているの と同じように生活 っているか、 在 文学は歴史や社会研究ではなくあくまで個別の対象に 日 (朝 陽に差別されること、特に近年はヘイトスピー 彼らが日 鮮 と問われれば口ごもってしまうしかな • しかし同時に作中の個 韓 年金に ľ 国 本に住み日本語を話 ているにもかかわ の人々とその思いについ 加入できないなど) らず、 々の事例から現実 Ļ 私たち日本人 就職や結婚 にかかわら さまざまな て何 (たと 知

> 史の 本人」 とを願って。 もし」 の置か れた状況の今と、 に繋がる想像力をかきたてるものになるこ あ ŋ つ得たかり もし れ な 11 歴

「アリョン打令」

とになったのか。 そもそもなぜ朝鮮人である在日の人々 が日本に 住

とがあ こみで募集に応じたところ、きてみれ ながっている。 おまけに売春まで強要されたという話など多 を読んだことは た男性を追ってその家族が日本にやってきたという記録 それは日本が あ 朝鮮半島を植 るが、 わゆる強制 他にも、 連行 民 地 によって連れてこら 化 工場の仕事というふれ したことと密 ば飲み屋 R 聞 一の酌 接 たこ 0

うことで理解の助けとしたい。 態があると推測される。 実際には 聞き書きを基 もっとさまざまな個別 にフ 1 ク 個別 シ 0  $\exists$ 事情に の事情が 化し た作品 つ V が て あ り複雑 粗筋 聞 き書き な実

解を深 を読

8

み解 近

くため、

背景にあると思われる事柄について理

集めた資料を基に、 歴史的背景と、

拙いながら

題に

なった若い在日作家の作品

「ジニの

パ

ズル」

在 解

について想いをめぐらせたい。

それが「私たち在日日

置か

れ

てい

· る現

み作品をめぐる たいと考えた。

き書きした文章がある。 私 たちに身近な 函 館 に 在 日 0 女性 0 半 生 を 聞

クゲの花 一咲く故

たが に生 生 ま 模 れ が苦しく、数年後、 一六歳で結婚、 (キムシモ) さんは一九〇〇年平壌近く 夫は平壌の足袋工場で働い 職を求めて単身日本へ渡 0 農家 7 0 V

労働 朝鮮 の紡績、 での 総 労働 方日本の企業は 督 府 者募集を行った。 の意: 向 その他零細企業のそれだった。) で、 労働力不足を補うため、 日本商品 労働力とは、低賃金 が 流 れ込み手工業者 競って 重 が

週間 儀だった。 わ 続きをしたが 年に五歳と三歳の子どもを連れ玄界灘を渡った。旅費は、 れ 夫が 社力 か 函 館の 0 なく日本名を金木とした。 たが 両 親 飯場に落ち着いたことがわかって一九二六 が 日本に行くなら金では許可できない 工面 日本 語 してくれた。 が分からず 村の駐在所で渡航 おまけ 平壌から函館まで一 に子連 n と言 で 手

日本への渡航者 か ったため紡績 朝鮮 12 残され のうち有配偶者は当時 工場募集に応じたとい た妻が 夫  $\mathcal{O}$ ŧ ڵ その 行 . う例 ごくた 半数にす 80 あ 0 旅 ぎ

たという)

が

た。 いう。 ろう。死にたいという者、実際に投身自殺し て売られてきた女たちだった。 しさから言葉を交わし身の上話 性の商売女 何もしてやれず一緒に泣いた。 ー」「チョウセンあ 始まったが、 暮らしになれてきた頃、 とか夫と巡り会えて狭い 田舎育ちの娘たちを騙すのは訳のないことだった (街 近所の子どもたちに .娼)が居るのが分かった。 Ú ー」と馬鹿にされ情け 町中に な も聞 がら 函館から ŧ 1 かなりの数 「チョ た。 家 周旋 ウ ふで長屋! 故郷 た者も な 様に 屋 セ が 0 悲 来たと 騙 朝 ま 0 漂され ぬ た。 懐 カン カン 女 0

P ば 和 こうと頭がいっぱい なった夫は、 て 博打 も解放された喜びより、 かりではなく、 夫が長年の重労働から体を壊し働けなくなったた 一一年から艀荷役の仕事で男並 逃げ込むとい 博打、 日本人 だった。 賭け事に走ってしまった。 う人は 八には理 明 日 ょ < からどうやって食べてい 解できない心の みに働 兑 かけた。 いた。 これ 戦に 働 憂さを げ な は夫 め なく 0

とに 日 本の 以 なり彼女が日本に住むことにな Ŀ 植 が !民地政策の一環にあったことが伺える。 聞き書きの粗筋だが、 彼女の 0 た理 夫が日本 由 が E 来るこ 時 0

聞き書きを基に 0 事 情  $\mathcal{O}$ L もう一つの た小説作品「アリョン打令」(注2)に 例 ノを、 実在 の在 日 世 女性

 $\mathcal{O}$ 

れる 人称で始まる物語のはじめに、 主人公の来歴が語ら

を支配 の教員 朝鮮語 督府 朝鮮 の植 命令と同 もちろん法律もない。みんな総督の名でだされたの。 も違うんだよ。 の教育を禁止され学校の存続さえ危うくなった。 民地になり日本が朝鮮に設置した総督府の命令で朝 日二世の女性。 「アボジが生まれて十年たった一九一〇年、 主人公謙蓮 民地になってしまった。日本は総督府を置 っていうのは天皇直属の機関だから、つまり天皇 には議会とか、内閣なんて作らせなかった。 0 したのさ。 (の家柄の出だった。一九一〇年、朝鮮が日本の植 教育をまかりならんと言ってきたんだ。教え 。父は祖国朝鮮で代々由緒ある私塾(書堂) (キョムニョナ) うわ 軍 人が政治をするってこと。 総督府って、 け。 植民 地に は一九三二年生まれ 日本の国会とも、 なった翌年、学校では 日本は、 朝鮮は いて朝鮮 だか 内閣 日本 の在 ね、 7  $\mathcal{O}$ 総 b ع 語

> 況下、父は二〇歳 た言葉、それを教えたらいけないと言うんだよ。 父母は一九一七年、 の時、 同じ一七歳で結婚したがそんな状 妻と子を残し日本にいわば 出稼

ぎにやってきた。

割は ならなかったことになる) と、五〇〇万に近い (植民地時代には朝鮮の人口の一 満州 に生活 の糧を求めて流 人々がなくなく故郷を捨てなければ 出したといわれる。ざっ 割は日本に、あとの一

派

家で飼われていた犬が痩せさらばえて村の中をうろつく は荒れていったそうだよ。子どもの私には、 に行く人たちが続いていたさ。 で肉体労働をするか、 か、二束三文で大事な土地を奪われ のはかわいそうだったし怖かったね。」 った。村からもあちこちで明日は日本に、 総督府や警察、 軍隊に気に入られ 私たちの前にはそれしか道は 櫛の歯が抜けたように村 日本人の半分の る『親日 明後日は 離村した一 満

鮮 無理だと判断したんだろうね。」 T 三・一独立運動 圧 を加 全土 父が故郷を離れる決心をしたのにはその前年に起きた くはそれ えた。 運動でたくさんの朝鮮人が殺され、 に及 W を見て、 だ反日独立 (注3) も影響した。日本の統治下で朝 もう故る 一運動で日本側 郷 で教師をしていくことは 関はそれ 投獄され

してきたこの言葉、

生まれてからずっと使ってき

語 朝鮮語

でやれ

とい

うの

ź

あ

 $\lambda$ 

た、

考えられ あとの授業は

る?今

す

0

诗間

と漢文の時だけ。

が 五.  $\mathcal{O}$ 出 とき .稼ぎ先 ょ  $\mathcal{O}$ 1 日 よ 本 からたびたび里帰 家で日本に渡ることになる。 りし たが 彼 女

まで 昇給も 城に土地 0 日 め た 本 な が を買 勤 いと知って、会社を辞 朝鮮 Ø ていた製菓工場でまじめ 農業を始め 人であることからそれ め 同 胞 0 以 に働き係! 伝をも 上 一の出 世 長 め \$

後、

家族

は

結結

局

帰国することが

できな

カン

0

た。

家

米

0

取

中に、

託 カン

L

5

オ

モ

まう。

罪 年

ŧ

11 11 オ

思い

出もあった。

は戦後 越え けん気から学校の成績もよくいつも一番だった。 カュ なんかやって」と後ろ指をさすもの 代だった。 不要という雰囲気だった中、 ン工場を く学問さえ身に 日本に 7 いずれも教育をほどこし彼女も高等女学校を卒業 11 0 は ける」というの 土地改革で農業を続けられず、 近所で 住む じめた。 朝 は 鮮 つけておけ 0 父は教育熱心 「女なん 女の子が学校 が 口 I癖だっ ば、 かどうせ嫁 彼女を含む姉 苦しく で、 た。 ŧ へい V 周 彼女は ても何 くの たが父は 囲 にやるのに学 父はこんどは 妹 は は 女に教育 五 とか 一人と弟 難 生 来 「とに し 乗 V  $\mathcal{O}$ 負 ŋ 校 時 ï は パ

る 「アボジもオモニも、 子 て 憶 だけ は ったね。 たに な V カン けど、 は かわ 優等 担 私たちは学校ではそん 『勉強でも運動 りがな 生だからよろしく』 0 でもやは 先 生 が り『朝鮮 書 V たとえば た手 でも日本 なに 紙 人」とい とい 引 は 辛  $\dot{\mathcal{O}}$ 0 · う 越 子 い 、う風 内 L 思 に  $\mathcal{O}$ 負 容 1 た け 15 を

> オ 0 モニ 家で は 朝鮮 母)の辛い 日本 の子だけど』ってとこがふるってるだろ。 語 では 思 なく朝鮮 出 が 関係 語だったがそ してい た。 れ は

たが関 で家族 モニからそういわ のだった。 して村人 は日本人憲兵 父親 り 立 ニの父親 オモニにとって日本 東大震 0 一ても厳 目 は の前 米 だから家では たい 災 0 は (当時 供出 ľ が村に常 地 でカー 主だっ れた。 Š 放 [をごまかしたというい な 題 キ色 0 日  $\mathcal{O}$ たが てい 仕 本 日本 とは 駐 オモニには、 の 打 人 に 語 力 服 き、 5 を話 だった。 日本 殺害され 1 0 日本 憲兵に 干 キ色とピ 記しては 人 ば  $\dot{o}$ 日本に つで不 植 0 たと 銃 供 高 民 ス 殺 わ 出 利 地 さ け  $\vdash$ 作 ع 貸 n に 、た弟が な ñ だ う ル 0 称 な と結 そ な 0 い 7 0  $\mathcal{O}$ 11 7 - 88 -

てに、 る な 干 に らりに ニにとって 澱 V オモニにとっては 0 は 生 ように それ 跡 諦 がだっ Þ め を通 L く激 たのだろう。 は 固 抑 そん り越 まったも 制 な綺 そん V L 悲 痛 て抱い L 元みを伴 麗 な 0) み、 な言 い < それを人 た思い、 悔 1葉では · 0 L さ、 た ŧ ŧ 0 í 感 憤 ちりち 言 恨 b, 情 い 尽く とい 消  $\mathcal{O}$ 燃え えること ŋ 切 な غ Š せ な が 胸 盛 る 0 奥 巣 あ オ あ

る。のもとを離れた東京で彼女の壮絶な苦労がここから始まのもとを離れた東京で彼女の壮絶な苦労がここから始ま女は会ったこともない相手と結婚することになる。父母

島に ことが 思惑から夫が 産 11 義母と夫 と弟三人妹 仕打 の折 家 送り込ま ち は で は を受け 実家 きな 0 銭 入 長 を作 人 0 年の おりから募集の に帰 7 れてしまう。 VI  $\mathcal{O}$ 4 折 性 0 たり り合 分ら 確 あ ることに る と複 執 わ せて六 賭け V のため嫁である彼女も姑から冷 Ū が か 雑 つた。 麻 ちょうど同胞 な 悪くなる。 な 雀 あった義勇兵として朝鮮 った。 家庭だっ |で稼 夫も定 義 。その 父は そん た。 だ り、 間 職 が 配 南 給 なことか が な 地道 家 北 品 に 義父母 か は 0 別 に 0 横 義 6 れ た。 流 父 7 半  $\mathcal{O}$ 出 た Ð: <

戦うことに

な

った朝鮮戦争のころである。

W

使い

捨てされる運命だったんだ。」

事にも ち使用 戦 幼 彼 したら終生婚家に尽くせ、と父母からいわれていたため、 女は れ い寄ら 夫は三年たっても戻らず生死もわからぬまま。 就き、 5 人 子 婚 を連 0 家 れるなど異常 五. の 男と恋愛関 えた。 嫁と れ 身を粉に  $\mathcal{O}$ れて実家 「て同居・ 九 して家事の 五. でする。 係に 五. に な事態から して働くが義母 身を 年 になるが 寄せ、 その Œ 彼女にとって か 婚家をでることに 生活費を稼ぐための 年、 父の 父の反対 が自殺 長女を出 仕事を手伝 新 から息子 V) 産 一度嫁 義父に 時 になる。 ううう 代 朝 鮮 を 仕  $\mathcal{O}$ 

> き取 が 朝 鮮 長 男 へ の ŋ t た 三人生 が 帰 V 五歳 لح 玉 事 ま 業 ってきた。  $\mathcal{O}$ れ 時、 (注 貧 突然  $\frac{1}{4}$ l V を阻 な 元 元 夫 夫 が へから連 6 はそのころ盛 止 する t 幸 っため 絡 せ な が 韓 暮 あ 国  $\overline{\lambda}$ 5 ŋ だ 長男 政 L つ だ 府 た北 がを引 つ

送られたのだった。

送船 た。) てる、 家族 からは再入国を拒否され暮らしも立ちゆかず辛 7 韓国 V (日本か た。 0  $\mathcal{O}$ 航行 |の片隅 使わ 居る日 ら送られた義勇兵たち 言葉も十分でない上親類縁者もな 2を目前 れ で忘れ 本に る』ことになる 帰ることが 5 れた存 再び 韓  $\tilde{O}$ 国 在 できず多 だけ は、 政 だった義勇兵 府 戦争 に れ 注目され 数 が が それ 韓 終 い たち 中 玉 わ 酸 は 12  $\neg$ 0 『役に立 は 残 た 日  $\hat{z}$ ょ 本 後 せ 北 8 側 れ

子 帰 t 間 希 VI 望も って行 たことか 元夫 が しれなか 不 は、 あ 5 残って家族が離れ って夫と娘 な たが、 つた。 t ら自 戦争での 0 分 たなる。 彼女の  $\hat{O}$ L 派たちは! カン 血を分け 負傷で子どもを残 ï 態度 れ 朝 ば そのこ 北 鮮学校に な 朝 か た 息子に れになった。 鮮 5 とが 彼 へ行 通 は息子を きっ でせな 愛着 0 7 カン が V い あ た け わ 体 ごきら な 娘 で に V 夫と た  $\mathcal{O}$ な 8 0 強 0 VI て カン 7

夫と生き別  $\mathcal{O}$ 家 族 は ħ 1 0 になり、 ŧ 引き裂 やっと六人の カン れ てい た。 家族とな は ľ 8 0

り合わり 朝鮮 つけ 渡 5 ばら ってきて、 着 ć 人  $\overline{\langle}$ 11 0 せ ば カン いかわからない・・・。」 置かれた状況の酷さに私はどこにこの らにされ と思えば カン そして戦争、さらに北 りい 亡霊 てしまった。 えるだろうか。故郷を捨てて日 のような前 これをただ、 夫が への帰還 現 ĥ て、 そうい • 思い 家族 、 う 巡 をぶ 在 本 は 日 に 再

入れ とし 影響から息子が職を失い体も壊した。 ぎても なかったため、 ち て働 に暮らす家族 前 いた。 0 事を続け がん ば 制度が るが りでヘルパ への送金の 無年金で以前 変わって資格が必 日本が北 一の資格 ため、 朝鮮 のように送金はできな 彼女 に経済 在 を 旨は国 取 は 要になったとき り八 病 封 院  $\bigcirc$ 鎖 民年金に  $\mathcal{O}$ をし 歳 付 をす 添 た 婦

らさざるを得なか ては婚 日 て巨大な歴史  $\mathcal{O}$ 女 語 本人によって家族を殺されながら夫に従い 0 0 家に くら 最 げ 7 後に主人公の述懐がある。 L L に生き歴史に翻弄され つくし夫に絶対 しまった。 は嘆息  $\hat{o}$ 歯 った母の嘆きと、その娘の 車 が ば 戦争も差別 私のような小さな人間 カン 'n, 服 小さい 従。 ŧ た母娘の 封建と戦争とが もうたくさん 頃 おもえば か 5 波乱 物 X 語 日本で暮 の人 别 私 たち に富 さ 八生を れ W そ 嫁 朝

> カン 流 日 ر ک この 本 れ ていった経過が具体的な事例で示される Ò 植 作 そのために 民 地 となって は 目 本本土や満 九 00 1 か に人々 年 代 荊 0 が 朝 へ仕事を求 鮮 暮らしにくくなった 半島  $\mathcal{O}$ めて人々 価 値 観

例は、 や息子) に、異国で思うに任せぬ鬱屈 徳の影響があると思われる。 情もあった。 婚 当時 ΰ 当時 の価 夫が不在となっても の憂さばらし  $\mathcal{O}$ 値観については、 F 本 酒や博打におぼ  $\dot{\mathcal{O}}$ 価 の受け皿 値 観とも近 働き手として婚家に 特に女性が親の意 在日の女性たちにはこ をかかえた男たち れ、 に といが、 ならざるを得 中には暴力が日常 V ずれ なか ŧ 居 向 夫や 一つで 儒 の 0 け 化 た 他 舅

結

賞候補作品 それにつなが 点から一 あ げ 以 上 上 6 れ た 世と二世の 日本で生きた一世の聞き書きと、在日二世の になったことで注目され多くの書評に 「ジニのパズル」につい るも 0 母娘の として三世の少女の 例を小説作品で見てきたが て考えてみたい。 あ る物 語 もとり ĴΪ 視

0 ズ ル

主人公ジニは在日三世の少 女。 日 本の 小学校に通学し

ま

でも、

日本の値

民地支配がなければどうだっただろうか

事

L

てしまった例もあ

Ž

すべてがそうだとはいえな

朝鮮 にでもあるごくふつうの学校生活だった。 ナという親友もでき、 ジニの態度から上級 が 配慮す をよく · 学 か 、知らな 中にはジニに反感をも b 朝 鮮 生に目をつけられ いジニの 人学校に通うことになる。 仄かな初恋もあったり ため 日 う同 本 た 語 りし 級生もいたり、 を使うよう学 して、どこ ながら、 そこでは

=

校

存在 原因を北朝 校するジニは黒服の男たちに罵倒され暴力をふるわれる。 この恐怖 朝鮮 がテポドンを発射した翌日、 鮮の支配者たちの肖像画に求めて幼い「革命」 !すら感じる理不尽な体験をしたジニは、 チマチ 彐 ゴ ーリで その 登

寄せ合う様が描かれる場面だ。

作

中、

母方

の祖

父(ハラボジ)

と彼の亡き後

の家

族

カン

を試みる。

れる。 選んだジニはここでは「暴れること」を選択するのだ。 ように暴れ回るか。」日本の学校で「大人になること」 学した目から、 「この日本で在日韓国人として生まれ日本の学校に 誰よりも先に大人になるかそれとも他の子ども 私たちは必然的にある二つの選択を迫 を 5  $\mathcal{O}$ 入

うに ν, のジニ 0 ワ 所がなくオ の運命を変えた。 飾られた肖像画を壊すという行為はしかしそ 0 カト IJ ツ ハイオ州の クの学校へ。 その結果、ジニは居場所を失 田舎の学校へ流されるよ しかしここでもジニ

 $\mathcal{O}$ 

の冒 頭 におかれるオ レ ゴ ンの学校での場面で、 授

> れる。 をもちジニは紙 という暗示だ。 無視するが、 業中突然パニックを起こし、 マイノリティであるという同質性を互い 同情を覚える。 生徒も教師 特殊な障害ゆえに無視される少年にジニは 学校で唯一の友である 彼女も同じように無視され 書かれた言葉で意志を通じ合わ もまるで彼がそこに居な 大声で泣き叫 マギ に感じとり身を ] る立 いか 3 は聴覚障害 少 一場な 0 年 いように せる。 が 0 描

5 なることが語られる。 世である彼だけが北朝鮮に帰国したということだ。 たとおぼしき北朝鮮での暮しが語られる。  $\mathcal{O}$ ョン打令」でもこの帰国運動の際に家族が離ればなれに 11 れ の手紙 状況がうまれていたのだろう。 .愛する娘に会うことも孫 ハラボジの手紙は痛々しさに満ちている。 ハラボジの手紙から伺えるのはいわゆる帰 が挿入され、帰国運動 当時はさまざまな事情で家族 (ジニ)を抱くこともできな 0 折りに娘と別れ 時代に 国運 · 翻 て渡 「アリ 弄さ で 0

日 た。できすぎた話のようだが前述の作品 本に住むに当たって彼がなぜ奈良をえらんだか、 奈良に暮らすジニの 0 ウリナラ 親族 (祖国) の男性の言葉も印象に と語 感が ?似て ア ij た カン ン打令」 らだっ 残った。 それ

暮らすことの心細さが伝わってくる気がしたのだ。にもこんな記述があって、いずれも、言葉の違う異国で

うだ。今では笑い話だけどね。」「アリョン打令」。) いわれ異国での先行きを思って暗い気持ちになったそ「サンノミヤ、サンノミヤ」(朝鮮語でドン百姓) と何度「サンノミヤ、サンノミヤ」(朝鮮語でドン百姓) と何度とき釜山から渡った下関の駅の構内放送でしものせきがく (「オモニが子どもを連れてはじめて日本にやってきた

そのことが伺える。り返す青春小説ともいえる。いくつかの書評のなかにも自意識の強い少女が、周囲になじめずに反抗と孤立を繰っての作品はある側面からみると、思春期にありがちな

よりな気持ちだったかを。」中島京子(日本経済新聞書評)ような気持ちだったかを。」中島京子(日本経済新聞書評)が孤独でとげとげしく世界中を敵にまわして闘っている「ふと思い出す。一三、一四歳だった頃、いかに自分

砕けていくジニ。」青山七恵(群像新人文学賞・選評)よみ取った思想だけを武器にして体制の欺瞞の前に無惨に「未熟な肉体を内外の敵意にさらし、自らの素手で掴

た 傷 が、 のが本作だ。」高樹のぶ子 つき破れ 「若く激 、自己のアイデンティティを求めてキラキラと暴れ る、 しい魂 孤独で過剰で前 矛盾に対し (芥川賞選評)より。 て真 のめ りの精神 つさらな 疑問 : の 旅 を持

泳の「凍える口」だ。 二世である二人の作家の作品、李良枝の「由熙」と金鶴 青春の屈折と孤独を描いた作品で思い出すのが、在日

象に残ったのは「凍える口」だ。ティを模索して苦悩する屈折した心理を描くが、私の印の第百回芥川賞受賞作品。いずれも、己のアイデンティしながらもなじめず挫折して日本に帰国するという内容しながらもなじめず挫折して日本に帰国するという内容「由熙」は、在日二世の女性が母国韓国の大学に留学

は影のように作品に張り付いている。とって切実であるということなのだが、しかしその出自とって切実であるということなのだが、しかしその出自影響を及ぼさない。それだけ吃音ということが主人公にの作品には自らの出自が朝鮮人であることは直接的には青年期特有の強い自意識とそれ故の苦悩が描かれる。こ金鶴泳の自伝的小説「凍える口」は、吃音の青年の、金鶴泳のように作品に張り付いている。

そらく世界中でいちばん朝鮮人を苛める日本に生まれてなら朝鮮で生まれりゃよかったのに、選りに選って、お(略)生まれてみたら朝鮮人だった。朝鮮人に生まれるこんなせりふがある。(俺はどうして朝鮮人なんだろう。 芥川賞候補作となった作品「あるこーるらんぷ」には

しまった。

である。 しかし在日を巡る状況は変わったといえるだろうか。 この作品 人権侵害だと問題 一九七〇年代とは社会状況が大きく変わってい が書かれ たのは、 になった指紋押捺は 今から四○年も以前 廃止され のこと

る場面は緊迫感に満 ジ 二 が 黒 11 ス ーツ姿の男たちに囲まれ暴力をふるわ ちている。 れ

ちをにらみつけるが通りかかった日本の少女たちには背 象なのだった。 広姿の男たちよりチマチョゴリのジニの方が気味悪い のだよな」といってジニを殴 男たちは警察だと名の り「朝鮮人ってのは汚い生きも り倒す。ジニは必死で男た 対

乗ったス た表情をした。 ーター い笑みを浮かべて親切に道を空けた。 犯罪者でも見るかのような目で私を見ていたが、 少し離れた所まで歩くとほっとしたように、びっく から降りてきた。私たちを見るなり、少し戸惑っ 服を着た同い年くらいの女の子が二人、エスカ ーツの男たちは何事もない様子で、どうぞ、 そのまま楽しそうな なが れ、 引き返そうとしたところで、警察だと名 ら言 何 かあったのかな、こわあい、と少し 5 てい るのが聞こえた。 明かりの中へと去ってい 女の子たちは 振り向 . ح < 0 軽 レ

> られ殺されるかもしれないという恐怖を味わう。 えたようにすぐ視線を逸らした。彼女たちが、 だのはどうやら男たちではなく、私のことらしかった。 そのあとジニは男たちに物陰に連れ込まれ、 怖いと呼 首を絞め

W

「男の手は下半身へと伸び陰部に触れた。私は 驚いてう

ばした。 ボールでも投げるように私の頭を押さえて地面 のまま動けず、私は声を殺して泣きじゃくった。 っと声をあげた。―その瞬間だった。男は突然手を離し、 私は勢いよく床へ転がった。その転がった姿勢 へ突き飛

ち去るのだ。 クショー。汚いもんに触っちまったな」と舌打ちし 男は何事もなかったかのようにスーツの襟を整え 「チ

ている。 この場で 面の衝撃性について書評はこんな風にふれられ

より という嘆きは、 く『勝てない。 く荘厳な響きで発せられる」 辻原登 (群像 「ジニが背広姿の男たちに暴行を受け泣きなが こんな腐った奴に、私は勝 私が読んできた幾多の小説の中で最も強 人文学賞選 てないんだ』 5 ついぶや

や様 ヘイトスピーチを向 読んでいるだけで不安と怒りに駆られるこのく !々なマイノリティが共有する体験だろう。 けられる る在 日 0 人々 0 みならず、 無力な者 、だり は

が 日 新聞 殺 書  $\mathcal{O}$ 恐 評 怖 ょ に震 え る Ō が : 今 の 日 本 社会だ」 星 野智 幸 朝

とい 込ん うな てるのだ。 は 理 う結論を 恐 不尽な仕打ちを受けるの 怖 の体 年の という脅迫状が届く。 呼験だっ、 ひきだしその原因を打 少女にとって存在そ たろう。 学校に は あ それらの体験  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 肖像 破 は t す  $\mathcal{O}$ 画 水道 を脅 Ś が ·原因 カン カン 水 5 され 命 な 毒 ジニ を企 のだ を仕 るよ

し本 日 0 本 保証さえな 国 カン ľ 北 朝 ジニ 鮮 でそれ 1 は だろうことは知っている。 闍 を実行する 雲に それ す ħ を実行する ば 間 違 11 なく罰 Ō では L かしここは けら な い れ t 命

春 なされることになる。 小 自 説 5 であるとともにそれ 0 お カン れ た位 置 に 対 を超えた自覚的 する自覚 がここに な 間 は 題提 あ る。 起が 青

通う弱 えてい 想像すべきだ。 に移さなけ 北 朝 ないことは そうな 鮮 であ のミサイル発射で今後さらなる批 'n ば る ñ なら 世界中 我 ば Þ 一番危険にさらされ 0 な 生徒だ。「そうなる前 た  $\dot{\mathcal{O}}$ 人間に見えて 何 悩むのでなく考えるべ カ を る て我 Ō に にまさに、 は 判 朝 が Þ ふええ 生徒 鮮学 きだ。 · 今 るだ 校に に 動 4

声明文を廊

下に

、撒き、

教室に掲げら

ñ

7

V

る金

場

面

に

っいい

前

述

0

星野智幸は

この

行

動

は

過

親子の肖像画を窓から放り投げる。

とい 0 れ に 終 治期から第二次大戦の 真影を想起させる。 は  $\mathcal{O}$ 戦時 責任で厳重 公式 た天皇、 なると写真を救うため 群  $\overline{\phantom{a}}$ 御 う話が 像 真影』 までの用語 の肖 新 賞 像写真。 皇后 残 とい つてい 選 に管理、 の写真 評 つ  $\mathcal{O}$ (大辞泉)」とある。 宮内省 中 ちなみに 7 る」と指 儀式に使用され 敗戦まで宮内省から学校に貸与さ 天 で 炎の中 (スー 皇 多和 から各学校に貸  $\mathcal{O}$ パー 御 摘 写  $\mathbb{H}$ [葉子が に 真 真影を辞書 するように、 大辞 へを崇 飛び込ん た。 日 拝 だ校長、 昭 与され、 で引 本 「天皇、 肖像 学 でも 和二 くと 校 ŧ) 画 が 校長 年 皇后 は 火 11 明  $\mathcal{O}$ 御

を想像 最 失で燃やしてしまったことで自殺に追 カン 0 価 11 また 0 たという事実も 敬 値 to 間 礼 L 北朝鮮 L 0 す 新たな 転 た生徒た れ か生徒たちの ば、 換  $\mathcal{O}$ が で肖像画 七〇 装 あ ŋ たちと、 また想像 11 )数年前: をこら 教科 前 を投げ捨てたらどうなるか、 その か L ら消 書 ま できるはずだ。 て出 E 御 での日本で、 えた。 は 真 一番を 墨 影を学校 が 待 ※塗ら い込ま しか つてい 火災と れ 戦 御真影の 後に 御 れ それ た校 な 真 影 な はい それ ŧ 長 j 前 0 て が 過 で

するという点で正しさも含んでいる。タブーを恐れず、っていると同時に共同体で目をそらしてきた問題を直視

う。
日新聞書評より)といい、野崎歓は選評でこのように言日新聞書評より)といい、野崎歓は選評でこのように言その矛盾した両義性を表せたのは、文学だからこそ。」(朝

革命 逆のさまを描 少少 (群像新人文学賞選評) 自ら を試 女は あまりに悲痛ななまなましさを湛えている。」野崎歓 Ō 4 折 反 Ź, しもテ 公乱の く言葉 学校: 幼稚 ポ は 内 F ]外での さや無意味をよく見きわめ シ より 騒動 ヒステリックでも独 残忍な迫害や孤 のただなか でた 善的 ₩. つ 無援 た いながら でも 人  $\mathcal{O}$ な  $\mathcal{O}$ 反

れる。 彼女は問題児として少年院(とおぼしき場所)に隔離さしかし彼女の意図に反して結果は無惨な事態を招く。

それと意図 ジニに は ī なかったにもかか 自 分 が 傷 0 V たことより、 わらず結果として傷 大 事 な 人たち つけ を

1 負 傷 てしまっ べった人 けてきた場合、 ついた人だと。 つか誰 なのだと。 たことへの深い哀しみがある。 数え切 カン が言 心から優しい人間 それは果たして優し でも、 ってい ħ ない ほどの・ た。 と私は考える。 よく笑う人 人たちを自分以 は、本当に いといえるのだろ たくさん傷 間 は 深 た にくさん E い に傷 傷を 0

ニの独白は哀切きわまるものだ。「ジニはハラボジの天国の祖父(ハラボジ)へ宛てた手紙として語られか」

ジニの り不 切 は そうです。そんなの望 た小さな家族だけです。ご飯 向 です。天国でこれを読 全に通えるようになったら良いと私はそう願ってい 7  $\mathcal{O}$ ラボジ、 何をしてしまったの。 旦那になったジニのアッパ。二人に残った な人を傷つけました。 いくのが かう相手は一体何処だったの。誰だったの。」 登校になりました。 私はどうしたらいい。 分かります。 んでいるなら教えてください。私 んでなか いまは誰とも話を 家族 私はどうしたらい ラボジの の笑顔を私は も食べず面会に来る った。 ニナはショ 娘 チマチョ  $\mathcal{O}$ エ 奪 IJ したがら にのは、 ツ V まし 私が ゴ クの 度痩せ リで・ エリン ない あま 立 た た。 安

ーとの会話 イ 人々が集う場所が安息の場所だった。 ォ ジニ ワイでもジニに の学校でも退学を示唆されている。 は ハ ワ (筆談) によれば「何もしなかったから」だ。 1  $\dot{o}$ カト は - リッ 居場 クの学校でも退学とな 所が なく唯 その理由はマギ ŋ ス

何 ス かか テファニ そんなジニにオハイオでのホー を感じ Ī 取 り過去の出来事を打ち は 理 解 を示す。 ジニ は ムスティ 明ける。 彼女に 自 先 一彼女と話 分と 0 お 同 ば さん 質  $\mathcal{O}$ 

ていると不思議と心が落ち着く」のだ。

はやっと安息の場をみつける。れましょう」とステファニーはいう。物語の終盤にジニかない。もしも空が落ちてきたらそのときは空をうけいがはい。もしも空が落ちてきない。だから受け入れるし「過去を変えることはできない。だから受け入れるし

終わりに

の苦難 発想ではない。「砧を打つ女」(少年の目で見た在日の母 立場だったら、 ħ た祖先 日 0 0 人々は 生涯を描く)で在日で初めて芥川賞を受賞 を持つ場合が多い。 と考えることは決して的はずれな突飛な !侵略戦争と植民地支配にやむなく故 もし私たち日本人がその た を

樺太に置き去りにされた朝鮮人は多いという。口李恢成は樺太からの引き揚げ者だ。

の中に、 れになっていたかもしれない。それどころか日本語を禁 や樺太からの引き揚げ者の手記を読 ししも戦 しも帰国 日本名すら名乗れなくなっていたかもし 半島と同じように 考えることで、 争が長引き、 がかなわ 「アリョン打令」のオモニや、 ソ連軍が北海道まで侵攻していた ず取り残され 分断され 私たち道民 た民族 は むたび考えてしまう。 た人々が 北 と南 0 哀 ,居る。 ジニのハラ に離 L ひみや、 れない 日本 れ ば 満 0 な 州 人

> う。 ジ . の 思 い ほ W 0 少し 近 ゔ け るか ŧ L れ な と思

なことを想像することができた。「ジニのパズル」とその書評、選評を読む中でさまざまさまざまな解釈を許容し想像力をかき立ててくれるもの。たかったが不十分なものになった。しかし優れた文章は作品を読み解くために、その歴史的背景をたどってみ

裂かれながら生きるしかない。」高橋源 ジニ個人の問題ではなく、 引き裂かれる。 群像新人文学賞選評で高橋源一郎は言ってい 「主人公ジニは、日本語と朝鮮語の間で北と南の 引き裂かれ わたしたちもまた何 ながら生きる。しか 郎 (群像新人文 る。 んそれ かに 引き 間 は

あるわたしたちもまた同じ旅人なのだ。う。しかしそれはひとりジニだけの旅ではない。読者で主人公ジニのアイデンティティを求める旅は続くだろ

学賞選

(注1)「道南女性史研究・第六号」(一九八八年) より

ン」は「おぼろげな、懐かしい」という意味の朝鮮語。(注2)第五回「賞・地に舟をこげ」受賞作品。「アリョ

ここでは 「自らの来し方を労い、 いたわる」というほ たと思わ

れる。

証言の意。 の意味で使用されている。「打令(タリョン)」は語

し日本側 はたちまち朝鮮全土に及び同年末まで続いた。これに んで決起したため万歳運動とも呼ば おける朝 注 ○人を検挙したとい <u>3</u> 一九 官憲が 鮮 の全民族的な反日独立運動。「独立万歳」 発砲。 九年三月一日から始まった日本統 約五 われる。 万二〇〇〇人を殺傷し四 れ る。 独立運動 治 を叫  $\mathcal{O}$ 下 波

でに八 が結 十字社と北朝 年 注 五 ば 4 万八〇〇〇人が北朝鮮に帰還。 れ から一 同 一九 年一二月から六七年一一月に打ち切られ 五 鮮 九 ○月に再開され  $\mathcal{O}$ 年、 朝 赤 在 Ŧ 日 字 朝 社 鮮 間 人の 000 で 帰還に 北 残余者の )人余り 朝 鮮 関 帰 して目 帰還 が 還 帰 協 るま が 玉 定 赤

うことになり、娘に宛てた第二の手紙は 年後と推定される。 するため日本にやってきた ル」のハラボジの最初 \* ていることから) ジニが 「アリョ ン打令」で主人公の元夫がこの (作中、 の手紙は一九七一年の帰還 一九九 生まれ、 のが一九五九年。 たのが一 八年に中学入学と記さ そのころ書か 九 。「ジニ 八 運 五. 動 年とい かの を <u>ら</u>三 阻 パ ズ

#### 文 芸 評 論

伝聞

#### 入 選

# 異なる場所(トポス)―宮本百合子と林芙美子―

広

瀬 龍

太

序にかえて

く異質の言葉だった。 装置も音響も んだ二人の人生の舞台には常に異なる空気が流れていた。 百合子と芙美子は早逝した人気作家だ。その波乱 観客層も違う。 照明も異なった。 同じテーマの脚本でも科白はまった 振り付け師も別人だっ に富

から探る試みである。 小論は異なる二つの舞台の実像をいくつかのアングル

## 二大列伝

芙美子は四十七歳 昭 百合子と四歳年少の芙美子は、 和二十六年に亡くなった。百合子は享年五十一 期せずして戦後まもな 歳、

記』(昭和五年・芙美子二十七歳)がその象徴だ。 二人は陳腐な表現だが彗星のごとく文壇に登場した。 しき人々の群』(大正五年・百合子十七歳)と『放浪

> た。 た。 読まれた。 戦後の焼け野原のなかで二本のペンはふたたび燃えだし の解放に酔いしれ、活字に飢えていた人びとにむさぼ 験はまったく異なるが)のもとで、筆の勢いは衰えたが、 因であるに違いない。 日 持病にくわえて、 百合子の『播州平野』や芙美子の『浮雲』は、 中 戦争・太平洋戦争中、 しかし、二人はその人気絶頂のさ中に他界し 時代の重圧や過労が死期を早めた 苦渋に満ちた体験 (その 戦後 'n 体

過労に過労を重ねた。 物凄く小説をかいた。人間わざとは思われないほど」と 回 った。一方、芙美子は同性作家に仕事を渡さな 想している。 度重なる検挙と投獄は百合子の肉体を死の淵に追い 平林たい子は「彼女はある時期に いために Þ

と並んで昭和の文学史上に今なお燦然と輝いている。 志半ばにして突如世を去った二人の業績は、 文豪たち

П 調で次のように述べたという。 芙美子の 葬儀 成に参列 した広津和郎 は、 しみじみとした

文壇における空前絶後の壮観だったなあ」が残るのみか。しかしながらこの三人が並び立った姿は、「宮本百合子、林芙美子が死んで、あとは平林たい子

形明子 合子は、 平成 すごい時代だった、 女流文学を盛 広津と 2 4 知性的 を述べ 並 『華やかな孤独・作家 んで歩いていた文芸評論家の青野季吉は、 り上げ、 、たあ 芙美子は情熱的、 と後世が評価するさ」と結んだ。 と、「それぞれ個性の 文壇に気を吐い たい子は意志的と、 林芙美子』 ていたんだから 翼を伸 藤原書店 (尾 て、 ね。 巧 百

測は適中したと言えよう。 「女流作家」という言葉は死語となったが、青野の予

がら六十七歳で生を閉じた平林が 芙美子』 (新潮 に伝えた最大の貢献者は平林たい子である。 (文藝春秋社)を著した。この二大評伝は病魔と闘 ところで、知性的、 つながりをもっていたから、 **芙美子より二歳若い** 平林は 社)、 彼女を措いてほかにいない。 三年後に遺作となった『宮本百合子』 情熱的 V 時 平林は、 から百合子とも、 な二人の作 二人の伝記を書くに 「意志」 昭和四十四年に :家の 0) 力で書 功績 芙美子とも 百合子より を いな 後 「林 た 世

平林は戦後共産党や民主主義的文化団体への不信をつ

ŋ

され、 人 態となって釈放されることもあった。 盟に参加 目を集めた。 0 と評価される時 6 せ たが、 半年以上の留置所生活で健康を損ね、 Ĺ 「文芸戦 その後、 若 い時代には 期 があ 「線」に 昭和十二年の人民戦線事件で検 った。 プロ 『施療室 昭 レタリア文学の有望 和二 に 年に て』を発表 労農芸 膜 術 炎で重 て注 家連

に見えるが、内面的にはどうであったろうか。 平林の経歴は一見して百合子のそれと重複しているか

平林が百合子を見る目には、

敬愛と批判の

能が

複

手」であり、「熱い関心を注ぐ存在、文学上の 0 百合子』 橋 交差している。「讃美を捧げる作家、 邦枝 手を緩めることはなかった。 『実感的評伝の傑作』新潮文庫『林芙美子・ の解説) であったが、 方で、 一目も二目も 先輩作家 強敵」 置 宮本 批 く相

嬢様 夫 な して百合子の いかった。 の宮本顕  $\mathcal{O}$ 百合子は恵まれた育ちや学歴、 作家 "伸子" を「 の烙印 治 iの 百 「甘さ」と「お上品さ」を指摘 合子擁護にも批判の 典型的なブルジョア文学」と断定 を押されることが 留学経験 あ 手を緩めることは るが いなどか する。 平 林 Ë b 代表

込むべきではなかったと思う。 平林は『宮本百合子』の末尾に次のように 私は 彼 女は、 プ 口 レ タリア 彼女が、 作家 0 現実 中に 書い 自 の当為か 7 5

ら解: が放され どんな 素 晴らしい作家であったろう。 由 の雲に泛び、 水に潜って人生を 歌

0

若

られないんです」 いる・・・「あ 年におこ ろう。しかしそれにもかかわらず、百合子の亡くな に長いあい 遺言とも読み取れそうなことばは、 なわれた野上弥生子との対談で、平 だ漂い続けていた批判をこめた (T) 方  $\tilde{o}$ すぐれた個性や才能は賛美せず 平 願 -林は述 望 林 一であ の心 った ベ  $\mathcal{O}$ て 底

を死とせりあうようにして書き上げた」のである。 をはさんで、 本百合子』は昭 の死後も、 六月に刊行された。 和 平林 四十 の尊敬の念は生き続けてい 七 年一月に脱稿、 平林 は「年来のテー 二月 0 平林 た。 0  $\neg$ 死 宮 7

いたり と知り合いになり、 彷 つ 11 アナ 平 徨と貧窮をともに -林と芙美子との関係は、二人が無名 1 丰 宿 ス が  $\vdash$  $\mathcal{O}$ 本郷 カフ . 詩 人たちの集まりで、二十一 の平 エー した時 以後二人で詩や童話 林 の女給をしたりして糊口を の下 代」にまでさか 宿 に転 が ŋ  $\mathcal{O}$ 時 込 0 代 売り込みに ぼる。 歳 0 むことも 「青春 派の 芙美 ĭ 平 林 歩 子 あ  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 

てい は彼女の晩年をかたるのに適任者ではない。 は 子 を次の ようなことばで書きは が、 8

> .先ずお母さんのことから語りはじめたい 決定的な影響を与えた彼女の原型である。 からもきい か V いえない 11 ときのことは、 まま で かたい あま その ŋ 語 結 割 によ お母さん び 6 つつきを れ なか く知 つてい こそ、 目 0 たお , . の あ めたりに 科母さん . る方 芙美子さん であろう。 との 私 見たし、 は 0 は 生 蹟 涯 彼 8

にどん 世わたり、 平林はこう語った直 している。 なに影響されたか、 愛欲のすべてに仔獣が親獣から教わるよう 一後に、 手にとるようにわかる」 芙美子の 母の 丰 ・クさん カコ

5

衍

に

女 L

きあ 書け 平林は仔 たのである。 いをした時 獣と親獣の双方に自分の 期 が あ 0 たので、 すこぶる面 肉親以上 一の濃密 白 な 0

+ 丰 歳 て書く必要もなかろう。 張 ク夫妻と芙美子 があ クは七歳の芙美子を連れて家をでる。 年下 歳も年少の男と結ば さて、 るにせよ、『放浪記』 の夫 芙美子は母キクの第四子であ (芙美子の の放 浪 実 · 行 れ、 父 でお 商 彼が芙美子の 0 が芸者を家に 旅に なじみであるから、 つい こるが、 養 そして今度は二 て は . 入れ 父となる。 丰 ク 脚色や誇 た た 0 匹

芙美子は四 丰 クは方々で男と関係をも 人兄弟だが 4 な 父親 ち 子を産み捨 が ,違う 私 児 てている で 0

かもしれない た末子の芙美子にだけは 印 林芙美子」所収 が強 い。し 」という。 か い幼児 河出 (桐野夏生 書房新社平成16 初めて「 の頃から行商 親子の情愛に 『放浪親子』文藝別 の苦楽をともに 年 .目覚めた 冊

なければならないことがあった。 雑な家庭事情から小さな芙美子を門司から鹿児島へ送ら つけて一人旅をさせた。平林は「キクさんらしい放れわ 芙美子も驚くほど早くから母の情愛に応えていた。 キクは芙美子に荷札を 複

ざ」と書き、次のように書いている。

の位の苦労は早くから覚悟していたにちがいない」 を見ている荷札姿が目に泛ぶ。お母さんのためなら、 かを肩に、ふろしき包みをもってひたすらな面持で窓外 母親思いは一生続いた。無名時代にも一円、二円と仕 「親思いの小さな芙美子さんが、万事心得て、鞄 か そ 何

送りをした。その金は 京ライフ社昭和 31 血の一滴」だった。(板垣直子『林芙美子』 年 実に貴い、芙美子のそれこそ肉

れることは決してなかった。 をかうことの多かった芙美子ではあるが えばパリからスイス製の肩掛けを)。友人や同僚から顰蹙 倉などを見物させ、旅さきからは贈り物を送っ 外国旅行 0 際にも出発に先立って母に京 母親孝行を忘 てい 奈 良 例

> る。 も言及しなければならない。平林は次のように述べてい 一方、「仔獣が親獣から」受けついだ「愛欲」につい  $\dot{\tau}$

L

は 島清恋愛文学賞等を受賞した桐野夏生の 道心堅固な手塚氏 また彼女には旅の一種であった。 りに言ったことがあるが、 ル』(新潮社 の『林芙美子 7 っていることは二 11 にした作品 安心して家庭を離れられる保 たのである。『私は一か月に一度恋をする』と冗談交じ 芙美子の死から半世紀たった今も、 「彼女は旅か恋愛かを、一緒にか 平成24年)などである。 は出版されている。 巴里の恋』(中央公論社 つのものに共通していたから、 (注 芙美子の夫の手塚緑敏氏) 考えようによっては、 証 たとえば、今川英子編 があったというものだ 家にかえってくれ 別々に、 彼女の恋愛をテー 小説『ナニカア 平 成 かたえずして 13 恋愛も が待 ば

### お弔

芙美子は天国でも恋をしているかも。

二人の 年) 前 逝去した。 ・業績のみならず、 述したように、百合子と芙美子は同 葬儀 に目を 本章では奇異に感じるむきもあろうが、 むけてみたい。 ときに生前のかくれた一面が、 形い の儀式 年 (昭和二 は、

すがたを見せることがあるからである。

こな う』「宮本百合子全集」第二十巻 弔辞を捧げたと伝えられる。 が日本文芸家協会を代表して「この年代に於ける最も 神を持し、 れ 百 上弥 Ò 誠実にして清潔なる作家宮本百合子」に 告 生 別 子 式 や佐 は 一月二十 多稲子らが 。(沢地 月 報 20 久恵 匹 日 に林 · 参列 『戦後 所収 町 Ö 0 自宅 広津 出発を思 で 和 高 お 郎

百合子の青春にとって決して忘れることのできな

1

女

が、 ど前 1 浅芳子の青春』(文藝春秋社 間 らである。それ以来、ほぼ絶交状態が続いていた。 友人代表として弔辞を読むに相応しい友人の筈であ 性がいる。 の つまんで記すと次のようになる。 事情は に、 葬儀に出席しなかった。それと言うの 「誠実に ロシア文学の翻訳で有名な湯浅芳子であ .沢部仁美の『百合子、ダスヴィダーニャ して清潔な」百合子に突然裏切られ 平成2年) に詳 も、二十年ほ ï この たか った る。 カン

に、 に「文通を重ね」「熱烈に愛しあい」やがて共同生活 百合子は 野上 弥 間 最初 大きな (生子の家で湯浅にめぐり会った。二人は 緒にソヴィエトやヨー の結婚に破綻がみえはじめ 二人は『伸子』や『チェホフ をあ げる。 ロッパ旅 昭和 た大正十三年 行をする。 年か 書簡 には すぐ

> 浅にとってはまさに青天の霹靂であった。 顕治のもとにかけこみ、やがて結婚をしたのである。湯ところが帰国した翌々年百合子は家を飛び出して、宮本

逢 して百合子の自宅を訪ねた。そしてその直後に で、湯浅は翌日 0 ている人には十分にうなずけるところであ この追悼文を瀬戸内寂聴は絶賛してい 随筆集 「いたかった」という追悼文を書いた。(湯浅芳子の最初) 湯浅 0 『いっぴき狼』に所収筑摩書房 別 式 欠席 の夕方に、故人の好んだバ は 野上弥生子のように る ラの花 0 た。 事情 『生きて を持参 を知 ところ 0

文より格段に好きだ」(瀬戸内寂聴『孤高の人』(筑摩書私はこの追悼文が、他に書かれたいくつかの百合子追悼ている。そこには何の構えもない。虚勢のかけらもない。思わず考えてしまうほど、その文章は哀切さがみなぎっ こんなやさしい人を捨て去った百合子はひどい、と

と伝 6 0 す人が少なからず 百合子は えられる。 獄 よりも湯浅との 中 しか · の 顕 いたにか 治に三千 湯浅 違 秘 の欠席 通 な 8 をこえる書 た 関 L た形 係 に V 簡 をお の場で「愛 くっ

ぼ

はえてい

寂聴は

「亡き人」よりも「悼む人」

に心情的共

八感をお

房

平成9年)

4のなかの百合子とかかわった人物がもう一人いる。

共産党 床 を そ だに伏 そ平 知 n ĺ L 和 日 直 本 1 つつ わゆる 民 共 産 宱 党 昭 義 0 和  $\mathcal{O}$ 「五十年問 一道 六 徳 0 年十 運 田 標 動 球 貞 一であ に尽くし に 取 題」のさ中にあった。 り組 共産 る。 てい 歴党に入 h 百 たが、 合子 でい 党し た。 は 宮 晩 当 年 本 時 詳 は 顕 説 治 病

時

熾烈な路 線対立である。 は

省く

が

徳

田

球

一と宮本顕治をリー

ダーとする二派

 $\mathcal{O}$ 

り、 に宮本 後約 追 指令もだされた。 中心はも 本百合子 に読まれてい この混 宮本 兀 ]か月後 た。 共 |葬||が 産党 百合子葬を ちろん宮本顕治である。三千人近い参列者が 乱のなかで、百合子の党葬がおこなわ 百合子 が主導権  $\bar{\mathcal{O}}$ の五月二十三日に、 「公然盛大に」執り行わ この立場に立った運動家たちは、 部からは 0 を確立 「大衆的にボ はもちろんこの した時に、 「公然と」百合子批 東京の共立講堂で、 イコットせよ!」 Ď 批 ちも 'n 判され解職等に た。 多くの 主催 判が れた。 との 読 0 お 宮 者 5 0 死 い

草葉の陰で微笑んでい 宮本百合子全集」 たに新日 本 出 版 (全三十二巻) るにちがいない。 社から刊行され は今世紀にな てい 百合子 って は カン

広大な自宅でおこなわれたが 芙美 子 0 葬 儀 は 百 合子  $\mathcal{O}$ 葬儀委員長の ほ ぼ 半 车 後  $\mathcal{O}$ ĴΪ 七 端康 月 成 日 が に

> 次 のような挨拶をした。

ľ

罪 間 L た悪を消ぎ てもらいたいとおもいます」 もすれ に 故 ひどい 人 ば は 滅させますから、 林さん 自 分の ことをしたのであ 文学的 は 骨になってしまいます。 生命 どう を保 か、 ŋ ます つた この め、 が あ 他 <u>ک</u> -故 死 は 人 対 をゆる 一切  $\hat{O}$ 

もう一度繰り返 Ш 端はさらに した。(尾形明子前 「どうぞ許してやってください 掲 書

لح

低

平 ŧ 感じていた」と記している。 合った平林たい子でさえ、 はうなずく顔もあった。 11 7 「このお葬式は引き締まってすすり泣きが起こった。 成9 る。 参列者 悼む雰囲気が希薄だったことを、 涙が溢れ 年 (『林芙美子』{平林たい子全集} の多くの て彼女を悼む心がはじめて充ちた」 顔には驚きの影がはし 若い時代にどん底 芙美子の L かし、 私自身 「不意な死 第 Ш 10 端 ったが の挨 も自 生活 と綴 人拶を機 去 潮出 分 を  $\hat{o}$ 分 な って 中 か 版 対 カン 私

家 わ 自 は予想をは った 井伏鱒二 と本心を語 人も な カン 0 0 い 11 のように絶交中に るか たが た て ってい  $\mathcal{O}$ V たの で、 に多くこえてい 通夜や告 だがが る文もある。 当事 者 その  $\bar{O}$ 別 ŧ 希 式 か 中では た。 か 望で出て行くことにし に わら 欠 席 前 古 ず 述 L た 焼 V  $\mathcal{O}$ 友人 平林 香  $\mathcal{O}$ 友人」作 は だ 列 私 絶 加

偲ぶ 告別 男たち。「文学アルバム」に掲載された写真は、 の群だ。 も作られた。 の横 「庶民」の姿をあますところなく伝えてい の前後から焼香に訪れた文学関係者以外の人たち 近所のエプロン姿の主婦たちやワイシャツ姿の しかし、芙美子の葬儀で特筆されることは 安井曽太郎が 死顔を素描 して、 デスマ 芙美子を ス

で語っている談話を転載しておく。 葬儀委員長の川端康成が芙美子の追悼特集号の座談 会

に

書いている。

に足を向けたのである 居している芙美子を肉親 るさと暗さ、ぬくもりと意地悪さ、無邪気さと偽りの同 あ の人が見送ってました。」(前掲書文藝別冊「林芙美子」) ですね。そうして霊柩車が出る時は、 式が一応済んじゃったでしょ、 百人くらい入って来たでしょうか。 る。超人気作家 おかみさんだの子供だの、近くの街の人たちが 林さんで一番おどろいたのは、お葬式ですね。 党葬」とは異なるいわば の心 の基底に流 のように感じて、人びとは焼香 「庶民葬」 文学関係者の。 れている庶民感情、 ああいうのは珍 黒山 が営まれたの のように近所 そうする ĺ 告別 明 で V

百合子の場合と同じように、 面を顕わすことがあるようだ。 形い の場は故人の 生

> こでは文学上の勝負を話題にするわけでは 火は金に、 とは 金は 五行説 木に剋つとすることのようだが、こ で、 木 は土に、 土は 水に、 水は火

ク

ぬ反目はあまりにも有名だ。作家の関川夏央は次のよう しかし、 百合子と芙美子の生涯にわたる抜き差し

和子』集英社 というより敵愾心であった。」(『女流 分からはげしい感情を持っていた。 「芙美子は、 平成21年) 戦前百合子がまだ旧姓の中条であった時 それはライバル 林芙美子と有

堕 はつねづね壺井に「林さんとつきあうこと自体あなたの 彼女はぷいと立ち上がりそのまま帰ったという。百合子 美子はひと言も口をきかず、 訪ねてきたが、二人のあいだにたちまち火花が散り、 |落よ」と言っていたという。 芙美子が壺井栄をたずね これに続けて次のようなエピソードを記してい ていた時、 百合子が鋭い皮肉を言うと、 偶然 百合子も 芙

後におこなわれた座談会だと思われ け このエ ーピソー・ 川端 しろい 康成 F · の 出 ので転載する。 も出席してい 所は、 おそらく芙美子 るの る。 だが、 小林秀雄や芹沢 壺 井  $\mathcal{O}$ 0 死 打  $\mathcal{O}$ ち

林さんが信 挒 から帰って来た時に、 うちへいらっし

相剋

憤慨して帰っていっちゃったんです」(前掲書 文藝別冊でまして帰っていっちゃったんですが、本さんが木で鼻をこする、というのあたしがどこへも行かない、必ずうちにいる、というのあたしがどこへも行かない、必ずうちにいる、というのあたしがどこへも行かない、必ずうちにいる、というのあたしがどこへも行かない、必ずうちにいる、というののましがどこへも行かない、必ずうちにいる、というので来てくれたわけですよ。ところが林さんが何か言いかで来てくれたわけですよ。ところが林さんが何か言いかで来てくれたわけですよ。ところが林さんが何か言いかで来てくれたわけですよ。ところが林さんが何か悪くてね、あうんですか、そうい方が大きに帰って来たんですね、そうしたら、やったんですよ。急に帰って来たんでする、神さんが

浮かぶ。
二人の険悪な顔とともに、壺井のうろたえる姿が目に

林芙美子」

づいていた。彼女は言う。 平林は、芙美子が百合子を無視する姿勢に日頃から気

いる」である。『ひとつの見せかけ・・・』とぬけぬけとかいてである。『ひとつの見せかけ・・・』とぬけぬけとかいてまともに氏の小説を批判したことさえなかったのは有名百合子に対しては、ひやかすような警句をはくだけで、「彼女(芙美子)が、左翼転向者のNO.1たる宮本

百合子と芙美子のイデオロギー上の違いは論をまたな

ここでは視点をかえて、

百合子の育った環境を見てみ

りは「敵意」である。 百合子の「讃美」と、芙美子の無関心、無関心というよしているが、その印象には、天と地のような開きがある。 は同じ時期にシベリア鉄道を利用してソヴィエト旅行をぼ同じ時期にシベリア鉄道を利用してソヴィエト旅行をい。その兆候はすでに若い時代に見えている。二人はほい。その兆候はすでに若い時代に見えている。二人はほ

するのであろう。 である。お嬢さん作家と放浪作家の違いは、どこに起因である。お嬢さん作家と放浪作家の違いは、どこに起因芙美子にとって「共産主義ほど縁遠いものはない」の

らない。平林の百合子観についても同じことが言えそうらない。平林の百合子観についても同じことが言えそなイデオロギーの違いとは別の要因もあるように思えてなところで、二人の「相剋」の原因は、文学や思想上の

4 いえ、 で生まれた共生感は、 な環境をとおってきた同性」と宮本百合子を よれば、 百合子にたいしては文学上の敬愛の念は持 せて書いているそうである。 芙美子と平林の育った産湯は同じで、 かつてはプロレタリア文学に筆を染めた平林自身も、 人間的親近 平林は戦前の文芸批評で「私や林芙美子のよう であった。 感は希薄ではなか ゆ ŋ かごで育った百合子には (岩橋邦枝 ったか。岩橋 その湯煙の 前掲 つてい ) 対 たとは 邦 なか

有力者 七歳 「中央公 載され 合子 0 時 論 0 た。 働 編集長 きか 茶 発表 貧しき人 の水高等女学校を卒業し け の背景には華族女学校出 の滝 坪内逍 Z 田  $\mathcal{O}$ .樗陰の後援 群 遥 0 が 推 中 数などが -央公 当時 た 身 大 あ 正 0 0 母力 った。 五. 流 雑 ŧ 誌  $\mathcal{O}$ 

藤

であ

誌、 難関と言われる名門女学校、 ちろん百合子の早熟の天才的才能が大前提であるが 美子の周りには、 さらに、 大文学者と日本を代表するジャー 『貧しき人々の群』 目も眩むような環境が整えられてい 文壇 は発表前から、  $\mathcal{O}$ 登龍門と言われる雑 -ナリス 大々的に宣  $\vdash$ • 芙 最

見出 分を賞讃五百頁の大作を近く発表する筈・・・」とい 作家が生れた・・・中條百合子嬢。坪内博士 伝された。 しとともに、 たとえば「東京日日新聞」には、「 百合子と母の談話と写真も掲載された。 新し 豊かな天 い閨秀 Š

寿恵 語を書 るだろうという意味を頻りに繰り返して居られた」 「今後年を取り経歴 前 記 V 此  $\mathcal{O}$ 早春 たの 滝 の母堂の得意は大したもので、『紫式部が源氏物 5 2 田樗陰も得意満面の母について書いている の巣 は 年 幾 4 つ位 ち を積んだらどんなにエライ作家にな でしたろネ』という調子だ 若き日の宮本百合子』新日本 (大森 にった」

> れは 合子と母 代 \$ これ したのであ 本節 大きな夢を K れ のテー な の宿命的な葛藤 は ジャ が、 る。 1 マではない。 ナリス 実現できなか 芙美子には想像 母 葭 江 1 が  $\mathcal{O}$ 素  $\mathcal{O}$ この直後から始 顏 問題は百合子と芙美子の .. が 办 た母 もできな 出 0 ていると思う。 誇 は、 張 が含まれ V 娘にすべてを ような、 まるが、 7 そ 女

託 時 カン

線上 中 は 自 P 分の 、母親 それは 本能的に 戦争と太平洋戦争中にい 芙美子は |を彷徨った無名時代や母キクのこと・・ 過 0 自信過 とも 去 石に思い .肌が合わなかったのかもしれない (平林も) 百合子の輝かし か 過剰とも くとし をめ て、 ぐらすことが 1 える動 ちだんと先鋭化する。 二人の思想と行動 きを見聞きす あったと思う。 しいデビ るに 0 ユ 違 ] 百合子と いつけ、 0 い 事情 飢 は 餓 日

#### 兀 反戦 と 美 V 戦争

た 機 0 同  $\mathcal{O}$ 院に息 年 追 時 百合子と芙美子 期だ。 九 放 心吹き始 ピ 月 放送開始も知らずに旅立った。 0 前年に サ ッド 8 フ . パ た ラン は 平 が早逝した昭 1 朝 和 鮮戦争が シ 日 ţ 本 ス 拡 コ に 亚 が Š ŋ お た 和 和 ただび 条約 こり、 は 二十六 ľ 暗雲が 0 8 É 年 調 共産 盯 は、 V た 主 義 敗 我者たち は 戦 Þ ľ ĺ め

華々し 人にとって、デビ カ Ļ 歳月であり、 敗戦から死にいたるまでの六年間 ュー時代に勝るとも劣らないほどの 同時に作家としての完熟期でもあ 余 りは、二

った。

り、 かれ 百合子にとって、 た 和 国 風知草』 [家建設の の解説には次のように書かれている。 敗戦は 出発点を意味した。 軍国主 |義からの「解放」であ 敗戦 の翌年に 書

の変化 載 刻 わたしがいる弟の家に帰って来た。 月十四日に風呂敷包を下げ、 に無期懲役を宣告され |々であった」(大森寿恵子編集『百合子輝いて』より 「一九四五年の八月十五日が来た。その年の六月下 新日本出版 十一月、 作者の一生にとって二度とありえない大展開 十二月とみつきの間 平成 11 T 網走に行ってい 年 素頭で、 この八月十五日から に展開 草履ば た宮本顕治 された全生活 きで東京 ば 転 0  $\mathcal{O}$ + 旬

され

ている。

党活 くの 風知草』 子は 反戦平和運動、婦人運動等に従事しながら、多 「生の活気とよろこび、勇躍」に照らされ いた。 遺作となった『道標』等がこの期 毎日出版文学賞をうけた『播州平野』 代 表作

ŧ

0

う意味を持っていた。 英美子にとって、<br/> 戦争中に、 敗戦は 百合子とはまったく違 戦争の崇高な美しさ」

に

とま 狂 戦』と受け止めた芙美子の心は、 ざるをえなかった。 って作成された『生誕 ・ツト() 戦後を軍国主義か 的 で言 な拍手喝采をあびた彼女は 製作 いは な ち、 風日社)には次のように書かれている。 らの 平成十五年に、 女ひとり最 100 年 "解放』ではなく、まさに『敗 記 念 前線に立って、 ひたすら戦争の犠牲と 戦後、 林芙美子展』 今川英子の監修 新たな道 のパ 玉 を 民 ンフ によ 選 0 にば 熱

開 英子監修の前記 していた頃から、 芙美子の心境の変化は、 のパンフレットには次のような回 芽生えていたのかもしれ すでに昭和十九年に信 な V) 1想が記 揃 今川 疎

なった人々の不幸や悲しみに向けられた。」

子 なかで、 どうしていいのか支えすらもないみじめな田舎暮らし ものを書くということは、それ自身罪の の素を育ててい 疎開生活で、畑を耕し、 「戦争のあ つであっ 私は童話を書くことが唯 たか。 6 ゆる障害に対し たのは事実だが、 山羊を飼い、童話を書き、養 て、この の救いであった」 罪悪感はどれほどの ようにも思え、 現実を手にして Ō

不幸や悲しみ」をテーマに猛然と書きまくる。 それはともかく、 芙美子は 「戦争の犠牲になっ た人々

義 父との間 未亡人の再婚をあ に子を産んだ妻が夫の帰還公報に苦 0 かった『うず潮』、 夫の 出

ら熱狂: 短編 リズ どの 死去 らとった ムか を書 0 的 作 た らの注文も多く、 t め にうけいれられた。 中断  $\tilde{O}$ ている。芙美子はふたたび大流 - 芙美子 が  $\mathcal{O}$ 多く 老い となっ の選択 と孤独と自立をテーマとした『晩菊』 女性をはじめ戦争 た 昭和二十一年だけで十二本 朝 L たテ それに目をつけたジャー 日新 ĺ 聞 7 連 は で苦 載 行 戦  $\hat{O}$ 作家とな 後 しんだ人  $\overline{\phantom{a}}$  $\tilde{\mathcal{O}}$ め 混 し 乱  $\mathcal{O}$ か 0 ナ カン

子

は

日中

戦

争

に 先立

一つて戦な

争

・賛美に. れ

転

じ

7

る。

軍

 $\mathcal{O}$ 

弟

君死

にたまふことな

を

おくっ

た与謝野

た。 揄されたが、 子に師事した深尾須磨子は、「ムソリーニ礼賛詩 が ファシ 大 尉 兀 郎 لح スト て出 み軍 を「超人的であり、 外務省派遣の に 征 正する四 ゆく 一男に たけ 文化使節として渡欧 く戦 水 神に近 軍 'n と励ま い」とまで賛 大尉とな して らりて Ĺ 人」と揶 わ

向けたい 八 月十 五 日を迎えるまでの二 人 0 動 向 に 目 を

射病 理由 れ 回の 百合子 |検挙、二度の執筆禁止 不 昭和 のため昏倒 たとえば 明のまま検挙され、 七 一年の頭が 秘書の大森寿恵子の作成 真珠湾攻撃の 治 人事不省のまま執行 との結婚二ヶ月後 東京拘 翌日 入獄、 ,置所 <u>+</u> = 釈放 に が停止され釈放さ 0 L 送ら を繰 月九 初 た略年表による 検 旦 学以 れた り返して が 来 は、 日 11

は キリが ľ 知 戦 論 0 な 意高 家 通 が時 揚 日中 局 女性  $\mathcal{O}$ ため に迎合した。 戦 も例外ではない。 争以 12 にペンをす 来きわめて多くの 朔 執 太 2 た文人の 郎 日露戦 光太 争で二歳 名をあ 郎詩 茂吉 小 げ 下 を 説 n

> 励 す に 7 本  $\mathcal{O}$ の新聞、 まし』(「宮本百合子全集」第十五巻 |動員された」とある。(小林栄子『暗黒下の若い人への べての心情を非国民的と扱うようになってきた。す 0 「昭和十六年」には、「再び作品 百合子はこの時期になにを考えてい 権力は戦争反対どころか『自主的』 ラジオ、 出版物は嘘と分かっている戦争煽 発表が: たのか。 月報 な『文化的』が禁止された。 12 自 動 な ~°

う心 中 +のこした。なかでも人びとの心を強く惹きつけた て短かった。百合子は「書ける間にできるだけ  $\neg$ であった。 五 明日 戦時下で百合子が執筆を許可されていた期間は 詩」をもって、この短期間 こへの精: 奇 L くも この本の視線はとりわ 神』である。 「皇紀二千六 この書が出版されたのは 百 に驚くほど多くの作 年」の奉 け女性に向けら 祝 L 書くとい きわ F. 品を ħ 昭 0 は、 7 ż

年

譜

可 ぎりぎ  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 11 能 ス 口 を ŋ を Ì もとめ 信  $\mathcal{O}$ ガ 時 じるようにメッセージをおくった。 状 ン 0 女 況 0 性 5 0 ŧ とに、 は、 もとで、 てい 無権 . る。 戦 女性に 争遂 利 百合子は  $\mathcal{O}$ 行 ま 現実 ま、 0 た を め 生めよ殖やせよ」 直 表現  $\mathcal{O}$ 視 「人的名 0 L 許され 未 来 資 源 る  $\mathcal{O}$ 

日

人の 1 ーランド 1 検閲 る。 姿が 明 0 第 日 ŧ 0 戦争前 独立 0 とで選ん 次 世 精 界 0 神』には 大戦 夜 = だテー 0 ユ ] 日 E 本人 おけ スに喜ぶ 「キュリー 7 は苦肉の しるドイ に 語ら パリ在 の策である。 ń -ツの敗: 夫人」が . る。 住 百 の 北 合子 丰 所 \$ ユ 収 リー が 袓 3 厳 玉 n 夫 ポ L 7

の注 取 りた 意を 明日 V は へ の 5 V 精神』の ながら書かれたメッ あとがき」をみてみよう。 セージの含意を読 細 4 心

えたい るも 世 ベ は、 るだ 界 今日 のと  $\hat{O}$ もう一人 け 歴 Ó 夜 な 史 . (T) は 0 ŧ から朝へのうつり 私たちの生活にとって、 0 て来 なか 今日 ŧ  $\mathcal{O}$ を隈 生. いないだろうと思 命 てい 0 で考え得る最も複 を花咲かせたい 生 なくとっ る。 活 を きょうから 層切 て、 カン わ りだと感じている 明 実 わ 願 12 れ 雑 日へつづく自分たち 明日とい いをもたせ 愛し、 な内 る。 あ L た 容 明日をよ そこ . うも で予  $\mathcal{O}$ ź 想され カン  $\mathcal{O}$ ら学 < S つり は 抑 Ĺ

> う。 7 < ゅ 本 0 出 昭 くことが カン 和 版 0 胸 Ŧ. 0 年 出 裡 九 来 に 月 活 るとしたら、 Þ (『宮本) とし た生 百合子全集』 ほ 活 W たとうに 0 脈 動 一慶ば 第十 を 8 し 兀 ざまさし 11 · と 思 新

月十五 述 処 んべた。 分 この れをうけ 日 書 以 0 降 た。 出 版 0 希 真 の 翌年二日 望 珠 湾 に満ち溢 攻 撃 月 に、  $\mathcal{O}$ れ 캪 た 日 百 月月 に検 合子 学され に は 0 再 び たこと、 執 筀 禁 止 0

た。 芙美子 早くも は、 毎 日 新 昭 和 聞  $\mathcal{O}$ 十二年 特 派 員 七 とし 月 に て上 は 海 • 南 た 京 に 派 戦

ľ

ま

0

日

中

で

は、

林

れ

最大 族、 0 た。 夫や の とりわけ 息子、 関心をもち、 母 兄や弟を Þ 妻 刻 は 戦 刻と変 戦 場 況 12 のな 駆 り出 わ いかでもど る報道に さ れ、 近 親 くぎづけ 0 こさ 者  $\bar{o}$ 生 n にな 死 た家

社 と兵隊』 掲 拍 草を は 二 ユ 載 か ] 覇 読 (昭和 けることになる。 を競 者 ス映 0 った。 期 画 十三年)の大べ 待に と並 応え 火 W で、 野 葦平 新 戦 聞 ス  $\mathcal{O}$ ŀ 従 場 社 や婦 0 ・セラー 軍 体 様 人雑 験 子 を活 や戦 は 誌 を含 況 カン L 0  $\mathcal{O}$ 動 た 記 to 麦 0

他 さて 薦 を問 11 わず、 わ Ś 男女を問 南 京 陥 わ ず 関 多 係 数  $\mathcal{O}$ が 従 志 軍 願 記 者 た は 芙 自

to

か 女

て、

その自然な響きが

又ほ 集め

カン

 $\mathcal{O}$ 

薦

 $\mathcal{O}$ 

7

0

願

い

 $\mathcal{O}$ 

熱

脈拍

が

ここに

6

れ

た

自身 読者が 美子 問題はまったくない ってい 前 ほどの適 . る。 年に満州 できる」と言わ もともと行 延任者は: 中 他 国 にいない。「批評家が 動的 に遊 れ るほどの人気作  $\tilde{\lambda}$ 作家で、 んでお ŋ V 大陸に ポ 家である。 タ 褒めるまえ ĺ は関心をも の資質に 彼女

ば、 起訴された石川達三の二 ついては、 従軍記· 『生きている兵隊』 事は残虐な死闘シー 極力控えなければならない。 (昭和十三年)で新聞紙法違 の舞を踏むことになる。 ンや虐殺 • これ 飢 餓 を踏 • 病 み外 死等 反 で せ に

た家族 うか 太平洋戦争に突入すると、さらに厳しさを強めていった。 もちろん控えなけれ 地人との交流と教化、 芙美子は もとめられる記事は、 それをみる前に、 0 もつとも知りたい 戦場でなにを見て、 ば なら 兵士の美談などである。 彼女の活動を追ってみる。 豊かな兵糧、 ない。 帰還の予想などについても、 なにを報道したのであろ 軍当局 戦勝、 の報道規制 のこされ は、 現

新聞 ゆる 子 昭  $\Box$ の二人のみ)の一人として、 芙美子 和 には、 「ペン部隊 乗 ģ 年 は 「女われ一人・嬉涙で漢口入城 九 南京では を果たして、 月 」(二十余名のうち女性は芙美子と吉屋 0 漢 口攻略 「女流一 世 戦 間 では 番乗り」と喧伝され 一か月半の行軍をへて「漢 0 喝采を博した。 内 閣 情 報 部 編 難苦も夢 成 たが  $\mathcal{O}$ 1 Ó 信 わ  $\mathcal{O}$ 

> どる。 兵隊 やうー に 11 . る。 も見える小 3 その んと一 (「東京朝日新聞」 堂 横 Þ 皇 柄 には 緒 に な 軍」とか 彼 漢口へ」とい 軍 女 一隊報道 の写真と談話や手記が 10 月 文壇 31日付) 腕 0 人 た賑 章 従 重 をつけ、 Þ 記 L 枕 11 た女性 見出 に通ふ 載 ざれ l がお 跫音 兵 7 士

垣 旋 直子 派将軍 この 福岡 時期は彼 の帰国のような熱狂的な歓迎を受けたという。 0 飛行場に 前掲書 女 の人気の絶 朝日」 機でおりた時には、 頂期である。 帰 国後、 まる で凱 各地 板

左 記の二冊の体験記を出版した。 祖国愛、

カコ

なら講

演

の要請

があ

ŋ

それ

iz

応えるとともに、

彼

戦 北岸部隊』 線』(朝日新聞 (中央公論社 社 昭 和 13 昭 和 1 4 年

成 15 美子 つとも示 この二つの 年  $\neg$ 戦争の崇高な美しさとは 北 唆 方 に 0 富 戦争ルポ 旅 む 論 所収 文 は、 ル ター 北 神 海道 ジ 谷 忠 ユ ---」である。(『林芙 孝の 文学館編集・発行 を読み解 「林芙美子と戦 くうえで、 亚

なに 間 論文の カ 部 分を転載する。 この論・ 副題となってい 文の なか る 引用, 「戦争の崇高な美しさ」とは され Ė る 『北岸部

0

私

はどんな事があっても死には

しないだろう。

だけ

戦、を 争、し の崇高な美しさにうたれた。てゐる兵隊は一人もゐない。 兵隊は従軍 前線 出 てみて、 単僧が見る ええる 私 は

とあ どの兵隊 な影すら兵隊は払 ま ŋ į, 0 、〜気持つ 顔 も光輝 では S ある故郷を持 のけて、 ないと言ってゐたが、 逞しく前 ,つ落ち 進し つつきが てゐるの 抹の不安 若 だ。 眉

宇にたゞようてゐる」(傍点は筆者) 模 範的とも いえる戦争ルポからうけ

るイ

メ

ĺ

ジ

は

5

間

死に ために前 対す うところであろうか。 進する逞しい兵士、 る一抹の不安をもつ弱い ったのだろうか。 芙美子はこの 戦場は 私、 何と美しい 死も恐れ メッ セー · 場所 ず祖 -ジをだ か、 国  $\mathcal{O}$ 

向

け

たか

を強調 なかろうか。 両 氏とも 神 谷 Ĺ は てい 森英 芙美子が る や川 戦場で感じとった 本三 れ は戦場ではだれもが持 郎 両氏 7の所論 \_ を紹 虚 無感 介し 0 感情 無力 7 11 感 る。

浪漫的資質の確認」と言及したうえで、「『崇高な美 の感 を考察してみたい。 説 谷自身は、 は 謝こそが林芙美子の本音」で、 空疎 に見える」 「無常観に裏打ちされた生 と述べている。 戦 後の 次節  $\mathcal{O}$ 充 戦争批 では 実、 八しさ』 自 判 0

#### 五. 戦 争 0 記

を再開する。 はふたたび各地で報告講演に従事しているが 文芸報告運 ガポ 月に 温 敗戦まで疎 泉 芙 は陸 で迎え 美子 1 ル 動 は • 軍 ジ た 開 報 講 中 が 先 + 道 演 国 ワ 部 会 で暮らしている。 カ . 0 + 0 6 スマ 徴用 講 月には帰 帰 師 国 トラに とし に応じ、 L た て北 京 兀 滞 年 南方視 北海道に 在 後 月十五日 その後活 L 0 7 昭 V 察 来 和 る。 7 には信 発 十九年 出 Ė て、 な 帰 る 年 揃 執 国 か 角

任に焦点をあてて、考えてみたい。 以下、 芙美子と戦争の 関わりに つい て、 とくに 戦 争責

厳 芙美子にたい 野上 い批判をむける 一弥生子等の į Ē は 研究で知られ ŧ ちろん、 る渡辺澄子は、 戦 後 0 彼 女に た 戦 争中 ても 0

略 追 日 ・て流 随 本 林芙美子は偉くなった。 従軍記 が 驀進した。 足を速めた侵略戦争を吉屋 行 九四 作 家となり、 『北岸 一年。)」 (南京・漢 部 財 をな ほ か、 さらに高みを極め П 番 時 局べ 乗り、 信子と先を争うように 新宿区下 ったりの作 講演活動等は省 落合に豪邸を るため 品: を 書

 $\mathcal{O}$ 

判は 戦 後の芙美子におよぶ

渡辺 大著 希薄さの指摘には、 れるが、 猛然と活 しかし、真っ向から異議を唱える人もいる。川本三郎は、 このエッセーにはいささか問題のある表現もみうけ の主張を徹底的 自己 『林芙美子の 戦 動 の 芙美子の戦争協力と戦後の戦争責任のとり方 カン 開 戦争協 始 。」(「東京新聞 一カ月 昭 力に に反駁している。 和』(新書館 賛同する向きも多いかもしれない。 後 なん 空襲を免れた家に の 三夕刊 痛痒も感じない 平成15 平成 年)のなかで、 1 4 戻 年2月 かのように った芙美 19 0 6 日 子

という言葉が安易に使われすぎている」と反論してい 方だ」と言い、「自己の い」との指摘に「これもあまりに理解 彼は『北岸部隊』のとりあげ方を「あまりに単純 戦争協力に何  $\mathcal{O}$ が浅い。『戦争協 痛痒も感じ していな 五 な . る。 見

員兵 社会の底 隊さん、 も転んでも起き上った『放浪記』時代の明るい芙美子、「兵 った芙美子 かいまなざしをおくってい |||• 引揚者 本は先の本で戦前 辺 有難う」と心に叫びつづけた戦中の芙美子、 戦争未亡人とい る人びととともに 川本によれば、芙美子はいつの時代に ・戦中・戦後の芙美子に一 . る。 いった戦 生き、 新宿 争犠 で貧しくて転んで 彼ら 牲  $\tilde{O}$ 者 に寄 世界 貫して り添 0 美 ŧ 復

張を引用

た。 戦争の大義についての言及もない。 繰り返されるが、そこには、戦争そのものの 0 兵士たちに対する敬意である。『私は兵 所与の条件として、もう戦争は 北岸部 隊』で書かれ ていることは、 ある。 戦争はすでに起こっ 隊 美化 が好きだ』 貫 は て、 ない。

家と批判することは ようとしない、 って大事なの さらに川本は は また、 続ける 兵 隊という『大衆』に寄り添うことな 容易である。 日中戦争の侵略性に気づかな 「林芙美子を戦争 しかし、 林芙美子にと  $\dot{O}$ 内 実 V を見 作

であろうか。 現代の 大衆」 は、 はたして、 Ш 本の主張を支持する

である。

成十四 n その Ó Ш 本 人物をあ 人物 年に上演 0 考えとは違うが芙美子に の名 げよう。 した「こまつ座 は作家・ 劇作家 の井上ひさし 0 理解をみせるもうひと 「太鼓たたいて笛ふ であ る。 平

す。 る。 0 . て 宣伝ガールとしてバ 日 林芙美子の 中 戦争 前 Ŀ カン 5 『転向』 太平洋戦 面 白 カに派手な活動をしました。 \ \ \ もま その 争 E た、 か け お 部をやや長い て しろ  $\mathcal{O}$ 彼 V 女 思 は が引用 想 軍 問 玉 主 題 義 で

П

は常に

「大衆」・「庶民」・「兵士」とともにい

さに焦点

をあわせてペ

ンを執

ってきた。

女

Ш

本 彼

 $\mathcal{O}$ 

シリー 時代 彼女の凛 ながら、 を犯しますが、 の月並み作家とは違います。 向 たくさん 日には 女だろうということになりますが、しかし、 の自分の責任を徹底的に追及したところが、その 戦 ズに登場をねがったのです。」(前掲書の R 後 戦後はほんとうにいい作品を書きました。 書きました。そこだけ見ると、 種 0 彼 の凛 い覚悟を尊い 彼女は自分の過ちにはっきりと目を据え 女は一転して、いわゆる『 なしい覚悟がありました。 ものに思い、こまつ座評伝劇 。わたしたちはだれでも なんと調 「反戦小 彼女の 宣伝ガー 『生誕 説 子 その 。 過き ま Ö を ち他

○○年記念 林芙美子展』)

子文学の 彼女は左 した渡辺 ているわけではない。一方、 この主 向」・「調子のいい女」と記す井上に拒否反応を示す てい 精髄が発揮された絶妙さで、 一張に対する反応は様々であろう。 記のエッセーで戦後書かれた『晩菊』を「芙美 澄子は肯定するところもあるのではなかろうか。 る。 彼女は芙美子の戦後の作品まで否定 川本三郎は「宣伝ガール」・ 文句なしの名作 芙美子を批 判

話はとぶが、宮本百合子はどうであろうか。あくま は の域をでないが、「芙美子の戦後の なに なぜ戦争中に カ ? 戦 争犠牲者 「大衆」のために闘 0) 同 情 が  $\overline{\phantom{a}}$ 一反戦 反 わなかったの 戦 カン ?  $\mathcal{O}$ で

だろう。

もしれない。二人の「相剋」は死後も続いているかもしか? 凛々しい転向など絵空事だ!」と皮肉を飛ばすか

れ

ない。

き合った茨木のり子の詩で飾りたい。 であろう。 けることの重要性については、 本節の最後を、 ついては、 唐突な感じを持つかもしれないが、 芙美子の戦争責任のみならず、 甲論乙駁であるが、「戦争の 軍国少女だった戦時 大きな意見の違 日本人の戦争責任 中 幅 0 記憶」をもち続 の関係も 悔いと生涯 向

噴き上げ 思わず笑いが込 その人は言 お答えできかね 文学方面 そういう言葉の っては 叶 血 った は (以下略 あ 0 いように 込みあげ まり研 止 きょす ŋ アヤに 究 また噴き上げ 7 『四海波静』より) つい V

この人」とはもちろん昭和天皇である。戦後三十年

戦争責任

を問

わ

れ

が 「おことば」がテーマの詩である。 経 った年に、 戦争責任を問われた天皇の記者会見での

かった」と記している。 茨木は 「野暮は承 知で」この詩を「書かずにいられ な

茨木のり子は「戦争の記憶」を大切にした詩人である。

結びにかえて

い作家としては珍しいことである。 してアイヌの世界に関心をもった。 くつもりであった。二人とも若い時代に北方 百合子と芙美子のアイヌの人びととの交流 大正・昭和初期 への旅 派を通

小説や随筆をのこしている。 アイヌ人女性八重子と生活をともにしながら、『風に乗っ てくるコロポックル』や未完の大作『遥かなる彼方』 百合子は大正七年にバチェラー博士のもとで、 養女 0

流を深め、 アイヌの 芙美子も昭和九年に初めて北海道・樺太旅行をして、 遺跡見学やアイヌの青年や樺太の先住民との交 多くの北方紀行を書いている。

に微妙な違い 備 異なる場所 しかし、二人のアイヌ理解とその文学的表現のしかた 程 で、 いくつかの伝聞資料を読むうちに、 があるように思えた。その違いを考察する (トポス)」に出会い、 小論がうまれた。 二人の

> T イヌ の世界につい ては別稿にゆずりたい。

以上

#### 文 芸 評 論

水

関

清

## 選

入

浪費 う偽 で結 その 格 金 ŧ 後に花嫁 か 口 第 は 5 に公認され 口 0 癖 す ば 手 婚 ても 極 L 章  $\mathcal{O}$ < L す 金 紙 式 X 強 ると を作 に ば 0 つけ はじめい 持ち主でも は 啄 1 L する向 使 前に 自己顕 で 行 木 宿では つて、 は 1 る場である結婚式の が 0 わ 現れ に て う非 借金 れ 不 きも 在 たが 示欲 L 新 まわ を繰 っている。 常 啄木は、 あ 酒 仙台在住 0 妻となる節子との結 いった。 ため、 !宴を開  $\mathcal{O}$ 識 裏返 この なけ り返 な行 奇行 ですー 間に L その背景としての れ その場を取り繕うため き やむを得 動をとり、  $\mathcal{O}$ 先輩 とし ば の多いことで知ら 方で、 欠席 気が 啄 その代金 ての 詩 木 であ す 人 は ず 病的 であ · 花婿 É 婚 手もとに 式 な は 母 る。 が 0 な +る土井 親 不 晴 1 | 啄木 井家 危 在 とい 八方探 ħ ほ 週間 المط て 社 あ 篤 0 ń · う、 に る 晚 ع ま  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ ほ 虚 性 お 嘘 المط 什 翠 ま い L

> 学的 また、 状 きさに をしたすぐ後に 自 11 に ŧ 心 態 重ね 在に 象を た窮地を脱 つ「ヒステリー性性格異常者」とし に検討 0 ために あ 根拠に、 あ 過去や空想の世界に逃避 春 るという。 わせることで、 原千秋と梶谷哲男は啄 起こっ 当 てきた生活態度や、 啄木 浪費行動に走るなどの 時の劣悪な栄養状態に起因 た、 大沢博 自ら 抑鬱神 夢想型分裂気 は 0 社会的 木を、 啄木 し 経症状との て、 死をほ  $\sigma$ たが、 感情 (質) 症状 適応 現在 循環 み を精 その 気質  $\mathcal{O}$ 性  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ ī É か 振 8 0 たを提 た低 か をあ 神 れ な 分 根 7 す 身 幅 の 拁 血 体 記 が 心 は  $\mathcal{O}$ 唱 糖 矢 沭 招 境

[を概 示 閉 せ る す 寒 観 る。 れ どによって、 た バ ラン またバ 筆者の考えは、 た 7 すなわち、 スのと  $\mathcal{O}$ ラン 性 格 ス 陥 そ れ 傾 0  $\tilde{O}$ た 向 0 啄 悪 た窮 性 木 これ 社会人とし が い 格  $\dot{\mathcal{O}}$ 窮余 その 奇 , ら先! 地  $\mathcal{O}$ 負 行 か 生は 行 0 6 0 策 7 研 0 側 11 では 究 脱 0 立 面 持 生活 出 が 5 とは異な って生ま ffを考え な 助 É 長 父 V 0 合れ 構 カコ と推 築 れ 7 0 たたため た立 た神 禎 0 0 齫 感 経 齬 場をと かをき 質者 に、 化な

啄

木

0

1格を、

精神医学的観点か

6 0

検討

Ĺ を濃厚

た報告 外

のような生活不適応者とし

して

側

面

E

見

L

7

vì

る

7

石

田

郎

や宮

城

音

弥

は

自

己

を

5

閉 る。 性

性や、

他者 天

12

対する敏感

と鈍感

0

両 界

面

性 カン

を

情表 する同 現 .調的態度が生活の随所にみられることにある。 を示 的 性 説 を立 Þ すことで他 时大妄想: てた 冷 たさ 根 的 拠 者 は 表象も Ŕ の共感を得るとい 啄 木に ヒステリー なく、 は分裂気質 むしろ -気質に . う、 細 に 社 B 7 4 会 カン 5 6 な れ

咸

る る

忲

経質者 層の 中に 優先 た生 陥 自己中心 ij, 苦悩を招くことにもなったと考えられるのである。 蟠踞 した、 1 <u>\frac{1}{1}</u> 特 その苦境から ひとり息子とし ちや、 的 有の思考形態が影響して、事態を複雑に した考え方 な生活態 父・一禎 住職 度とし の脱出を意図するにあたって  $\mathcal{O}$ の感化などの影響によって、 としては異 て両親 幼弱 して現れ 性 0 色な歌 寵愛を一身に受けて育 が、 た結 依存的 果、 人とし 生活が ての • 観念的 生活 ŧ 啄木 窮 地 神 に 0 な 0

好 とを対比 機とも 的に検 な させつつ、後年の歌人としての飛躍 った精神的 したも 脱 であ 皮 0 過 程 を 精 神 医 学 0 礎 的見 を築 地 Ś カン

中の もの

載

٤

啄木生来の神経質性

格と執筆時

0

心

理

制

ーマ字日

記』である。

本論文は、

この目

記

 $\mathcal{O}$ 

た

その苦悩の が、

経過を、

啄木が余すところなく書き記

岩手県 南岩手 禎 啄木の生い立ち (三七歳)、 郡日戸村 (九歳)、  $\mathcal{O}$ 母 次姉 曹洞宗 啄木は、 カツ トラ 回 常光寺で、 明治 (七歳)) ()歳) 九 の三番 年二月二〇 として生ま 僧侶 目 で あ 0 子 0 日

> 対 生 8  $\mathcal{O}$ n まれ する特別扱いを、 擁 ての た 男児 を受けて育ったことは、 当 たミツが 時 ということもあ 長 ても高齢 じて、 羨望とともに語ってい その頃 であ 0 7 った 啄木 0 両 両 両 親 . О 親 親 や姉 0 0 一歳 溺 ŧ る 愛と二 た 下 うけ 5 Ď 妹 た 0 とし 人 啄 0 木 は 姉 7

詠 和 仏 は 年 歌 著名な歌 歳で寺に預けられ、 0  $\mathcal{O}$ 電歌を作 事の一 人の んだ。 布施 曺 生い まず、 影響を幼児期から濃厚に受ける成育環境 を <u>ń</u>. 立. であり、 立ちとか 並を両親 こった。 環である説法をするために、一禎は本を読 啄木 人であり、 僧侶として暮らした。 一禎 0 0 0 それは仏事を営むことによって得られる。 歌 金 らめて考えてみたい。 西行を好み、その生涯に 家系から受け 銭 0 母 師 後年宝徳寺を退去するまでの約 感覚である ・カツの兄でもあった。 • 葛原 対 僧侶の 総ぎ、 月は、 が この 当時 西行 生活の経済的 間 四千首近 禎は にあ E 題 0 東北 . 傾 は った。 倒 啄木 数え 父 地 V L つは、 た父 方 歌 五 を 礎

家 厚 覚えて居る。 援 京 てい 助 な 助 啄木の不名誉な代名詞ともなった借金に  $\hat{O}$ 化 葉か 0 私 4 跡 たえすい なく その時代 6 が は その うか 办 心はさらに 年の 与 がえ 実 頃に 大態を探 た二人 の寺門の る。 聞 無 啄木  $\mathcal{O}$ き知った「坊主に金貸す ってみた 人達の貸借観念の超越(マ い。 友 文人、 0 生涯を通し という俗 宮崎 ŧ 郁 郁 雨 謡 て金 と金 は こう書 禎 田 0 濃 的

雨は、 て居 の何 いう特殊な生態 心 1 心の希薄とが大きく影響して居たのではあるまい 彼の処世観念と、 裏には、 特殊 の希薄」な 「一禎的」金銭感覚が啄木の の性格」になったことを見抜き、さらには カ 次々と 実際 にそれと一脈 「啄木の生活観念」の根底にも「寺育ちと は必 の存在を観ていた。 金 寺育ちという特殊な生態の生んだ自 須 を重 の事情が伏在 相 ね 诵 て行 0 ŧ 0 0 た彼 があ 「借金」も含む した 0 る にのだけ 無反 様 に 省 私 的 ĥ は か。 「自助 「根強 行 観

郁

助

マ)ぶりを諷

歎

Ĺ

た

ŧ

0

であ

ったろう

が

啄木

0

生活

観

動

 $\mathcal{O}$ L 念

れ。 の実 の食分に 士工の四種の食(じき)は、皆不浄の邪命 である道元は、「学道の人衣糧(えりやう) 視」にも影を落としている。常光寺の属する曹洞 一禎の金銭感覚は、 (・草の実・托鉢による食物・信者の寄せる布施物 只仏制を守(まもり)て、世事を営むこと莫れ。 清 三浄食 に無縁 あらず。」と述べ、出家の戒律とし (しやうじやうじき) なり。 になる」ことを求めてい 啄木の「生業としての会社勤 其の を煩ふ 食なり。 7 余 こと莫 済 宗 0 生活 出家 田 は 0 8 商 相 軽

たの 仏道に るが を始 ることを回 とす . 専心するために、 禎は彼流にこの教えを守っ Ź 避 して、 様 Þ 0 労働 ただひたすら本を読み、 出家の心得をそう説 に 従事することで生活 た。 す な わ V

感覚は、

名門盛

岡

[中学での学業継続に見切

りをつ

父 歌 僧侶としての一禎の姿を見て育った啄木の中では、 得るとい 1 への姿は を作 涵養されなかったようである。 出 の 中 り . う 出 12 は てこない。社会に出て働くことで生活の 不客を接 般人としての社会生活の基本中の基本は 寺 の雑務とし 待 L た。 ての ちな 掃除や草むしりをする J. 啄 木 や光子 Ó を 思

わ 対 明 0 は、 そのことは自己省察の できない。 として は 校四年生までの義務教育化と授業料廃止  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 11  $\mathcal{O}$ 0 深奥の れる。 対 十分できな 治二八年の 関 扶養義務に わば教化の対象だったの 明治三三年のことであった。 あ わ 象と考える観念の てある種 どこから来るのだろうか る意味で世俗離 りを見 あえて言えば、僧・一禎の意識 教えを語 曹洞宗の高 その現実には当然ながら自己の姿も含まれる。 対する責任感 小学校就学率は六 て育った成育環境を抜きにし 0 V 権 住 民 威を帯び るだけの れ ..祖道元の教えから説き起こして仏教 は多かったと思わ 希薄化につながり、 もとでは、 した啄木 かもしれない。 知識 0 て振 希薄: これも一 -の貴 があ 当 時 る 化と表裏をな 舞う立 現実を直視することは る一 0 三%に 族 礼 農村 節 の中で檀 湯に が断 禎は、 禎と檀家 • 留留 高 V では読 7 村 間 あ 0 行 は 踏 され ては 寺 信 檀信 語 的 つ n を教化 たと思 信 徒  $\mathcal{O}$ 4 れ 生 書 た は 徒に 住 小 徒 職  $\mathcal{O}$ 

道を歩もうとし け て浪漫 義文学 た啄 0 当 木 に 時 0 実 ボディブ 践 形 であ 口 0 た 0 詩 ような 人とし 打 7 か  $\mathcal{O}$ 

試みは: 渋民 浪漫 の主 掲 三六年一 あ て上京 載 った。 Z され · の 糧 主 室す 失 義 î 二月 在学中 た 敗 Ź を得るという観念が希薄 一禎の  $\mathcal{O}$ . 「愁調 に たの 啐 1 明星\_  $\hat{o}$ 終 び 庇護 マ字 -から熱中し は \_ わ 声に全身で応えるべ 。明星』に、 b, Ť 五編 にはじめ のもと雌伏すること一〇 明治三五 記へ その が 厄 掲 た文筆で身を立 の道 成載され はじめ 年、 て詩 か月後憔悴し 満一六歳 作 な 寺育ち て石 < -が掲載 啄木 詩 入とし 盛岡 が 川啄木の筆 で、 T てようとする 0 É か月。 中学 秋 与 勤 帰 れ ての 郷 のことで た 謝 8 を Ĺ 直 野 明治 啄 名 た。 後 退 鉄 出 木 で 学 幹 7

0

E

三八 よる 的 版 日 明治 積 年 年五 〇月 木 で あ 友 入 ぎつけ 上月、 は で生 t あ 0 人 年二 動 た。 か 0 には、 たが 活す 揺 た らの借 九歳 父 月には ると カン 詩 É 金や下 その に 集 同 して最 年五 禎 出 堀 · う 売 が 出 版 合節子との 宿 自 ñ 月 住 版  $\mathcal{O}$ 代 E 行 初 た 職  $\mathcal{O}$ 論 0 め きはさっ 行 を 直 0 見 詩 É 不 わ 前 は 払 潰 間 れ 免 集 再 え 度上 た自らと堀 z V で 啄 など、 ñ 木 ぱ あ 婚 去  $\mathcal{O}$ こが ŋ 京 約 た 0 との 生活 て、 で、 が L 不義 成立 た。 残 報  $\mathcal{O}$ 経 作 0 理 2 明 済 た H 子 接  $\mathcal{O}$ 

0

名は

気に高まった。

明治四( 5 京子 次に芽生えたのは、「作家とならん」とする思いであった。 泊 がわ 間 の半 詩 Ō 小 説 で が Ś 結 にそれは \*生ま ぬ ばに差しかかった小樽の は 婚 0 车、 正 友 式 到底生活されぬことを知った」 なりき」と痛切に思 |宗白鳥の「塵埃」を読んで、 「予が天職 ñ に 人・支援者を失った。 「食を需(もと)めて流れ歩いた」北海道漂 確信に変わった。 欠席するという非常識 満 二〇歳で父となった啄木はようやく 街で、 釧 明治三九年 路 な行 いでの滞り 自分と幾ら が、その心に、 動 に 在 には 出 七六日 て、 は 長 女 文学 さら 間

然主 その たが 度 Ŀ 完全さを 刊した雑誌 は 小 「刑余の ゖ 奮闘 説 まで試験する決心」 明治四一 、活字になったのは 0 なくなり、 義者になら 年も暮れ 執筆を始 して「菊池君」「病院の窓」「天鵞絨」「二筋 叔父」「鳥影」と定稿だけ さ 非 年四月二七日、「新 中 常 n 「スバル」一月号に「赤痢」、 村 な つって作 かたの 聖 抱 一月に その 湖 負 明治四二年、 へをも 12 は ょ で最後 品 は五月上旬 深 「鳥影」 いって の中 って小 刻な 眠 れぬ女」を二枚書い '「早稲! 挫 で試みた自己告 の上京を果た ľ 自らも編集者となって創 折 説 0 き文学的 を一 のことで 0 4 でも六篇 田 中 の惨憺たる 立文学」 篇 で、 発 二月号に 生 表 の あ 活 啄 した啄木 百 った。 木 小 0 L 月 の世 運命 た 結 説を書 は 黒で、 諦 号 が は 小 0 さ不 0 が を 説 啄 ш́ 自 足 木 極 が い

三月 突きつけた 分 Ø 0 思うように 島  $\mathcal{O}$  $\blacksquare$ 君 0 その 書 小 原因 が \*書け は  $\mathcal{O}$ 一一枚書いた処で力尽 直視である。 な という 実 が きた。 啄

の乖 日新 を書き始めた 分の求め をとも 木 窮 -離をどうしても直視できない啄木は、 聞 ï  $\mathcal{O}$ ように な た いっての 7.啄木 校正 る方向には動 係 が 小 同 説 0 職 同 居を迫ら  $\mathcal{O}$ 執 を得た報を聞 年三月同 動かず、 筆 が ń は ありたい自分と現実の自分 ることとなった。 郷の先輩を頼って、 かどらな きつけた妻子 · 方 ローマ字日記 で、 現実 生活 東京 が 父母 自 朝 に

月七 第四章 期間 たのは 装の堅牢 四月三日 による記 を残した啄木が であ 日 カン なもので、 る。 5 載 明治 口 から六日ま 同 は 年六 マ字日記 わざわざ新調 兀 二年四月のことである。 同年一月一日に始まる当用日 月 あえてその内容をロー その 二六 での 筆まめで、 実際 日に終わ 兀 聞した帳 日間と、  $\mathcal{O}$ 4 法 面 る 生涯に十数冊も 帳面 は、 は  $\neg$ 口 を変え · マ字 縦二〇 ] 実際 背革黒 7 字日 記 で記  $\mathcal{O}$ クロ 7  $\mathcal{O}$ 口 同 末 五. Ì  $\bar{O}$ 記 ] 始め 自記 尾 cm 7 字 兀 ス  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 

> 知ら 啄木 に 超え ñ が る、 私 娼 すさまじい描写であからさまにした日とし 窟 で 0 自 らの行 動 を、 自 然主 義文学を遥か

妻を愛してるからこそ、この日記を読ませたくないのだ。 る。「なぜこの日記をロ とにしたのか?表向 なぜノートを更新 本当の理由は、別にあると思われる。それ きの理由は してまで、 ] マ字で書くことにしたか?予は 口 四 月 7 七日 字で日記 の欄にこうあ は、ロー を 書 I く こ

その て、 げ 書 ずその脳裏にある単語を、 に対して、ローマ字で日本語 本  $\mathcal{O}$ 書いたことの意味が反射的に紙面 文章に記 予語をロ っては、 V 文 たものを読み返す場合にも、 一文字ずつそれを紙面に書きつけなければならない 章 には、 ] それ 組み直さないと、 マ字で書きつけるという作業を経ることで、 を単語 視覚的 にもう一度組 印象 一つずつの 意味 0 ŧ の文章を書く場合に たら が 文字を一つずつ拾い み立て、さらに 取れない。 から返ってくる。 す 音節· 直 厄感 文字に 0 つまり、 分解 日 は、 本 語 上 日

る文章 堆 積 面 -を口述 て行 15 書かれ くだ して録音する様なものである。 け た で直 口 ] 接視 -マ字は、 覚 E 訴 次々に紙 え か け 面 な 吸収 口述され 脳 され 裏 に あ 7

たって

記

る

例えば四

月一〇日の

頁を読

む

四六二頁中二三〇頁に

わ

程

度免

れ

種

の独立

性が生まれる。

数は二三一枚であ

九

ちょうどA

Ŧī.

版

0

大きさであ

た

ŋ

口

| が

7

字る。

で二五

仮

名漢字交じり文に

ちなみにこの

自は、

して約四百字ほどになる記載がある。

る。仮名漢字交じり文は、単語

を書き下し

たその

瞬

間

字表記という文章の持

つ、

視覚的

直感からの

距離感

心であ

文章 要 す作業が必要となる 25 が には、 あ 再 現 るように、 文字を一つず するに は テ 口 ] ĺ つ拾 7 プを巻き戻 字で書か 11 · 上 げ て日 れ ĺ た て録 本 日 語 本 音 に を 語 組  $\mathcal{O}$ 再 み立 文章 生 す を る て

直

思わ た上で、 ことで、 点を含め で書いてみて、 は、 7 れる。 それ 返 0 L 面 新たに なまでの 倒さは、 た自己 たくな ある程度 当用 П |  $\mathcal{O}$ 自然主 1 書きた ま 直 書き手に で可 . 視 日 マ字日記 が 義 記 能 V 末 小説を書く際 に とっ 尾 け 口 いれど書 なる 用 ]  $\mathcal{O}$ ては 兀 0 マ 字  $\mathcal{O}$ 帳 日 で文章 では 間 いた 面 好 に を購入し を 都 な 出 実 ŧ 合 V を 来 際 で 0 書きつ かと判 なか あ は に たも る なる 口 1 0 け た弱 啄 断 べ 7 字 لح Ź 木 < L

める結! であろう。 いう構 は、 構 メ 面 ラ 慣  $\mathcal{O}$ 想 自 1己凝視 直 化 啄木 力 果に 造 よう は た 的  $\dot{\mathcal{O}}$ 最 小 天 説 できず、 L なったことを、 弱 天才主義や高 高 • (才主 かし、 点とな 自己告白 は  $\mathcal{O}$ 価値 書 啄 啄木 it 義 木 幼少 うって、 を置 12 な 直 0 は苛まれてい 清算 自 視できな カン 嵵 「く月 Ē 踏 5 う導き出 書け 菂 か 啄木は 目指 0 12 本的 直 5 視 0 な なが 点 視 11 0 す I され 限 を迫 自 小 自 L は たのである。 っか ŋ 己 然 ŋ る思 る。 か 0 家 自 主 くう事 り認 義小 ね 生 評 己 へ の その 価 活 把 想 な を 実 識 道 握 説 12 様 を自 を書 ょ が 耐 自 式 0 核 え得 7 弱 う 己 に ī さと < ブ  $\mathcal{O}$ 1 6 L る 狭 た 内 7 た

> ろう、 する。 彼 うし 描 月二日 7 一人の 6 写や 口 ても É 1 その ために 無い 施 家 借 0 7 日曜日、 焦点が 族 L 金 )後の .袖を振ったその結果として、 た自 É 癖 日 記 下 犮 ع -宿を探 当た 人人に 窮状のことは考えない。 表 分 とい  $\hat{O}$ 食い詰めてきた故郷の後輩達の訪問 裏をな にるが、 後先を考えない 対する自 え ば Ļ す 時 手付を払 非 私 己 常 中心 は 識 窟 美 な 诵 厚遇がそれ 菂 金 11 V 使 に な考えなどに、 自らが 天婦羅 無謀もする。 V お 0 け 荒 る露 2陥るで、 であ を御 骨な そし あ 走 五. تبلح

は、 を通り が 過ごす。 上 厚情を示した前 ŧ  $\mathcal{O}$ た るために `見え 下の また、 で豆ランプが 小 ハ 奴に似た ナコとの会話 何 7 ように漏 の部 0 後 その後、 腐れ畳 前 後先考えな ない 悔 て、 屋 借 0 で、 ハナコと入った空家は、 ŋ 念も起こさな 蓋平 ども 0 Ĺ 日 ただただ切なく哀れである。 らすくだりは、 上には 下宿 の土 とその後の交情も描写して た給料で私娼窟 啄木とハナコは、 館 ŋ いといえば、 に 花 曜日夜、 戻 /滞納 長火 古時計 ŋ かった。 鉢が置か のため火鉢に火もなく 着物 が 啄木 妻への 物憂げ に この のままで横にな 入り、 は 夢のような れ、 裏切りという義憤 狭く汚く、 故 郷 に鳴 本来 そのネコ そこで出  $\mathcal{O}$ 「ふしぎに予 る。 V は 後 妻子 . る。 輩 時 そ た 屋 って、 間  $\bar{\mathcal{O}}$ 板 根 <u>会</u> E 5 釧 隣 . 送 を 寸  $\mathcal{O}$ 惠

五 口 7 字日記 の 中の | 啄木 の苦悩 口 ] 7 字 白 記

の浪 ため れは、 啄木 で食事をするか 金が入ると、 どうし 朝 L あ 費 7 る 見 日 れ きた家 費 だ 0 え 0 浪 た 行 け 7 聞 る 妻子 では ず外 動 友 費である。 社員とし めに準備 ること、 啄 族 走 私娼 な 郁  $\mathcal{O}$ 的 0  $\mathcal{O}$ つて、 扶 苦 \ \ \ 雨 扶 要 洋書や そし , 養 資. 窟 7 悩 できない 因 0 養 言う では、 毎 義 に走るか 小 は 『金を用· 月二 てその その苦し 説 は 務 花などを衝動 の書 履 「寺育ちという なぜ浪 五. 年 行 げ 円 ため 立 的 が 前 な みを紛ら 7 活動写真を見 0 0 5 給 のふた 費 上 V に 明 内 時 . 必 れ 料 膫 京 してしまうの 買 要な 啄 な を な 以 0 特殊 つで ŧ 期 わ いするか 木 来 Š 1 らう 金 限 た は せてきた  $\mathcal{O}$ な あ カン 銭 を 日 て酒を飲 0 える。 ? 生態. ŧ 少し 啄 が 延  $\mathcal{O}$ か ? 原 木 自 0 ば 要 など でも 結 大 が 7 因 1 果 W そ は 京  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 迫 が

包み う記 明治 尚 ケ カン は 天才」た 月 中 上京 無 余 で書 うに 当 た を にる自分 空想 限 年 中 ゖ  $\mathcal{O}$ 初の日記 と豪語 るが で 自 0 退 高 あ 記 L きに の才能 る。 た少 張 L に、「自 甲 2 てい 西鶴の文を言文一致 . 見る。 莀 年 7 天 詩 への無邪気な Ò 11 ít た啄木の 日から 程」一 る。 分の 我生命 夏 頭は 地 月 常 心 目 は あ 兀 に  $\mathcal{O}$ 0 大 まだまだ実際 り思 底に 日 信 胸  $\neg$ な で行 虞美 頼 底  $\mathcal{O}$ り。 想 項 で に あ ごく筆は É あ 息 うた 宇 人 草 宙 0 %を写す 啄 ただろう。 11  $\mathcal{O}$ んは、 なら 木 て な 天 か は 1 n た な を 盛

実 な

を

認

8

てし

まうことになる。

それ

は

小

年 う

日

カン

0

が

ゆ

え

書

け

な

カン

0

た す

 $\mathcal{O}$ 

だ、

恐

る

き では

は

書け 小

な

事

実

0

奥

蟠

踞

る な

自 事

分が

「天才」

説

を書こうとし

ても書

け

実」

を認

8

ること

な

のであ

る

0 4 独 り 自 由 な る

来 計 壇  $\mathcal{O}$ 8 カン 7 る それ るのだから、 は に ŧ ることが 0 成 しながら、 お 信 0 れまでの で揺 自 り立ち、 いて存分に発揮することで、 頼 がが ゖ 5 出 揺 な  $\mathcal{O}$ 人生の 一来な 少年 5 いことを オ 当然のことである。 家族 ぎ 能 つつつ 時 \ \ \ 8 0 至 0 代 た 上目的 ある自然 その 扶 ば 信 から抱き 毎 養 日思 頼 カン ŧ 天 ŋ が であ 可 分 で V なく、 才」 続け 能 を、 知 脱 とな 5 0 稿 たる自 ž た、 収 啄 てきた自 L 木は り、 執 た 入 n が 天 拗 る 小 才 確 分 どうし S  $\mathcal{O}$ に 説 書こう V Ď 保 0 5 で 0 がされ ては の「天才」 あ た 実 才 現 ても び を文 重 が 啄 木 な 出

が 思 う 定めると、 6 を貫き続 向 'n, また、 0 0 想」をみても、 た 確 稼 ぎで 行 啄 かさは明らか け、 明治三-動 木 は 0 は ものごとを理詰 行 他 食 人の 一六年・ き 文学 ベ てつい その かである。 思惑を付 • 思想的 た先 思想 啄木一七歳 け な が 8 • 生活 に徹 このことは 早熟 لح 度することは 文壇 いう *(*) 底 時 に 心する行う 生 的 お 基  $\mathcal{O}$ 一盤を 評 活 野 11 て、 1/2 論 0 な 動 V な 破  $\mathcal{O}$ \_ とた 挫 その 綻 カン す ワ グ で 折 0 式 理 た。 考え ネ あ び 知 思 的 0 0 ル 方 な そ 自 VI 傾  $\mathcal{O}$ 

まう。 中学中 死 は て以 の誘惑すら湧き上 . う その先 降 に 退 理念を否定することにつなが 抱 IJ て消 き続  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 自分の人生を想像することすらできず、 けてきた「自らが文学的 え 彼なりに文学を追求 去 ŋ が ってくる。 これ 5 Ó 日 々は してきた日 る 天才であるは それをすれ 烏有 に 帰 Z の L 7 輝 ば ず

き

らの 書け 巡りをするのである。 る「観念上の抵抗」を続け、「現実」の すり替え、 口 天才 啄木 ] い現実」と、現実の奥に潜む、「 マ字日記 Ď 性は否定される」ことを恐れ 天才性への否定的判断を先延ばししようとす 心は、「現実」か の中 -で戦 い合ったのは、 ら巧妙に逃 周 る 書け げ 辺で、 啄木 回 書こうとし な 0 ては 延  $\sigma$ い 心 々と堂 のなら 他 で 事 7 あ に 自 \$ K 0

第六章 る前 と「それを認めようとしない心」との執拗 現実」と「観念」との 日 記 それほどまでに 啄木の性格からみた「天才」意識 0 主題 の一つであ 相 克 啄 术 を精神医学的 がこだわ ることを検 る、 「書けな 観点から考察 証 「天才意識」に したが、 な戦 11 が い そ 事 0 実 す 口

あ 玾 細 る 考 が を経た てい カン . る 頑強なも 「天才」 層 近 藤 構 浩 に Ď 0 によれ で を なす あ 自負とプライド ば 0 た t それ  $\bar{O}$ カン は、 だ とい は 近 . う。 - であ 啄木特 藤 典 ŋ, 彦 中 が 有 詳 そ に  $\mathcal{O}$ 

ک

0

Ī

反対な

大思想の

各

を、 必

聖壇

握 翻

楽聖ワ

· グネル

が

現は

した

「意志:

張

の

愛」

0  $\mathcal{O}$ 世 前

L

た者と見

6 る

れ

意志

消

滅

を 端 拡

要条件

6

n せ

た

「愛」は

ワグネル

の天地

に入つて意志融

0 惟

烈な

くて整理

てお

意志に に かれ 啄木二〇歳時の渋民日記にこうある。 ことを躊 主 6 軽 0 一義」の 於け Ó 視 外 る。「一元二面 元二面 郭 天 大 る最大発見の一つであつた。 帰したシ 才 に 躇しない処世観がある。「天才主 は 実 現 を教 観」と呼ぶ、啄木天才主 層 層 0 に た 化 ヨウペンハウエ 0 は め 観」とは何か。  $\mathcal{O}$ 借金 に 対 には、 八才主 象とみ 癖 義 実生 • 生業軽 Ś ル が配置されてい 民衆 明治三九年三月二〇 活 0 0 (中略 世界観 観 糧 義 視 「宇宙 を他  $\mathcal{O}$ 0 ·家族扶養 保持 理 義」の外層に この 者 は、  $\bar{o}$ 論 に依存 的 根 などの、 る。 総括 論 十九 本を絶対 玾 天 世紀 が Ē す 上 は  $\mathcal{O}$ 

と正 源 彼 誤 己  $\mathcal{O}$ 拡 11 て か。 平等 影を一 発 道徳 泉 張 の予言する新時代は、 水から 反対に、 自己発展に である。  $\mathcal{O}$ 天蓋 出 層敷衍 は同情と弱者 ニイチエはまた、(中略)人生の 0 下に したの つが 同情 の二条の ありとする個 と権 集まるの社会であ 生 がトルストイ伯  $\mathcal{O}$ (中略) 凡ての の二大 道徳である。 流こそ誠に興 威 換 公言すれ 根 人主義を立 本 事 保め 実 る 人が ば の人生観であ ぞ は権威と強 意志を あ 自 る 一てた。  $\vdash$ 真諦 他 る 対 照で ス 融合と自 中 ば F 放 同 者と は 意志 棄 る 1 な

再び人生の大海に流 る愛と変じた。二条の流は、ワグネル れ出されて居る。 の (後略 胸中に相

人生 この ある。 の語 ける最大の事業である。 意義あるものとなつた。この一解が乃ち自分の今迄 さらに渋民 0 義を拡張 理 ショウペンハウエルに従つて宇宙の根本を意志と の意志に自己発展と自他融合の二面ありと解する。 想 あって、 は、完全なる基礎に立つて、 '日記ではこう書いている。 「意志とい って、 自分の二十年間の精神的生活が初 愛を、 (中略) 自他 |融合の意志と解くことで かくてワグネルの示 初めて真に我が いふ言葉 した に於 8 7

最高最後の目的となつたのである。

のが「天才」という選ばれた存在である。「天才」 融合」の二面がある。 に「意志」があり、 啄木の言わんとすることは、こうである。 のためには、 その意志には 他者が 宇宙の 「意志」を最も体現 「自他融合」して惜 「自己発展 宇宙 」と「自他 えしたも L  $\mathcal{O}$ 0 みな 根 本

ひっさげて上京した啄木が、 0 る性格 持ち主であることを示している。 傾 向 は 明らか では であ ŋ, 破綻必至と思わ 緻密か かろうじて生活を営めた背 つ観念的 啄木 れ るこの な思考形 理 態 勝

であ

この は

論

ひとつをとってみても、

0

知

に

の実現が

かられるのである。

まことに巧緻な理論

7

く貢献することで、「天才」の実現、すなわち宇宙

の意志

常人 日新聞 れ 景 を繰返す社員にきわ な意志の持ち主であった妻節子、 という二人の友 た優し 定 つでは 社 は考え難 など、 い他者の存在 木 0 枚挙にいとまがな いう 人、愛の 支援を続 (「自他i めて寛容な があったことは、 永遠なることを信 がけた、 ]融合」 勤め先であった、 を通 金 田 非常識な欠勤や前借 L いうまでもない。 て彼を助け 京助と宮 じ続け 東京朝 る強 てく

第七章 えられ 東京 心理的に天才主義の牙城に立て籠もる啄木 朝 日新聞 ていたのである。 森田神経質理論からみた『ローマ字日記』 聞に就職 するまでは、ほとんど他人の金で支 の生 の中の 活

うかが 医学的 力 の が、 啄木 に る心」には この日記を「近代文学の最高傑作の一つ」たらしめ  $\mathcal{O}$ 関与 側 ともに超 面 源泉と指 知識 えるの 桑原武雄は、 のうちの一つである、「本質を直視することを恐れ していることに気づく。桑原のいう、 とともに読 である。 摘したが、 一級の強さと執拗さを持っていたことが 下 相戦う「事実と心」という二つの んでいくと啄木の性格 視点を変えてこの日記 神経質の性格特 特徴 相戦う二つ を た魅 側

:神医学者に、 が としての神経質 いる。 森田正馬 田 が をを、 着目したのは、 (まさたけ) わが 国で系統的 (明治 多様、 に理 な神経 論 <u>T</u> 昭 和 7 た 0

三

傾向 を是 質症 社会生 6 症 間 感 状 れ Ī لح そ る 0 0 0 性 備 することで速 表 活  $\mathcal{O}$ 背 性格/ 格 え 現 全 後 7 チ 支障 主 う 傾 に 事 義 ること、 傾 11 向 は る 向 をきた か 実 的 正 表 で  $\mathcal{O}$ 性 内 負 あ 格  $\mathcal{O}$ やかに解消する 現 向 側 神 L  $\hat{O}$ ĺ る。 等 的 た場 経 側 た 面 0 そし に気づ 質 to 神 自 面 症 合  $\equiv$ が 経  $\mathcal{O}$ で て、 0 12 前 質 内 くことに 何 症  $\mathcal{O}$ 景 性 省 に出 神経 ば 状 み、 5 格 的 カン は 病的 が りか その 性 質 ることに 心 ょ 格 意 そ 共 配 症 傾 義 0  $\mathcal{O}$ 通 性 て、 その 向 状 は 1 ょ 7  $\mathcal{O}$ な な  $\mathcal{O}$ 小 社 性 偏 神 認 つ は い

経

兀

月

 $\bigcirc$ 

日

0

項。「

想そ

0

ŧ

 $\bar{\mathcal{O}}$ 

は

P

はり"Life

7

るあ を を 意見 な症 口 他 恐 敗 澼 を 状 ま 0 方 7 る ŋ 原 求 聞 が 質 を優先 8 者 あ 大 カン 4 た ま ま 真 ず 5  $\mathcal{O}$ ŋ 大摯な う。 明 性 れ E また周 る 格 他 てし 反 傾 優 あ 0 0 省  $\mathcal{O}$ 先 た 向 カン 事 ぎまっ す に が 0 囲  $\mathcal{O}$ 象に H て は 負 べ が 自 た結果、 き課 特定 一来な ŧ 見 説 0 転嫁す Ž 側 に ず、 題 0 以 執 面 V 玾 前 着 が が ることで反省を怠る。 失敗 失敗 する 強調 あ 由  $\mathcal{O}$ カ え 0 を 成 ※を繰 っされ 功体 あ って自らを つけ て してもその ま ŧ ると、 て、 ŋ り、 験にこだわ 返すこと 自 説 行 周 更な 原 ど 動 开 か 因  $\bar{\lambda}$  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 

段

何 0 天

カン

る 窮 れ 地 6 に 追 精 1 込 神 W 医 学的 で L ぼう。 候 論

8

に な 対 表 比 11 記 節 L す 囲 7 á で抄 みると、  $\mathcal{O}$ 畄 L た 驚くほどに 上 症 仮 合致 名 ع 口 漢字交じり文として 点が ] マ 多 字 *\*\ 日 記 文意を損 0 記 述 とを ね

だとし ない を偉 おい てくれ えることだ。 でなくとも、 てい オで ら予 の は は 復 時 だろう?事 書き続い 分ら 0 間 ような気 のことで 1 たことは たもの はなか 電 の心 ても、 題 ぬ 車 と思 心 0 答えは それ 。」これは け  $\mathcal{O}$ に起こった  $\mathcal{O}$ しかしこの問題の先に \*業? を含 った それ た が 中 あ ってい 嘘だ。 底 地 を避け 道 0 す ば った。 カン 我」 に働 決 Iめて だが á。 か なし 恋?金?金もそうだ。 5 b<sub>o</sub> 理 求 ま 啄 た 予にとっ たい とい には ŧ 読 って 8 いて金を 木  $\mathcal{O}$ 家に は、 7 む書 種 近ごろ 売れた小 0 う自 11 啄木は、「 わ 欺 生 0 い ずか る。 くと ての きら 革 る 瞞 偉 いると何 <del>,</del>命  $\tilde{\mathcal{O}}$ 己 カン で 予 V は、 せぎ、 あ い  $\dot{o}$ は は 0 売れ 説 第 n とはどん 一編だけ、 急速に は、 「予の求 る う 心 . る 安 <sub>正</sub> 一義では ĺ か  $\tilde{\mathcal{O}}$ る小 心  $\mathcal{O}$ この 小 こしなけ 最 だ。 妻子 鴎外 体 か 説が書け 淮 カン 8 説 に な だったの t が押売 さこと 今朝 の上 去 Ź 0 を書くこと あ 暢 な 〇 ケ そ 気な る ń 年 直 れ 京 か か 予 る ば 視  $\mathcal{O}$ 月 なに備 が 文学 0 だ。 ŋ な 0 知 は 手 待 そ は 6 7 n

格」 医学 て性 生

忟 影  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 

す

Ź

議

論

石を投 そい

じた。

大正

八

年

0

こと 精

で 病

あ 人 神 0

彼 れ 影響を強く

いく受ける

た精神医学会

一での 当時 きの

神

活

循

環

が

れ

そうし

た気

づ

連

続

に

ょ

会

格 V)

格 Ē

陶 好

冶

ŧ

望

ま 生

れ ま

ることを主張

į

K

ーイツ精

往 ぬ

る。

れには に行 ぬ。 ころへ行きたいと考え、 は、 襲った。 作家としての前途に暗雲が立ちこめ、深刻な不安が彼を 心がある。」と続け、 べてに対して戦うこと。これは勝つ、しからずんば、 ただ、二つある。"All or Nothing!"(すべてか無か わずし かし負けることがない。負けることのないものには安 、字日記, も一つは、 問題 て疲れたのだ。」「世 「赤痢」 の真 浅草の この不安の根源を見つめることが恐ろしい啄 ならでは 0 所在 私娼窟に出入りしたことを告白する。 の失敗、「鳥影」 何者に対しても戦わぬ。これは勝 をはぐらかすために、 の凄絶な記述が続くが、 自己の直視から逃避する。 それを忘れるために、  $\sigma$ 中を渡る道が、二つあ の連載打ち切りが 、人のいない それについ 去年 活動写真 !)」「す た あ ぬ Ò لح 木 暮 死

> 価 純 示す。 影

に

注

意

が集中すると、

その感覚はより一

層

鋭

つまりその感覚と注

意 敏 . 対

相 な 0

とら

ゎ

れ思考」「精神交互作用

(ある感覚に

て過

度

その感覚が固着される。

な響しあってますますその感覚が拡大され

る精

渦

程 互に

化」「全か無か思考」「自分の欠点の拡大解

いわゆる「注意と感覚の悪循環」)」「防

(森田正馬は、これを「部分的弱点

の絶

視

と表

現

釈 衛

B

鳻 制

小

評 単 を

機 神 が に L

0

とされる「幼 すべてが表現されている。 解いてみる。ここには、 この日の 「執着性」「心配性」「自己内省性」「強い生 記述を、 弱性 神経質者の 特徴である、 神経 神経質の 营 性格 0 兀 「依存: 負の 傾向 つの基本的 側 0 性 観点 面 品を助長  $\mathcal{O}$ から読 欲 特 求 徴 す で

ての論考は本稿の目的ではない。

口

域とされるサインが多発している。

れる。

さらには、「運動観

した)」といった、

神経質症に特有の傾向

が

明 対

て常に変動するという見方)」と「両

面

観

くある

べし」

とい

. う 理

現実 馬は

 $\mathcal{O}$ 

自分との

式にも「思想の矛盾

(森田正 想

向」「自己中心

性」も、

記載の

をこう表現した。)」「思想の矛盾をきたす最大要因として 随所にうかがえる。 神経質者に 矛盾 あ 観念的 思考様  $\mathcal{O}$ る カ 傾 る あ 4  $\mathcal{O}$ る売 思考が 機 なことに気 忠実で他を顧みることの少ない  $\mathcal{O}$ か を加えてみたい。 なか 制 観念的傾 日々を考えて鬱屈する「心配性」、自分の真 やや専門的になるが、上記の問題について逐語的 0 'n ? 売れ 偏 単純化」、 る小 る「思考の矛盾」と、自らの「天才」意識に 説を書くということから目をそら ない づく。 向」と、その 生活に窮して上京を迫る家族のことを 小説を書き続ける「執着性」、売 まず、 その 細部 四月一〇日の記載の全体を覆う、 観念に引きずられ を見 ってい 「とらわれ思考」 くと、 奮 てものごとの せ  $\hat{O}$ 闘 る 欲 れ 求 な 7 が 防 頭 であ V (T) 注 先 J 釈

欠如なども明らかで、全般的にみて神経質症発症の危険 価は多方面から把握しないと判らないという考え方)」の (ものごとは状勢の変化に (ものごとの 一様に 認め ょ 真 0 6 - 125 -

強く 0 顧 だに 神 運 地 、疑わ 状 道 熊 観 な L 'n な 生活を始 が るのである لح ほ 自 لح 両 巨中 W め 面 ど神 観 ることによる 心 性 経 0 質 欠 如 症 浪 など、 低費を慎 0 水 状 準 況 この に 0 W 改善を あ で勤 当 0 たこと 時 8 j 考え  $\mathcal{O}$ 人 啄 لح 木 な

のいて

11

その意味

で、

神

経

歴質とい.

くう性

格

を有

7

いた啄

木

それ 年間 神経 との う問 まで具体 を頓挫さ 観 啄木が恐れていたのは、 念上 は 実 0 ここで 恐れ 破 を を認 執 題 理 書 想 は 綻 他  $\mathcal{O}$ 拗 12 せた後 恐れ 論 な戦 的 め ゖ あ る L つい  $\mathcal{O}$ 人 0 な 向 た現状をこそ恐れ の観点に立てば、それは正確な見方では らためて、 頓 てしまった後の自分を想像することであ 金で生きてきた事実、 実 に なのであ 1 て考えてみる。 11 の自 事実」と「それを認めようとし ŋ 頓 を活写したもの、 の恐れ 返 着  $\mathcal{O}$ 生活 らの せ ず、 る。 啄木 に 書けない事実そのものではなく、 心の では な ではなく観念としての すなわ る その は るの なく心 が 混 さきに筆 何 乱を、 事 .と戦 のだが、 と表現したが、 啄木 ち、 実 が って 普通なら 0 上京 ただひ 混 が 自 者 恐れ 分 啄木 は 乱 11  $\hat{\mathcal{O}}$ 以 た で 来のほ あ たすら は その生活 0 る 玾 口 ない 恐れ  $\tilde{\mathcal{O}}$ そうし ] り、 想 カコ は、 森 0 7 観念 追 字 な ぼ لح あ V) 田 V ) Ś 求 た 日  $\mathcal{O}$ 自 基  $\mathcal{O}$ 1

で

あ

る

俗 実 場 ること 制 0 が恐れ (態が 0 答に 兆 諺を引用 感 L じ方次第とい もできる。 ŧ つかみづらく、 を助長する、 見え、 す 様 h 相 ば、 そ が 異 これ Ō うことにな なってくる。 目に見える変化 目に見えな という悪循環に陥る危険性が 恐れが行 が 心 0 0 中 動を縛り、 てし からこそ、 Ó 改善も悪 を糧 観 ま 念的 12 い その行 化 な さら 何 ŧ 恐 ょ ħ 12 ケは 動 りそ 当 であ 努 高 0 0 分 抑 本  $\mathcal{O}$ 

その 5 に 上 7 0 0 に自らを窮  $\overline{\mathcal{O}}$ 恐るべき事態 まかせな 恐 高 症状を現し 度な理 n にとら V 事実 地 知 て でで 的 に追い込むという、 わ れれ、 V は に 傾 なく、 直 た時期の 向 面 ゆえ 浪費や女色に L 自己 て、 記 文壇 録 0) 実 生 理 が 逃 活 まさに神経質症 想 菂 避 口  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 野 7 破 1/2 ] 頓 挫 綻 ることで、 マ字日記  $\mathcal{O}$ لح لح 実 現 Š Š が とし 現 思う な さ 実  $\mathcal{O}$ 

な治 様 n 神 創 8 式 T 経 この 始 をあ É 療 有 質 章の 症 方 n 効 りの た 法 な に 4 定 は 治 悩 冒 ままに む 頭  $\mathcal{O}$ 0 療 法 人の 多 で 0 で 則 道 くの 紹介 あ 感情 見つめること る。 性 を てした森 患者たち が 拓 そ あ 0 1 動  $\mathcal{O}$ ることを見抜 たことに きと、 田 治 療 正 理 馬 (森田は それに あ 森 0 | 偉業 る 田 療 これ まず ま 法 は、 そ 2 0 لح 事 こうし わ ユ j ょ る = 実 きわ ぞ ]  $\mathcal{O}$ 0 実 た あ 7 動 ク

来る。

改善

のあ

ため

0

努力れ

を重ね

れ

ばにに

6

か

0

変化

ħ

は

他

者

0

何も

え、、

共

有

用」 唯真 程における働きかけ 念も変容 で感情を ものであ 質症発症 る「事実」 ロメカ の結 = は置 0 る ズ 果として起こる「とらわれ」とい じつただし 具体的, か L お かないとした事実本位の姿勢にある。 症状 を打破することによって症状 いて重要な、 田 感情 の卓見は、 な改善度 打 破 ん)」と呼ん の効果測定は、あくまでも目に見え が の道を拓こうとする :変化することで凝り の 思想の矛盾 把握 まず行動に働きかけ だ。 に置き、 か 」や「精 5 主観 を改 う特 始 が 固 Ø 的 善 有 ま 神 に導 な改善 そ Ś 交互 0  $\mathcal{O}$  $\tilde{O}$ た観 神 心 過

Ü

の曲線 なる。 その その 法則 によりますます養成される。 ようなものである。 ことで 一の感覚に慣れれば、鈍くなり不感となる。 刺 性 動を満っ あ 激 をなしひと登りしてつい が が る。 あ 継 情 ることを見出し、 森田理 足すれば、 続 は ĺ 新 て起こる時と注意を集中する時に強 L ①感情は、 論 1 経 による 急に静 験 によってこれ 「感情 それを治療手技 まり消失する。 には消失する。 そのまま放任すれば の法 を体 則 台とは ④感情 ③感情 以に応用 得し ②感情 以 は は Ш 下 反 は、 復 形 た  $\mathcal{O}$ 

心 ·で自: 現象と同 は 然 感情を評 反応 じように」自分でコント として起こるも L 7 内 なる自然」 ので、 と呼 口 自 1 ル 然界 び できるも 自 お 5 け  $\mathcal{O}$ 

夜、

Ш

5 間

原

稿

催 0 ため、 とか

促

 $\mathcal{O}$ 

電

話 出

 $\mathcal{O}$ 

期

及んで、

仕

送りをせずとも何とか

して食っていくだろう」と

5

汽車

改

正

勤

は

一二時、

引けは

六時 今日

わ

が

母

と妻

は

何 ŧ

して食ってい

くだろう。

カ

生

は

そん

暗

しくも

な

V )

予が

金

を送ら

絶 な  $\mathcal{O}$ 0 な 創 では、 いということを、 Ϋ́, 始 理的 なく、 は 大正九年とされ、 戦 それ を余儀なくされ を排 繰 ŋ 除 返 L 啄木 た L . り、 述 た時代 が ベ てい 口 自 ] 在 に操 0 る 7 は 字 る Ħ ħ るも か 記 0 後年 森  $\mathcal{O}$ 中 田 0 で壮 療 では 法

玾 作 経

たる。

てこの

0

法

予に を楽し なるべ 光が、 に た。 に 族を養えばならぬ責任 帽をかぶった人を見た。 下に引用する。 からだを洗い け なっ た湯屋だ。 則 偶然ではあるが、啄木が巧まずし ここは去年東京に来て赤心 0 、くそれ しんだ時: た。 青葉の くらか熱し た行動をしたと思われる記 赤心 影が なが 代 を考えぬ 一枚ガラスの窓に 四月二一日の項。「昨 で 館 た若 5 あっ のひ ゆらめい た。 追懐にふけった。 ようにし から逃れ と夏!それ い快活さを与えた。 夏だ!九時に てい 予は は、 館に て た。 その頃より健 ているのがうれ は、 載 "半独身者" 戦がみられ V 予 朝のすがすが 月 たとい は、 た頃、 台町 は 電車 入浴と追憶とは 「感情 予 れ 0 一年前 は 半年でも よく 湯 康 'n る の気持 中で、 若 に 屋 しくて、 なった 、行き へ行 心 V 家  $\exists$ 0 0 夏

田療法の

神髄は、

こうした人の感情の動きに

以

下

 $\mathcal{O}$ 

日記 したあと って は は 重 意味 を締 早 責任 「莫復 中 起 の心 -で盛 きを は きわ めくくってい 問 蓋 持は ま しここに 七 出 L  $\bar{+}$ 時 て歌 ŋ 首 代 な 例うるもの を作 る。「何に をまとめ、 が、 あるのだろう!」この 知己と言葉を交わ b, その もなく楽 の 記 限 らず一 以下 次 載 を の二三日 -の言葉 ï Ū V ) į た 日暇なく仕事 37 人生の ように、 でこの 夜ま 12 日 は 0 で 诵 真 日 カン

な

のかの

日

にあ うなじ載せ/ゆるく息する物思ひ 筆者にはこの の歌がある。  $\overline{\phantom{a}}$ ったと思われてならない。 握 の砂』の「手套を脱 初出は、『創作』 明治 四二年四 月二一日 明治四三年五 んぐ時」の 朝 かな 0 湯 0 章 -の三首 入浴のことが念頭 0 一月号であ /湯槽のふ 目に、 る ちに 以 が 〒

間

続

月二〇日までの

鬱屈とは様変わりした記

載が

以後数

H

四 の

自ら 本 てくる。 啄 取 東 ŋ 身体をこすって垢を落とし、 Ō 京暮らしで垢じみてきた着物を脱いで、 身体 移 か  $\mathcal{O}$ るく深 み 森田 動する。 た子丹念 入浴 0 1 目 は 言葉で言えば 息を 0 に洗 前 書け 湯 行動その うく。 船 0 つって、 入浴とい な に V つかり、 身体 ŧ 先 湯船 0 0 . う Í E が 入浴 専念し 「目的 うなじをその 洗い場で滑らぬように につかる。 分 温 行 ま 勤 姿 ŋ た結果、 本位 を恐 E 汗 「事実本 浴場に 」になって ħ が 石 吹きだ 鹸 縁 る でを泡 そ に 入る。 気 . 載 欱  $\mathcal{O}$ 分 間 廿 7/ L

> るとい 養 新 細 を じて作歌に励 る。そのことで、 な感情と気分本位 自 本位の行動は、 0 11 成され 快 集中 ľ な、 戦 分と、 たは V く経験に ٠ ځ の感情 - する時 ずであ しかし日常 その事 る。」 よって、 目的 がみ、 よってこれを体得 好例とい 強 本 実を直視し 「④その 感情 時的に影を潜める。 位 曲 平出 生活に深く染みこんだ行 のすさんだ生活態度が く」な 一時的にせよ  $\mathcal{O}$ がりなりに 行 の法則に沿って言えば、 からの原 、える。 動 り 刺 に て認 増幅され . つ が継 なが į 稿催 ŧ 消 めたくない自 締 退 続 促 り、 8 したことを示 反復によります まさに、「⑤感情 切りに 続けてきた不 0 て起こる時 それ 電話 、入浴という些 為 のも ま 間 12 で に 素 書 合 直 た と注 لح  $\mathcal{O}$ け /ます お 5 愉 0 気 7 せ

動 もとの苦渋に満ちた生活に舞い  $\mathcal{O}$ だが、 を、 あ とは、こうした本質的に 気分本位にではなく、 啄木 は その後、 月末 目的 0 快」 戻ってしまう。 下 ·宿 本位 0) 代 感情をもたらす行 取 ŋ 継 立 続 てを機 すれ ば よい

第八章 け を 堂 啄木がこの日記を書き始めて一ヶ月余。 読 た逃 Þ 七 巛 W 日 りを続けてきた啄木に、 避 , · 行 『ローマ字日記』の世界との別れ~啄木 記載 少 動 んく思い当たることがあった。 へ の が、 自己嫌悪に それである。 苛まれなが 変化の兆しが現れ 夜、 枕 0 事 上で『 , 5 実 E "National 観念上 新 目 め 「をそ る。 小 回 心 五. 0

世文壇 味にあ 評論 味する評論を通して打破する可能性を見出したものと思 模倣した小 きこと、 life!"それ 文芸 0 ŋ に 在 於 の三点を主張した。 説 価 け 小説の中にもこの における行き詰まりを、 値 る い 啄 て評 は人生や社会の実際 (National life) 木 論 が 0 読 が 価 W 小 値 だ 説 0 であ 啄木は、 評論の立場を取りいれる に後れをとってい は、 田中 る。 National life 喜 自らの自然主義を その中で田中 一 (主 堂 談 を吟 は、 の吟 近近

ベ

きた世 であ にな 差し が である。 この発見 訪れた。 る。 徹底的 らった。  $\overline{\mathcal{O}}$ 一度方針が定まれ 自分の 中」を見 木にも、 は にそれを推 樽日 大 外に つきか る目 報 や釧 った。 ある人生や社会 さい が、 し進めるのが神経 路 ば 新聞 ようで、 啄 再 水木の び 開 勤 直ちにそれに 務時: 自 カン 質的 ħ の実際 己を見 代 ることに 品には大 位質者の 養 0 取 わ · 向 め 八きな. 性格 り掛 'n 続 な かうこと た 0 け た た眼 傾 カン 生 化 向 0 0

われ

して、 予定より一 あ までの啄木 間 五 評論 月 岩手 二八 小なら、 時間遅れで到着した妻・節子、 て六月 胃 日 日 報 カン 弱 ら 二 通 小説を書い 信 目 週間 盛 全 五 尚 宮崎 12 に ては |回を書き送ってい わたって日 お 郁 け 雨 る 途中で断念したも 地 伴 域 記 われ 振 娘・京子、 興 0 て上 記 策 を題 載 野  $\mathcal{O}$ それ な  $\mathcal{O}$ 材 で ع 11

えられ

る 力 喜之床 シ に おさまるところで、 田 京 助 とともに 出 П | |迎え、 マ字日記は 東京 での新 終わる 居とな

月 五 子 とあるまいと思ふ。 述がみられる。 子  $\mathcal{O}$ に  $\mathcal{O}$ は、 お , が 盛 確 0 同 日付け 居早 母 強 執 岡 読 で さんくら 1 の実家 者 筆跡 あ Þ この胸 った の妹・ふき子宛の手紙には、さらに深刻  $\mathcal{O}$ 啄木が で冒 右右 い、 0 を突く激しさが とは 頭 母宛に出した手紙からうかがえ 0 東京はまつたくいやだ。 えじのある人はおそらく天下に 気に書かり 胸が 直 面 上京間 L 肩からあ れた たのは、 ある。 ŧ 「東京は なくの ばらの処まで痛 夫婦間 次い 六 V 、 で 書 やだ 月  $\mathcal{O}$ 九 齬 カン ħ る。 目 影と嫁 0 な記 た七 文字 節 姑

社 家族扶 きた函 およそ半月 月 京して同居を始めた節子の目に映ったのは、生業を怠り、 九月 苦しいながらも の文字が見えることから考えて啄木は節子到着から 養 0 [館での暮らしを打ち切り、 啄木からの郁 0 義務を軽視する啄木の姿だったのである。 間 ŧ  $\bar{O}$ 間 「兄さん」と慕う郁雨の 欠勤して七月一日か 雨宛ての書: 簡の中に、 義母 • . ら出社 力 ツの主 援助で営ん 日から出 たと考 導で上

ŋ́, に浅草に遊 明 治四 此処に住むものは皆女なり、行人を見て頻に 年日誌、 時 is. 間 を一 凌雲 年ほど前に巻き戻してみ 月二 閣 0 北 一日の項に、 細 路 紛 夜。 広 たい。 大 金 田 なる迷宮 挑む。 君と 啄木

共

0

あ

出来 啄木 子は ザのたぐひではないかと思ふと何とも云はれません。 るでせう。 塔下苑と名づく。 ませ -が 偉 郁 ることを、 雨に宛てて、 間に杖をひきて帰り来る。」啄木 Ā くなれるかなれぬかは、 が 大才をもちながらいたづらにうづもるる、 濃厚に疑わせる記述であ 誰 これ しも偉くなろうと云ふ自信は持 こんな手紙を書いた。「葉月二十七 地 上 0 仙 境 神ならぬ身の な ŋ 0 る。 道念が 時 同 過ぐるま じ 溶け 知る事 つて居 頃 月。 ゲ が 飾 Ŕ で

'n

啄木の本質を見る目は驚くほ

ど確かであ

る。

すめら まう。 たの りの 果たせず、 気まぐれ ゲザは、 いちずに 前 傑作 の主人公である。 ħ が 後年そのことを深く後悔して再起 |啄木 てこの で、 木 も書くが 森林太郎 年老い  $\hat{\sigma}$ 中  $\sigma$ 地道な努力を怠って、 才能 作品 7、長続 ていく。 時 面 (鷗外) 記を読ん 影 として を信じて彼に バイオリンの才能 が きせず、 見えてし の『美奈和集』 でい 節子は少女時代 (あるい た じまい、 のである。 付いてきたの アル は、 才能 コ をはかるも ] しば に秀でたゲザ  $\mathcal{O}$ にまかせてか ルに 中の 安になっ 以 しばかも (来節子 だが 走 啄木にす つて 篇 7 0 は、 目 L な は 埋 い L  $\mathcal{O}$ 

半月 したことと思わ を 再 び 毎 萌 日 見 治 ħ 7 四二年六月に戻す る。 暮 5 それ Ū た節 は 子 田 は、 中喜 ٤ 陰 に 出 陽 0 勤 近近 15 L な 啄 世文壇 木 を批 夫 を 圳

> を、 外 於 ことに成 0 に 掲載 貢献 に ĩ 小学校を舞台として展開され 当 時 Ź ts. ずる。 され 評論 け 功  $\dot{O}$ て開 た小 した佳篇である。 玉  $\mathcal{O}$ 同 価 民生活の カ 年九月中 説 'n 値 てきた啄木 「葉書」は に接 要を得た描写を背景に淡 旬に書かれ、 L て以 二〇世 0 視 る、 降 野 0 人びとの心 紀 をさら 思 初 索 ヹ 8 バ 0 に広  $\mathcal{O}$ 中 ル 東 ス々と描 北 理 げ 0 徐  $\mathcal{O}$ ること 0 ア )月号 田 Þ 舎 Y

とかの 信 は を過して、 は、こんな記載が現れる。 あ 8 れ て見る気を起 を書 あれ 出 ば借金するを何とも思はぬ るまじきかとの一案に御座候 葉書」執筆後 来るだけ罷 ば 电 1 却 て送ることにし 薬 Þ 小生も近頃は元気恢復、 出 餌 し め 候 来申さず、  $\mathcal{O}$ の九月二八日、 料 居候為 は足ら 唯困 て地. [り候 ず、 それ 創作 気も張りも 方 ŧ Š 子供 のに候 は、 0 で思付き候 などは 新 渡戸 新 以は暴 荊妻、 聞 やるだけ ,仙岳· ひし 脱け 11 定の ĥ < が 6 3 る た 宛 局 社 にやう は 所 7 貰 (T) 事 0 近 0 方 前 頃 肋 は 書 毎  $\tilde{o}$ É 日 は 膜 B 簡 夫 務 诵 ħ 木 炎 0 夏

寺の 面 坊ちゃ 質を育 た現実生活 ん育ちとい 自ら (T) 被綻 Ď 天才 う特殊 に自己変革を迫られた小説家 意識を がな環境 固 く信じ続 の中で、 けた結果、 濃厚 神

直

不

は

地

新

聞

0

業

定求

8

るという

健

全な生

活 控

態

度

は、

社

の仕事をして給料

を稼ぎ、

借

金を

が

表明 户

され

てい 方

る

者として、妻・節子の産婆よろしく、ここに産声を上げの「真面目」の大切さに気づき、新たにまっとうな生活啄木は、『ローマ字日記』という陣痛の中、「国民生活」

たのである。

 啄木なら到底成し得なかった、「回心」(井上ひさし)を をこれほどに追い込んでしまった自分の問題点の余すと をこれほどに追い込んでしまった自分の問題点の余すと をこれほどに追い込んでしまった自分の問題点の余すと をこれほどに追い込んでしまった自分の問題点の余すと をこれほどに追い込んでしまった自分の問題点の余すと

黄金 名編 となった。 以降の啄木の活躍は目覚ましい。 おり、 の明治四三年を迎えることは、 集長として慕われ、 『ローマ字日記』と節子の 渋川玄耳は、 歌 啄木入社に力を尽くした佐 入· 石川啄木を育てた名伯 東京朝日新聞社に 到底出来なか 力なくして、 かったの 啄木が 楽 北

果たしたのである。

#### 選 評

#### 安 東 瑄

労だったが て読み応えがあった。読む方はひと苦 評論とも上位に質の高い作品 い数で驚いている。数だけ なので一 9篇だが、 本 年 度は 篇として扱った)。 6篇は同一作者 小 図書館当事者の蔭の労が 説 15 篇 評 論 で Ō 4 近年 なく小説 短文連作 篇 が揃 にな (実数 0

ら受付順に寸想を書く。 館の理解を得た。 1 篇 説評論とも入選 を加えた。 例年にない 以下小 3篇、 説 い数だが 小説は  $\mathcal{O}$ 入選 佳作 作 図書 カン

感じられる。

くる。

以前ミステリの連作で入選歴

持

つ作者の筆力は確かで、複雑な

話

 $\mathcal{O}$ か

事件は、 す夏のな 立たれ 1 初老の男が、マリーナの 少年との交流  $\mathcal{O}$ 一々木淳 をひくように、  $\tilde{O}$ 終りの日 病院を息子に任せて引退  $\exists$ が、 「潮風のブル ツ 1 どこかわけ ロ々を描 のほかに事件ら 5 日常 (ース」。 はそれだけで  $\mathcal{O}$ ヨットで暮ら ディテ á 不登校らし りげ 妻 な初 L に V た 先

> かに をしっか もうまそうだし、好きな音楽 力をさばいて食べる手料 り書きこんで読ませる。 理 好物 を聴 は

には、 日 カン きビール はないが男の人生の哀歓が伝わ の岸壁で青年は、 つての の男の話を聞く。驚くほどの意外性 孤独な安らぎと影が 少年が青年になったあ を飲んで寝る気ままな 男の息子から ,漂う。 あ つて いる日 後日 日常 りし

港の匂 し作品に着きすぎた感じだが、函館の 体の魅力がより生きている。 仕掛けがない本作ではその硬質な文 い作品に仕上がっている。 1 が感じられる読み心 題名 地 は少 のい

## の地球」。 松坂真由美「スイレンの葉と水の中

くは、 球を見る。 年時近くの八郎沼に誤って落 寓話的 れない。言うほどぼくの正気が疑 水の中で血を流して回る青い な物語で その 臨 というべ 死体 験 は きか 誰 E 占ちたぼ 小学二 · も信 地

6

なる。 れる。 りを見て生きて、 ぼくはい つか自分を包ん 中途半端な社会人に でまわ

沼に青い地球が住むとい で中はカフェ風の食堂と魅力的 の沼、林の中にふと現れ 何かがいると思わせるスイレ 撃を受ける。そんな話を手際よく運ぶ のユリさんと出会う。 た八郎沼 あ る Ī の帰り、 何 + 年ぶ 林の中の ŋ ユリさん カゝ で . う。 るオンボ 仕 食堂で店主 事で ぼ は くは な女 口 0 行 風 0

に意余 L あげる筆力は才能を感じさせるが、 心を和ませる。 う終わりは少し教訓的だが後 って生きることを考えはじめる、 ぼくは迂 ある物語に導く。ユリさん 立てが面白く揃って奇談を臨在 の会社の社長と同僚のじいさん、 店主、そのユリさん目当てで通うぼ た 0 回 て語りすぎるところは して生きた人生に向 独 特の物語世界を (T) が励ま とい ]き合 注 よく じに 道 感 時 0

山野みちこ「鳩の血」。 この作 品 を

のわ 手短 長だったと書くと、唐牛健太郎 身で六十年安保闘争時の全学連委員 またまKの墓前祭に行く。 たしは カン に りのある物語では 語 る 年下の のは むず 友人に誘わ か な L Κ は れ 語 函 筋 Ò 名が てた 館 0 H 手 起 ぶんわ 絵描 た記憶などが回 きの たし 青年 の中 -と鳩 |想さ 0 血. のこと

ら生きて四十七才で死んで行った。 に重なっている。終りの方で和泉さん ぜKの生に心を寄せるのか。 の言葉、「Kはあの時代を背負い の解けない生 れる。 わ それ た <u>ー</u> L なが 記 は は \_ 憶 な

として評価した。

る人としてKの記憶が積み重 保の時わたしは十二才でリアルタイ 前祭にはさまざまの年代の人が るようなKの奥さん し、中で一人違った時 しかしい つか気にな の姿など なる。 間 0 Κ 残る。 われる。風通しのいい文章だが鳩 感する人たちがい そういうKの生き方にそれぞれの生 の話など行間に語り切れないものが の時間を重ねながら、年代を超えて共 それだけ「文学」の匂 る。そんな思いを誘 ついがも

の血

0

中にい

気軽に交流

の墓

ムの記憶はない。

浮かぶが作品は終始Kとして語

。 る。

安

う。

彼女の依頼で安保

か

ら五

動を共に

が描かれる。翌年の墓前

祭ではKと活

とも感じられる作品だった。

真展を函館で開くために友人と奔走 した女性の和泉さんと出会 十年の写 けるが 価した。 以上三作、作風が違うので比較 V ずれも上質な作品とし 7 は 評 澼

あ する。それはわたしのK探求 った。 の旅でも

稲本昭治

「スイッチ」

も棄て難

て行ったこと、若い時東京で出会った 町工場の家に婿養子で入っ を 個 出 人 書く。 なる。 もの時 ガンの進 日 常的 手術までの その か な胃 6 行を宣告され即入院 間 Ó の検査 記 のショックと心のゆ 憶 間 から思 いろい スイッチを押され ٧V ろ蘇る子ど が 手術 け ń なく を

函

館

がある。

的な記憶、

この話と並行して十二才

時

 $\mathcal{O}$ 

画

[家志

望

0

父が

折り合えず家

く描 な思い な 小説としての興味 たように身近になる死へ 場 かれ 面 に 心に届く作品 なれば誰でも経 平明簡素な筆致で過不足な は 限られるが、 になっている。 0) 験するよう 思い。 そん

を

語

0

あるが 達の四季を描く。 まとまりよく詩 不在の家が多かった下北 時間の出入りを少し整理したかった。 いく生の時間をしみじみと描く。 交流が親しくなる、近所も含めたその つきあいを通しながら老い 「やまとのものがたり」、 退職して近くに住むおばさんとの おばさんのりんどう」も心に 話 にヤマ場がなく淡白な作品 出稼ぎで父 の村の少年 、 に 向 って 0

くところで、パターンで話を書く傾向 町に戻る。筆力ある作者だが ぬ政治屋として立身しまた失脚 治屋)」貧乏育ちの少年が政治家 になっている。**「ポリティシャン**― と時を隔てた松前 要注意。 「赤い 文様」。 藩時 代 人 このア 現代 間 を書 (政 1 7

ヌ の若者 [と娘 0 悲 恋話 を つつな い で書

をしぼり切れなかった。「試練 意図は買える力作だが、 話 体を超え 0 焦点

前者 女の神が現 生の作品で見どころがあった。 て」「命短し恋せぬ乙女」。 は倒れて意識を失った男に ñ て現世に戻るのに三つ ともに高校 とくに

ム的 に語りの資質を感じさせる。 の試練を与えるという話。クイズゲー だがシンミリとさせる話 後者 0 1の発 運び

躍する。 たせる細 部が 書けてないので話 が飛

想も奇抜だが、奇想にリアリティを持

の筆は いを巡らす。入賞歴を持 **|父のルーツ**||父のルーツを辿っ 愉し が、エッセ

つ作者の

**取られた空**」筆力を感ずるが話の こみすぎて筆がまとまらない。 赤子を抱えた若い女の数日。 べき小品。 口で終わっている。 プリンセス」ともに断片的で話が 「砂州の街」。 「又・又友哉」「花 入籍できな 話を盛り 「切り 入り

つながらなかった。

を中心に語る後半である。

目三

二の物語。

当方未読で恐縮だが作者に

などをうまく使った生い立ちの対比。

に同 論 作者による短篇連作。 は 見るべき作品 記が三作 これも前 揃 11 他

を受付順に、 例がない三作入選とした。 評価  $\mathcal{O}$ 计相想 以下入選作

のパズル』-菱井亜紀「『アリョン打令』と『ジニ 在日作家の作品に寄せて

令」の解説を中心に書く。 き書きと、 一世と二世の母娘の小説 前 半は 函館の在日女性の半生の やはり聞き書きを基にした 「アリョン打 在日韓国 間

評論になっている。

朝鮮 生の位置に置かれているか、また困難 の人々がどんなに複雑で難し V

イとして読む 自在 て思 候補 が強 も深く が示される現実が圧倒的なので語 事例として示される。 語りきれ な生を強いられているか、そこに日本 口もどこかもどかしく、メッセー 『にもなった小説「ジニのパズル」 くなる。より心に残るのは芥川 関わっていることなど、とても ない現実の一端が具 要を得た文章だ 体的 ·ジ 性 な V)

ょ いることをあらためて考えさせる好 人間の本質的な問題に深く関わって かれた存在」としての在日者の苦境が て問題を語る懐が広くなる。 る口」の金鶴泳の作品などと関連させ 家だった李良枝、 く伝わってくる。 説を通し る文 例 や選評などの適 て作品 の提起するも 現役 同じ在日 の李恢 切 1の芥川 な 「引き裂 成 引 0 「凍え が 用

作家という言葉が ス)―宮本百合子と林芙美子―」女流 広瀬龍太「伝聞 異なる場所 流通していた時 ( トポ

照的 代 っている。 意したアングルを効果的 じ年に早世した。 家として活躍し、共に人気絶頂 的に語る。 林芙美子を、いくつか を代表する二人の作家宮本百合子と 表 的 であった二人の作 な女流 戦前戦: まず二人をよく知るやは 作 宗平 中戦 しかもことごとく対 -林た の角度から 後を同時 に用い 位相 · 子 の 期 代 7 対比 0 作 同

- 134 -

庶民 葬だった宮本百合子、文壇 そして二人の葬儀 この姿が 目立った林芙美子 の対 比 共 人より 産 党 0 庶民 0 党 それ 心 文学との に が 読み解く。 口 関連を「ロ ] マ字で 日記 ある理由を視覚的 には体裁 ] -マ字 から言及し 白 記

互  $\overline{V}$ 距離感に求 その意味づけが綿密で読ませる。 めるのは 特別 ではな

たい。

葬の対比が

面

白

い。当然二人は

たか、戦争責任の話題なども絡めエピ 家がどう時代と向き合い作品 角度で書き、更に戦中戦 意識し合っていた。それを相 後と二人 剋という を書 への作 V ず、その自己把握の弱さが書こうとし 識

を感じさせる評論とし た語り口に、対象への消化され た作家論でなく、角度を自在に生かし て興味深く考察している。 て、 型に 面白 こく味わ た理解 は まっ

ソードや文壇の評言などを折

りまぜ

て書けない

現実を生む出口

0

な

*\* \

牛

い深く読ませて貰った。 水関清 啄木の精神分析」

きの を紹介しつつそれに拠らず、 的な考察。 評論を寄せたが、本作はその さきに ついての多い 神経質者の性格傾 啄 木 奇行の目立つ啄木の  $\dot{\mathcal{O}}$ 研究例 病 跡について興味 カ Ď 向 作者 が 生まれ 精神医学 性 作者は · 立 ち 先例 向に 深 0

や父

禎

 $\mathcal{O}$ 

高

踏

的

な生活

態

度か

?ら助

活路を見出したという考

 $\mathcal{O}$ 

筋

長されたと書き、

その観点から晩

年の

は、

ややあわただしいが啄木文学

さら が

に内容に触れて日記は、啄木が天才意 などから苦しい 現実の直視 が ^でき

論や療法が「ローマ字日記 れるとして、森田理論を紹介しその理 地からそこに神経質症の病状が見ら 活の記録だという。作者は医学的 の記述に [な見

符合することを考察してい この評論で光るところはそれが . る

学的見地

にとどまらない啄木

文学

医

意もない。

記して謝すのみ。

味が 木は精神的な脱皮を得た。そこに黄金 0 口 理解と見識が窺えるところである。 あり、 ーマ字日記」には自己療法的な意 年と言われる多彩な晩年の 日記を書くことによっ て啄 表現

> 内容 造詣 上 硬  $\mathcal{O}$ V も窺わせて肯か 表現が 充実した好論文として評 目立つのは せる。 気にな 論 文 0 るが 価 立.

を中

は、 のほ 人への手紙、 た。いずれも聖書を対象としてロ それぞれ読み応え十分の上記 主題が重なるので一篇とし か、 同一作者による短文連作 福音書、 詩篇などか で扱 三作 Ď 1 6 莂 0 7

パンセ ではなく、 論としてその是非を語る範 の文章として読むべきだろう。文芸評 いて神イエス (思想) として語る。 の教義や意味につ 篤い 拼 0 ,信仰 V 文 7

当方には残念ながらそ

# ノンフィクション

### 入選

# 総合医を志したふるさとの町で

水関

清

す 0 か を任され 地 高原 75 療 矢 形 غ 所 かとはい つに設っ で 8 か た山 た。 あるため、 6 けら 前任地 っても、 兀 脈 0 万 れ 向 + て九年目の た診療所であった。 点在する標高 である離島から Ш こう側にある高原 リアス式の 0 上 流 に 初夏、 あ 沈降海岸 る山 0 低 当時 内 11 に 間 集落 勤め Щ 点在する小 海を介してはる  $\dot{O}$ 並 後背地 4 7 0 診  $\mathcal{O}$ 1 た離 間 療 をな 集落 を流 所 長 島

れる 5 0 て迂回を余儀なくされた難路ば + 流 るという、 ñ れ 便 分 で、 河 の悪さこそ、 ΪĬ ょ 因であ 集落間 沿 って結ば 独特の景観を呈していた。 1 に、 ったろう。 0 交通 れ III小さく家 てはい 沿 1 は、 に点在する集落に診 集落相 たが、 ふ々が 固っ かりであ 互を隔 まった小 水運が発達するには 集落と集落 つった。 てる山 集 療 落 所が その 々に が 点 は 交通 設け ょ Ш 在 0 不  $\mathcal{O}$ す

五 部をなす 0 診 丰 療所 口 ほどだが か 離島 半日 · ら 山 から  $\mathcal{O}$ 時 の診療所までの 蕳 実際に移 Ш を要 沿 した。 1 動するとなるとその倍 の小集落に至 リア 距離 外は、 ス 式 るには、 直 0 線 沈 12 降 海 ま 岸 以 7

豊

かか

. な地

味を醸

成

農業が営まれるようになった。

集

ならな 鉄 海 ず さらに、 0  $\mathcal{O}$ 連絡 流れに沿った道を、 道 に落ち込もうとする谷筋を縫うようにして敷設された 路盤も道路も、 E 乗って、 船 バ で離島と向 スに乗り換えて峠越えをしたところに 次い で、 Щ 急坂と急カー 脈 その 0 き合う本 五キロ 向こう側に 街 カン ほど遡る必要がある。 5 土 ブの連続である。 側 千メー ひろがる高 0 街 に 1 わ たらな ル 原に 級 0 . あ げ 至 Ш る川 る。 れ 鉄道 脈 が

高 は 常に清流が傍らにある暮らしにも、 名をかえてさらに南流 返すようになり、 ともに、 流 が 原 西流 満 そん n Ш は、 0 のすみずみからの水流を集める。 ちていた。 んな思い 流 山間 れ 前途を遮る山 あるものは東流し、またあるものは南 が 運 をして赴任した山間 に点在す W 集落の できた土壌 愛媛と高知の県境を越えて四万十川 Ľ [脈を避 る小集落を結び 四方にそびえる山 黒潮洗う太平洋を目指した。 は けるようにし 繰り の診療所であ 離島とは別 なが 返す氾 流れ K が太く て蛇 5 に 濫に 源 行 流 を の豊か あ 0 j 発 す よっ なると るも た を繰 して、 が 7 ٰڂ ż

らぶ。 貴重な蛋白 が 落 ゅ ... を 一 望 生活 か す á 12 源をはぐくみ、子どもたちの遊び場にもなっ ひろが 用 れ る水 水 地 0 0 上 は n 一部としても利用 に <u>\</u> 業に欠か 河 成 0 ٤ 段 丘 っせな の 上 泂 Ш され V に 0 産 は 氾 一業用水 家 Ш 原 「魚など が に であ ₩. は ち 田  $\bar{\mathcal{O}}$ る な 畑

いで、 った。 が落ち着いたら、 トラクターで代掻きをする。 まった泥 師 水 住 田 |||が 沿 とても身近 水が漏 まず、冬の間に出来たネズミやモグラの穴をふさ  $\mathcal{O}$ VI 周 や落ち葉や小 の集落を生活の場とするようになってから 开 れないようにする畔  $\mathcal{O}$ 水 な存 田 田植えである。 にでは、 技を取り 在となった。 田 り除 [植え 代掻きで掻きまわされ 0 ぬりを行 いて田に水を引 準 赴任 備 が したての V, 真 0 盛 水路にた 頃、 りで い た土 て、 は あ 矢

L

ていく。

田 け 田 Ú 植 え iz < 大きな櫛のような器具を持って、 所 誘 0 なってしまう。 のである。 械植えではなく、 林引きを b よしみで、 0 れた時 だが Ū これ なけれ のことは、 子どもたちと一 神を集中して、 そして、 が 手植え なかな ばならない。 思い か難 その 出深 よいよ苗 緒 しく、 目 1標を決 لىلى ため \ \ \ に 田 コ 0 ーシヒカ 中に 0 波 は É 苗 大 植 め は 一の植 打 基盤 え付 てま 人 0 た i え 付 ま  $\mathcal{O}$ け 基 担 ず  $\mathcal{O}$ 0  $\mathcal{O}$ 

早苗饗」と書き、

田植えを無事に終えたことの感謝を

めて

「さなぶり」に誘わ

ħ

たの

ţ

頃

で

で あ

五.

盤

入れ る。 駄がなく、流れるように鮮やか 平然と作業を続けられている。ひとつひとつの手 身体のあちこちから悲鳴が上がり始めるが、農家 ながら、次の五列を植え付ける。二往 列ずつ並行 0 今度は子どもたちも一緒 る。 目 対岸の畔 交点に、二~三株ずつ植えていく。 今度は反対方向に、今植えつけた苗 の上にあがって、 して、対岸にたどり着くまで辛抱 である。 な手つきで、 背筋を伸ば 田の中 |復を終え L に 早苗 える頃 [を横目 記され てひと呼 強 3の方は を定 く続 カン Š 植 無 . 見 妼

なる春 7 カン 身 6 その姿を見て笑っているような気さえする。 をゆっくりと抜き上げ 歩を踏み出すには、 か こらわ る土に 体 田 いる生きも 柔らかで暖  $\ddot{o}$ (n) 前 き上がってくる。 の田 中に入るに に向 足をとられ の土 Ď か かって歩を進め な の感触。 のだ、 は、 ると、 指の力をゆるめて泥 め うて、 足の指 め との りの 太陽 自分の植えつけた早 自分も大地に根 バランスをくずさな 思 な に力 あ の光を浴びながら、 る田 1 11 が、 . کر を込  $\mathcal{O}$ 身体 め 泥土 容易に転 田 É を張っ 踏 0  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 中 苗たち 4 感 込 触。 びそうに から足先 範 み、 て生き 水でぬ ところ 畔 で

IJ

診療 では、 うように で続いてい 加 神 ĩ 様 た人 にささげてそ 夜 務 田 植 L をともにす 々をもて  $\mathcal{O}$ た て何とか えでは 早苗饗ま 翌 日 なす U  $\mathcal{O}$ いでの時間 成 る診 0 め 年 て知 饗 -の 豊 L 勤 療所 遂げ 務 応 ŋ 莋 間をともに過ごし は のことであ たが :を祈 職 合った人々 員 全身 0 ŋ の筋 私ととも 顔 な ર્જે ŧ が 肉 混 5 0 痛 じ 中 そ た診 り、 0  $\mathcal{O}$ 田 に 中で、 祝 田 植 植 夜半 療 宴 え 所 え  $\exists$ 職 を 這 ま

 $\mathcal{O}$ 席

新 緑 が 輝 できを増り ず頃 E な ると、 Щ 里 を 流 れ る渓 流 では

なにくわぬ顔で事務をとっていた。

ボ ホ

が羽

化 が

そのそば

0

用水路ではカエ

ルが

鳴い んぼでは

た

タル

舞

渓流

 $\mathcal{O}$ 

水が引き込ま

ħ

る

囲

h

1

シ

してサナギである の中に沈  $\emptyset$ で十分に Ш 沿 てくる。 な か いの道には、 でも、 む土の 目を慣らすと、 まず、 ホ 中で光ってい タル見物 足もとの どこよりも早く夜が すこしず は JΪ 楽 岸に るのは、 L しみであ 視線 つ周 囲 訪 ホ を落とすと、 0 ñ た。 タルの幼 0 状 3 況 が 暗闇 灯 0  $\mathcal{O}$ 暗闇 みこ  $\mathcal{O}$ な そ 中 V

ケと名づ

けられて

いた。

Ш が す緑色をし 11 面 つうち 空 そ と散ら لح た光 Ō 暗闇 背後に伸 が 動 ば ポ 0 ツ 中 りはじめ びる斜 ポ 少 に ĺ 沈 ツともり始 ず W 面をバ Ź. だ 0 高 河 度 柳 畔 ツクに を上 の枝 め、  $\mathcal{O}$ 柳 を離 げ 小  $\mathcal{O}$ した、 枝 7 さく明滅 11 れ 0 < た 間 うす 光 が、 1 緑 暗 な Š

> 光 色 」をし 0 瞬 き方、 た光 は  $\mathcal{O}$ 瞬 きが ヒメホタル よくわ のそれのようである カン るようになる。 この 小 さな

ろえて、 ホ  $\Delta$  $\mathcal{O}$ は、 タル Ĺ あ 空に集ま ちこちの が 少しずつ同調し始め、 奏でる 数秒 枝を 0 ってくる。 間 隔 離 光のオーケストラだ。 をもって一斉に明 れ て、 初めばらばらだった発 たくさんの やがてみごとに足並 滅 ホタルたち L 始 で める。 光 み をそ ヒメ IJ ][[ ズ 面

星 の ホ タル ことを思 のことを書い 出した。 7 1 て、 森 の木 Þ に 宿 る 地 上 0

微光 せん階 もうひとつの ヒ メ を放つキノコが ホ 段 タル 0 いように 光 が 2舞う川  $\overline{\mathcal{O}}$ から 森 あ があ みつ 沿 ŋ 0 1 きな た。 その姿かたち  $\mathcal{O}$ 背後に控える森 がら 硬 11 梢 クヌ へと伸 ギ から、  $\mathcal{O}$ 樹 び 0 ギンガ る、 皮 中 に、 に 緑 は タ  $\mathcal{O}$ 

ことが 歩 5 その 歩 光を見り あ は落 った。 慎重 尼 ち ようとし 進 葉の溜まりに 倒木に足をとら W でい て、 った。 夜 足 更 首 れ け までつ て転ば  $\mathcal{O}$ 森  $\mathcal{O}$ ぬ カン 中 ように ŋ に なが 分け 入 なが 0 た

る カコ T Ë 懐中電灯 と虫 エやく 0 てくる を のちで満ちてい つつけ が ると、 た虫。  $\mathcal{O}$ その・ 森 木 K る 光 0 子 幹 0 ども 輪 カコ 5  $\mathcal{O}$ たち 中 滲 4 12 出 現 0 [す樹 目 れ を た 液 輝  $\mathcal{O}$ を求 は

せ

懐中 光 る 灯 + ノコ 0 光 0 を消す 生え るクヌギ 薄緑色を 0 木 は、 した微光 森 0 奥に が ク あ ヌ 0 た。 0

まとわ

りつくようにして空を目指してい

なの 花だ。 のお花畑だ。 うな形をしたキノコの傘 ノコ たくさん ギンガ 0 光 ペタケの は 0 そしてその 胞子が育 丰 ノコ か 5 つ。 0 お花畑は、 の中では、成長してゆくに みつくクヌギ 胞 キノコ 子から放 の胞子は、 緑に光る地上の で樹皮 た れ . る。 反は、 帽 キノ 丰 子 銀河 つれ コ  $\mathcal{O}$ コ  $\mathcal{O}$ ょ

や枯 る。 足にはその胞子が付着 ん集まってくる。 キノコには、 そこでもあちこちで、 足 もとに キノコを食べ 葉も、 積 ご馳走なのだ。 ŧ ムカデやアリなども夜 つってい る夜 柔ら 、る落ち 緑の微 して、 の虫たちにとって、 か V + 葉や 森のすみずみにまで運ば 光が放た ノコの傘を食べ 枯 れ の虫たち 業に目 れ ってい 豊富な落 た夜 る。 を転じると、 たくさ 夜光る 0 き奏 虫 れ  $\mathcal{O}$ 

に還 なり傘に 子 ってゆくのだ。 間 が 付 吹きを支え、 なってゆき、 かか V けて、 たクヌギ 森 クヌ その樹体もやがて地上に倒れこ Š の土に溶けこんだ倒木 の樹皮は、 たたたび ギ  $\dot{o}$ 木もまたゆ 若木の中でひ しだい にキ つくりと森 こそか シコ  $\sigma$ いの 0 に ちは 息 軸 0 づ + ع

そのようにして、 光るキノコ は森 に満ち、 1 のち は 8

> 0 7 くの

空に ると、 た羽が透 くようになると、 である。 けぞるように かりとつか の根株をさが ゴである。 水 向 田 かって飛び立つのはもうすぐであ 早起 12 一明に 日 植 0 きが え 背中 出 なっ つけ まって腹と尾を伸ばし、 葥 i すと見つかるのが、 楽 て翅 が 0 6 飛翔準備完了となる。 て幼虫の殻を脱ぎ捨てる。 薄暗さが残る水田の畔にしゃがんで、 割 みに ñ た早苗 脈 れ ると頭 0 な 黒 る。 11 が育ち、  $\vdash$ 筋 部、 が ・ンボ 羽化直 朝日を浴 つい 水面 折りたたま  $\mathcal{O}$ る。 · で胸 郭 朝 前 化 を覆う頃  $\mathcal{O}$ 光 び 抜け殻に 部 0 を見るため トンボ 0 てきら が 中 れ 現 ĥ て め

Y 稲

0  $\mathcal{O}$ 

住宅の きもの コゲコ 早苗 んは、 ジ裏手は ゲコ」 が育ちゆく頃のもうひとつの見もの、 カエル 0 大合唱であった。 面  $\overline{\mathcal{O}}$ の鳴き声である。 田 んぼで、 (T) 当時住 頃になると . W でい という 「ゲコ た 矢 か 師 聞

た往 た ラ が が 11 きり 1 あ 夜の往診 j 診 0 た。 び 上 で横を向 車 0 光 Ö 所 その が の環 職 0 帰 0 ッドライト 員 てび 0 いてしまった。 は 時 りに駐車 中 っくりしたことが 力 蛙合戦ですね。」 工 が、 しようとして、 ル 田 h の大合唱の ぼ 田 0  $\lambda$ 中 ぼ -にうず の上で一 あっ 声 が ハ ぼそっ た。 Ź ま ン ド 閃 瞬 る黒 ル 止 l 同 を切 たこと 行 W で、 V 塊 7 0

力 工 ル べてみたら、さにあらず、「雌カエ が 田 W ぼ の中でどんな戦 V をする ル  $\tilde{O}$ ルを求め だろう 7 カ

体格 ば ヘッドライトで照らしてしまい、申し訳ないことをした。 つ れ 力 る の大きさに比例する。 鳴き袋ともよばれるこの袋の大きさは 工 ル П 0 た状 腔 0 0 鳴き声は、 なかにある柔らかな皮膚の膜から発せら 態 力 エ とのこと。命がけ ルが、争ってメスに抱 雄のカエルの したが って、 の先 みが持つ、鳴嚢と呼 陣 大きなカエルほ きついて、 争 雄カエ の最 ル 中に  $\mathcal{O}$ ħ 字

が続く であ 利に 中央と辺縁など、 うでもない。 作用 0 かと思っていたが、よくよく聞いてみると、 力 するという。 深夜 工 ルの 確 かに夜の 場所によっては、「ケロケロケロ」と聞 い鳴き声 早朝 は 九時頃までは「ゲコゲコゲコ」 そうでも のことである。 ない。 \_ また、 晚 中 この 田んぼ 調 0 そ 子

ろ

かも知り

れない。

る夜間に、雌カエルに自らの

位置を知らせるうえで、

有

低音

の大きな声で鳴くことが

出来、

視界の

制限され

和 に尽力した岡 かえ したことでも知られ る の小学校教 るの合唱』 ||本敏明 歌 科 が が 書 、う童 n ドイツ民 兀 てい [年生の音楽] 謡 . < が 間 謡 あ をもとに る。 後半の 玉 に JII . 掲 作 学 職され 歌 詞 亰 詞 0 創 が 微 た 設 昭

こえるところもある

が、その後が少しちがう。 ♪ かえるのうたが きこえてくるよ ♪ までは一緒だ

続 交わしに触発される形で、 らに輪唱曲として親しまれ という指摘に応えて、 ワ では日常的に接することの出来た、 ワ♪と改められたの グヮ♪などの歌 くが、 発表当初は、♪ケケケケケケケケ 生徒達 足からの · 方が が、 ♪ケロケロケロ 「同音が 派 昭 生してきたとい ♪ゲロゲロゲロ ていく中で、 和三一年のことであ 続 べたため 複数のカ 1ケロ ク ゙ヷ 当時 É ク ゲ 歌 ワ エ Ò ク V ク ル 生 った。 . ワクワク の鳴き 活 ワ ゙ヮ  $\mathcal{O}$ 中

ケケケ したように、 quak, kae kae kae』となっており、ドイツの っては、さまざまな鳴き声を聞 元歌となったドイツ民謡の綴りは、 クヮクヮクヮ』と鳴くのであろうが、 田んぼの中に居る位置や、活動時間 かせるのが、 ¶quak quak カエル 本当の 私が 帯 は quak によ 経験

花 開  $\Diamond$ お ž. 粉をつけた白い 始める。長さ七ミリほどのモミの外殼が二つに割れて、 くと、 あ 八月の上旬ともなると、 しべの下、 る黄 日 色い 炊き立 .. の 出 開 袋 からやや時間 0 7 のご飯 た殻の 中に 六本の雄蕊が伸びてくる。 には、 すき間 Ó 水田 花粉 が経 ような、 には稲 には、 が 過した午前 たくさん かす 雌蕊が見える。 の香りが漂 カン に 中 ってい 雄蕊の先端 廿 稲  $\mathcal{O}$ 11 は が

を蓄えた ンチャ 蕊 雌蕊 ク ħ (T) 端 の先端に付着する。 出 ように した花 向 袋 カン って は 粉 開花後 細 は Þ Ė カ 開 Ŭ . く 枝 V · た 殻 E やした姿をし 開花から受粉まで、 乾 分 燥 か のすき間 ĺ n こて表 L ラ てい 面 お へと滑り落 ŋ に亀裂が る。 およそ 1 花 ソギ

5 入

く短いものであった。 さったのは、 そのつもりで見てい その言葉どおり、 腰痛で診療所に通院されている患者さんだ ない 稲の花の開花している時間 と見逃すよ。」 と教えてくだ はご

 $\mathcal{O}$ 

出来

事であった。

秋になり、

稲穂が頭を垂れるようになると、

0

を 収

Ż

 $\mathcal{O}$ 

か

稲

 $\mathcal{O}$ 

穫

あっけにとられて呆然としていると、

ひとり

0

方

が

タ

り、 燥が均 は稲 らせ カン の時期を迎える。 の草 り返せば、 架 7 バインダーからつぎつぎに吐き出されてい た稲穂が、 取りや水回 かけられ になるように、 あとは脱穀をまつばかりである。 それ て天日で乾燥される。 りもせず、 刈り取られて紐 まで夕日を浴びて金色 上下を逆にする架け ただ田植えと稲刈 で結ば 架上 れ 替えを幾度  $\overline{\mathcal{O}}$ ては束 < < . 稲 波 りをわ 東 頭 稲 0 に 乾 東 な

地

新米

き初め

いにご招

待いただいて、

その味

 $\mathcal{O}$ 

奥深さに

たことも忘れ

られ

その

席

炊き立て

ぼる香りとともに、

つやつやした米粒をほおば

た

のことである。

り手伝

, つ

ただけなの

農家

0

方のご

厚意

るということも教えていただい

すると、 まれ うな ると、 ず か カン ŋ の品種の試食をすすめられたのだと思い、 ν, • ねると、 0 わ 少ない、 りはどうですか」という声 出た稔りなの じん てっきり、 ŋ おかわ 周囲から一斉に笑い声が起こった。 わ さっぱ りと広が りが届けられた。 が 私たちが植えつけ かという感動にひたってい りとした口当たりで、 あ る甘 Ó 時 私たちが あと、 が 噛め カ ひと口ほ 植 たコシヒカリとは カン り、 ば え 歯 つけた苗 おばると、 即 そのことをた 食感もやわ に 座 吸 に V おお カン 0 くよ 5 別 1

穫され らされた。 ひとつ、 ネあかしをしてくださった。 で質も 変化 ら百メートル離れた田んぼであることだけだという。 日も私たちが苗を植えたのと同 たお米 異な 富 植えら 農家は り、 んだ盆地 の味 ñ 風 わ 向 た場所が、 玉 いも異なることを、 きも日照も O中では、 城の 正解はコシヒカリで、 主、 私たちが 数百メートル離れ 異なり、 百人 じ目。 石通 田植 この時 稲 違うの え n 0 育ち んした田 0 初め 技 は て知 ただ 田

同 うこと 違うだい 品 種 0 苗 け つでこれ を 同 じ時期 ほどに食味 に植えつけて の異なるお米が ţ 田 できる W

そうだ、「医」と「農」は、とてもよく似ている。「高い個別性」と「不確実性」。

もはっきりと覚えている。と「農」の高度の類似性に思い至ったこの時のことは、今と「農」の高度の類似性に思い至ったこの時のことは、今「高い個別性」と「不確実性」の観点からみた、「医」

念頭 勤務 とする専門分化医療への志向はひとまず措いて、当時そ 感じてい の方向性 当 時 であ にあった時期であった。 の私は、 、た時期 が模索され始めてい ったが、 でもあった。 医師となって九年目。二 前 任地 の離島診 た総合医療のことが、 若手医師 を療所と が一度は目指そう の微妙な差異を 箇所目の診 常に 療 所

を限定 専 地 すると、 たえるためには、 をかかえ 住む住民 一人の医 域 限 都市であっても人口の少ない地域であっても、そこに 医療 られたマンパワーで多様な医療需要に対応しようと 住 した専門医療 でとの .師で運営される医療機関で多様な医療需要にこ 0 臓器や疾患ごとに受療対象をくくるのではなく、 た総合病院 医療 適切な連携体制の構築を前提として、住民 人を対象とした医療にならざるを得ない。 への期待には変わりはない。多数の医師 専門医療とは異なる方式が求められる。 では、 も可能であろうが、 特定の疾患や領域に受療 診療所のような 対 象

> 空間 え 診 一人一人を全 てい 療 新 的 た時期であった。 医師 な広がりを持った視点を備えた総合医療担 は 人的 目指すべきではない ・包括的にとらえるだけ か、 という考えが芽生 Ó, 時 当医を、 間

の冬の としおであった。 年 中 春待暦という。 厳 温暖であった前 しさは格別で、 その厳寒の頃、 任地 それだけに春を迎える喜び の離島とは異なり、 毎日つけていた暦があ 高 原 はひ

「春待春待春待春待春」

「亭前垂柳珍重待春風」

に ば 日 啓蟄の頃にはすべての文字が赤くなる。すなわち冬至の くのである。立春の頃にはおよそ半分が赤文字に変わり、 れが九文字あり、 の日から毎日この文字を赤いペンで一画ずつなぞってい である。ここに並んだ文字、「春」「待」「亭」「前」「垂」 梅 れ 「柳」「珍」「重」「風」は、どれも字画九画からなる。そ の花の、 から八十一日が経過すると、 文字ではなく 枝が描 私がつけていたのもこの春待暦である。 花びらの外縁だけが線で描かれたものである。 か れ 絵の春待暦もあり、九九消寒図とも呼 画数の総合計は、八十一となる。冬至 たもので、 春がやって来るのである。 五弁の 花が十六輪とひと 画

ただ文字を並べただけのようだが、これでも立派な暦

るのだ。 べて紅く 日 あ つぶされ V 赤 わ 花  $\tilde{\zeta}$ せ び 塗 7 らが塗 た花花 八 なって満開 りつぶし +びらが増えて、 in つぶされ 枚になるこの ていくと、 の花で満たされる頃、 て紅梅に変わる。 枝に 花び <u>7</u> 春 の頃に 6 ついた花び 冬至 は 春がやって来 およそ半分 らの色 さらに塗 0 目 カン が 6 す

0

1

毎

n

大

きる暦 に、 近づい 加 塗りつぶしていくうちに、 え 同じように 小 先人 温 であ てきてい まる思い が生み出 花 る。 した紅梅 寒 、るのだ、 暖房設備があまり整っていなかった時 1 がしたものである。 日 した着想の素晴らしさに驚き、 の数が増すにつれ が 続 ということを、 11 梅の一 7 1 ても、 枝は て、 日一日と彩づきを 毎 視覚的 日 毎 春 には 日 花 歩ず その 実 75 感 5 知 代 を で 0

沈下橋の名

は

大水の時には

橋

の上を越え

7

川

0

水

が

らい 手法であ 予想され 、 う 概 検査 0 薬 頃 (剤を使 念が を受けて る検査に 先進 提 定 唱 わ 医学の分野では、 際 の効果が確 こされ ずに検査時 Ņ る患者さんにリアル しては、 てい た。 検査 認されていた。 の苦痛を和 あ る程 0 バ 進行 1 度 オ タイ |状況 0 . ラ 5 げ 苦 1 ようとする ムで見て を画 痛 1 ドバ が 像化 事 前 ツ ŧ ク に L

待暦 春待暦 をつけて と理解したことを、 いた私は、 直感的に「これは医学 懐かしく思い 出 版

春

たちは大きくなっていく。

として知ら をゆるやか 有名で、 でも時にみられるが 数に こる時  $\mathcal{O}$ ル 高 0 知 して三一九もの支流を集めて流れる。 不入山(いらずやま)に源を発し、 0 県と愛媛 枕詞 本流に二 泂 ñ Ш る は 潤 • ï 四万十川。 県の県境近くに聳える標高 のが「沈下橋」である。 て流れ、 最後の清流」。そし 四万十川にかけられたも 支流に二十六ある。 総延長 太平洋へと流 は一 て、 九 兀 六 れ 高知県以外の 玉 その km 下 西 一三三六 ·る高 四万十川 に 南 シ  $\tilde{\mathcal{O}}$ ŧ 部 は ンボ な 知 0 県 n 大地 メ を 最 県 ル

語 総

から、 には、 捕 こう岸 朴な橋 とをあらかじめ想定して造られ 流れるのでそう呼ばれる。 つなぎ、 0 Ш らえるの の欄 が 体に 側 橋 最短距離で川面をまたいで対岸との間を結ぶ、 干は である。 の上か E ときには子ども達の遊び場にもなる。 が 飛 ŧ な U V ) 毎 込ん 日 ら下の川 必ず集落があ したがって、 0 川の流 でくるような体験」をして、 日課であ にダイブしては、 れ にギリギリまで近 出水時に流 ったと、 沈下 る。 てい 部 橋のたもと側に 諸落と るの 村の古老達 n で、 **の** 部 泳 中に没するこ ぎ、 橋 村と村 夏 12 は 子ども の盛 た岸 Ш 語る。 魚を 边 素 V) を 向

0 生活 を、 登 美子 こう表現している。 小 説 『仁淀』 ĬĬ  $\mathcal{O}$ 中で、 水 0) ほ とり Ć

こに小さな虹を作っている。豊かな水は川上から絶え間いほどの勢いで四方八方に砕け散り、その飛沫はそここ「午後の陽射しはおだやかだが、奔騰する水は荒々し

え間のである。ここかるさとには、夢の原点がしっかりと根を張っている

をながめるたびに、自分の成長の跡が見えてくる。

へと分散していく。」なく無尽蔵に来り、この堰で遊んではまたはるかな下流

医師としての夢のふるさととなった、川のあるその町。師としての夢を汲み上げた。総合診療医への夢が生まれ、みじ)と呼ぶが、私も四万十川の支流が流れる町で、医その川へ降りて水を汲んでくる道のことを、汲路(く

懸命に見ようとしていた若き日の自分。 それは、景観と人。そして、見えるはずのない未来をふるさとには、たくさんの「まってる」がある。

a。 毎日の暮らしの中で、見過ごしていたことが見えてく

そんな一日が、「まってる」。

「梢」を見上げたい。梢がつくりあげる「杜」をながめそれぞれの夢と地続きの空を目指して伸びている生活のそこでは、人々の暮らしの中にしっかりと根を下ろし、

ふるさとで人に会うたびに、梢を見上げるたびに、杜いたい。梢」を見上げたい。梢がつくりあげる「杜」をながめ

## ノンフィクション

### 入選

# ジュリエットに会った夏

年

应

月

0

五.

+

立

歳の

誕生日をも

0

て三十

藤

健

佐

中学校 長老」 二度 外劇 に何 でお世 実家 引越 務時 年間 IJ などの アニ .か夢 12 代 ることは 目 L 勤 役をい テラー  $\mathcal{O}$ オ 話 近 で三校通 が あ  $\mathcal{O}$ 務 中に メ 平 て覚 函 V 八 0 Ź て結婚 成二 館 な 函 た 口 「宇宙戦艦ヤマト」やTV デ なれ [館を終 え ĺ 嫌  $\dot{\mathcal{O}}$ ただいたのが最初である。 勤 1 海 0 ·-シ 役割で台詞 務 子供 V 年に ブ 1 E えるも りし では 大きな負担になったことと思う。 自 時 ニングナレ ョンを受け V 代 たち る。 衛 の棲家と決め、 元 た。 なく、 の平 のを求めて、 それ 町 隊 新し Ó の市立 を定 配が多い 成二 以 5 転 た。 来転 中高 なみに、 1 年 1 校も多く、 一十年に 病院 退 仕事 シ 、役だ 時 勤 彐 野 職 外 にも 現在 じた。 ンをカセ 代 で 今年の三月に で看護師 小劇との ・ドラマ 全 高 は 0 上国を回 たが、 長老 校 コ 慣 は 小学 時 ñ 市 最 口 ット 出 内 をし 代 「ヤヌ ポ 校 初 文章 会 iz が ター は、 ツ 0 0 0 仕 造 たが テー 函 事 て ク 兀 宇 函 · を暗 ル 館 ス スト は 以 船 校 館 宙 憧  $\mathcal{O}$ 野 外  $\mathcal{O}$ 勤 0 所

> 赴任し 命 れ 勤 を決 私と言えば残念ながら 11 り、 ごぜら 以 務し た。 Ĺ 意 とれ、 た。 たため、 0 正 L 転校 た。 義は 子供たちが中学生 函館に家族を残して定年までの六年間 は 兀 艦 野外劇 |十歳 できない にこそあると信 派まで艦隊 は 翌 年 状 度の出演で終わ 況 隊 にな  $\dot{O}$ 勤 で 函 務 じて海上 ŋ, 月から 館 E 以 と後、 自宅を設 高校進学を控 東 京 陸 衛 ってしまっ 上 隊 0 定 司 を単 令 転 0 えこ 勤 入 7 身 隊 を

照明に に が 発声練習を 用 て来た。 水 しも恵ま 舞台 できな て、 八年ぶり 若い よるスケー で、 れ 寂 実行委員を中心に夜 た ī Ó Ŧī. L コ てい 今年は、 8 口 いことだが 口 ポ  $\mathcal{O}$ ツク 夜公演も予定どおり ルの大きな舞台 くうちに当時 0 ĺ 橋を含め 「高田屋嘉兵衛」 が 今は 空を 公演 その の 五 堀 飛  $\bar{O}$ び、  $\mathcal{O}$ を復活っ 記 稜 手 石 無事 記憶が懐 船が 郭の 垣 前 の役をい  $\sigma$  $\mathcal{O}$ 広 修復 走 堀を利用した 終了すること させた。 場を会場 カ り で L ただき、 堀 く蘇 音響と 天 が 候 使 0

[を少し戻して、野外劇の練習が始まって少ししたこ

卜

0

映

画

が

公開

され爆発的

12

1

A

が

.巻き起

者を演 Ŕ うで、 できれ 古で、 での 習 日 できたで り一う んが、 が、 いただ 想像 が 詞 を覚えることに 前 が 1 五. 画 一合唱 十六歳 きなり 台 で 古 ľ Ó 東 消 回までの V 詞 異 ば Ŧī. る無謀 た役 本読みな と承諾 きな あ 病 京 去 月十九日から始まり、 な も多く 7 劇 めろうか 法 0 動 0 らだ を発 で選出 Ó 7 作 広 は、 ること  $\mathcal{O}$ り、 い 0 告代 身長 が な挑 をしながら五月末日に 初 稽古では は いる した。 変更だっ 知 何と主 緩 'n, な 0 症 劇 識 集中 つされ 慢 者 が 演 戦 理 V 一七三、  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ L は 店勤 役者 で若者らしくな 0 出 をすることになることを て  $\mathcal{O}$ で 野 示 な たの 一役級 で可 田 た。 時 外 ま 私 唆 家 か Ê 舎に 務 を ず、 か 同 間 劇 で 0 何 体重. は間 能と判 あ Ď で会社 人材 級生役が予定され で台詞 どの 募 n  $\mathcal{O}$ た ٤ 背 0 集 は 帰 火曜 た 都 が か台詞を頭に た。 九 掛 中 が 0 違 不足が最 合 L あ 7 は問 が が と木曜の 断 け持ちとなる て 1 が多く難 何 配役が発表され それ のメタ 来 ま 先ずは、 6 倒 な し V 7)3 るま か た 産 た。 ると 題 しら なく 稽 ľ 大 さえも 古が それ 0 週二 め + たことに ボ 合唱 の お 0 L 入れ 結構 誰 ってい て か な 理由 七 1 手 歳 、役だ 進 iz 口 伝 な い が お 劇 野 たが 想 たの 7 多 ľ L n  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 0  $\mathcal{O}$ 外 た。 像 若 ょ ż ょ 0 稽 稽 劇 が 1 7 0

5

ようど会社

の夏休

4

期

間

中

では

あっ

たが

+

日

 $\mathcal{O}$ 

北

斗 に

市 練

0

市

民

合

唱

4 方

が

+

爿

に

創

作

合唱 誘

劇

0

公

演

緒

習

7

11

カン

5

别

0

劇

0

い

を受け

学は その で な 機 シ 学 す 座 内 るダメ出 が 動  $\mathcal{O}$ L 11 か 11 詞  $\mathcal{O}$ 0 活 会で . ョ ッ 外で活躍する演 に中央図 稽古 と思わ 5 な [と違 移  $\mathcal{O}$ IJ. け れ V 中 湧 \$ لح 動 な 相手を見 诼 か から あ プ き出 3 0 日  $\mathcal{O}$ 0 い い 館 で が を開 ħ 役を愛 思 ら今の役 本 室 れ る。 しを受けて、 相 な 0 あ 書館 三か 演 0 るほど追 [る感 手役 で 7 0 きを要求 る 演 てし カン 催 畄 7 あ パ る 5 家 ン E 情 î との る。 出 般 L 月が過ぎたそん 八 場所は、 な作りに じまう。 月 演 初 て演 Ш 協 フレ をも 役に な 寄ったとき、 舞台: 会 され + でどう変わ 出 心 家や俳優を い詰められることが何度もあっ 掛 どうし け合 者 稽古が終 な 家 劇 ットを見 が って台詞 りき 体 何 可 . る 日 相手 に  $\mathcal{O}$ 自宅から近い カン ょ カン 幅 演 ても よう  $\mathcal{O}$ 1 験 こってい 6 L 記 広 劇  $\dot{O}$ に 0 講 招き短 を発し 話を聞 な中、 る て 座 載 さと奥深  $\mathcal{O}$ 0 わ な 野外 占 E ントを得られ 情報コーナー 0 E けたのである。 'n Ď, 詞 演 振 な 励 興 カ に ば、もう立ち直 な 劇 を言う 日 技 0 がを役者 加まされ 会話 期 申し 借りてい てい \ \ \ た  $\mathcal{O}$ は  $\mathcal{O}$ 11 で **漁集中的** さを体 7 が 函 \$  $\mathcal{O}$ 込 5 環 な 日 館 1 何 に -で「演 とし るか より これ 間 市 ろ N غ な 人 11 、 た 本 複数 験 12 民 語 0 で 0 Ē ŧ, そ 会 で ワ 演 あ t て あ が きる -を返 れ 体 知 0 1 6 V  $\mathcal{O}$ 全 作 劇 内 抑 講 天 な 京 n ク 玉 ゆ 揚 な 面

の実家 0 0 お 盆 0 お 墓 ŋ 行 け な カコ 0 た 事 が 申 訳 な カン

ほとんい ことに 座が 介をし クシ まり、  $\mathcal{O}$ 0 である。 子である。 六十三歳の方が とは思ってもみ くくって になろうとし 演劇 呼 Ĺ 不明で n 覚ええ 始 び ヨツ 7 受講 なるの どが 活 ま 方 部 ある いった。 る女 を決 経 られるも プに参加 動 年 もっとも 県に その 市 年齢層 たが |験者である 者 だが場 、って め 7 内 7 が は で いるとい 男性 男性 中 0 į, な あ 就 が -で演 らし 道外 Ō 劇 る ŧ たことか 職 は し V まさかあ る。 V で は 違 て 寸 7 五. ことであ 私も今回の役の上  $\mathcal{O}$ 野 高校生 やは は った、 おり たが たそうであ 出 さて置 出 E V 人と女性七 だ 外 な 家 初め 身で今年 本名 所 感はぬぐえな カン 劇 の 属 他 0 6 をに、 き、 先生 前年度 な この受講 経 和や から二十 った。 ような状 L  $\tilde{\mathcal{O}}$ わ 大 そ ていたり、 何 験 学 一が受講 人である とか ざわざ函 女性 カコ る。  $\mathcal{O}$ 0 カン お互いに簡単な自 春 中に な 0 初 者とも 今の 代半 演 代 たぶ 12 ツ 0 A V) では同年代と 目 況 な 名前 劇に クネ 期間 る に追 函 1 は るだろうと高 W 館 K 高 L ば 顔 稽 館 演 11 向校、 に関する ・ろは 中の かも 男性 午後 は . の 見 古 0 1 15 0 多様 うち 若者 大学 . 込ま 知 来 部 0 A ŧ な 大学 娘 お 7 ŋ  $\mathcal{O}$ カン から. なのか呼 た 中 己 そ ワ 本 ょ で 互. 1  $\mathcal{O}$ か 所 . う す 講 紹 で  $\mathcal{O}$ 5 ] 始 属 V 様 に る な 月

> さん ぐらいの印象だ 座を受講 髪型がア 出 L てい ニメ 0 で るということであ た あ り タ /ッチ」 知的 で 控えめ 0) る 朝倉南に似ているなあ これ な雰囲気を持つ女 ・ろは

うかと勝手に決め Ļ ミオが町を追放 お、 登場人物は と「ロミオとジ 台本が Ĺ の差ペ であ  $\mathcal{O}$ 議 バルコニー ロミオとジュリエット」とい V さて、先生が 司 状 室 様 二人に任 朝が来る前にジュリエットの前から去る場面である。 ロミオよ、 る。 態 の机と椅子しかな Þ アが な状 演出 で仮 VI 『でどの 況設 0 せ ロミオとジュ 0 て年配 答れ ュリエット」 され 高 組 下 場面が有名であ ロミオ、どうし 今回のテキストとし との 校 定が てい み合わせでイ る前 ように変わ た。 不倫 習者は 試され 私に与えら ア 一夜、ジ 1 場場 Ŕ IJ ヒバ ~ ところが 第三幕第五場の台本であ ア 演 所 る 二 リの ・ユリエ 、えば、 とい るか るが、 てあ で 劇 メ ットの二人だけなの で何ができる 1 あ ñ 経 た状 な 験 ジを膨らませて う。 を体験することで 鳴き声でも担当 て配布 ーットの 今 回 たは 本講 第二幕第二場「お 者 況 とい H  $\bar{o}$ 1の場面 設 言 大 座 ロミオな の趣旨 部 たの が 定 0 0 ても 屋 は 0 か、 で過ご が は 不 倫 ア、 行 手 は Ď 職 探 あ Ĭ 何 同 口

会

ŋ

 $\mathcal{O}$ 

年

手  $\mathcal{O}$ 

屋

で寝

あ

わ

て家に

帰ろうとす

á

面

ミオとジ

ユ 過

リエ

ツ

Ĺ

 $\mathcal{O}$ て

本を使って演じるの

あ

ľ

V)

若

 $\mathcal{O}$ 

まれ 横向 ジ 私 ば も多く たことなどなく、 な 0 まうの ろん 日 も見ず 11 ようとす 妬 台詞 る。 0 目 面 詞 それでも台詞覚えに てし た み きに  $\mathcal{O}$ が 室 to 深 ? 工  $\mathcal{O}$ 講 な 回 Щ 始  $\mathcal{O}$ 夜 0 寸  $\mathcal{O}$ 台詞 まう。 空に る私 練 座 カン ま 寝 床 相 Z まだ朝じゃない ツ L 11 カン 圧も午後 1 0 る。 行い ょ 習 ったの が 光 W 所 十回ほど書 は を言えるようにまではなったはずだった。 頂 が 0 またたく灯 横 属 で 背中に くる背中 今ま (に爪先立っている」シェー B ょ 幾すじも東の E 0 L 台本 1 す きな ペア から で家 そもそも情景がうまくイ た て、 な る n -を 見 た 彼 で 0 彼 り目覚 くな (D) だっ [き取 に てい 女 少なくとも台本  $\mathcal{O}$ の方に私も仰 験 場 女が声をかける。 帰 は 人生 豊 発表であ ながらでもたどたどし 火 わ」と、それ 面 が た 多少 ŧ V 富 0 るところ 0 は て台詞が と言 燃え 空の の て 他  $\mathcal{O}$ め な 二人 で、 0 É  $\mathcal{O}$ カュ 中で、こん 女 自信 る。 らリ 雲 静 尽きて、 性 台 出 午 覚え 本 カ 向 カン が  $\mathcal{O}$ ところが を見 に K L に 前 才 が 切 け 5 ベ で寝 ッド た 挑 中 あ ĥ 対 始 に集中し ベ わ 「もう行 0 な ŋ な言 ク 間 し ツ ま ず 戦 は完璧を 才 メ 朝 た姿 である。 が ij 1 スピア独 日 を て私 F に か る L B 縁 [葉を が た 台詞 ジできな V カン 見 な た。 で  $\mathsf{E}^\circ$ 靄 勢 11 \$ 5 彼 昨 取  $\mathcal{O}$ 0 ₩. 時 期 台 発 離 カン 日 あ ツ  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ に 0 7 女 て で 量 特 包 7 詞 Ū 5 が た 0 n L ク L に n で

た。

三組目

は 0 流

7 ことで、

ア

んであ

石

に、

女性が

舞台

女

優

 $\mathcal{O}$ 

経

験

を

持

0

だけ

って、

言 る。

葉

に を待っ

Ŧ

が

作ら 話

. て 行

間

に

新

作 れ

戱

曲

ま

Ś

V

カン

な 0

VI

役を代

え

ほ

どの

彼

て白

 $\mathcal{O}$ 

矢

ろは」

高 思  $\equiv$ そこで書か 0 は 生 あ は カン お 校生 た。 照 組 が 6 0 0 れ 0 実 た 7 解 本 稽 があ ペア、 演 講 スペイン語  $\mathcal{O}$ 放 古が始め であ ĺ 0 座 が るようだ。 可 れ と同 心 女 れ 否を た 演 る た 技 ま 新 時 乱 な 作を本 とは ŋ, 判 とに のジュリエット 兀 進 n 0 かと感い 断 時 行 た 演出 する段 ま 安 11 で え でに 組 講 L 戱 初 が付 座 す 目 か 心 は 対 取 新 で実演 Ш L けられ 面 ŋ 作 自 な 講 と目 であ をも 座 分 が スペ  $\mathcal{O}$ 次 相手と抱 が L 0 本語 る。 1 ようという企 が ていく。 らって 11 瞬 ŧ 開 ン た 間 私  $\mathcal{O}$ 先に  $\mathcal{O}$ カン  $\mathcal{O}$ は ロミ 玉 擁 演 れ で 不 嫌 先ず 決ま す 出 0 て あ 倫 わ 才 女 る 家 お る 口 n Ú み ミオ 0 性 0 0 0 先 だ た が

私

0

仮

0

相

手

役

生

カン

6

指

ż

ħ

た

 $\mathcal{O}$ 

は

今朝血] え立ての赤ちゃんのようだ。窓際に立って行って台詞 のたどたどしい台詞となってしまった。まるで言葉を覚 リじゃない」それを受けて私の台詞、「ヒバリだった、 なたのおびえた耳を貫いたのはナイチンゲールよ、ヒバ ぐな視線が私 じゃないわ」驚いて振り返ると「いろは」さんの真 さんの台詞がかけられる。「もう行ってしまうの?まだ朝 もした。 そらく鼓動が早鐘のように鳴っていたと思うが、ふと、 に覚えたは た。このとき自分の中では、頭が真っ白になり、 となんだと自分に言い聞かせて平静を装うことに集中し 圧 ベッドから離れようとする私の背中に「いろは もしかしたら脳梗塞?頭の中で不安が広がる。 だ、ナイチンゲール の薬を飲み忘れていないかとぼんやり考えたり ずの台詞 の目に突き刺さる。なおも台詞は続き、 妬み が飛んでしまっていたのである。 、 光 が じゃない」台本を見なが ・・・」うまく あんな 「あ つ直 デ は 5 お

瞬ドキッとして体全体に力が入ったが、これが演じるこ 礼します」といって私の右肩に頭を乗せて来たのだ。 合図を出した。すると「いろは」さんが、小さな声で「失 先生が

半までで、

0 経

もあ

るやに聞えて来る。二日目

の講座は二十一時 演出が始

ま

った。二人並んで床に仰向けになって先生の合図を待

よいよ私たち不倫ペアの稽古、

「自分のタイミングでどうぞ」と手を一つ打って

あ、 な 発する台詞 さんが、 わ 本 ジュリエットに恋してしまったのだろうか。演じるとい ることなど出来ないことに気付かされた瞬間である。 り過ぎてコントロール不能になっているのか。 葉がうまく出て来ない。もしかしたら、自分の感情 に続けるのである。 私は「きっと会える、その時には今の悲しみも楽し 大好きだよ」の台詞である。このうち、なぜか「逃さず」 ないか。いったい自分に何があったのか、ほとんどパニ 力強く格好良く決める台詞である。今朝は、できたじゃ ばに居て、まだ行かないで」、私が答える「捕まってもい でになかったけれど、本当に緊張のせいなのか。「いろは の感情 1 の台詞が口から出て来ない。次には、ジュリエットが ックである。最後の別れの場面は、二人が見つめ合って、 い、殺されてもいい。死よ来るがいい、歓んで迎えよう」、 「さようなら、どんな機会も逃さず、手紙を出すからね、 ñ け 当にどうしてしまったんだ、オレ。 出話になる」と答えて、最後の「さよなら、さよなら」 また会えるかしら」と言って私の手を取って来る。 が わ の昂りの中で、 からな 私の背中にすがって台詞を続ける「だから、そ を求めら は恋なのか。 この場面もやっぱり台本を見ても言 人前でこんなに緊張するなんて今ま 自分の使い慣れない台詞で恋を語 て来たのに皮肉なことである。 は「い ・ろは」 自問自答するが、 さん いから V 思

らそん を連発 果な 息子には らなかったのが不思議 ラブスト 話で恐縮 日 ľ な カン 常 į だが 気持 た中で、 「完地」 0 ij l 芸能 た K 'n 丰 が理 結 界 私の大好きだったテレビドラマに ドキ感を恋と勘違 鈴木保奈美と織 がある。 と名付けた。 婚 で 解できるような気がする。 は したという報道 でならない ドラマや舞 あれほど「好き、 田裕二が V 台 する。 余談であるが がなされ 0 共 好き、 よくもそうな 演 るが を れ 大変古 き が 「東京 好 0 吊 うき」 私の 今 か 橋 な い け 効

日

0)

午

前

中

は、

それ

ぞれ

のペ

ア

/で自

主

稽

古

0

め切 が する 0 いたりする。 役を演じたに過ぎず、 最 こん 大の理由だと思う。「い れなかっただけなのだ。それにしても、 つもりはな  $\mathcal{O}$ 私 . な純 の心 1粋な気持ちが残っていたことに の動揺を恋だとか、「い い。 単に私が役者として未熟であること それ ろは」さんは、ジュ をロミオとし くろは」 て私が さん ちょっと驚 自分に、 リエ  $\mathcal{O}$ 受け せ ツ V ま 止 1 に

字で一 せめ ってく 生が と思って Ō 枚にまとめ 2帰りが 後 たの て覚えた。 0 别 が、 け れ 他 !の場 て台本  $\mathcal{O}$ に「台本持ったままでもい ちょっとショックだった。 面 面 子の裏に は、 人のときは 0 台 詞 台本を持 貼り付え は 小細 こんなにも完璧 け、 I た 一せず ない 大事な台詞 に、 それ でや V カン 大きな 7 6 ij で ط に n  $\mathcal{O}$ 

. 掲

載

かの

ガであ

となっ を選 られ ら、 を見た < よの れ 新 薬を飲んだから大丈夫と自分に言い聞かせた。「さような 稽古を始めたが、 心させられた。十一時前には、「いろは」さんが合流 れ は一晩でかなりの量の台詞を完璧に覚えており、 で 笑顔で勿論だと答えて、 0 と手を取り合い って来るのがわ る。 作の 稽古を始め 稽古 てしまう。 ていたのに、 どんな機会も逃さず、手紙を出すからね、 少女漫画雑誌 演出 台 か た。 稽古を見たい 稽古の合間に雑談を入れ で それさえも話題に詰 してくれ のだ。 詞 ったのだろうと思う。 すな すると「  $\mathcal{O}$ の先生からは、 演劇 る。 「逃さず」がどうしても出 これが役者としてのプライド こんなにも相手のことを思い お互い Ň カン な る。 て、 V 心が大きく揺り動かされ、 たぶん「 「花とゆめ」 かと言 からその後 V えば それ が見つめ合う状況に 体も熱を帯びて来て、 ろは」さん 一人で大会議室前 「ガラ ま は いろは」さんは 台本見ながらでも って来た。 0 まさにプロ て、 でい たりしてみる 新作を演じ ス が į, . 近 いかと聞 ただし、 仮 付 面 ポ で来 少女 V 私 の階段 禁 て 来 1 る二人の 朝 なが の心 感情 なの 断 が ズと な 新 って、 大好 į١ 內 E 作 た 0 と言わ 同 5 は . Ш. 驚かさ 扉 が か 踊 0 喉  $\mathcal{O}$ す つきだ ,と感 り場 が 耐 女性 昂 女 演 圧 え  $\mathcal{O}$ 

午後は、三時半からの発表会こ句けて最後の稽古、どのではないか。ああ、これで変なオジサン決定である。紫のバラの人について語られようとは思いもしなかったる。まさか五十六歳のオヤジから北島マヤ、姫川亜弓、

午後は、三時半からの発表会に向けて最後の稽古、ど午後は、三時半からの発表会に向けて最後の稽古、どさんに魅了されてしまったとを詫びたが、「いろは」さんに上手に出来なかった」と言ってくれた。そんなさんも「私も間違っちゃった」と言ってくれた。そんので終えることが出来た。発表会は、何とか台詞を搾り出す感じざんで終えることが出来た。発表会を終了して、私は「いろは」さんに上手に出来なかったことを詫びたが、「いろは」さんに上手に出来なかったことを詫びたが、「いろは」さんに魅了されてしまったということなのか。

たと言うのか。

翌朝、台詞を言ってみる。窓のカーテンを開けて、

見

ろは」さんはジュリエットではなく、もちろん私もロミさんと何を話すことがあるだろうか。台本がない今、「いので、酒を飲まない私であるが参加することにする。し打ち上げの案内があり、「いろは」さんも参加するような打ち上げの案内があり、「いろは」さんの姿を探している自分に気付つの間にか「いろは」さんの姿を探している自分に気付つの間にか「いろは」さんの姿を探している自分に気付

出会いは、

衝撃であり最高の宝物となった。

ろは」さんに私はいったいどんな言葉をかける事が出来 して、所属劇団の活動に取り組むのだと思う。そんな「い 就職先の地に帰って、 たので小さく手を振っただけで店を後にした。 ない。結局 ことなど絶対にない。 オ て話す機会はなかったが、それで良かったのかも ではない。「いろは」さんが 、帰りがけに「いろは」さんが気付い 翌日には仕事に戻るのだろう。そ 幸いなのか残念なのか席 私 を見 つめ な がら愛を語 明日には、 が てくれ 離 7

て、何よりも演劇に真摯に向き合う「いろは」さんとのを与える力があることを自分で体験したのである。そしはないかと心配した顔を向けて来る。他の台詞も言えた。はないかと心配した顔を向けて来る。他の台詞も言えた。はないかと心配した顔を向けて来る。他の台詞も言えた。でにないかと心配した顔を向けて来る。他の台詞も言えた。ないかとがあることを自分で体験したのである。ないかと心配した顔を向けて来る。他の台詞も言えた。というにいいる。

はさん」と呼んだことは一度もなかったような気がする。とって絶対的な存在だからであるが、私が実際に「いろことを敢えてしなかった。それは、「いろは」さんが私にこれまでに「いろは」さんを「彼女」と代名詞で記す

届いたと思いたい。ロミオのこの想いがほんの少しでもジュリエットの心にでも、思い切って欲を言わせてもらうなら、私の、いや、

に応えることなのだから。 演本番の観客の心に響かせよう。それが、ジュリエットに届けよう。そして、十月二十三日の「アズキの花」公さあ、明日からの稽古で、このロミオの想いを相手役

## ノンフィクション

### 入 選

# 夏目漱石の 「こころ」に心酔

年

0

誕生日

当

旦

江

别

に住む二女か

5

小

大 滝 洋

子

いて、 ある額縁に入れて飾ってあるのを二女は家へ来て見 嗟に思った。と言うのは一人で続けて来た短歌 が 目を見張った。 は包を開けて予想もしていなかったものを手に、 載 届 0 11 もう一つあってもいいと思ったのであろう、 た。 たりすると、 受け取 った瞬 墨をすり色紙に書いて、 間、 ああこれは 「額 ただ一つ 縁 が新聞 唯 と咄 Þ 私 7

しかし歳を重ねると共にごく限られた作家のを繰り返 そ 読むようになり、若い頃のように新しい発見はなく が好きで、 れはかねがね読みたいと思っていた漱石の「ここ 冊分が大文字でコピーされたものであった。 時間をつくっては読書を楽しんで来た。

が大きい。 私が本を読むようになったのは、六つ年上 机とし 通 心ってい て使っていた座り机の上にはいつも本が載 て時 その 頃、 間 が 自由 女学校を卒業した姉 だったと言うことも は が姉 あ 洋裁 り、  $\mathcal{O}$ 学 影

> なって読んだ。 は 冊も持っていて、私は本箱から勝手に一冊抜き取って、 出た頃だったように記憶している。 ている。又、パールバックの「大地」上下巻も夢中 がなく、 本を手にした瞬間である。字も大きめで文章に気負 0 0 本箱 てい 森田たまの"もめん随筆"で、これが教科書以外 から た。 あまり日数をかけずに読み上げたように覚え <u>一</u> 冊 私が女学校一年の これも姉のすすめで、 「読ん でごらん」と手渡され 頃だったと思う。 姉は又、 確か私が勤 詩集 を何 8 そ 1

を読 林 拾 夢中になった。それからと言うもの好きな詩に出会う 読むうちに詩のとりこになった。島崎藤村・北原白秋 室生犀星・佐藤春夫又啄木の歌集・ヘルマンヘッセ等々、 ては気を良くしていた。それがいつの頃からか ったこともあった。 い読みしているうちに、どれも心に響くものがあ 学校 むようになり、 の行き帰り繰り返し諳 次 々 太宰治・ 戦した。 芥川龍之介 記んじて、 一時は太宰治に夢中 自分 獅 子文六  $\hat{o}$  $\tilde{O}$ 説 ŋ

あ る "から始まって、 6 石 を to に至っては、 っちゃん# 心 奪 わ 美 吾 草 は

屈

0

ぼ

流

好

きなのである。

0

b

思

S

る。 に、 別な なって手にしてページを開いたら字が読めな り返ると、 もう四 感動を覚え、遂にのめり込んでしまったのである。 心に響くも 残らず 何度読み返した事であろう。読む年齢 五年にもなろうか、  $\tilde{\mathcal{O}}$ 読み上げた。 が違って、 中でも "こころ" 新しい感情が 又こころが · 湧く 読 には みた  $\dot{O}$ で 印 刷 < あ 毎 特

漱 庫 分足らずの な が ある一 本では 薄く、 か 石 0 て来た った。 文字など無理な注文であった。 のところには全集のみで、 冊限り、 もう無理 字が小さい事に苛立ちを感じ、 んのであ 近離に 私はすぐ図書館  $\delta_{\rm o}$ あ すぐ係の人に頼み込ん り、 単行本ならと望みをか 匹 度々出 て、走 五. 回 幅七、 つった。 掛け利用し は 読 その日、 W でい 八 私の家から二十 んだ。しかしれてンチの目れ 諦め て るので、 手ぶら たけ ざるを得 11 ń で 大 方 ス

石 2 ようで娘はそれ 3 か 倒 ï 日 読みた 屈 娘が 0 ぽ らった の事 游 い気持なのであ ところが感じられ びに を聞き逃さずにいたのである。 とふ れ 来 てあった。) た 時 っと思う時 この どうし 不満 るのに私は が をポ あ てこう、 ツ この 文章 IJ Ĺ

玾

が n 漱 同 走

 $\mathcal{O}$ 

リイはしっか

りと覚えて

る。

漱 な 石 い。これら総てを飲み込んでの好きと言う事で、 な 当て字のはい文章のは のである 目 立れが のは『こころ』に限 0 た事 唯 では Þ

漱石は好きな作家で、ころを目指して時間の 村 れ を訪 た。 平成十五年三月ツアー ね た時 自 由 の 行 限り目に納めて帰った。 動 興味を示して一緒に行 影同 12 参加 時 12 l して犬山 漱 石 0 住居 市 に しある明 :動し のあ

その猫 明 が そ が わ 明 治村 ふわ 書き れに 置 狭 か ٧١ てあった。 温を背に の座 こがあ れ 沿って長い 玄関 行 こった甲 から上 った。 布 ここで に写真を撮 団に座って置かれ 一つて、 斐あ 縁側 縁側 \_ 吾輩 *y* の真 って来た。 が は あ 漱 と写 えん中に: ŋ, 猫 石 である」を執  $\mathcal{O}$ 真 部屋 書斎 てあった。 作 への横に "ここ一ヶ所だけ 一の片隅 ŋ は ŧ 十 私 0 0 主人と私 筆 12  $\mathcal{O}$ 程 猫 は  $\mathcal{O}$ たと説 が、 座 広 ŋ で は S

生と私 書 私 でかれ りを持  $\mathcal{O}$ こうして小 文中の 感 . つ親 は二人の結ば のようなもの 説 戚との金銭 私 章 「こころ」に、  $\dot{\mathcal{O}}$ が 先 生と懇意に 両 れ た過程 に 親 心と私 まつわる醜 てとし 心奪 を、 な は たら、 肉 ゎ ŋ 淡々とし 親 1 れ 次第 繰 0 ŋ 働き等 た運 それ 12 返 章 宁 L Ď 惹 び 読 6 か で

ためた。

含め

中

を

0

以外、 に響くものはあるのだけれど、今は唯 るように思え 代が絡 クラ 的 面  $\mathcal{O}$ 先生の自殺に到るまでの経過等々である。 は 私 で 1 頭に浮かばない私である。 あ K んでいるとしても、 マックスであろうと、 読む 度、 てならな 章 読 心に受けるも む 「先生と遺 V) 者 現在に 世 書」 そしてK  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ が 誰  $\mathcal{O}$ 通 大きく、  $\mathcal{O}$  $\dot{O}$ 友人 裏 小 用 がするも 説も読  $\mathcal{O}$ 侧 文豪夏目漱 自殺 K 語  $\mathcal{O}$ の大に絡  $\mathcal{O}$ 自 W で心 7 あ

る。 ある。 読んだのは一度きりのつもりでいたが最後 石との私生活 V 知らされる。 つもそうするように日付が書 早くに買って読んでいる。勿論、 (漱石 発見もあ 因みに、買ってすぐ、 本当に、 の奥さんである鏡子さんの り、 の生の声、日々の 人間 興味深 この記憶 本の 中を拾 1 昭和五· など、 ものを感じる。 様子が いてあ VI 読 定か 十二年十一月三日 4 今も手元に でない 漱 掴みとれ り三 てみ 石 度読 のペ  $\mathcal{O}$ る **、**事 思 を ] ある。 W 11 んで ジに 出 漱 思 لح 1

であろうと思った時、 であった。 から 十六歳の 状を書 のこの 私はこ 感動を貰っ 11 た。 プ レ ゼ れ を ント 吾が娘とは言え た 気に読え は、 事に感謝して……、とした 大変な労力を費 み上げた。 頭の下が そして、 やした でる思

## ノンフィクション

### 佳作

# 函館ハーフマラソン

田優一

年九 7 門で常に中位の成績である。でも年々記録は落ちてき 過去六回すべて完走してきた。それも七十歳以上の部 ようになって、今年で七回目だ。七十歳から参加した。 となるためであろう。私がハーフマラソンに出場する された。 る。 月開 雨が 来年度よりフルマラソンが加わり、 催 降 のハーフマラソンは、 っている中、 妻と千代台競技場に向 今年から六月に 同時開催 う。 変更

決めようと、 走るのはよしとして、大会に出場するのは止めてくれ 時がきたのかと、自分でも力の衰えを感じてきている。 の昨年は、 此 の年も、 七十歳での初出場は、二時間六分であった。 の記録を短縮してやろうと、 残念ながら短縮どころか延びてしまった。 私も、 しきりに勧める「もうやめろよ」と、趣味で だんだんと二時間三十分に近づく、六回 何と二時間二四分となる。そろ! 望む大会であった。 今 回 成績 の結果を見て、 張り切って走ったも どうするか \止める 次の その 目 年

> に ると外に出て植木を弄ったりで、気分が晴れない 好きな読書を始めたが、座ったり寝ころんだり、 船となってしまった。 言われる毎日が日曜日の自由人となり、糸が切れ ようになった、 考えてもいなかった私が、 体重を減らすことにした。妻が散歩に出るのを、 で薬をのんでいる身だ。なんとかしなくてはと、先ず、 十五キロを越えて、八十キロに近づいて来た。 続いた。 そもそも、 していたので、 動かないので、余分な脂肪がつく、体重も ーフマラソン大会に出場するなん 事の始まりは、六十五歳で退職 一緒に歩くことにした。 昼も、夜も何もすることがな 今こうして六回も出 高血 場する た風 よく 日 あき 日課 て、 圧 Ť が

(公園デビュウ)

チに座り一 色を見て、ぐるっと廻り、 中に入り、土手をゆっくり歩き草花や、 妻の散歩コースは、 緒に歩くと、何と、 休みして、 家に帰る道順であった。 五稜郭 私が遅れがちとなった。そこで 遊具のある所に下 公園 の外廻りを一 植物、 りて、 周し 口 りの景 て、

そのベンチに、 おらず、 廻 所 つった。 Þ に あ る ベンチも、二~三ヶ 年前 ベ ンチに腰を下ろし は 休みながら 濠の外 散 廻 がし 歩 ŋ 1 Ó か置 遊 スを 休 歩 か 道 み れ 廻ると言う、 は てなか が . Б 舗装さ コ 1 0 た。 ス

くなり、 量から少しずつ減らす。常に腹八分を守るようにし すことが最大の目的だったので、「食」も働いていた時 ることなく、家に帰れるようになった。 と一年、 んとも情けない 「腹へったあ」という状態を久し振りに味わうことが多 ついに「グーッ」「ググウッ」と鳴る腹の虫が出 歩く筋肉 有様であった。 も動 くようになり、 冬の雪道も休まず歩くこ 休まなくとも疲 先ず体重を減 た。 な Ò 6 ħ

す音が快感となってきた。

を待ち せて一 タッ 三年目に入っていた。 それでも少し歩いてちょっと走りを繰返していると、だ 充分にわかった。 悲しむべき現実だった。 えると、 になった。出っ張っていた腹が少し、へこんできたと思 年目 周 長く走れるようになり、 又走る。 走 頃 走ってみたくなった。 打 へから、 れ るようになった。 この繰返しをやる。走って分っ 胸の肉が上下にゆれて、 散歩から帰ると、腹筋運 ゝこれが 無駄な脂肪が付いてい 我が その時公園デビュウから 妻の先へ少し走って、 ついに妻をベンチに座ら 身かと情けなくなった。 腹は、 動 をするよう タッ るのが、 たの

> 東 置を歩 Þ

な て

長 である。 0 五 稜郭 ある人、 その中で印象に残った幾人かの人が居た。 公園には様々な人々が歩 目立つ人、見てもすぐ忘れてしまう人と様 ĺ١ てい 、 る。 中 に は 特 Þ

П 爺

時計廻りに歩き、 「トラック」競技が身について、丸い Ŧi 反時計! 稜郭 公園 ŋ [の遊  $\hat{O}$ 人 又走るようになった。 歩道は、 んと様 々であ 濠に沿って、 るが、 私は コー 時 スは 子供 計 廻りに 自 0 |然と反 頃 から 歩

十歳前 でも、 なるのだった。 どうしているのだろう、 目くらいから、この人に、「ジロ爺」と名付けた。 くなり、 でもなく、 「ジロ」っと見るのである。それも必ずだ。私は、三日 ジロ けたこの人も、 爺 余所見している恰好をしていても、 後の年齢である。 最近は月に一度くらいになり、姿を見ない は 止るでもなく、プラリ、プラリと歩い 必ず反対から、 三年目、 常に幅広の帽子をかぶ あたか 四年目となると、だん 時計 ţ 廻りで歩 隣人のように心 擦違いざまに、 V て来る。 てい ŋ 毎日見 七 疎

か

(ニコ爺

で肉 頭は 懸っている。 きも 丸 よくて、 体 唇は、 は骨太で大柄だ。 眼 やゝ大きめであ は大 き 眉 スター は る。 丸い 風折 眼 に、 帽 字 をか 円 形

いる。 自分の顔が 妻に言う、「あんな顔になりたいよ」と。でもとても無 ぶれば、 しまう。 / ~ 顔になりたいと思っても、 私達には笑っているように見える。 自分の顔を、自分で嫌な顔だと思っている。 どうしても「トンガリ」顔となってしまう私で そっくり恵比寿様となる。笑ってはい 「恵比寿」顔とは、 ほど遠いことは自認して 内面的なものが外に出て 擦違う度に私 ない ニコ 理

は

(つんのめりさん)

た。

ある。

たんだ」となる。そんなことで、私は勝手に友達にして 元気な姿を見ると「よかった、よかったなんともなかっ 見ないと「どうしたんだろうか」と心配になり。数日後、 ているなあ」、「元気そうだなあ」とそれが二~三日姿を 様に姿を見ているとそんな気持にもなる。「あゝ今日も来 こともない友達である。変な言いかたであるが、毎日の 公園の友である。声を掛けたこともない、挨拶を交した この人は、一番長く、一番繁くおつきあいしてい た、

前傾 廻りに歩く。妻と歩いている頃は、よく追越された。 となくつんのめっているように見えるので、私達は、「つ この方は めりさん」と呼ぶことにした。私達と同じく反時 にして「ツツツ」と歩く、早足だ。その格好がなん 私より若く見えて「オッサン」タイプ。 やく 計

ぬ

所で彼の姿を見ることになる。

追 年目頃よりあまり見かけなくなった。遂に姿を見なくな らら」と驚かして、元気だった「つんのめり」さんが十 に、「クス、クス」と笑い合った。こうして私達を「あら 私達と向き合う形となって、今度は後向きに歩き始める の追越した後が、「エキセントリック」な動きとなるのだ。 って、何ヶ月か後に、歩かない「つんのめり」さんが居 って、びっくり仰天、思わず妻と顔を見合わせたが、次 のである。初めてそれをやられたときは、「ギョッ」とな 「越して、二十~三十メートル位進んだら、「クルッ」と

にか全く見えなくなった。 時々ベンチに座っているのを見かけていたが、いつの間 のベンチに やがて歩くのであろうと、私は走り一周して来ると、 えた。着ているトレーナーも帽子も以前のまゝであ いっと座っていた。遠くから見ると、黒い彫像の様に見 である。みじろぎもしないで、一点を見つめるようにじ それは、 遊歩道から少し引込んだ、桜の木陰のベンチ 「つんのめり」さんの姿はなかった。その後 しかし、 何ヶ月か の後、 そ

病院 長椅子が並んでいる脇の方で、ポツンと車椅子に乗って 病院に行って診察を受け、 私は降圧剤をのんでいる。四十日分の薬が切れると、 待合室に、「つんのめり」さんが 薬を貰って帰る。 何と、その

まで「つんのめり」さんの姿を見ることはなかった。 何か悲しい気分を抱いたまゝ家に帰った。その後、 診察を受け、 して前を通った。なぜか正視できず、胸がドキドキし めり」さんと分り、 1 私 は 入るなり「ギョッ」となった。 病院を出るまで、頭がボ パッと視線をそらし、 ーッとしてい 気づ かぬ 振 現在 た。 た。

n

ľ

ば

(赤ジャン婆さん)

くり、 明るい人柄なので大きな声で挨拶する。 ち止り、 自然と私も挨拶するようになった。 歩く前からの、 最初に声をかけられ、 ゆっくり歩く。 休んだり、知りあいと会うと長々と立話をする。 妻の「公園の友」である。そのせい 一周するのに、あっちこっちに立 挨拶するようになった人。 腰がやゝ曲り、 で、 私と ゆっ

淋 かけなくなり、「今年も完走したよ」と報告出来ない しみでもあった。その赤ジャン婆さんも、 報告、「すごいね、よかったね」と声が返って来るのが楽 と走りながら返事する。大会が終ると、「完走したよ」と わせるのだと言う。 「今年も走るのかい」と声がとんでくるので、「走るよっ」 しかった。 々濠端に寄り、草を摘んでいることがある。 ハーフマラソン大会の前になると、 だん~~と見 猫に食 のが

男性と思いこんでいた人が、女性だった。

同

出られ、 は、 てる身分の、 人であれば働いている時間なので、その時走る時間 ので、転勤したのであろう。その後も同 る前に、 拶を交すようになったけど、 う締切られていました」とのことであった。それ 答えて「あなたは」と聞くと「申しこもうとしたら、 声をかけられた。 と思っていた。ある年、ハーフマラソンが終った直後に、 もう妻とは 人が現われて、 時 数年 間 ず行き交うのであるが、 ましたか」と問われ、「はい、完走しましたよ」と 帯 忽然と見えなくなった。 かかった。痩形で、 に 別行動で走るようになってからである。 時計 転勤族であろうと勝手に想像してい 何と女性の声ではないか、「マラソンに 一年か二年くらいで来なくなった。 廻りに走って来る人が 骨っぽ 次の年のマラソン大会が 挨拶するようになるまでに 関西訛のある人だっ はく私は じ時間 :現わ 男性だろう れ 帯 、るの が持 た で 成 来 挨

掃 溜 0 鶴 あ

る

11

クに似た歩き方 足である。その中に、 ポニー もたまに テール 太り は Ó Ļ V である。 の髪を、 . るが、 ス 初老 タスタと 長い脚でスタ 濠の 帽子の後から垂ら 常連さんは見かけ 0 周 々で、 歩く、 りを散歩する女性 腰が 0 な Ш モ ったりして は ほ とん オ を

鶴である 私は と追 越すことになる。 を体全身に 走りながら追越す。 して行く。 発散 年の していると、私には見えた。 頃は四十 その都度、 鮮やかで際立 兀 歳前後かと思われるが 周以上走ると、 「クイッ、クイッ」と動くお って見える。 二回くら その に 彼 女盛 掃 女を 追

尻に見惚れるのである。

中学生 尚更憧れるものである。 先生に淡い憧れの気持を抱く、特に美人の先生であれば、 い女性を見ると、それだけで気分が変る。私もあの 日のような、気分にさせられた。その気分とは、 男性 の頃の男子生徒 というものは、どうにも仕様 の、 誰もが抱くものだ。 のない もので、 若い 女の 少年 小 • 美

帰り道 けで、 振返るとその ジョギングの楽しみに、一つの色がついてきた。見るだ 還ったような気持で、「掃溜の 心の中に の感情を加えたような、「思い」であるが、純真な子供 その憧 現在も、 をして終った。 老人にしては、走るスタイルがよい。 で信号待ちしていると、後から声をかけられ 挨拶も交すことなく、五年になろうとする頃 芽生える、ごく普通の感情である。 れ は、 追越しながら「今日は」と言って走ってい 「鶴君」であった。「元気ですね」から始ま 母や、 それ 姉 へ の 以後、 鶴 「思い」に一寸だけ異 『君」を見る様になり 挨拶をするようにな と言うよう その子供に 私の た。 性 0 0

> る 唱

的

11

0

私と同年代と思わ の方は、 んがやゝ遅れ気味で、 若い ている。 夫婦 で歩く人も多い。そのタイ 妻を振り返ることもなく大股で勢いよく、 その中でやゝ目立つ一 は 並んでおしゃべりし れる夫婦は、どちらかというと、 旦那とち よっとだけ間をおい - プは様 組 なが 0 夫婦 ?ら歩 々である。 が いた。 て 歩 奥さ

るが 公園 、以下簡単に三人ばかり記す。 何時のまにか姿を見なくなってしまった。 [には、まだ――多くの特徴を持った人が 歩 ĺ١ 7 1

少しばかり奥さんに同情しながら走っていたがその

という格好の夫婦だ。亭主関白

歩いて行く。

奥さんは必死で後から追いかけている

の家庭なのだろうか

(豹柄の女)

も重たそうに、バッグを肩にかけて歩いている。 若づくりであるが、年よりにも見えて年齢は 春夏秋冬、 かけ爺さん 何 時 も豹柄である。それも下の ズ 不 ボ ンだけ、 何

る。 である。 座っている人が居ると、 相手は誰 毎日姿を見るその爺さんも、 車 でもかまわず、 乗り グルグル 廻 よく話しかけている、ベンチ すぐ横に座って話し って相手を捜 プッツリ見なくな L て かけて . る様

夫婦

ってもう二~三年となる。

(ジェイソン)

曜日」のシリーズもので、そこに登場する、主人公の名名づけた。丁度その頃にテレビ放映された、「十三日の金見えないのも不気味であった。私達は、「ジェイソン」と手袋をした手には何か持っている。帽子の奥で眼がよくて、帽子を深々とかぶり、体をゆすってドスドスと歩き、不気味な爺さんだ。夏でも長袖の厚手の着物を着てい

なった。 に置いて、私だけ走るようになると、妻は一緒に来なく私の公園デビューも三年目くらいとなった。妻をベンチーさて、こういう人々とある意味で知り合いとなって、 前をもらったのだ。

たげ、复がへこしできた。可寺り負いらいジョドングがなくなってきた。その体の変化を追って見た。脂肪もとれてきて、走るとブルンブルンと揺れていた肉重も目に見えて減ってきた。出っ張っていた腹はへこみ、重も一周から二周三周と連続で走れるようになり、体

った。

った。 ててみると肋骨の一番下の骨が に寝て気付 べると、 小便をするとき、 腹がへこんできた。何時の頃からかジョギング いた。 腹筋運動もするようになっていた。  $\mathcal{O}$ 脂 腹がへこみ始めたではない 肪 が 自分の一物が腹に隠れて見えな とれてきた証 明らかに手に当るよう 拠だと嬉しくな 仰向き 手を当

出来るんだ」その効果に、私は驚いた。かったのが、だん――見えるようになってきた。「やれば

順を追って説明する。体の変化は、頭から足の爪先まで、体全体に現わ

(頭部

がそがれて、 ぼ こがへこみ鎖骨が姿を現わしてきた。 弛緩した肉がなくなると、 て頬骨が出てきた。垂れ下りぎみの頬から顎の余分な肉 はんで、 今まで使っていた帽子が、プカ――となる。 眼の下部のタルミが少なくなった。 、角丸の! が顔が、 縦に筋が浮き出て、 やゝ面長となった。 眼窩 肉 部 が 0 所は、 どれ 根

(上腕)

れて、揺れ動いていたのがなくなり締って筋肉らしくなー 肱を伸ばして、腕を横に上げると肩と肱の間の肉が垂

見 がとれて余った皮膚が皺を作って、 に分かれる溝 0 っていたのが、 も見ることになる。 いで無くなった。 胸と腹との境目もはっきりしなくて、太鼓腹につなが 老醜 腹がへこみ、みぞおちが現われて、 その っかりと出来てきた。 大胸筋 ものだ、 の乳首の下には、 だがこれもその後三年く 垂れ下った自分でも 然し、 皮下脂肪 不様

### ())

これ 骨に沿って、窪みがはっきりと現われた。 れる」腹となっている。 に、 と揺れる。 字に垂れ下った。手でつまんでゆすると、プランプラン やも胸の皺同様、やがて消えて来る、今では臍の エクボみたいなへこみが出来て、老人としては でも見たくない自分の腹が出現した。 り、 縮んで皺を作った皮膚が、臍を中心にして、 醜いことこの上もないひどい腹となる。 九四センチが八三センチとなる。 腹の脂肪がとれると、 まるで象 だが然しだ、 背中も背 然し 海脇 . 「見 Ō

(お尻)

なる。 ことで、今では跡形もなく消えた。 の下の「サガリ」を想像して、鏡 るが、これ 感じとなる。 トイレに座ると、 泣き笑いする 。今まで上に乗 双つの 手で触れるとプラプラと揺れる。私は、 文縮 お尻が小さくなったのは喜ばしいことであ ĺц [の下にあたかも付属品 にんだ分皮膚は余る。 しかなかった。 っかる感じであ 馬蹄形の座にスポッと嵌まるように だがこれも走り続 に映る自分のお尻を見 何処へ行ったかと言 ったのが、 品みたい にぶら下 入りこむ 牛の首 がける 0

#### (胠

は つきりと隙間 が 細 び現わ つ た。 立立 れてきた。 た姿勢で太腿 椅子に座って足を組  $\mathcal{O}$ 間 を見 ると、 む

は、はっきりと隙間が現われた。最初に買った靴はプカ先も全体が細くなる。指に向う筋は浮き出て、各指の間とぴたりと組み交すことが出来るようになった。踝から

カとなり買い替える。

と自分のやり方に自信が持てるようになった。ような、体の変化である。「ヘエー、やれば出来るんだ」こうなると、もう止められない。自分でも信じられないいから、徐々に効果が現われて、目に見える形となる。こうして六五歳から始めた、減量作戦は、三年目くら

音だ。 碗は、 ŧ はその、 すぐ空腹を感じるようになったが我慢する。 ていても、上に盛らないようにした。食後、 現役時代の半分の量に、減らそうと心がける。 虫が、「グウーッ、ググッ」と鳴く。長い間、  $\mathcal{O}$ 副食は変えず、主食の米飯を茶碗の縁までゞ腹が 食パンは半分にする。 減量 空腹を感じない量を食っていたことになる。 使っていた大きいものから、子供用に変える。 |に欠かせない、もう一つの重要な要素は食事 腹の鳴る音が気持よく、「あゝ腸が動いてい 昼は御飯を茶碗に少々、 すると腹の 聞いてない 暫くすると その茶 ~~っ

振りに会うと、減量したと言っても、信じてくれず、「病ると、半分になった」と言い、元の会社の連中に、久し私の体の変化に、近所の婆様は、「前の肥った時と比べ

あ」と快感に変ってい

気なんだろう」と言われた。

季に 変りを肌 走るのに 種 ように K 几 試 ついて書 目を過ぎると、 も余裕が出 て走る。 感じて走るようになった。こゝで、 子供 いてみよう。 速く走 0 て、 頃 Ê 五. り、 稜郭 . 走っ 廻りを見て楽し ダッシ たスタイ 公 亰 を、 ユ ーを繰返 ル 兀 み、 を思 周 季節の 五. L 1 公園 た 出 周と走る りと、 L の四 移 て、 n

から地 甲高 らも、 現われ われ、 と割 高 来て少しだけ 出して、 枯 色が失わ なった遊歩道は、 根 れ芝の 元 春は一 々と宣 ħ を見ると積 日当 声で仲間を呼んでいる。 る 雪 て雪はどんどん後退して行くと、 肌 やがて中央の方へと広がって行く。そして芝生も 音を出 中 れ が 点々と広がり、 解から始まる。 ŋ 視り 色が見えるようになる。濠には、 カℷ てきて、 , b, のよ 顔 ているように聞える。 を出 ľ ħ ってた雪が 小さい「イヌフグリ」 て来る。 走る私の靴の下で、「ビシッ、バ て雪解が した水面に遊ぶ。 石垣 面には、 松の枝に未だ雪が残ってい に接 やがて一つの群をなして遠くか 濠 始 円く窪みを作ってきて、 まるのだ。 した所か の上に積った雪は、 菫 その声は冬が終ることを、 の花が咲き始めるのだ。 公園の中に入ると、 鴎は氷の上を歩き、 たら雪の 残る雪の横では、 圧雪されて氷と の青 鴨が帰 切れ目が V 花が顔 ハリッ」 そこ ・ても、 が 白 って か 現  $\mathcal{O}$ 

て走った。

光 中 冬籠 春 りし 0 前を 7 捜し た 人達が はじ め 出 7 来 桜 0 梢 を 照 6

濠の 最後の姿を留めている。 を見計らって帰ってくると、 台競技場の外回 つくされ 五. 面 月、 に吹き寄せられて、 る。 桜が 此 満 の時 開 りを走ることにしてい に 期 な る 私 たは、 頃 色かわり朽ちゆくのみの 散った花びらの 五. 正 稜 面 郭公 入 П る。 園を 附 近 花見が 避 は け 人 Z ^終る頃 ŋ で 花 埋  $\mathcal{O}$ 代 8

桜 る。 である。 れ 只 老い の木の は花を散らせて、 葉桜となった下を走ると、 私は、 てゆくだけだ。 営みを思う。 だから走れ、 それを踏んで走りな 次に進む桜 今、 走れと、 顧みる自分には、 此 萼が の時は一生に一度だ よく分らない がら、 0 一面に 木 0 毎年繰 営み 落ち 繰 を現 汳 理屈 返さ 7 お 温をつけ ゖ ñ な L . О 7 時 そ

大型ト 体ま 二つも三つ ごとに規模は大きくなり、 花見が終る を立て . て 追 で を台無しに - ラッ 長期 カシ も立 ながら走った。 ク け  $\hat{\mathcal{O}}$ 間 った景色は、 てくる。 横 しているだけでなく、 すぐ を走り抜けると、 公園はまるで工事現場 、野外劇 「何んてことだ、これが公園 公園に異形の矢倉が、 五月 異様とし 0 0 準 準備 備 金物 が か言い 準備 作業 始 を のように ま 小から八 吅 る。 ようも 解体時の市 高々と、 年 月 を追 な な音が  $\hat{O}$ かか 解 う

地

面

が

7現わ

れて端に細

V

筋道

が出来る頃にな

民 · と 思 の安全 った。 なが 天 の枯れ たら走 なお けと喜んでい 0 ざりにされ てい たが 7 る 石 1 る。 垣 0 崩 毎 落で 年 危 実行 な V) 出 来 危 な な

L

う間 ら熱が る私 骸 図となる。 た葉が落ちるようになると、 ようになる。 感は、 着てい ( 」と落ちる。 が、 (T) 影は 伝わってくる。 桜 涸 夏ならでは るシャ 草刈 の葉 びて剥れ、 輪にな 短く足もとにあ ツは汗 先に病葉らしきものに始ま が 機 の音を幾 「ワンサ」 0 のものである。 松陰に入り、 .に濡 て路面に 風に吹かれて道端 顔 面を流 後度か聞: れ ŋ̈́ 繁り、 て、 それが へば れる汗を、 路 き、 走り終って絞 着替えて涼む その 濃 ŋ 面 当は焼け 0 夏の終りを告げる合 路 V に寄せられる。 V 面 夏 日 Sy, てい に桜 は 掌で掻き落 陰をつくる。 って、 短 緑色の しときの 、 た 蚯 くあ ると「タラ 0 葉を 靴の 蚓 0 0 残 莧 لح 爽快 底 そ 死 0 る V カン 走

を見越 あろう。「ひまつぶし」に生きている老耄の我は、生きている人々は「あはれ」を感じているひまは いられ んだと空を見ると、 ŧ て旋回 又  $\bar{\mathcal{O}}$ 走る私 0 飛 あ び、 中だ。 は (D) 霊の れは 幾度 スタイルも、 六月 秋 t やがて氷 繰 備 こそ・・・」 を始 E 返 Ĵ 孵 てい かて が 化し 長袖、 張 た鴨 た。 り濠に住め 11 のそ 長ズボ 桜 0 子  $\tilde{\mathcal{O}}$  $\mathcal{O}$ 鴨 の 一 秋 ン姿となる。 葉 が。 ŧ. なくなる が 色 家は 親鳥 どうな な 現代 づ に 水  $\mathcal{O}$ 率 で 7 に

0

風こそが

秋

の始

まりの風である。

形

消えて、

又次の一

雨雲がやってくる。

だす。 情 時 公 時 私 る。 は ってい  $\mathcal{O}$ 来そうだな 早 雨 あ 風景 園 横津から駆け下 ġ と思 な雲がすぐお日様を隠してしまう。 雨 雨 には聞える。 0 ると同っ がも 0 その音は 季 葉 の上を見ると虹だ。鮮やかに半円の弧が懸って る 節 雨脚は通り過ぎて南西の空に光がさす。 公園 である。 0 たらし た桜 のが が あ の南 時 Þ ?見え を走 眺 実際には聞えない に ってくる。 0 濡れながら走り、 してくれ 側 葉 思わず足を留めて、見惚れ め り、 る。 な が、 りて、濠の水 を走っていると、 公園 がら る映像、 裏門の橋 落 もくもくと広  $\mathcal{O}$ 趣 時 走 5 きに、 る は 雨 ľ は 0 、けど、 此の時 正 面 ŧ め の近くまで来 ちょっとし に輪形の紋を作 桜 る 面 5 横津岳 が 0 0 入 光を 期 時雨 ってい 枯 は な 葉 週 早  $\mathcal{O}$ に黒い 6 失った虹 ていると、 所  $\mathcal{O}$  $\mathcal{O}$ 間 ると、 で た彩 É 雨 落 綺 は 振 来 音 5 ŋ とし · 雲が を作 すぐ ると、 ij 降 る だ は 公園 返 始 時 0 0 跡 め 7 7 ক্র 縣 V) 時

ワノ こともあ 何 で 処に あ 時 る。 雨 · 飛 と群れ が雪に変る頃になると雪虫が風に流さ った。 んで行くのだろうか 走 0 えとぶ。 7 V) その雪虫 ると、 時には目や口に入ってくる も 体 が 命 附 あ 着 思った。 るも た雪虫 Ď で白 何 処で生れ れ なが < Ō で厄介 な 6 0 7

葉を 枯 À 葉が で走る。 毎 踏ま 日 大 量 れた落葉 12 落 ち が ると、 カサ 遊 コ ソと音を出 歩 道 を 0 た

此の音、感触は私の気に入っている楽しみである。

ば昔通り、 を求める市民の気持を踏みにじる機械音であ い騒音そのものだ。街の喧噪を逃れて閑寂な公園 幾度となく繰返される。 員の登場で、 ついた枯葉が残 でも ウナリ 何 .時 V · 公園 熊手と箒でやってもらいたい。それこそが市 その騒音は、桜の 傾か ´声を発する風 つていても、 の管理ではないだろうか、 , 5 か その音たるや、 無粋な闖 屈車を使 木の 文句をつける市民はい 入者によって台 枯葉が落ちつくま って落葉を集める作 公園にそぐわ 芝生にへばり る。 無しと に、 願 わ V < 憩 な 業

見えない新雪の朝は、 の姿は消えて、 所もすべて純白 冬は雪、 を描く人であったか、 公園 やがて積る雪に白く輝く。一点の汚れ の隅 の雪に掩い 々まで白のひと色となる汚れ 心が洗われる清冽な景色となる。 漆職 尽される。 人であったか記憶は 濠の 面も凍 ŧ 定 ŧ 鴨

であろう。

の積った直後は、 かではないが、こんなことを言っていた。「黒に七色あり」 では白 の足 人影な を走る ž にも七色あるのであろうか、 がつくぞ」と、 0 た気持 人の足跡が一つもなくて、「さあこれか 猛烈に吹きつける西風が、 私には只白く見えるだけである。 で走る。 恰も人跡未踏の地を行くがご 吹雪く日 と思いながら雪 は :我れ 逆風となる

> なる。 く息と顔に当る雪がとけて、 て走る。 押 顎髭が し戻されつつ体を斜に前 冬は、 玉 雪を楽しみ、雪と戦いながら走る。 一の簾となってゆく。それを手で毟 顎髭までくると凍れ のめ りにな いて走 て玉と る。 吐

寒中「トレ」靴の下にて鳴る雪の

音色に凍れを測りつつ走る

年 があると、担当の人を紹介される。すぐ入会する。 なるものを紹介された。 が、チンプンカンプン要を得ず、 からには「保健体育」も当然あるものと思い 役所に「生涯学習課」なるものがあった。 グから三年が過ぎると、 函 江差で開催されているという。 [館で大会をやるものと思ってい が参加出来る大会はないものかと、 こうして、 歳 ″月は 廻りウォーキ 最初札幌に電話、 自分の力を試したくなった。 ・ングか たら、道南大会は、 只「マスターズ大会」 捜していると、 ら五 生 次に函館支部 涯」と言う 年ジョギ 電話した 私は、 市 毎

走る破 ない ク 7 百 驚い が 競 入会を果して、 千五百、 ので、 技 種目に、 の後に幾人か 参加 次 の競 三千メー 者 技 が 申込んだ。 さっそく道南大会に参加する。 に移るのが早 種目とも 少なく、 1 -ル 競 此の大会に出場して得たも 走に 走 一回で決勝となる。 n, 種 にエント V) 目千円の 休む間 等に . Л は 参加費用 なれ もなく次を た。 予選が な トラッ 走 0

のは、 「俺も走れ 人が居る た」という自信 仙 人の 様に速く走る人がい ٤ 世 0 中 には、 て、 「大海 とてつ

を知らされたことであ

フマラソン」へと私は移った。 マスターズは、 二回 |参加 L て 止 め た。 愈 Þ 函 館

であ った。 参加は、二〇〇九年、 私は丁度七〇歳、 、公園デビュ 記念すべ 1 き古稀 か 6 実に六  $\mathcal{O}$ 大きな 年 思 Ħ

い出となった。

のように、 これも履いて確かめる。終ると、子供の 取付ける。 ンランナーに見える。 に取付けて、 バ 大会前日から緊張 カー ド」を受取 (現在 気持が高ぶって来るのだった。 試着してみる。なか~~よい一 は ナンバーカードに取付けられてくる) りに行く。 感 次に記録用のチップを、 の あまり、 ランニングシャツの 千代台競技 頃の 端のマラ 場に 運動会前 0 「ナ 紐 前 日 に ソ 後

で埋 ラウンド で会場に行くと、 皆私より速そうに見えた。 っていた。 0 7 日 が に下りる。 のち妻に脱 来て早々と目 私もウオ 競技場の内も外も、 老若男女 だも が ーミングアップを始 0 醒める。 を渡 入り乱れてざわ して、 妻を連れ 参加者とその ス タン がめる。 て、 ついて ドからグ 自 家族 外周 車

並

W

0

集団 先頭

は

動

き出 が

した。

ゆっくり動

くので、

が

立っていた、

集団

競

放技場

を出

て、

B

0

方に

思

生れ さないけれど、そう叫んだ。なにしろ二〇キロ走る スタンドに立っている妻が見えて、 無事に帰って来るからなあ、 て初めてのことである。途中何 待 ってろよう」声に 手を振って合図する。 が起きるか 分ら á

り坂で、 向 共に走り、 人である。不安一 つて、 坂を上り下る、 勢いにまかせて先行者を、次々に追 第一給水所で水をのむ、 杯のスタートであった。 折返しての青柳町電 谷地頭 集団  $\mathcal{O}$ い越 か  $\overline{\mathcal{O}}$ 返 b 流 て走  $\bar{\mathcal{O}}$ 点 れ

場に くな、 を高 と抜 こでマメが 曲  $\otimes$ 通 距 Ш 1 った。  $\mathcal{O}$ 一つて が たのだった。マメが出来たらしいのだ。  $\mathcal{O}$ りを湯 スで走り、 \*苦 一砂通りに出る前に、 辿りつく。 かれて走る。 折返し点から、 と唱えながら走った。 しか 体の調子はよい、 あるが、 の川 最後の給水所に来 った。 潰 ñ 無理をしないよう心掛ける。 に向う頃に完走出 中 何 ても完走する決心 |と苦 そこから競 その上、 急に疲労感が出てきた。 か 少し坂になっていてそこを上る 何処にも不安材料は て、 右足 0 ヨレ たことか。 技場までは、 んの裏が 来ると確信 足を止めて水  $\exists$ をし レになりな て又走 チクチク痛 只、 ところが 亀田川 ほ す 今度は 歩く んの を飲 る。 る。 な がら V 温みはじ む。 沿 Ш 同 湯 じべ 1 海岸 12 そ  $\mathcal{O}$ 11 K  $\mathcal{O}$ 

手を振 に寝 出来たことを喜び合った。 ドで待つ妻と合流する。 全体が充たされてきた。 やったぞー」と心の中で叫ぶと、 心を解き放 る 0 てくれ 青空が広がっている、その青い青い空に向って つ、 あゝ何と言う解放感だ。 あとは 完走記録証をもらって、スタン 無事に帰ってこれたこと、 靴を脱ぎすてて大の字に芝生 達成感と満足感に、 「完走したぞう、 完走

体が 果すことが出 年の目標を立てる。 私の後方にはまだ千 歩くことなく完走出来た。その上、順位が一一〇五位 この 老 は V 二〇キロ走ってもなんともなく、 て行くことの 落 か 間 初出場で得た自信は大きか ! ちて、 な 以 内で走ること、 V 「来ず、 0 が 世 口 の 中。 証 目 期待は外れた。 人もの人が居 一、千着以内に入ること。 明となった。  $\mathcal{O}$ 記 録 次の の二つである。 が 大会 最短となっている。 った。 たのだ。 その記録を表にする 以後年を経るごとに の結果は 七〇 L だが何事 かも、 自信を得 歳 0 一度も 自 とも 時 肉 ŧ 7 分 間 来

目瞭然である

年度	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
年齢	70	71	72	73	74	75	76
記録	2 時	2 時	2 時	2 時	2 時	2 時	2 時
	間	間	間	間	間	間	間
	6分	10分	14 分	18分	19分	24 分	19分
	8秒	35 秒	22 秒	23 秒	40 秒	15 秒	44 秒
総合順位	1105	1150	1160	2089	2138	2315	2551
70 歳以上	24	29	20	39	39	43	48

な の 川 体温 った。 隊前 た体 砂 に並んでいる。「ダメダ」とパス、幸い 指定されているガソリンスタンドまで来ると、 高まり、走りに影響してくる。早く済ませようとあせる。 をしたことはない。低温で汗をかゝないせいであろう。 意を感じてきた。 スは っていた、 「ゴール」までもつだろうか、気になりだしたら不安が の上 頭らしきも いかと気に 雨は止 , を 折 の上 から、 私 て、 心 柳町 返し 上 配 住 用 素早く用を足 昇を抑え 防波堤 止んだが 湯の川に向う頃に、 砂 体 係の人に脱 W して走 電停に変ったが、 のがある。「しめた」と直角に曲 て、 で 诵 て、 が ていた りに 歩 · る時 える 7 貫 調 のコンクリが見えた。 今まで六回出場 漁火通りを谷地頭に向っていると、 雨 出 何時もの年よりも汗をかゝない。 受着を作 たが、 「ると、 のが IJ l 体力の消耗 12 任 いだビニール袋を手渡す。 ズ てコースにもどる。 よる体の冷えが、 町を通ると知ってい 17  $\Delta$ が 温まってきた。 配 一人も見え 0 出 体の調子がよいことが分 その上り下り して、 を少なくし スター 前夜急い 折返 海に面 下に な 途中でオシッコ 逆に作用 か 1 りダッシュ、 、る人が った。 を一気 点が 安心したの 降りる ているよう した家並 前 数人が 脇 え 梯子 ï 自 7 が 外 湯 て 衛 い 4

は

雨

0

大会とな

0

た。

中マ

ラ

は

初

8 た。 言わ が、 と腕 最 を返却して、 完走した。やりとげた満足感 競技場に入り、直線を走り切った所が、ゴール点であ ンバレ、 しながら走る。沿道には、次第に人の数が増えてきて、「ガ どうだ、無理をしてない 処で倒れて救急車 前 ゴ 折 と言うと、「いゝ気になるんじゃないよ、年なんだから」 短縮している。 所に立っているのが見えた。 つく体を踏ん張って、 け 、場し 後 抜 へと走る。 (今年から入場してトラックー 最後の それが結果に現われた。 を振 'n ル 0 機先を制して、 it 力を振 前 Ź てからの走り方が「昨 る。 る。 の数 ガンバレ」の声援がとびかう。 帰り道「昨年より記録がよくなっていたなあ」 給 前 記録 中の 水所で水を「ゴックン、 何も考えずに、舟を漕ぐように、 羊 ŋ 走者を次 走りながら、 ロだ。 Ĺ 十で運ば 証 橋 ぼる。 私 をもらうと、 にさしかゝると、 喘ぎつつも止 0 スタンド 々と追 次の言葉を妻が遮った。 か、 れた人がい 力尽きて歩 スタン 年よ 体は大丈夫かと自問を繰返 体調が良 で心は充たされ 力強く手を振 、越し の妻を捜す、 周が ドの妻 何と昨年より グいてい た。 た。 まることな 11 なくなった) ック それを力に 自 ょ 0 のを感じてい 口 亀 、る人 1分は1 思 所に つた。 く見えた」 <u>ٰ</u> 田 何時 ĴΠ 果し と の Ŧ. 出 戻ると、 前へ前へ を 今年も 一分近 もの す、 前 1 ふら ッ 走り り左 て、 た

日休

んだものゝ、

二日目にはジョギングを始めた。

さりげなく、新しいランニングシューズを買った。なりげなく、新しいランニングシューズを買った。てなっていた。そのことが、ずっと気になっていたけど、私っていた。そのことが、ずっと気になっていたけど、私此の大会を機に、出場を止めるよう、妻や、息子が言ど影響はなく、一日休むともとの体にもどった。

毎日のように走っていると、二十キロ走っても、

ほとん

## ノンフィクション 佳

作

## はじまりは十五、 遅咲き桜 (振り返れば青春) 欠 端

が咲き乱れ 九 八 五 てい 年昭 、る中、 和六十 私、 年三月、 中学校の卒業式に出 気が付けば周りは、 席 桜

った、 出来ず、 そこは、 株式会社 日本全国から、 中卒と言う悪奴

る内、 った。 親に楽な暮らしをさせたい」と思い、 決まり、まずは、「将来手に職を付け、 \_ U と 言う、ふぐ料理中心の居酒屋に、 社長と舌鼓みを打 独立開業をし 勤務が 母

に、迎えに来て貰い、上野動物園や、 家には高校受験を理由に仕事を退職した。 げ、「Yちゃん」に会いたいこともあって、 いた私は、 その時に、 富士山を窓ガラス越しに、 交際 週間もしない内につらかった仕事に根 していた「Yちゃん」 アメ横に寄った後、 親戚の住む静 我慢が出 静岡 県 来 0 岡に 親 ず、 を上 戚

岡には、

少し遅咲きだった私は「S」の中でも、 東京都目黒区自由ヶ丘にいた。 浜名湖があり、 「S」と言う就職先だった。 親戚のお兄ちゃんと、 を函 お店が三件 の男子が集ま 館 12 残 車で して て あ が流れて、特になる。 言う、 た。 がら、 ず、 Λ, 湖 れ、 1 ミリーレストランで、 田 .、どうしようも無いという事で、 ジェーン」 た から、 一半を一 チークタイムともなれば、 夜遊びが、 函館に帰って来た私は、 途端に進学を諦めてしまい 順番に、 中学校に行ったものの、 「Yちゃん」を始め、 ホ テル 飛行機 周ドライブをし、 特に「ディスコ」が好きで、 得意のダンスやステップで、 が定番だった。 度を過ぎ続いた中、 踊ったものだ。 調 で函館に帰 理 場 で、 って来た。 シェ 色々な友達と遊ぶ様になって 特 普通に何人かの女性 担任だった先生とは、 週間程過ごし、 に、 やはり母 市内のデパート 洞爺 0 のだひ 当時 に 周 ある 親 ユーロビ ろの その K に . О ーメリ . 頼ま

機

羽

皿洗いのアルバイトの仕事をしな 一度は高校受験をしようと思 ラ ア

1

囲を魅了させ

預けられる事になってしまった。 フをしていた知人の所に の反感をか

の中で待ち合わせて、 一ヵ月に一度は函館に「JR」で、帰って来ては、 当時の彼女と、 深夜のデートをし 駅

てい たので、淋しさからは、逃れていた様にも感じた。

忙しさで、 られていたので、ホテルは毎日満室状態が続き、大変な 洞爺湖では、夏になると、連日連夜、花火が打ち上げ 仕事に追われていた。

する事になった。 が重なり、或る日、 私は、 一生懸命頑張っていたので、そのせいか、 調理場で倒れてしまい、 病院に入院 無理

一ヶ月程度の療養をし、復帰後、順調に仕事が続く様

見覚えのある女性が目に映った。 スコに行き遊んで居たら、 になった、或る日の夜、 温泉街の中にある、小さなディ 客の中に、どこかで、会った

ちゃん」と呼び、 それは、夏に入院していた時の病院の看護婦だった。 名前は、「M」と言い、年は、三歳年上で私は、 自然に交際が始まっていった。  $\overline{\mathrm{M}}$ 姉

M姉ちゃん」と別れ、 季節が冬になり、ホテルも暇になって来たので、 姉ちゃん」と、最後の夜、交わした言葉がこうだっ 函館に帰る事にした。 私は

「離れても、お互いに、いい人が出来たら教え合おうね!」 て私は、 涙を呑み函館に帰ってきた。

それは十六の、冬の出来事だった。

函館に帰 0 て来た私は、 又 ディ · コ 通 V 0 毎 目 が 始

まった。

みで仕事をする様になって行った。 子と交際する様になり、 そこで、女友達の中の一人、「R」と言う一歳年下の女 地元 元の湯川 のホテル 住み込

仕事が終わると、すぐ近くの寮に帰り、周囲

の友達等

お決まりの、ディスコで遊んだりなんかをしていた。 ボーリング場で、デートをしたりなんかをして、 が遊びに来たり、「R」も良く遊びに来たりして、昼間 夜は、

又 東京に就職する事になった。

そんな十六歳

源の春、

勤めていたホテルを退職し、

私は

勤務先は、 東京の足立区の、「割烹N」と、

った。

いた。 ト」と言う、 おいしく、私の大好物でもあった。 住み込みで仕事をしていた私は、近所にある、「Sマー コンビニで、よく仲間達と、 買い物をして

東京都の下町とも言えるそこは、うなぎや、草団子が

女子大生との交際が始まって行った。 員と仲良くなり、私は三歳年上の「K姉ちゃん」と呼ぶ、 又、気が付くと、い つもよく行く、 その コンビニの店

私が、休みの時なんかは、都内を案内して貰い、二人で、 姉ちゃん」は、やはり、 地元だと言う事もあり、

言うお店だ

デートを楽しんだりなどした。

紙が届き、 事も慣れ始めたある日の事、 私 の心をひどく動揺させた。 函館 0 「R」から、 手

内容は、 私と離れてから、生活が乱 れ、 荒れ てい . ると

の事だった。 私は仕事を辞める事になり、「K姉ちゃん」 と別

れ 結局、 函館に帰って来た。

げる事さえ出来ず、又、ディスコ通いをし始め、 「R」との久々の再会をした私だったが、 何もして挙 今度は

「R」の友達の、「Y」と交際を始めた。 「Y」は、結構、 器量も良く、「Y」の自宅に呼ばれ、

遊びに行った時は、 部屋で、「ジンギスカン」を御馳走に

自然に別れ、今度は、その友達の「T」と、 それから、半年もしない内に、「Y」とは会わなくなり、 交際を始め

ったばかりで、「T」を助手席に乗せ、 元の飲食店での食事が多く、その頃、 「T」は、足も細く、器量も良く、 デートと言えば ドライブをよくし 丁度車の免許を取 圳

その後、私が三十歳を迎えた頃には、沢山の特定しな 「T」とは、 喧嘩 ば カン た りし てい たのだが、 すぐ縒 りを

> を呑みのくり返し、そして仕事 い女性との交際があり、出会いと別 は、 就職はするもの れ、恋、 度 々涙

長続きはせず、 転職のくり返しだった。

ツ

見た。 トでもある、 そんな中、二十二歳だった私は車で桔梗の隠れ 裏夜景が見える場所に昼間行き、 函館 ス ポ を

瞬、アイディアがひらめい た。

造るプロジェクトを考え、 を考え、描き、将来函館に、「がぎうc ている様にも見えるその山の、マス それは、「臥牛山?」「がぎうchan」、牛が寝そべっ 夢見たのだった。 コットキャラクター h a n ランド」を

ジナルプリントTシャツを限定で五○枚作り、 その為に必要な資金作りとして、まず手始めに、 販売をし オリ

その事は、 当時の北海道新聞夕刊でも、 とりあげられ

次に、

タ作

b,

作詞、 を挙げたのだった。 ンパ・小パ 作曲を続ける様になり、 唄うお笑い芸人という道を選択し、ネ 1 -ティー 催し物・ デザイン等と、 五稜郭中心に、 宴会・コ

O るか出演、 街角では当時、 弾き語 街角は昼夜問わず賑わったのだった。 り等、 コギャル・ギャル男・ストリー 色々な人 産に支持 され 1 F 系

nラインスタンプの販売。 最近となっては、ユーチューブでの配信。 ユニクロでのオリジナルT がぎうc h

生ラジ?配信、 ツイキャス、FC2等での配信。

〔売。フェイスブックでの作品紹介、ツイッタ

シャツの販

今となっては、「肝硬変」が発症し、病院のベッドに伏 やれる事は、ある程度の事はやった。

せながら、 気が付けば、こうして筆を持ち原稿を書く日々である。 いが残ると言えば、 現在自分が、 十五の春、高校進学と言う道を 何が出来るかを考えている。

それだけが、心残りでしょうもない。

歩めなかったと言う事。

通信教育で、大検と言う道も考えたが、こうして病に

伏せ、

四十五歳となった今、大検もどうでも良くなって

だ。

来ている。

た一人の母親 自分が出来る事は、高校進学?高校は高校でも、 への親孝行。 たっ

えている病気も忘れられ、 精一杯笑う事かな?「笑顔」それだけで、今、自分が抱 そんな感じでいいんじゃない。後、出来る事と言えば 周囲の人達にも余計な心配を

母親も言っていた。

掛けずにすむ。

本当、「乾杯」の詩の中にあるフレーズの通り、語り尽 機が笑ってさえいてくれれ ばい

> くせ ない日々だな。

忘れもせぬ

、あの

目の

早朝、

缶ビール片手に、

函

I館山

Ш の素晴らしい街作りに 頂 がらの 函館の発展と繁栄と地元活性化、より一層 『乾杯!』」

そんな事を思いながらも、今日も私は、

「元気だぜ!」

「肝硬変」「平気だぜ!」「病は気から!」 悔い残らない人生だった様にも感じる。

私から、旅立っていった友よ、人生、生きて行く上で、

色々な事があると思うけど、何事にも負けず、強く生き ていて欲しいと思う。それと、今までご支援、ご鞭撻 本当に心からの感謝の気持ちを伝えたいと思う今の心境 て下さった、先輩方、友人、上司の皆様、恩師の先生方

おわり

#### 選 評

### 竹 中 征 機

のやりがいがあ 本 年 度 は 作 品 とし 7 質 0 高 1 個 性的 な分野 が 揃 1 選

て赴任 かつ日本の清流 水関さんの作品は、 した生活の様子が温かい眼差しで描かれている。 元で名高 い四 総合医療をめざし、 万十川山間部に診 兀 療 玉 所 一の長流 長

療を問 根をはって生きている生きもの」といい、自ら田の 筆者は土地の人々や土にふれることにより実体験で医 い直そうとするのだ。その文中で「自分も大地 泥 土 に

に入り、 また、 人々との出会いとふれあい 田植えなどに加わる様は感動的だった。 が、大きな収穫だ

0

医療に対する 「医」と「農」の体験的洞察から、導きだされた総合 春夏秋冬の季節の移ろいを語る文体に詩情すら感じ 個別性」 と「不確実性」 には説得力があ

佐藤さんの作品は 挑 戦 の日 々を語 海上自衛隊を満 って興味 深い。 55 歳 で退職した後 0

った。

れをやろうと考えて無為に過ごしてしまう。 は 60 歳、 それより5年早 い。 あれをやろうこ

度参加 した。 作 - 者は、 また野外劇で知合った方の紹介で北斗市 函館で毎年行われる 野 外 劇 に で 再

> 開 市図 催される合唱劇に |書館| で知 ット」とはそのことから引用の表題であ った演劇講座を受けることとなった。 も加 わり演劇 0 基礎を学ぶためさら ń

そのほろ苦い顛末を仔細に描 「ジュリエ

かった。 先生の心について読者に伝わる部分があると、 る作者の心酔ぶりが推察され母娘の絆を感じた。 大滝さんの作品については、 漱石 の「こころ」に寄せ もっと良 ただ、

ゃ を見守る奥様の存在である。 時に、その根源にある若さに頼もしさを感じた。 この作品で光ったのはい 今田さんの作品は、 目標を掲げ ての努力や精神力に感心させら 函館ハーフマラソンに参加 つも目立たないがどこか ħ 0 で夫 経緯 同

が なんといっても、健康で走れる自分と家族のありよう 「走り」を生むのだろう。

るく見透すところが良 欠端さんの作品は、 い 自分の生きてきた航 跡と将 来 を明

に 遊んでしまう日々が、隠し立てなく描かれている。 職を付けようとし この学歴社会に若干15歳の身で投げ出された自 ノンフィクションは勿論 てもがく青春、 虚構ではない。 かし 誘 単なるル 惑に負 分。 くけて ポ 手

でも 7 いるといえようか。 ば 事実は小説より奇なり」が今も生き

そっと光へ・・

欠 端

機

見えない糸があの月へとつなぐ一筋の道

歩き出すその一歩が夢の中へと僕を導くよ

そっと光へ・・・そっと光へ・・・

二度とないこの瞬间よ・・・

このまま時间よ・・・

瞳を用じても 君の笑顔が浮かぶんだ

眠いのさ とっても でも眠れない

そっと光へ・・・ 歩き出すんだ・・・

途切れた糸がこの地球へと消える一時の詩が

走り出 すその光が夢の中へと僕を導くよ

眠れない 今でも そう眠れない

瞳を闭じても 君の笑顔が浮かぶんだ

く、今もろ その辞しこのまま二人が・・・

ス、会える その瞬间を・・・

そっと光へ・・・そっと光へ・・・

そっと光へ・・・歩き出すんだ・・・

消える事のないこの思いよ永遠に

二人出会えた この奇跡

そっと光へ・・・そっと光へ・・・

いつまでもあの光の中 を歩いて行 くんだ

そっと光へ・・・ 消えないんだ・・・

旓 えないんだ・・・旓 えないんだ・・・

生き甲斐

佐 Þ

木

溜りの窓辺 男は回顧を

出会いという思い出の道

Ð

年上なのか

おかった

あの時

さようならの言葉があった

その道 途中ではぐれて別々に

どうしてか

くねくねする道を歩く

藪の中に眠っているあの日の青春

言葉はなかった 何故か

余韻だけが

- 177 -

道は

風に吹かれ あれから長い道程 雨にうたれ 傷つき歩いたのか 雪で涙した

今はどの辺りなのだろう

不思議な事に

青春という記憶は残れるのか 更新されて来る電話帳には残っている

何故 夕焼け空を眺めるの

何かがあるだろう

ひとりだけになるため

暫く会わずに居られるから

今さら戻らない青春

例え 不明でも 何かをしたい町会に デイサービスバスの参加者いの中に 仲间 体力作り

青春という価値を大切に

矍鑠と新しい季節に

畢生で元気をもらったら

やがて

- 179 -

珈琲かを選択しながら特の移りで抹茶とか

出会いまで歩き続けたい

は(な)ロ・ロ・ロ

余りにも 自由だ!

あっと言う同に 私の体から抜け出し

異次元の世界に 行ってしまう

コ・コ・ロ(心)よ

玉 掛

公恵

色・形を 変幻自在に変え

は(の)ロ・ロ・ロ

余りにも

自由だ!

- 181 -

持ち主の私は

君と 年月を

共にした仲ではないか?

自由を手にする前に

私に伝えてはくれないか?

一私には―

ク・ス・リ(薬)と言う名の

支援者が必要なのだよ

その支援者は

F (

時には

私に反撃して来るのだよ

支援者とは 養人の顔をした支援者は

果して存在するのか?

存在するかも

貴婦人で 居てくれないか?

すがりっくすべしかない 斑明 できない支援者に

存在の 私―

私には

支援者が必要なのだよク・ス・リ(薬)と言う名の

コ・コ・ロ ( な ) キー

もう少しの向でいい

#### 選評

### 鷲 谷 峰 雄

数は少なかったが水準は高かった。一と佳作二作品を選んだ。いつもより今回は17作品のなかから、入選作品

## 入選「そっと光へ・・・」

### 欠端 一機

です。 まの時間の方が二度とない瞬間なの 眠いのに、眠れない。でも、このま

う。

この「二度とない瞬間」が、君とのです。だから消えない光もあるのです。からはもう消えない。瞬間が永遠なんの中を歩くことによって、自分の胸裏が出合えた奇跡はいつまでも、あの光

繰り返すことです。

Ĺ

### 佳作「生き甲斐」

### 佐々木 二二

らなくてもよい青春もあるのでしょは残るが、本人の考え方ひとつで、戻青春時代が荒んでいれば、その記憶

は忘れないようにしたいと思うのでという、老いの身になっても、積極性あるのです。青春を仰ぎみて懐古する大切にして歩き続けたいとの願望もでも、老いのなかで青春の価値観を

りこんでくる。

どが詩的です。とか「道は今どの辺りなのだろう」なとか「道は今どの辺りなのだろう」な詩的な文章は「余韻だけが若かった」

す。

生しています。リフレインです。笑顔の出合いです。この場面を二度再

それが詩的に構築しているのです。

と二人のリフレインは成功していま組み立てて詩をつくっています。眠り

わってきました。

少し散文的ですが、

生きる力はつた

## 佳作「コ・コ・ロ(心)よ」

## 玉掛 公恵

私に伝えてはくれないから。た仲ではないか、自由を手にする前に、「持ち主の私は、君と、年月を共にし、「持の主の私は、君と、年月を共にし最初から詩が表現されています。

ク・ス・リ(薬)という名だ。には見えない支援者がいる。それはまに、ふるまうことがある。でも、私も由を手にした心は奔放で思うま私に伝えてはくれないか」。

の心と薬との葛藤は思いがけなく入味方と思っていたが攻撃するのだ。こでも、その支援者は私に反撃もする。

るので、すがりつくしかない。にしているが、支援者が善人の顔をすこうした意外性がこの作品を複雑

まごころのある善人でもいいのでは的につかわれていますが、それよりも、居てくれないかという。貴婦人を象徴もう少しの間でいいから貴婦人で

ないか、身分の高い婦人は、高慢でう

れています。で作品は確実に構成さっていますので作品は確実に構成さいずれにしても、心と薬の物語になぬぼれた人もいるからです。

佳

作

選

入

手水舎に揺れ浮びたる紫陽花が涼を与へてくれてゐし初夏 漆黒の宇宙に咲ける花のごとギガンジウムの神秘な紫 「呼吸停止」看護師よりの急の報せ父よ急ぐな今暫し待て

捥ぎ取りし胡瓜がぶりと噛み付くに露したたりて夏真っ盛り

石嵜

章枝

柳本 水関 優子 清

光彦 法雄

竹田 清水

厨より見ゆる大きな栗の木に熊啄木鳥が来て音を奏づる

安値なる赤かぶ洗ふ母とわ

れ川上の水赤く飛ば

柿を食む祖母の口元見る程に子ども見守る母の気持ちに

透きとほる白鱚三枚下ろしにし厨で吾待つ冷や酒三合

Щ 県

庸

美 選

濱谷 清水

昭剛 牧子 杉澤

椛流

#### 選評

### 入選

# ジウムの神秘な紫漆黒の宇宙に咲ける花のごとギガン

い。ギガンジウムであれば、生け花な上の句の比喩が効いているのが善

科の一種。(三省堂 カタカナ辞典よどに使用するネギ坊主の巨大なネギ

# を与えてくれてゐし初夏 手水舎に揺れ浮かびたる紫陽花が涼

であれば「与へて」となる。 捉え方に独自性を感じる。旧仮名遣い神社に参拝されての作か。下の句の

# 父君よ急ぐな今、暫し待て!「呼吸停止」看護婦よりの急報あり

て特に下の句が善い。「呼吸停止」看リアルな歌で一気に詠みこんでい

を用いなくても十分に伝わる。し待て、としたが如何。この場合記号護師よりの急の報せ父よ急ぐな今暫

#### 佳 作

# たたりて夏真っ盛り(新鮮な胡瓜がぶりと噛み付けば露し)

て三句は「噛み付くに」としたい。で初句は具体的に「捥ぎ取りし」とし家庭菜園の朝での作と思われるの

# 透きとほる白鱚おろし三枚に厨で吾

待つ冷や酒三合

「白鱚三枚下ろしにし」では。合語としては「三枚下ろし」としたい。も七音にするため苦労されている。複原作の「白鱚おろし三枚に」は作者

# 見守る母の気持ちに - 柿食す祖母の口元見ていると子ども

このままでも娘さんの気持ちが読

に」としては如何。 元見る程に子ども見守る母の気持ちみ手に伝わるが、「柿を食む祖母の口

## 水赤く飛び散る安値なる赤かぶ洗ふ母とわれ川

上の

旧仮名遣いで、生活に関る歌に着目

しては如何。いるので、結句は「赤く飛ばして」とが、折角リズムよく四句まで詠まれて結句「赤く飛び散る」は事実だと思う

# 鳥が来て音を奏づる 厨より見ゆる大きな栗の木に熊啄木

当てはまることだが。このことは多くの作品、選者自身にもの中心を今ひとつ掘り下げて欲しい。あそうですかと言うことになる。感動がなりですがと言うことになる。感動がなく纏められている歌だけに、あ

今回は、応募作品数一一○点、二八

無理だが、次回も是非応募して下さい。り選に一喜一憂しないが多くの作品を選外にしなければならなかった。外にしなければならなかった。外にしなければならなかった。の選に一喜一憂しないぞと言ってもの選に一喜一憂しないが多くの作品を選やにしなければならなかった。

弟 0 百 箇 日 法 要 来る前 15 ひ Y ŋ 詫 び た ŋ 工 場

閉

鍞

部

首

順

0

ケ

1

ス

0

活

字も溶

か

ż

ħ

て

滅

L

ゅ

<

0

か

時

代 0 中 15 7

を

0

時

代

閉 倉 六 庫 十 鍞 年 15 す 経 る 印 紙 7 取 刷 V ŋ 工 と夏 場 壊 す 0 乾 下 紙 準 燥 0 させ 倉 備 庫 進 伸 ŧ 鋳 縮 物 ぬ 時 0 防ぎし亡き父

ス

۱ ا

ブが

二台も出で来し

友

0

追

悼

文書く

者 詠

選

Щ 県

庸

美

俳 句

三 太 郎

熊

選

入

選

夕焼の海底くぐる新幹線 近づけば話し出しさう立葵 ふるさとの小さくなりし踊りの輪

佳

作

空高く伸びるつくしの丈くらべ 百二歳花を待たずに母の旅

逃げまどふポチ尾を丸め夏花火

白寿すぎ喉をうるおすところてん

蟋蟀や忍び足でも止みにけり

澤 由 欠 石 葯 利 端 岡 地 田 宏 寬 繁 政 子

機

雄

義

之

佐々木 田 水 克 光 法 子 彦 雄

竹

清

選 評

## 夕焼の海底くぐる新幹線

ね。そのお祝いの句としてもいゝです し、喜びの句でもありますね 幹線が 函館までやってきました

とも華やかで壮快なので、俳句では夏 るのですが、とりわけ夏の夕焼がもっ 季語は 「夕焼」。四季にわたってあ

ばではなく、人々の内なるものを表現 の季語としているのです。 句は、型に嵌った祝賀や喜びのこと

#### 決めました。 焼の海底くぐる」と素晴らしい表現で し得たのだとわたしは思います。 タ

### 寂びれてゆく昨今になりました。それ ふるさとの小さくなりし踊りの輪 「ふるさと」は過疎化してだんだん

ました。以前なら若い人もたくさんい を「小さくなりし踊りの輪」と表現し

らも話しかけてみたいような気がし

秋八月の盆踊のことです。淋しくなっ て賑わ 輪になったものでした。季語 った盆踊りとなり大きな踊 は 「踊」。 ŋ

うな今のふるさとの情況を象徴的に 詠嘆しているようにも聞こえます。 りも希薄になったような気がすると たふるさとは何だか人の心のつなが 「小さくなりし踊りの輪」とはそのよ

## 近づけば話し出しさう立葵

捉えたものとなりました。

葵」が咲いています。夏の季語です。 函館の街のあちらこちらにこの「立ち

それとも立葵が少し高いか、こちらか ます。立葵との目線が同じくらいか、 てくれそうな表情でそこに立ってい んでいますね。「近づけば」「話し出し」 るい花です。句もその通りのことを詠 あります。さわやかで気どりのない明 形の美しい五弁花を開くと花の本に 茎は直立して二メートルにもなり大

> とても ます。「話し出しさう」の擬人表現で、 いい句になりました。

佳

## 蟋蟀や忍び足でも止みにけり

ぎが か。 この句のような経験があるのではな んでした。それにしても、蟋蟀とは難 かりです。鳴き止んだ句は見かけませ 止みますね。あれはどうしてでし だそうです。 漢字にしたようです。ではどうして だそうです。羽をこすり合わせる音を しい字ですね。音読みは「シッシュツ」 の例句はほとんどが鳴いている句ば 秋になります。歳時記を見ますと、そ は秋の季語ですね。虫が鳴くのはみな いでしょうか。近づくと、はたと鳴き 「こおろぎ」と云うか、えんまこおろ 面白い句になりました。多くの人に 身を守るのでしょうか。「蟋蟀」 「コロコロリンリン」と鳴くから しよう

## 百二歳花を待たずに母の旅

懐の句です。
での句です。
です。その花を心待ちになさっておられたのでしょう。その時節を迎えられです。その花を心待ちになさっておら現が効いています。「花」が季語、桜ね。そして次の「花を待たずに」の表面に歳まで長生きなさったのです

# 空高く伸びるつくしの丈くらべ

のです。「つくし」は春。

この句、ひろびろとした高い空をめ
がして伸びようとする大地のつくし、
がして伸びようとする大地のつくし、
がして伸びようとする大地のつくし、
がして伸びようとする大地のつくし、

# 白寿すぎ喉をうるおすところてん

ょうか。この方は御自分で食事をとらを過ぎた方が、身内におられるのでしぱりとした涼しい味ですね。九十九歳油に辛子や海苔をそえたりして、さったところてん」(心太)は夏。酢醤

に表現しました。そうに食べておられる様子を、親しげか。何れにしても、つるつると美味しさせてもらっておられるのでしょうれているのでしょうか。それとも食べ

## 逃げまどふポチ尾を丸め夏花火

「夏花火」がいけません。「花火」「夏花火」がいけません。「花火」が幅がったのためさが怖かったのとらくポチはあの大きな爆音や頭上と名のです。その花火をポチが怖がってものです。その花火をポチが怖がっています。作者そこに着目しました。おものです。その花火をポチが怖がっています。作者そこでこの句をすこしばかでしょう。そこでこの句をすこしばかでしょう。そこでこの句をするというでしょう。

こんなところで如何でしょうか。「大花火ポチ尾を隠し逃げまどふ」。

朝 近 自 市 づ 画 0 ١, 像 西 てくる 0 瓜 ル 叩 才 汗 V 1 て 0 0 牛 通 髯 ŋ ち は 暑苦 過 ょ **(**\* っと恐 L (こわ)

青空へ 初 諷 経 ٠٤, へ は ŋ 撒 つふぎん) ٧١ たやう花辛夷 若き僧 侶 の青 つ むり

吟 熊 澤 太

郎

選

者

Ш

柳

惻

池

入

選

さ

と

/

選

佳

作

深

読

4

は

せ

ず

聞

き

流

すこ

ħ

ŧ

愛

鈍

行

で

Vì

Vì

ż

人

生

面

白

٧ì

生

き下

手

0

胸

15

ま

た

立

つ

11

ż

Vì

波

蔦 笶 が お 這 う う ね そう あ 0 生 だ き 明 様 日 ŧ 15 意 陽 地 が を 昇

まる粉薬

目

が

ね

か

Ġ

大きく見え

る

嫁

0

あ

Ġ

関

口

孝

Ξ

水

関

清

還か

暦されき

咽の

喉と

15

か

Ġ

や

母

0

死

15

父

0

淚

を

垣

間

見

る

4

る

る

水野島崎

麗

舟

清 悦 春 子

辰

宮

岩本白本間井

真 総 靖

#### 選 評

# 深読みはせず聞き流すこれも愛

は、持ってうまれた性格なのかも知れ の中を上手に立ちまわれないの 生き下手の胸にまた立つ小さい波

ってしまう。 口下手ゆえに、ついつい内向的にな

小さい波」と表現して成功している。 心にしみじみと伝わってきて心地 そんな心のありようを、「また立つ

## 鈍行でいいさ人生面白い

がある。 作品の面白さがあり、底抜けの明るさ すぱっと言い切ったところに、この

思わず、「うん、そうだそうだ。」と

だけではないだろう。 叫んでしまいたくなるのは、自分一人

> 詮索されたくない心境の時にかぎっ 細かいところにまで、何だかんだと

な経験があるからこその心配り。一見、 て、深入りをしてくる人が居る。そん

深さを思ってしまう作品であったか 何気ない表現をしているが心の広さ、

佳作

# 笑おうねそうだ明日も陽が昇る

もよさそうな作品と見た。 自分自身に対する応援歌と言って

に作品に生かした。 ールでもあろうか。自然の摂理を上手 勢が見えてくるようで、頑張ろうのエ つぶやきかも知れない。前向きな姿

している。

# 蔦が這うあの生き様に意地をみる

塀や壁などに這っている様は、美し

くも又たくましくもある。 必死に汗している人間の生き様に

も似ていると感じ取った作者の、目や

柄でもある。

心が生んだ作品であり、

それがまた手

## 母の死に父の涙を垣間見る

なかった。母の死に直面して、 父の泣き顔を見てしまった。 パートナーを失った人間の哀しみ 今迄、父の涙なんか一度も見た事が 初めて

が、痛いほど伝わって来る作品でもあ

る。

## 還暦や咽喉にからまる粉薬

なかなか味の有る詠い方をして成功 日常の一光景を表現した作品だが、

うか。 まだまだ青リンゴの範疇ではなかろ 還暦といっても、今の長寿社会では、

揶揄したのであろう。 そんな歳でもないのにと、自分自身を からまるなんて何かおかしいな、まだ それを逆手に取って、粉薬が咽喉に

## 目がねから大きく見える嫁のあら

表現の裏側を覗いて見ると、ほのぼ大がない。それゆえに逆の表現をして方がない。それゆえに逆の表現をして方がない。それゆえに逆の表現をして方がない。それゆえに逆の表現をして方がない。それゆえに逆の表現をして方がない。それゆえに逆の表現をしてしまったが、深読みだろうか。自分もしまったが、深読みだろうか。自分もしまったが、深読みだろうか。自分も

選

者

吟

笑ったぞ泣いたぞ今を生きている

池

さと

し

4 ピ な コ 太 無 郎 口 VI 水 さり 面 0 火 月 も笑 海 峡 雪 っ 模様 て る

奇

魚

跳

ね

る

海

峡

か

ら

0

告

訴

状

دز.

ところ

0

深

さを見

せ

て

V

る笑

顏

函館文学学校講師

対 馬 俊

明

### 小説・文芸評論 北海道教育大学名誉教授

安

東

璋

函館文学学校講師

ノンフィクション

文芸誌『海光』代表

竹 中 征

機

日本現代詩人会会員

詩

北海道詩人協会理事

鷲

谷

峰

雄

短歌

北海道アララギ地方編集委員

山

県

庸

美

俳句

函館俳句協会会長

『ホトトギス』同人

熊

澤

三太郎

函館川柳社主幹

川柳

さとし

池

### あとがき

今年の各部門の応募作品数は、随筆十七編、小説十五編、文 『市民文芸』第五十六集をお届けします。

増えました。特に小説・文芸評論は力作ぞろいで、審査され 俳句八十七句、 芸評論九編、ノンフィクション十編、詩十七編、短歌百十首、 今年度は昨年を大幅に上回る応募があり、 川柳七十句、計三百三十五点となりました。 入賞作品の数も

は創作にもチャレンジしていただきたいと願ってのことです。 ました。少しでも多くの方々に冊子を読んでいただき、更に た先生も嬉しい悲鳴を上げていました。 昨年は、 この冊子を市内のあちこちの店に置いていただき

今年も昨年以上に多くの方に読んでいただくよう取り組んで

参りますので、作品のご応募もお待ちしています。 たことを心より厚くお礼申し上げます。 かわらず、厳密なる選考とご講評、貴重なご意見を賜りまし 最後になりますが、各審査員の先生方にはご多用中にもか

函館市民文芸 第五十六集

発行日 平成29年3月18日

編集・発行 (函館市五稜郭町 26 函館市中央図書館指定管理者 🏗 函館グループ —1) և (○一三八) 三五—五五○○

題字 木下

函館市中央図書館正面玄関前 モニー像 (小寺真知子 作

- 199 -

#### 【応募要項】

#### 募集作品

23.216.11 66				
1.	随筆	400 字詰原稿用紙		5 枚以内
2.	小説	同	上	45枚以内
3.	文芸評論	同	上	45枚以内
4.	ノンフィクション	同	上	35枚以内
5.	詩	同	上	5編以内
6.	短歌	同	上	5首以内
7.	俳句	同	上	5 句以内
8.	川柳	同	上	5 句以内

#### 【応募規定】

- 1. 応募資格は<u>函館市民</u>であること(函館市内の学校に通学している児童、学生、生徒、また函館市内に通勤している者を含む)
- 2. 原稿は未発表のものであること。
- 3. 原稿には ①応募部門
  - ②住所
  - ③氏名(ふりがなを必ず付記のこと)
  - ④年齢・性別
  - ⑤職業(児童、学生、生徒は学校名・学年も必ず記載のこと)
  - **⑥電話番号** を明記してください。
- 4. 400 字詰め原稿用紙に手書き、またはワープロ・パソコン原稿によるもの。 原稿用紙に手書きする場合、ボールペンもしくはインクで誤字脱字のない ように、読みやすい字(楷書)で記載してください。

ワープロ・パソコン原稿の書式は、原稿用紙(400字・20字×20行)設定で、規定枚数内であることをご確認のうえ、ご応募ください。

短歌・俳句・川柳は、すべての漢字にふりがな(読み方)を記入してください。

ふりがなについては、作品集掲載の際に表示を希望する箇所に ( )を してください。

- 5. 応募原稿は返却いたしません。
  - <u>また、入賞(入選・佳作)作品の著作権は、すべて函館市に帰属いたしま</u> すので、ご了承願います。
- 6. 作品の中では個人情報保護に配慮し、個人・団体を誹謗・中傷するような 内容の記載はご遠慮ください。